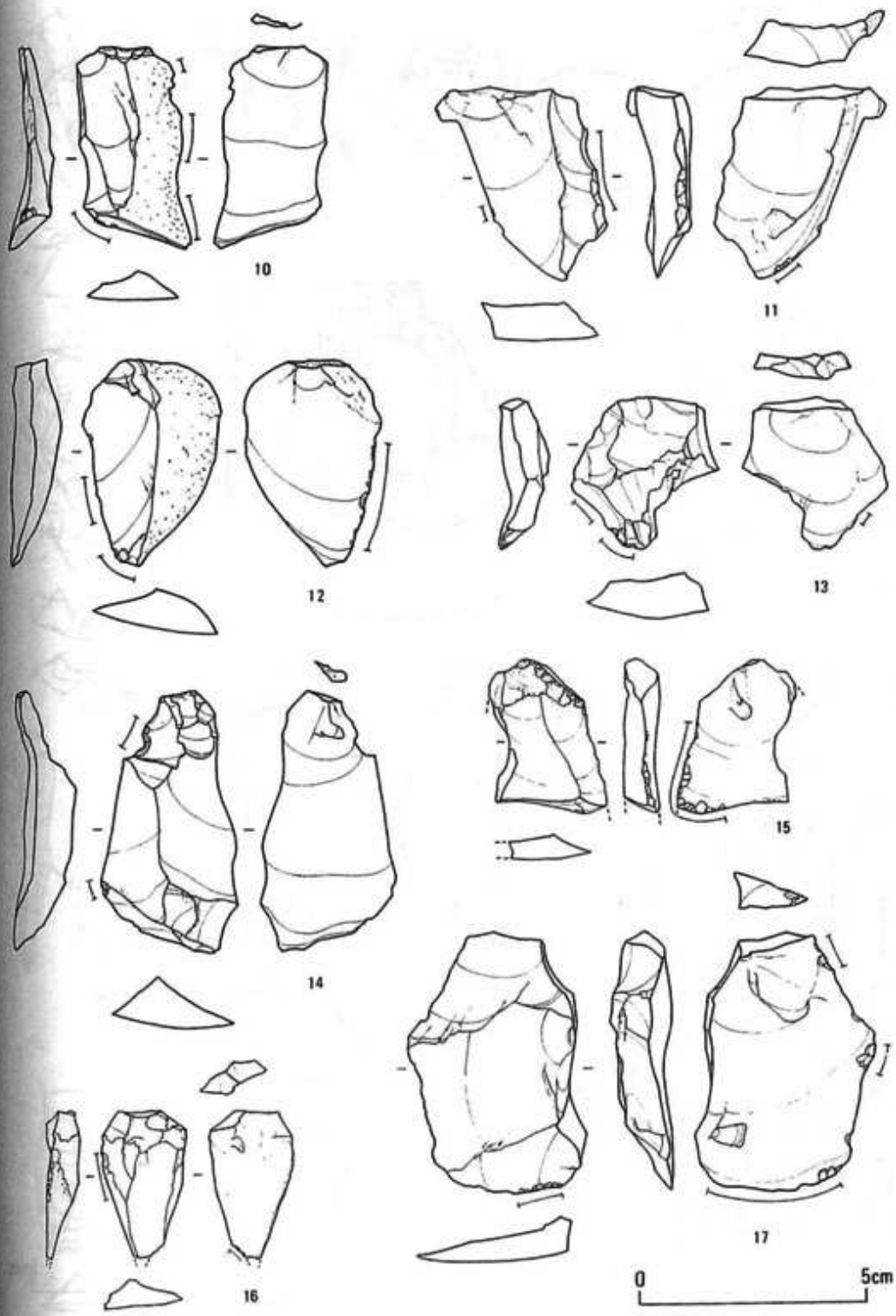
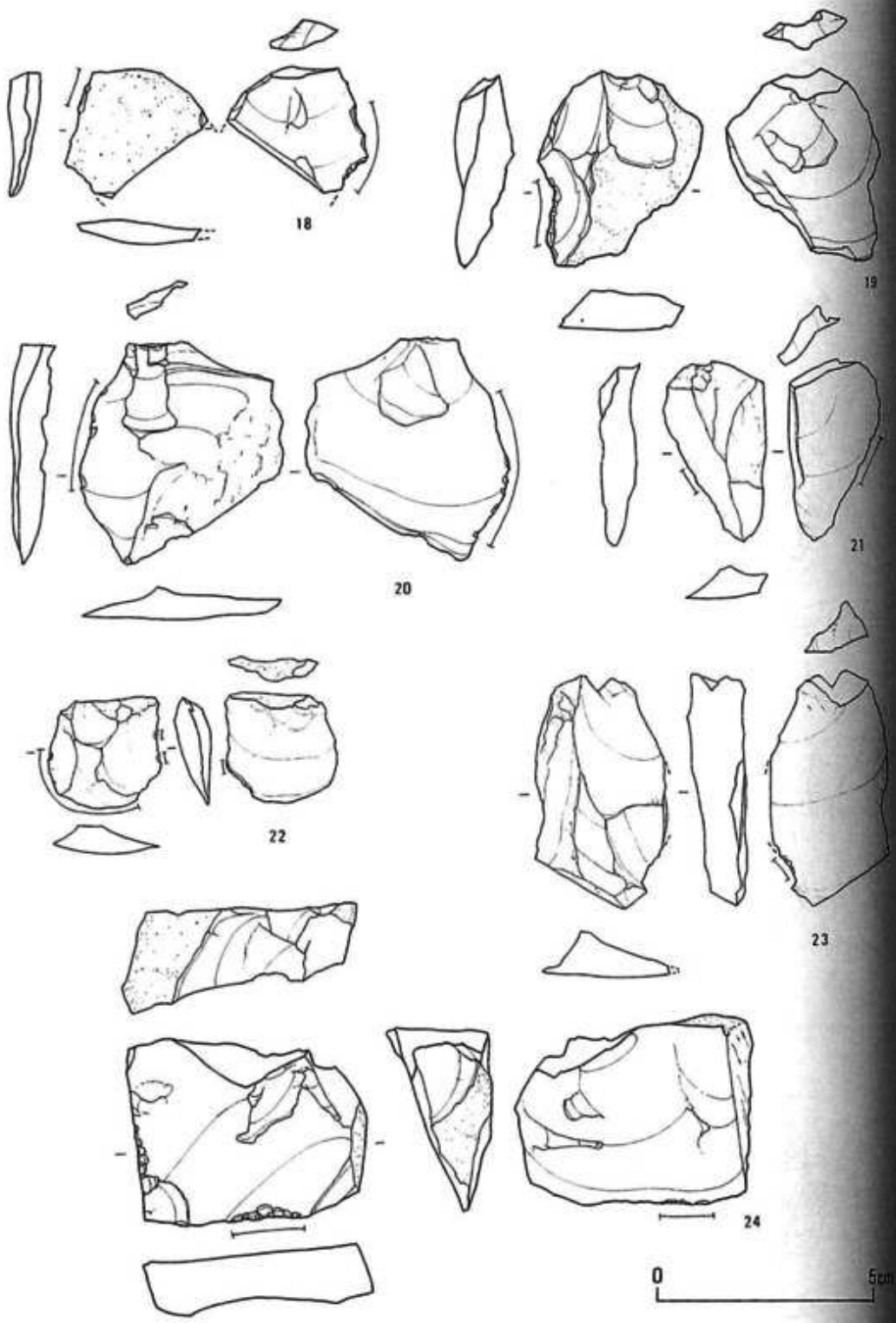
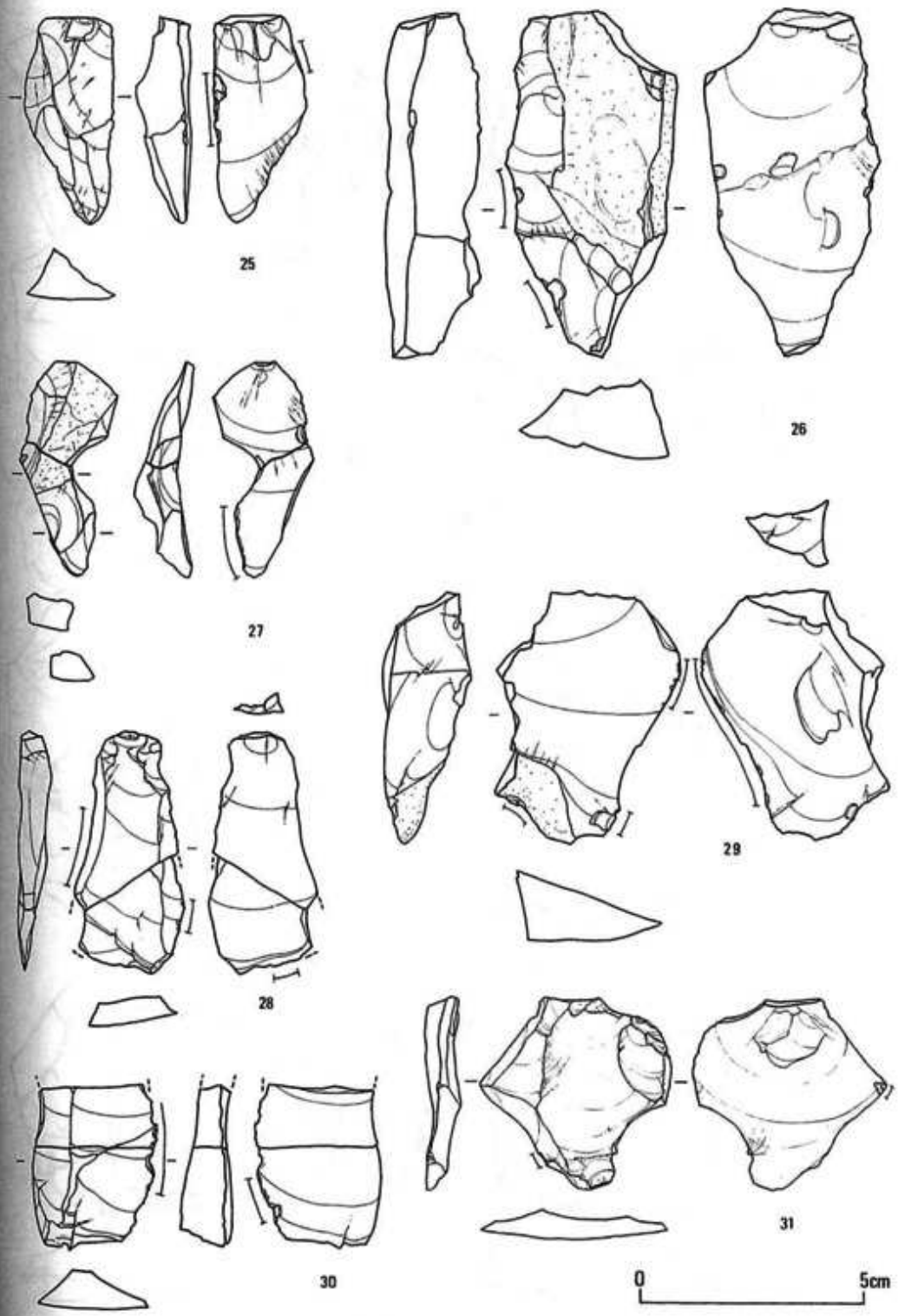
第288図　K3に属するUF



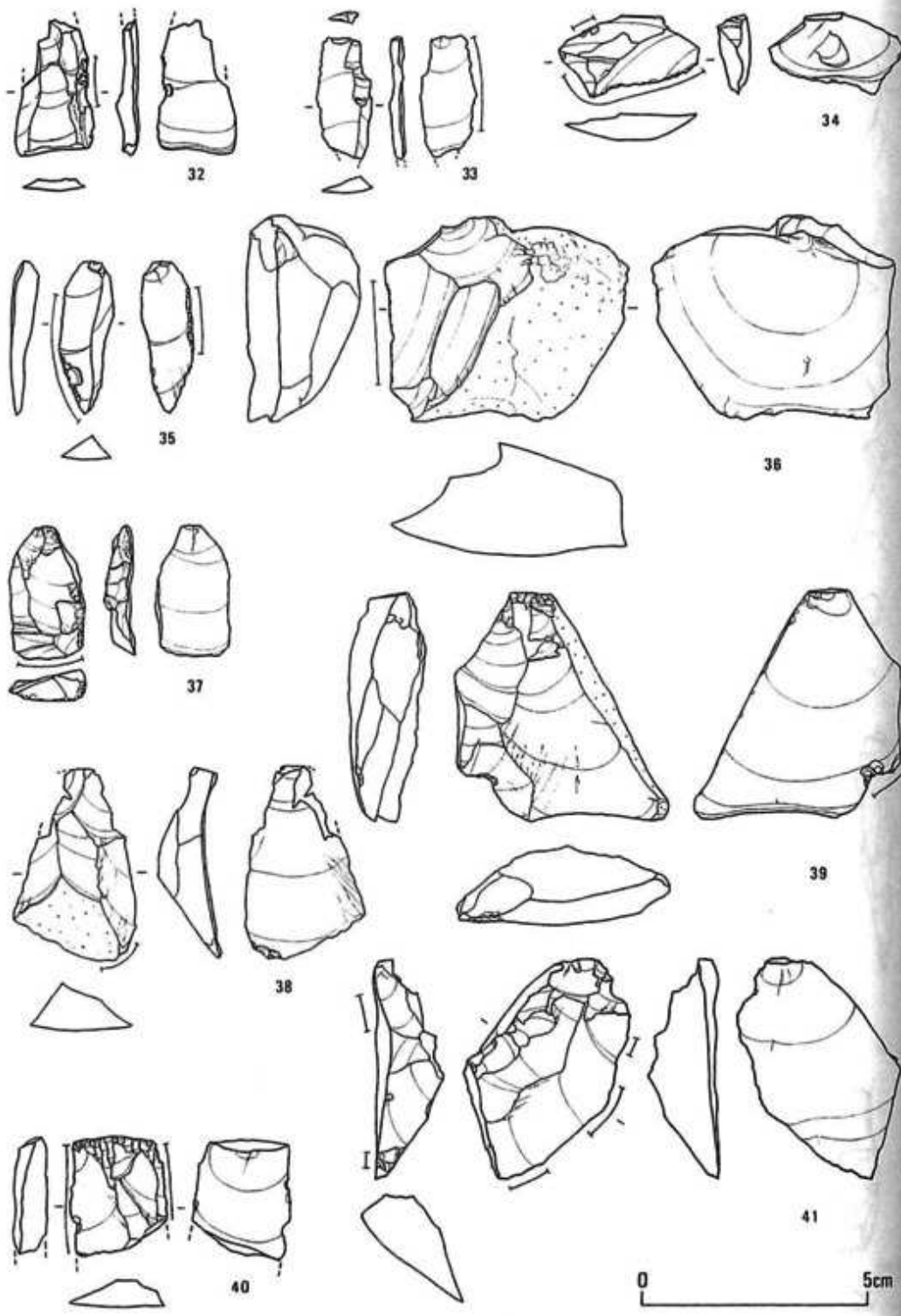
第289図　K３に属するUF



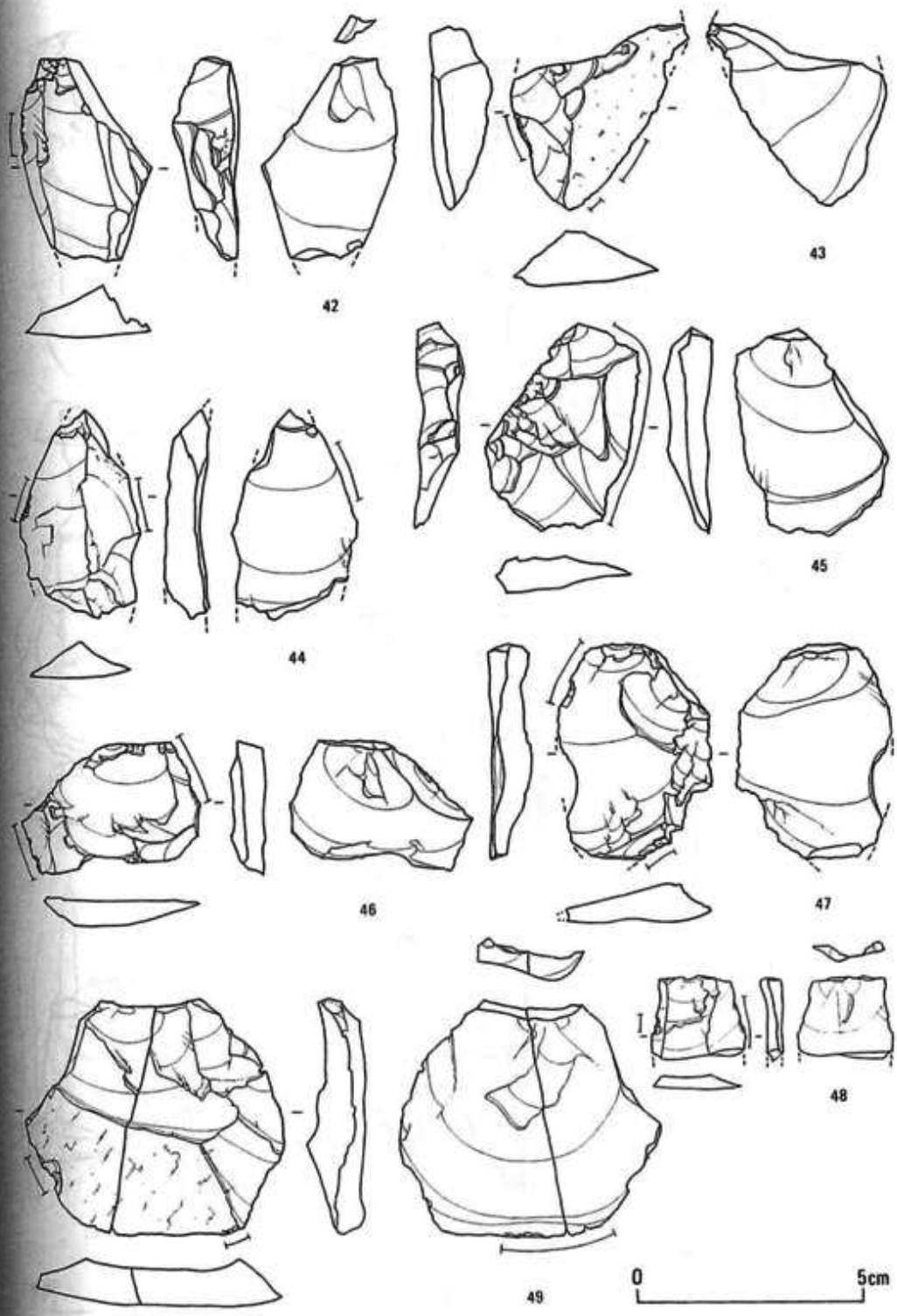
第290図　K3に属するUF



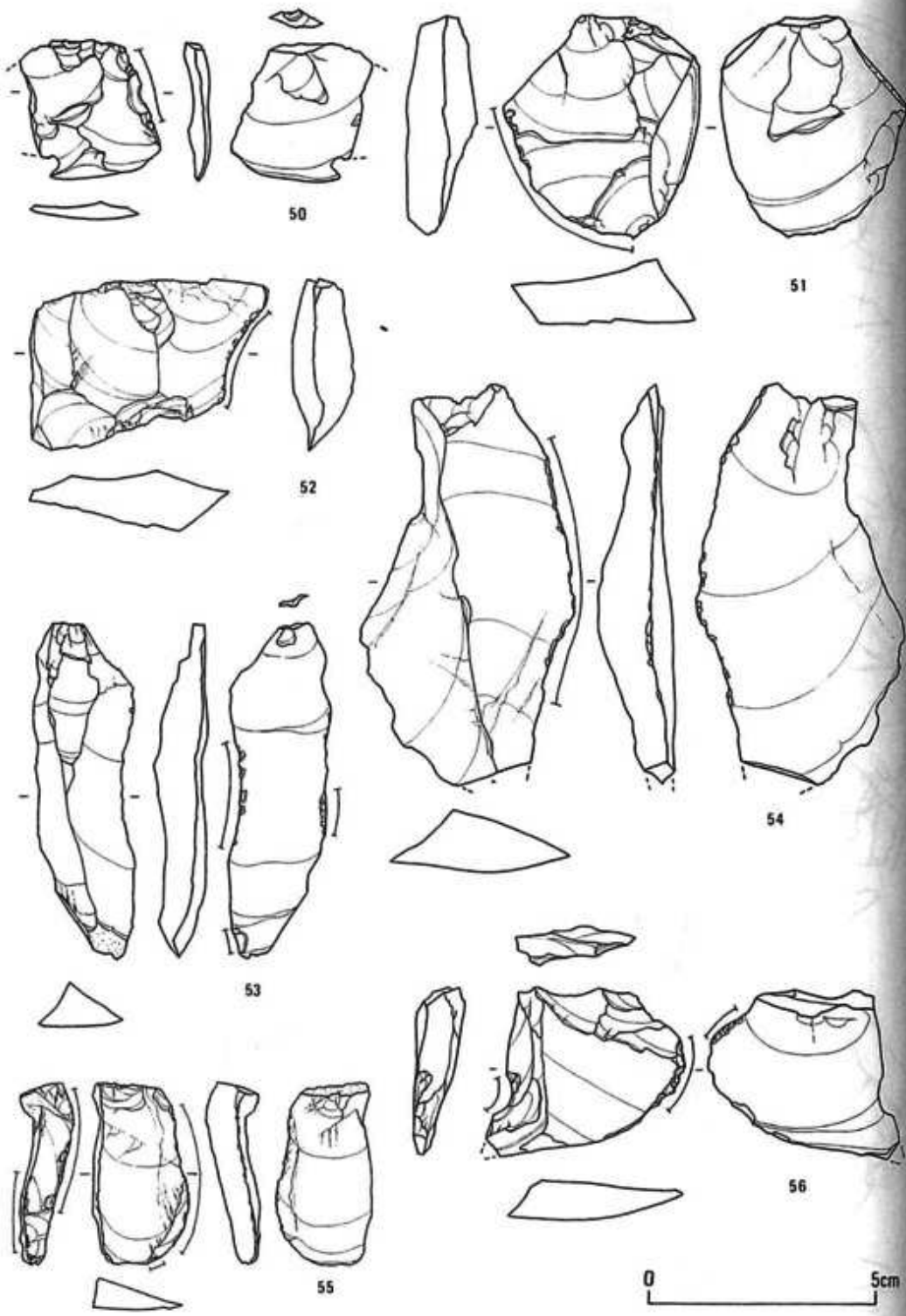
第291図　K３に属するＵＦ



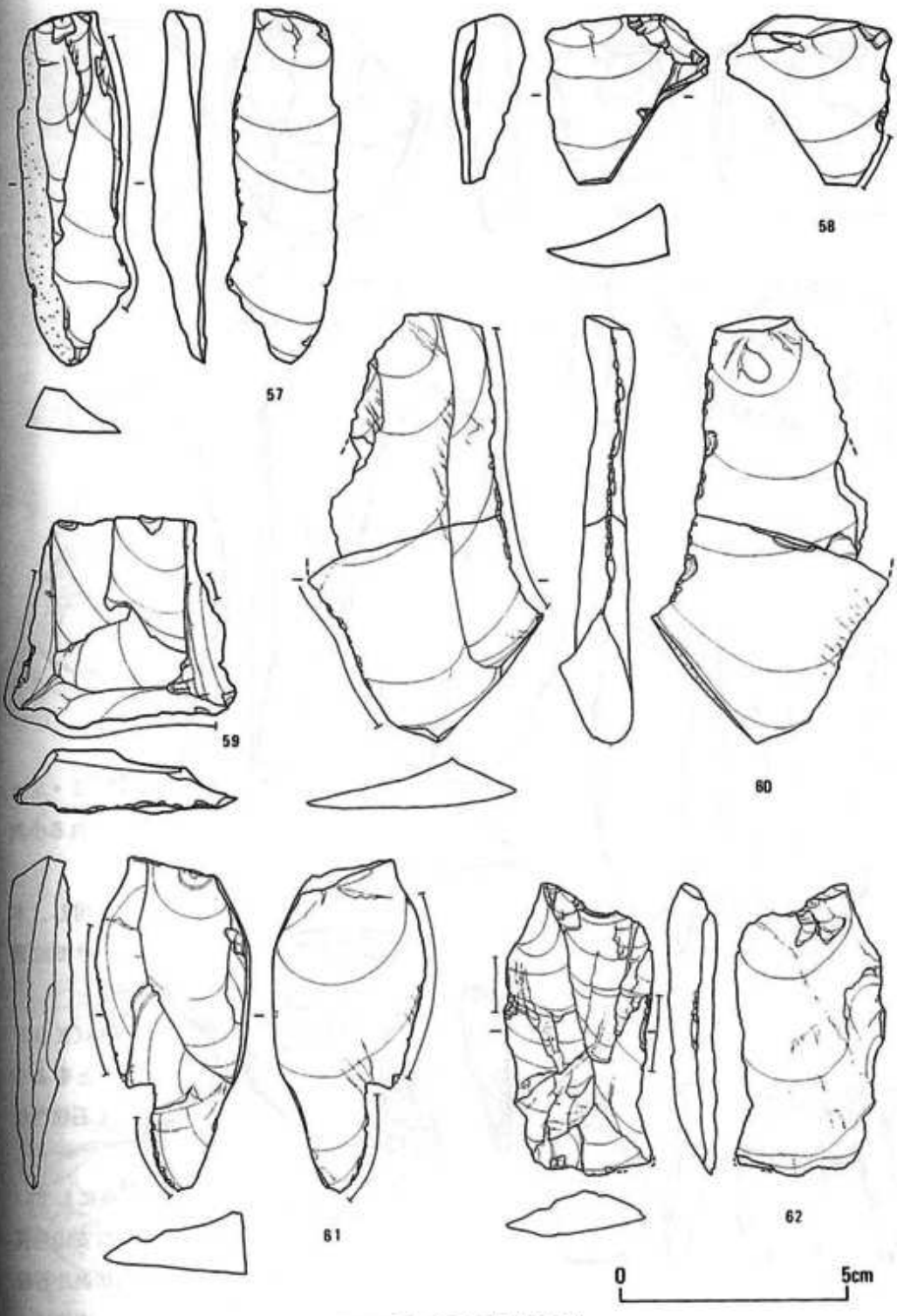
第292図　K3に属するUF



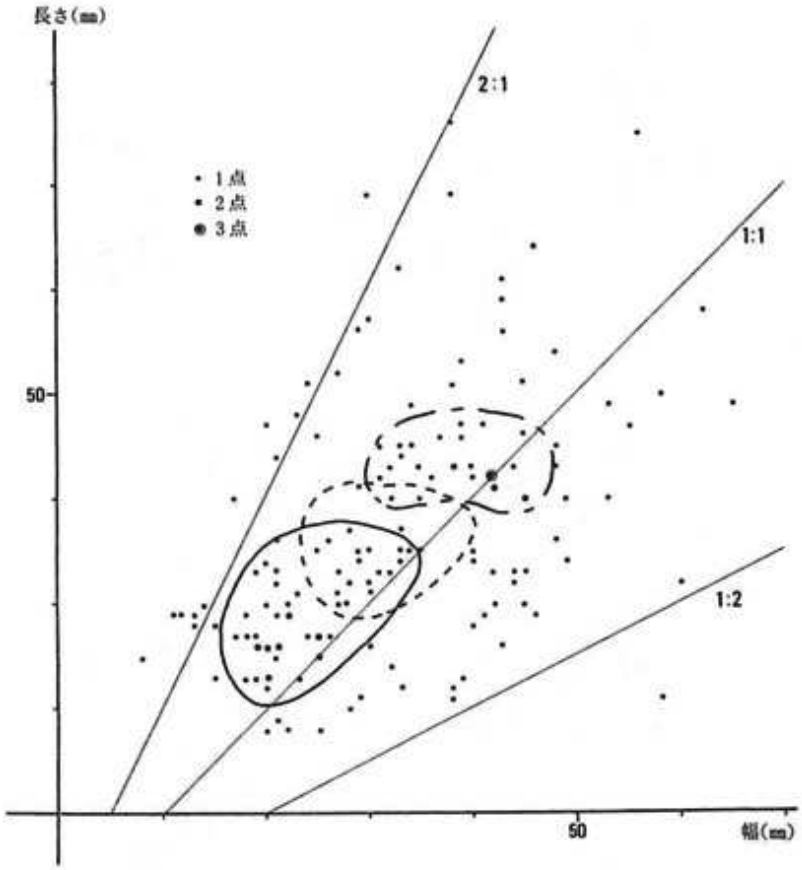
第293図　K３に属するUF



第294図　K3に属するUF



第295図　K３に属するUF



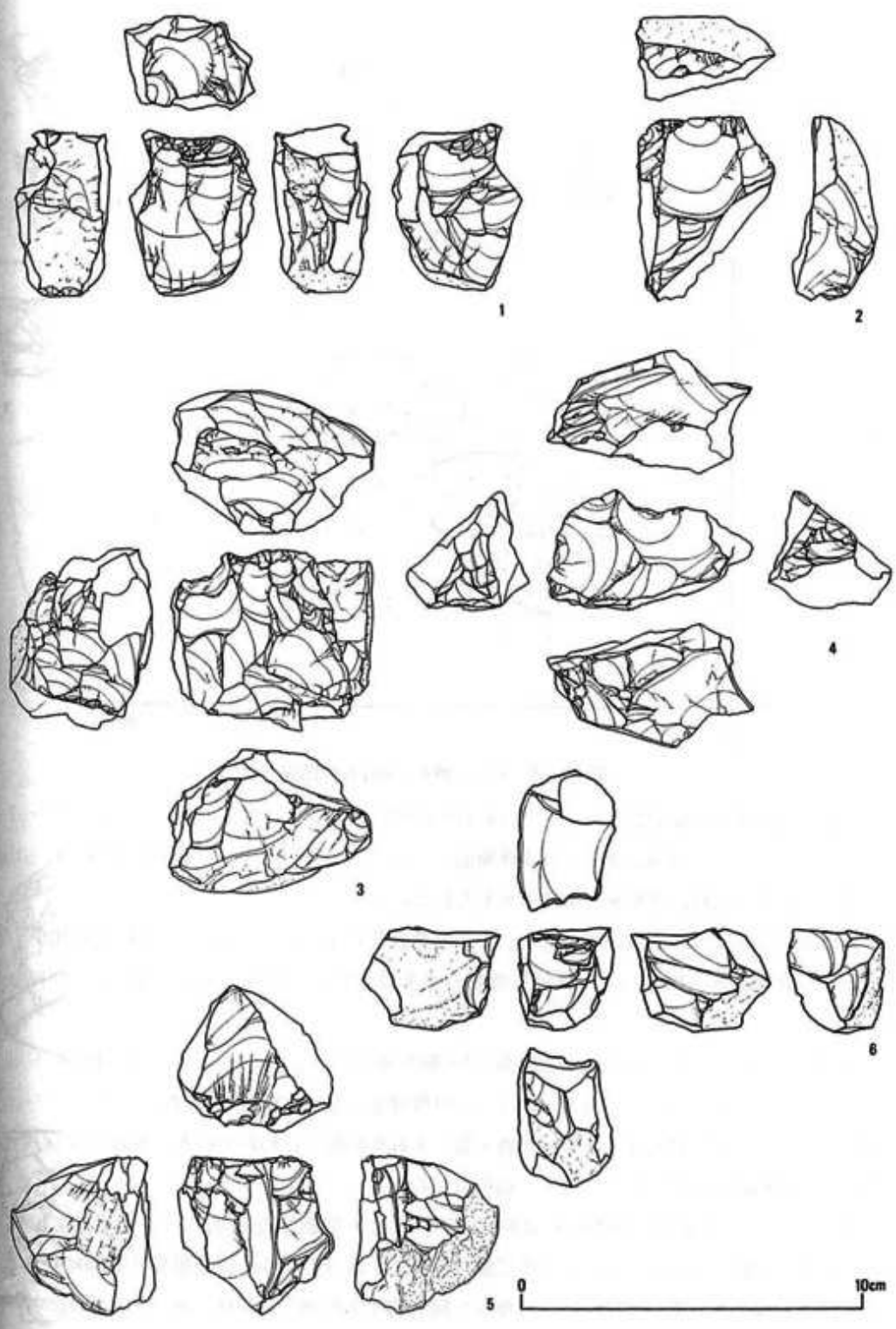
第296図　K3に属する剥片長幅関係グラフ

ら，打面・頭部・体部調整はほとんど行われずに剥片を取るのが常態のようである。2・7・9のように，打面の移動が認められず作業面の一定する例もある。5の打面に認められる小剥離痕は，数少ない打面調整例と言えるかもしれない。

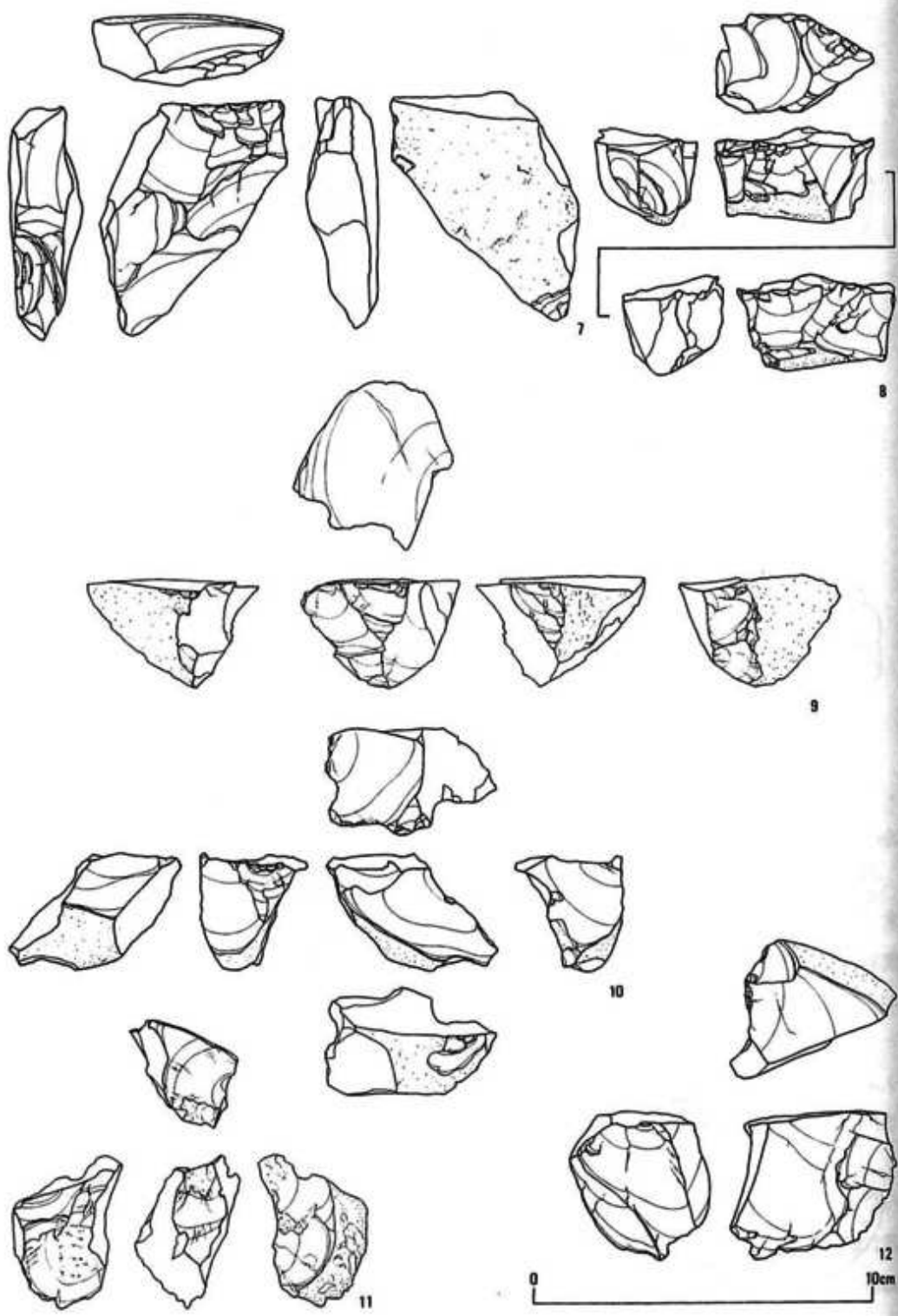
A_3類は第298図11の1点のみである。厚手の熱破砕によるかと思われる剥片を利用し，木口面から剥片を剥がしている。断面三角形の厚手の剥片(第305図6)を1点取るだけで放棄している。

A_4類は9点見つかっている(第298図12～第299図17)。このうち4点が同一個体(K3－4Ⅰ①)で3点が接合している(12～15)。この個体が大型剥片に分割されていることをよく物語っている。剥片剥離作業は素材の背・腹いずれかの面で行われている。やはり1石核当りの剥片剥取量は極端に少なく，1～3点位である。

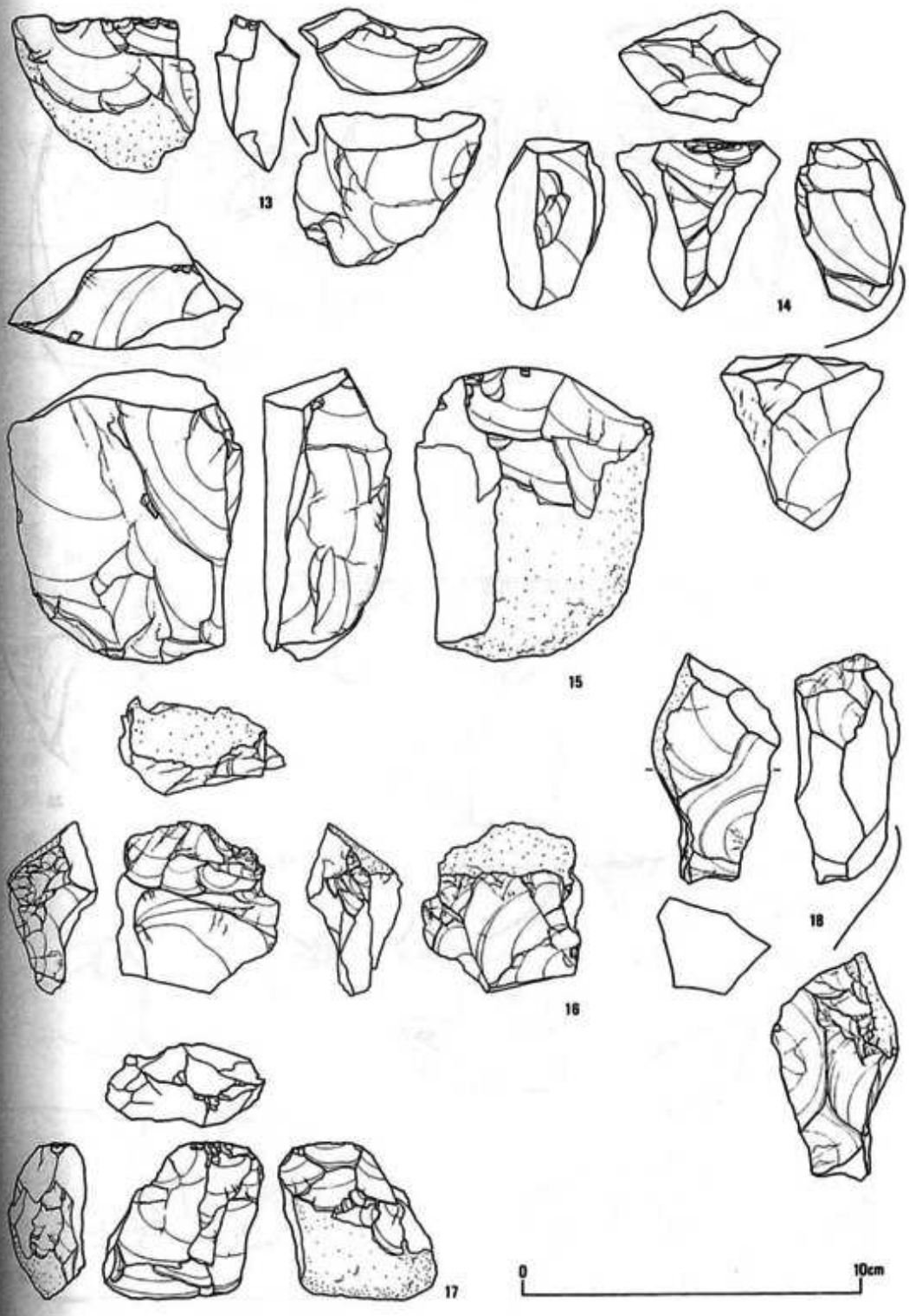
B類は3点である(第299図18～第300図20)。18は大型剥片を半割し一方を石核にしている。素材の背腹両面から，交互に小型で横長の剥片を取っている。19は粗質で脆弱な安山岩質の石材を利用する。素材の打面側から整った横長剥片を剥がしており，あたかも翼状剥片石核の観を呈する。作業面側から，数枚の打面調整に該当する大きな剥離が施されている。本例は，一方で図の上下端の剥離痕を強調すればA_4類と考えることもできる。石材の粗悪さから風化



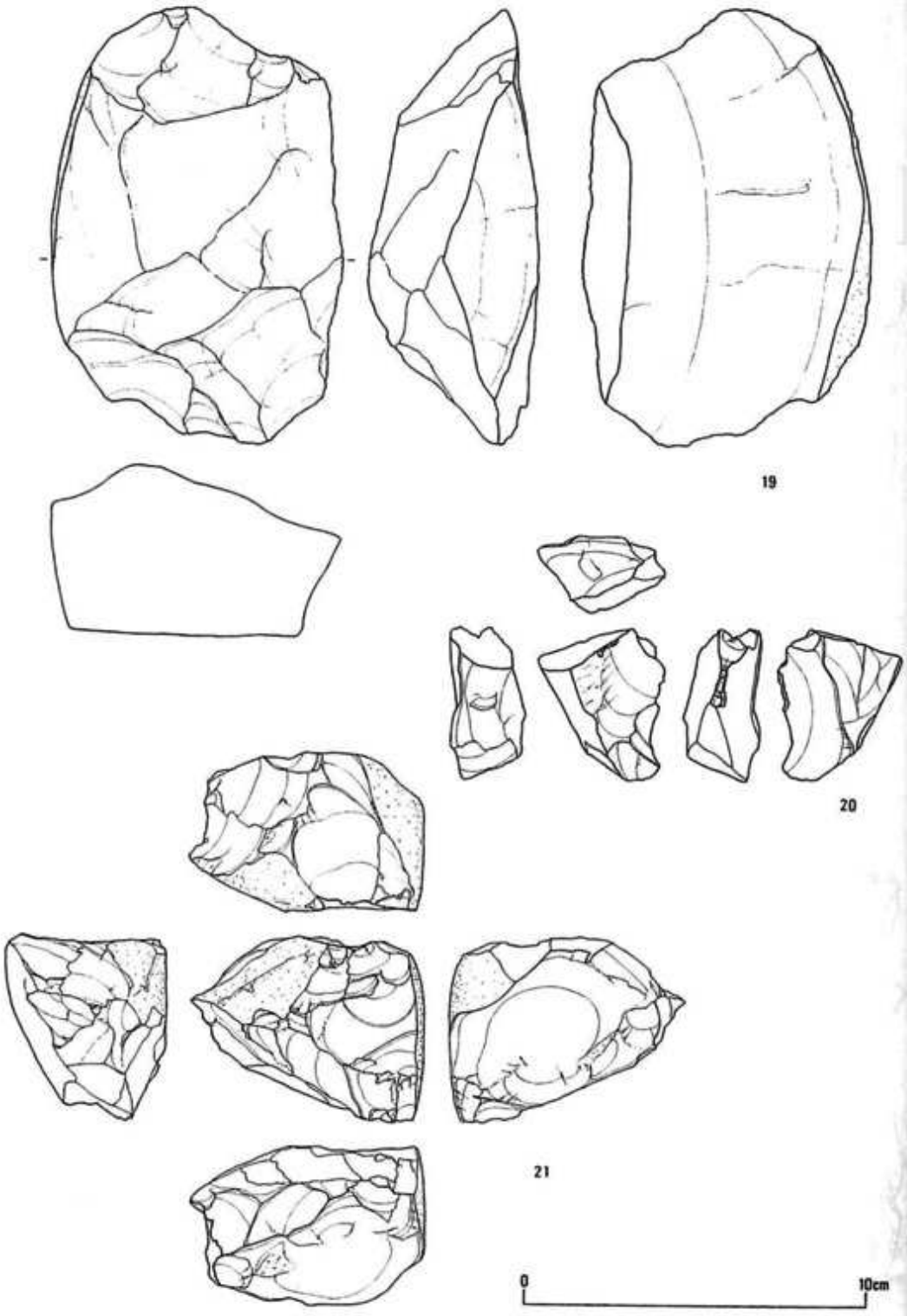
第297図　K３に属する石核（A_1類：１，A_2類：２～６）



第298図　K3に属する石核（A_2類：7～10，A_3類：11，A_4類：12）



第299図　K３に属する石核（A_4類：13～17，B類：18）



第300図　K3に属する石核（B類：19・20，石核素材：21）

第68表　第３層ナイフ形石器文化段階所属石器属性表

ナイフ形石器

遺物	No.	形態	長さ	幅	厚さ	先端角	刃部角	重さ	破損分類	折れ*1)	*2)	素材*3)	石材*4)	個体No.	ブロック	挿図番号
1 A22	A 7	B	—	18	6.8	—	38°	3.1	Cb	D→V	0°	タテ	Sh	K３－１A②		268－21
0 B15	A 6	A_1	—	15	5.3	—	53°	2.9	Ba	D→V	0°	タテ	Sh			267－11
1 B 3	A 2	A_1	—	—	—	38°	64°	1.2	Ca	D→V	0°	タテ	Sh	K３－１A②		267－3
1 B 7	A 5	A_1	41	14	5.1	40°	41°	2.9	A	D→V	0°	タテ	Sh			267－13
1 B12	A 2	B	—	—	5.2	—	—	4.7	Ba	D→V	20°	タテ	Sh			268－20
1 B15	A 6	B	—	15	6.3	—	44°	1.7	Cb	D→V	35°	不定？	Sh			267－15
1 B20	A 1	B	50	18	12.1	43°	35°	8.2	A		0°	タテ	Sh			268－19
1 C 9	A 4	C	32	14	4.9	56°	37°	1.1	A		0°	タテ	Sh	K３－１C③		268－25
1 C12	A 5	?	—	—	—	49°	35°	1.1	Ca	V→D	15°	タテ	Sh			269－31
1 C21	A 4	A_1	—	12	4.5	—	28°	1.5	Cb	D→V	0°	タテ	Sh			267－5
1 C22	A 2	?	—	—	—	—	30°	2.2	Cb	D→V V→D	0°	タテ	Sh			269－32
2 C 3	A 2	C	—	—	—	55°	20°	1.8	Ca	D→V	0°	タテ	Sh	K３－１C⑥		268－23
2 C 9	A 4	A_1	24	9	4	65°	44°	0.7	A		0°	タテ	Sh			267－1
3 D11	A 1	C	50	22	9.2	54°	46°	10.4	A		0°	タテ	Sh			268－27
3 E 1	A 6	B	—	—	9	68°	50°	7.2	Ca	セツリ	0°	不定	Cha			268－22
2 F15	A 5	D	29	15	3.8	(39°)	23°	1.1	Bb	D→V	0°	タテ	Sh		K３－１	268－30
2 F19	A39	B	—	—	—	—	—	3.0	Cb	—	0°	タテ	Sh	K３－２F①	K３－１	268－18
2 F19	A42	B	—	—	—	—	—	0.9	Cb	V→D	0°	タテ	Sh	K３－２F①	K３－１	268－17
3 F25	A10	C	—	—	—	57°	36°	1.9	Cb	V→D D→V	—	—	Sh		K３－６	268－26
4 F16	A 3	A_1	35	11	3.3	32°	48°	1.0	Bb(A)		20°	タテ	Sh		K３－４	267－2
4 F21	A 8	A_2	32	15	5	45°	34°	2.0	A		25°	タテ	Sh	K３－３F⑤	K３－５	267－14
4 F22	A 1	C	38	16	6.3	57°	55°	3.3	Ba	D→V	0°	タテ	Sh		K３－５	268－28
4 F22	A 8			（4 F22　A 1と接合）											K３－５	268－28
2 G10	A 3	A_1	31	17	6.6	—	39°	5.0	Ba	D→V	0°	タテ	Sh		K３－７	267－7

遺 物 No.	形態	長さ	幅	厚さ	先端角	刃部角	重さ	破損分類	折れ*1) *2)	素材*3)	石材*4)	個体No.	ブロック	挿図番号
2 G10 A 4	A1	31	14	6.0	43°	43°	2.5	Ba	V→D	0° タテ	Sh		K 3 − 7	267−10
2 G15 A 1	A1	37	16	6.4	47°	36°	3.3	Bb	D→V	0° タテ	Sh		K 3 − 7	267−12
3 G 5 A 4	B	—	—	—	—	—	2.1	Cb	V→D	0° タテ	Sh		K 3 − 6	267−16
3 G20 A 5	A1	38	15	4	45°	33°	2.5	A		20° —	Sh		K 3 − 9	267 − 8
2 I 19 A18	D	49	23	9.5	—	28°	9.5	A		0° タテ	Sh			268−29
2 J 5 A11	C	—	—	—	55°	42°	1.4	Ca	D→V	10° タテ	Sh	K 3 − 2 J①		268−24
2 K 5 A 1	A1	33	13	6.2	46°	67°	2.8	A		45° タテ	Obs			267 − 9
2 K 5 A14	A1	21	14	3.3	—	31°	1.1	Cb		0° タテ	Sh			267 − 6
2 K 9 A 4	A1	—	—	5.1	28°	43°	1.0	Cb		0° タテ	Sh			267 − 4
1 B 7 A 4	Blch	—	—	—	—	—	—	Da	D→V V→D	— —	Sh			269−33
2 F19 A 125	Blch	—	—	—	—	—	—	Da	—	— —	Sh		K 3 − 1	269−35
2 F19 A 135	Blch	—	—	—	—	—	—	Da	—	— —	Sh		K 3 − 1	
2 F19 A 153	Blch	—	—	—	—	—	—	Da	—	— —	Sh		K 3 − 1	269−34
2 F19 A 161	Blch	—	—	—	—	—	—	Da	—	— —	Sh		K 3 − 1	
2 F19 A 209	Blch	—	—	—	—	—	—	Da	—	— —	Sh		K 3 − 1	
2 F19 A 221	Blch	—	—	—	—	—	—	Da	—	— —	Sh		K 3 − 1	
2 F19 A 236	Blch	—	—	—	—	—	—	Da	—	— —	Sh		K 3 − 1	269−36
3 G11 A58	Blch	—	—	—	—	—	—	Da	—	— —	Sh		K 3 − 8	

スクレイパー

遺 物 No.	形態	長さ	幅	厚さ	重さ	刃部角	素材剥離角	石材*4)	個体No.	挿図番号
1 B 2 A 2	B1	29	56	9	16	65°	75°	Sh		274−3
1 C 5 A71	B1	44	39	9	15	72°	—	Sh		274−4
2 D12 A 1	A	45	38	18	31	63°	72°	Sh		274−1
2 D20 A 1	B1	48	38	11	22	82°	62°	Cha	K 3 − 2 D⑥	274−2
2 E 5 A15	B2	31	34	7	9	70°	66°	Sh	K 3 − 2 E②	274−5

RF

石　器	No	個　体　No	素材*3)	石材*4)	長さ	幅	厚さ	重さ	刃部角	打角	分類	ブロック	挿図番号
1 B 2	A 1		不定	Sh	73	35	24.3	52	74°	—			286-21
1 B 9	A 1		不定	Sh	44	36	5.1	7	50°	—	D		285-11
1 B19	A 5	K３－１B③	タテ	Sh	(37)	14	4.6	3	88°	—			286-20
1 B22	A77		?	Sh	7	5	1	<1	72°	—	A		285-1
1 C 2	A 8	K３－１C⑦	不定	Sh	29	18	5.4	3	85°	80°			286-22
1 C 3	A15	K３－１C②	不定	Sh	(27)	(26)	11.9	(8)	76°	—	C		285-5
1 C 9	A13	K３－１C③	ヨコ	Tu	(23)	(28)	6.3	(3)	66°	—	H		286-15
1 C14	A 5	K３－１C⑪	?	Sh	(16)	(8)	4.6	(1)	80°	—			
2 C 2	A 1	K３－１C⑥	不定	Sh	(20)	30	7.6	(4)	90°	—			286-19
2 E25	A 3		不定	Tu	40	33	11.4	19	83°	98°		K３散a	
2 F15	A 8		赤化砂岩片	砂岩	(104)	(59)	(42.6)	—	78°	—		K３１周	
2 F19	A11	K３－２F①	不定	Sh	(27)	(21)	4.3	1	76°	86°	H	K３-1	286-16
3 F17	A10		不定	Sh	36	44	13.8	18	63°	50°	D	K３-3	285-10
3 F25	A 2		?	Sh	(27)	(17)	5.7	3	77°	78°	A	K３-6	285-3
3 F25	A13		不定	Tu	43	42	8.6	12	67°	72°	H	K３-6	286-17
3 F25	A14	K３－３F④	不定	Sh	(50)	41	12.5	18	70°	—	C	K３-6	285-4
2 G 4	A 2		不定	Sh	33	33	8.8	8	70°	60°	C	K３散c	285-6
2 G10	A 2		?	Sh	(24)	22	7.9	5	77°	82°	D	K３-7	285-8
2 G14	A12	K３－３F②	不定	Sh	(33)	46	12.5	(22)	63°	—	D	K３散c	285-12
3 G12	A 4	K３－３G①	?	Sh	(27)	(13)	(10)	(2.5)	68°	—	C	K３-8	285-7
3 G12	A 7		?	Sh	(9)	(5)	(1.6)	<1	74°	—	A	K３-8	285-2
2 H 4	A 5		不定	Sh	(50)	(25)	(18.5)	(14)	74°	—	D	K３散c	285-9
2 I 19	A 8	K３－２I②	不定	Sh	(22)	21	9.8	4	79°	—			286-18
2 J 4	A27	K３－２J①	不定	Sh	32	29	7.5	8	88°	80°	F		286-13
2 K 9	A 8		不定	Sh	42	42	11	23	37°	88°	F		286-14

石 核

遺物	No.	分類	打面数 1	打面数 2(上下)	打面数 2(以外)	打面数 3以上	打面調整 レセッキリ	打面調整 なし	打面調整 1cm以上	打面調整 細調整	取られた剥片 数	取られた剥片 タテ長	取られた剥片 ヨコ長	取られた剥片 不定形	石核 高さ	石核 幅	石核 厚さ	石核 重さ	石核 打面角	ブロック	個体No.	挿図番号
0 C25	A 5	—																			K 3 − 0 C①	
1 C 5	A15	A_4	○					○			1			○	30	58	23	16	67°		K 3 − 1 C⑩	
1 C14	A17	A_2	○					○			5＜			○	28	63	39	50	76°		K 3 − 1 C⑪	297 − 4
	A46	A_2	○					○			5＜			○	53	40	25	43	70°		K 3 − 1 C⑫	297 − 2
	A58	A_2	○					○			5＜			○	32	48	50	54	70°		K 3 − 1 C⑦	298 − 9
	A73	A_4	○					○			3			○	41	48	32	54	63°		K 3 − 1 C⑪	299 −16
	A 107	A_2			○			○			4			○	43	54	34	62	77°		K 3 − 1 C①	
1 C16	A 7	A_2		○				○			5＜	○		○	70	62	44	168	81°		K 3 − 0 C①	
1 C19	A 9	A_2	○					○			2			○	50	49	32	56	70°		K 3 − 1 C⑫	
1 C25	A 3	A_2	○					○			5＜	○			48	36	28	65	85°		K 3 − 1 C⑬	297 − 1
2 C 9	A 1	B？				○		○			5＜		○	○	50	130	84	626	70°		単	300 −19
2 C14	A 2	A_4	○					○			2		○		30	75	64	112	64°			
2 C21	A 1(片)	—																20			K 3 − 1 C⑭	
	A 3	A_2		○				○			5＜			○	52	60	38	136	82°		K 3 − 1 C⑬	297 − 3
1 D22	A 10(片)	—																				
2 D15	A 6	A_2	○					○			4			○	31	35	40	49	84°		K 3 − 2 D⑥	
2 D20	A 5(母)	—																				
	A18	—	（2 D20 A 5 と接合）																			
2 D22	A 7	A_3			○			○			2			○	32	24	46	28	75°		K 3 − 2 D⑤	298 −11
2 D24	A12	A_2			○			○			2			○	35	32	51	41	71°		K 3 − 2 D①	298 −10
2 E 1	A 3	A_2				○		○			5＜			○	28	47	29	44	75°		K 3 − 2 E③	298 − 8
2 E 2	A 4(母)	母																211			K 3 − 2 E③	300 −21
2 E 3	A 2	A_2	○					○			3			○	69	53	23	63	67°		単	298 − 7
2 E 4	A20	A_2			○			○			5＜	○			46	44	40	85	87°		K 3 − 2 D⑤	297 − 5
2 E 5	A6(残塊)	—																31				

2 E 9	A 8	—			レキ	○		3		○	44	58	19	32	83°				
3 E 1	A 5	A_2		○		○		5＜		○	30	31	42	40	74°		K 3 − 2 D①	297 − 6	
3 F 6	A 9	A_4?	○			○		5＜	○		48	45	24	51	84°	K 3 − 2		299−17	
3 H19	A1(母?)	—												26		K 3 散f			
2 I 11	A 6	A_2		○		○		5＜		○	85	89	90	806	80°		単		
2 I 24	A5(片?)	—															K 3 − 2 I②		
2 I 25	A 2	B		○		○		5＜	○	○	30	63	37	63	77°		K 3 − 2 I②	299−18	
4 I 7	A 1(母)	—												88					
4 I 8	A 1	A_4	○			○		2		○	45	54	26	51	70°	K 3 −11	K 3 − 4 I①	299−13	
	A 4(?)	B	○			○		1	○		23	44	35	28	53°	K 3 −11	K 3 − 4 I①	300−20	
	A 5	A_4	○			○		1		○	70	88	36	221	60°	K 3 −11	K 3 − 4 I①	299−15	
	A 6	A_4	○			○		3		○	51	48	32	54	82°	K 3 −11	K 3 − 4 I①	299−14	
	A 7	A_4	○			○		1		○	40	44	58	66	88°	K 3 −11	K 3 − 4 I①	298−12	
4 I 14	A 1	A_4	○			○		1		○	44	36	35	44	80°	K 3 −11			
2 J 13	A17	A_2			○	○		5＜		○	73	64	53	245	85°		K 3 − 2 J⑥		
2 K 5	A12	A_2		○		○		2		○	31	44	40	45	77°		K 3 − 2 K①		
2 K 6	A 1(母)	—															単		

（ ）内は推定復原値。ただし発掘調査時にわずかに損傷を被ったものは推定復原値を示しているが( )は付していない。

＊1）D：背面　V：腹面

＊2）素材の剥離軸と石器の中心軸との交叉角度

＊3）タテ：長幅比1.5：1より長い剥片　ヨコ：長軸比1：1.5より幅広の剥片　不定：長幅比1.5：1～1：1.5の間の剥片

＊4）Sh：頁岩　Cha：玉髄　Obs：黒曜石　Tu：凝灰岩

が進行しており，このいずれかを確定することはできない。20は，A_4類で触れたK3－4I①個体に属している。接合こそしていないが，出土ブロックも同じである。

この他，第300図21に示したのが石核の母材である。本資料は第298図8と接合しており，分割された素材の一方は消費し尽され(8)，他方は母材のまま放棄された(21)ことになる。

第3層の石核は第2b層と比較する時，A_1・A_3類の整った縦長剥片を取った痕跡を残す石核に乏しい事が明瞭である。この結果は，UFでやや細長い整ったものが多いように思われた点と大いに矛盾するものである。一つには後述するK3－2D⑤個体の石核(第297図5)のように，剥片剥離作業工程の中期段階では整った縦長剥片を取りながら，末期に至って横方向からの大きな剥離を施したために石核としてはA_2類の不定形剥片を剥がした類型で捉えられている可能性がある。また，この例で見るように本質的に目的とする剥片の形態と最終形態としての石核に必ずしも脈絡をつけ得るような因果関係が認められないことも考えられよう。

(山下)

第3節　個体別資料と剥片剥離技術

第2b層のナイフ形石器文化については，個体数が多かったために中央区のみを検討対象とした。しかし第3層では，中央区のみではあまりに資料が少ないため，北区の個体別資料も合わせて全体の傾向を見てみたい。合計10個体について詳述する。

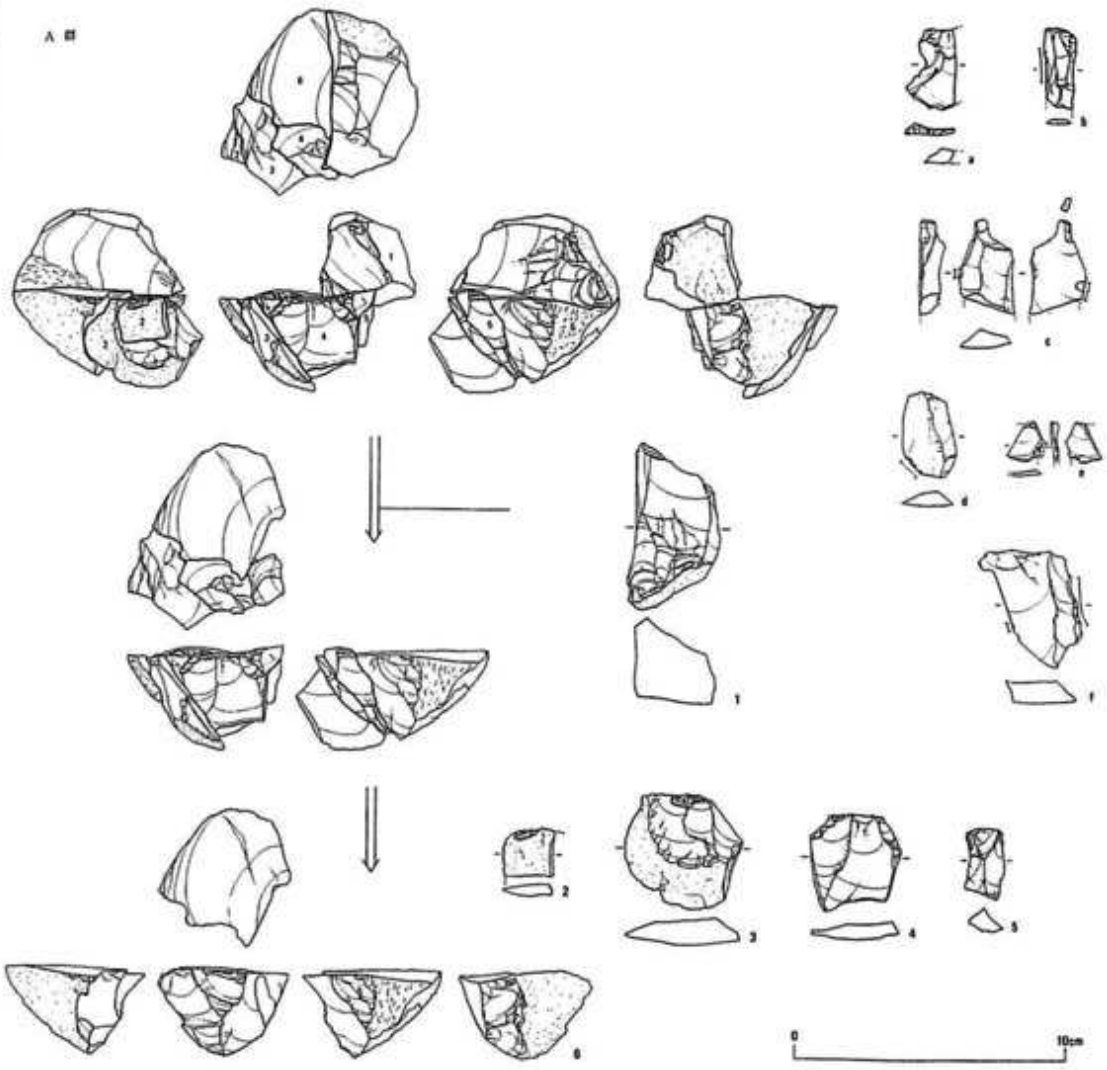
＜K3－1C⑦＞（第301図）　65点からなる。II種接合資料を2組5点含むため，資料数は68点になる。8組21点が接合するが，石核を含み全剥片剥離工程を推定し得るA群6点のみ説明する。

A群

イ┬①1B2A3(B)
　└②1C2A23(B)→ロ→③1C2A22(B)→ハ→④1C2A28(B)→⑤1B22A11(B)→ニ→⑥1C14A58(D)

イ)で母岩の一部を数回大きく剥離する。その一部を打面に①・②に大きく母岩を分割する。①はさらに二分割され，一方のみが残されている。②以下は分割された片方に認められる工程である。分割面を打面に②・ロ)・③の礫表を剥ぎ落とす工程がある。これに続いて，すぐにほぼ方形の長さ3～4cm前後の目的剥片を取る工程に入る。ハ)～ニ)がそれに当るが，計10点ほどの剥片を取っているようである。⑥は，結果として一ケ所に平坦打面を持つ三角錐状の石核になっている。作業面は半周に限られており，背面には自然面を残す。

個体全体を見ると，長さ7～8cmに近い礫表を持つ大型剥片を2点含んでおり，工程イ)の段階で大きな成形が行われたことが窺われる。また，長さ4～5cmの整った剥片も含まれている所から，イ)の段階には⑥の石核に較べやや大型の目的剥片も剥がしたようである。①も分類上は剥片になっているが，石核素材の可能性が高い。打面・頭部調整は施さない。



第301図　個体別資料K3－1C⑦

＜K３－１C⑪＞（第302図）　48点で構成される。Ⅱ種接合を４組８点含むため資料数は52点である。ＲＦ１点と石核３点を含む。接合は６組21点あるが，Ⅱ種接合のみの例もある。接合群相互の関係はわからない。最も多量接合であるＡ群９点についてのみ説明する。

A群
イ→①１C14A113(B)→②１C14A82(B)→③１C14A45(UF)＋④１C14A73(D)
ロ→⑤１C14A79(B)
ハ
⑥１C14A100(B)→⑦１C14A72(B)＋⑩１C14A17(D)
⑧１C14A７(B)＋⑨１C14A16(B)
ニ

イ)すでにある程度剥離が進行しているが，依然として大型の剥片を取っている。①・②はその間隙での小剥片剥離で，何等かの調整を意図したものであろうか。③＋④では，大型の横長剥片を取っている。これを半截した後か先かはわからないが，④の礫表を打面に２cm四方位の小剥片を数枚剥がしている。ロ)と⑤を含む工程である。③＋④に続いて，同じ打面から再びロ)・ハ)で小剥片が数枚剥がされる。ハ)ではまた，打面を異にして大型剥片も剥がされるようである。その剥離面を打面に，⑦＋⑩の大型縦長剥片が取られる。⑦＋⑩は破損したと言うよりも，⑦を打撃した際に同時に⑩が剥がれたが，両者の間には本来割れ目が入っており，剥離と同時に二分されたと考えた方がよい。⑩の方が厚手であったために石核に転用されたものであろう。⑩から⑧＋⑨他，ニ)前後して５枚以上の剥片が取られている。いずれも長幅比が同じ位の剥片であったと考えられる。

接合資料Ａ群は，大型剥片の剥離とそれを石核とした剥離に終始している。本個体中には，もう一組大型剥片を石核素材とする接合群があり，このような技術が一般的なものとして存在した可能性がある。しかし，非接合資料や接合資料に残る剥離痕から判断する限り，およそ整った剥片を得たとは考えられない。こうした工程の後に本格的な目的剥片剥離に移るのであろうか。個体中には礫表を持つ剥片が多く，工程の早い段階は窺うことができるが，石核はおそらく½も消費しないで持ち出されたと思われる。大型剥片から判断すると，個体は径10cm以上はあったと考えられる。

＜K３－１C⑫＞（第303図）　49点で構成される。資料数は51点である。石核を５点含む。４組14点の接合資料を含むが，最も工程をよく示すと考えられるＡ群のみ説明する。

A群
イ→①１C14A78(B)→②１C14A４(B)→ロ→③１C14A31(B)＋④１C14A39(B)→⑤１C14A42(B)→
→ハ→ニ→⑥１C25A３(D)

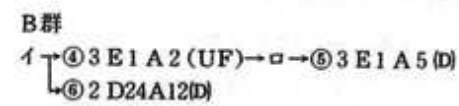
イ)かなり大きな素材から剥離を開始しているようである。①の背面にはすでにある程度整った剥離痕が残されており，工程が進行していることを物語っている。①・②と続けて縦長剥片を取るが，いずれもあまり整ってはいない。①・②とそれ以降には差が認められ，ロ)では打面を移し，４枚以上の整った縦長剥片を取っている。続いて③＋④・⑤のやや短い剥片を取る。

ハ)で打面の再生を図り，作業面を180°移して，ニ)石刃状の剥片を取る。⑥は単設打面の整った石核である。

本個体に石核が5点も含まれていることから推測すると，本来よほど大きな素材であったものを大きく分割し，それぞれで剥片剥離を行ったと考えられる。具体的に示さなかったが，接合資料B群中には，石核2点の接合例も認められる。こうした背景を念頭に置いてA群を見ると，イ)～②の工程とロ)～ニ)の工程の違いは，石核を異にした接合を意味する可能性も考えられる。①・②と石核⑥の接合面が節理面であることも示唆的である。そうであるとすれば，A群の打面は一つとなり，その再生と整った縦長剥片の工程として捉えることができる。他の残核を見る限りではそれほど整った縦長剥片を取っているようには思えないが，非接合の剥片中には整ったものも若干含まれている。整った剥片が，目的物として本来持ち去られるものであるとすれば，本個体の示す整った縦長剥片剥離工程の断片は，その存在をより積極的に評価されて然るべきものであろう。

＜K3－2D①＞（第304図）　6点で構成される。石核2点を含む。2組6点が接合しているが，石核の分割が認められるB群のみ説明する。

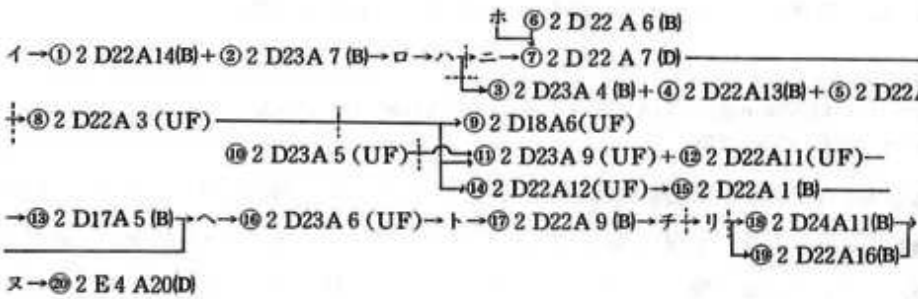
B群



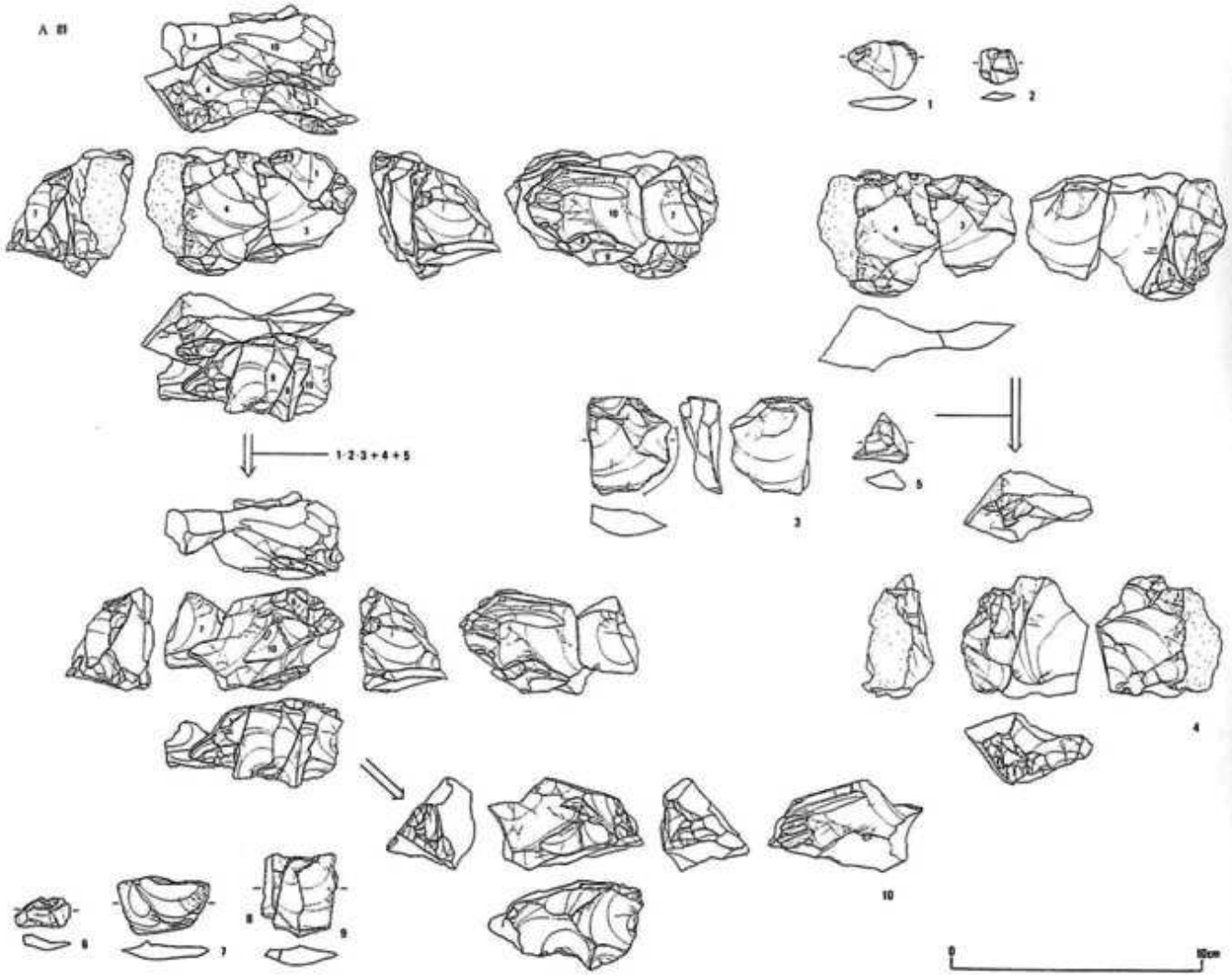
イ)剥片剥離が相当進んでから石核を二分する。分割面を作業面として④を取る。ロ)では4枚以上の不定形剥片を取るが，打面は三度にわたって移動している。⑤は残核である。⑥は分割後の剥片剥離が明瞭でない。分割後すぐに遺棄されたと判断される。

接合資料A群も含めて，本個体からは長幅比1：1前後の剥片が取られている。A・B群が相互に接合しないばかりか，両群の大きさの違いも著しい。砕片・小剥片といった剥片剥離工程そのものを示す資料が欠落しており他の遺跡で剥がされ，A群のみが本遺跡に持ち込まれたことが考えられる。

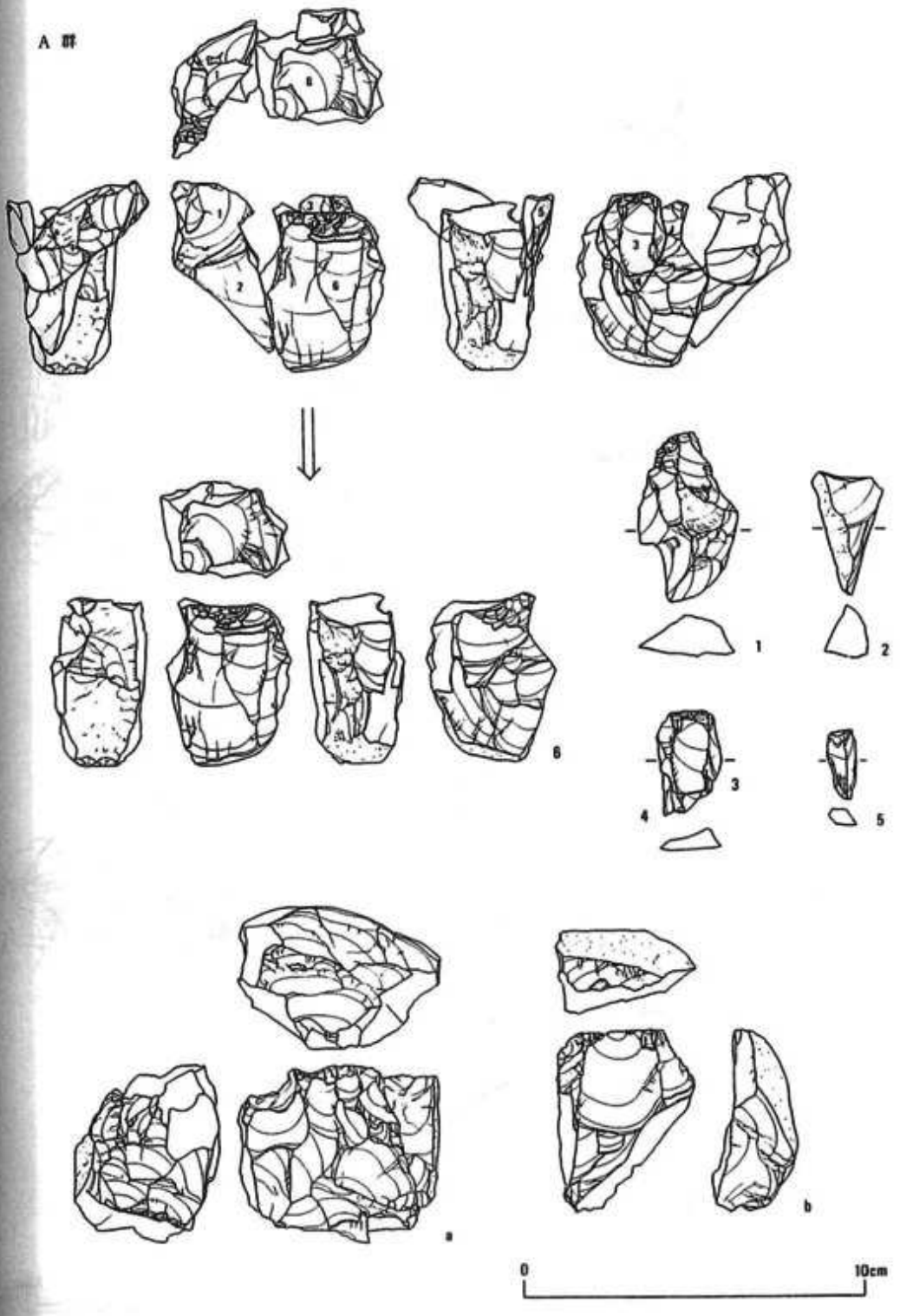
＜K3－2D⑤＞（第305図）　20点で構成される。II種接合例を3組7点含むため，資料数は24点になる。石核を2点含む。17点20資料が1組に接合しており，ほぼ全工程を知ることができる。



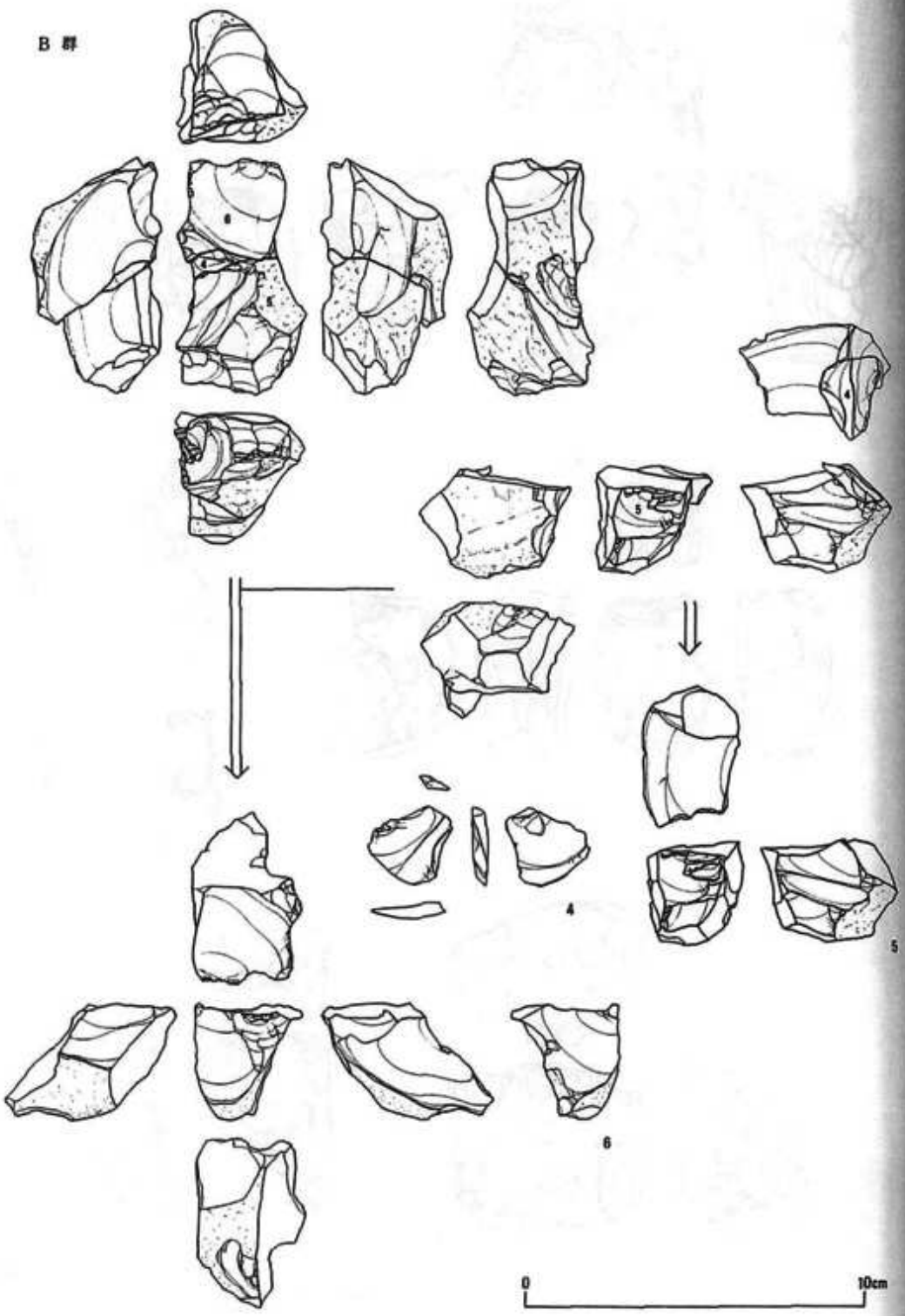
イ)長径10cmほどの亜円礫を素材に，礫表部の荒い調整のために最初に①＋②の大型剥片を



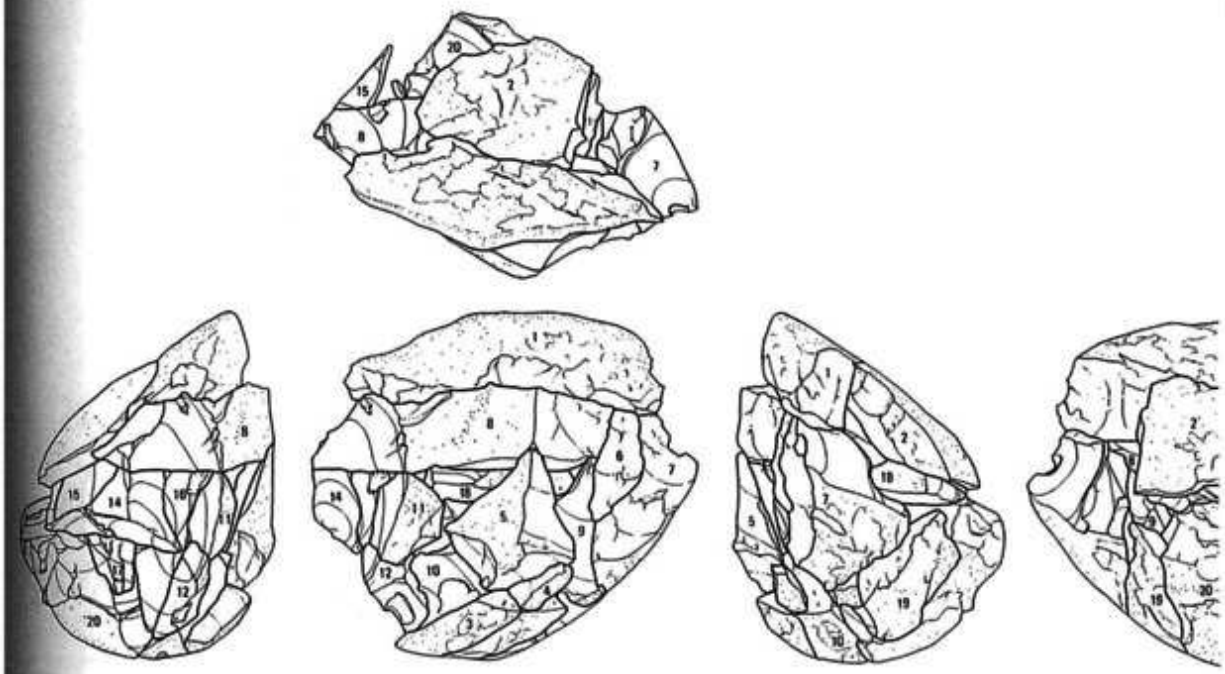
第302図　個体別資料K３－１C⑪

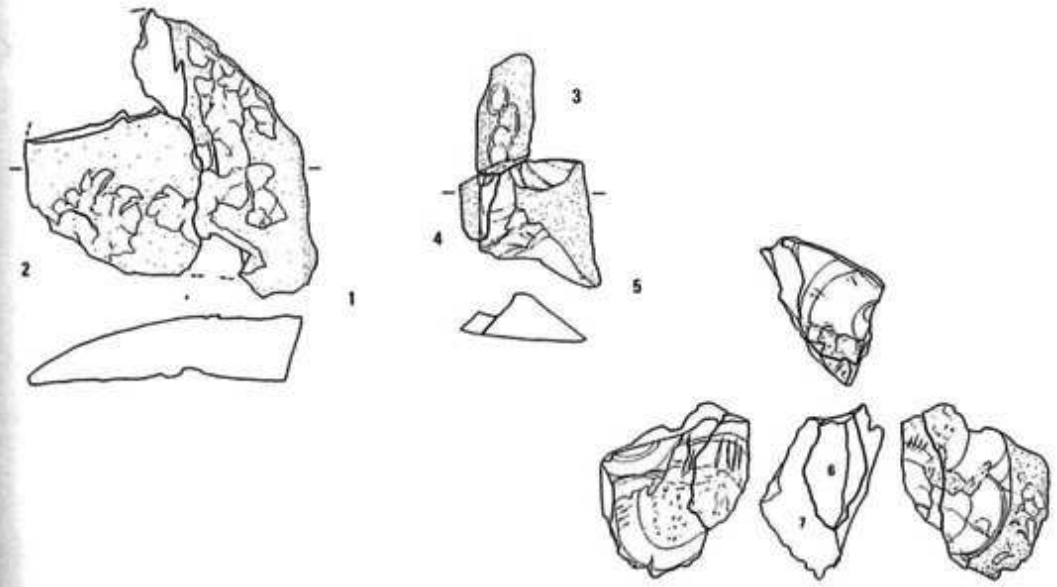


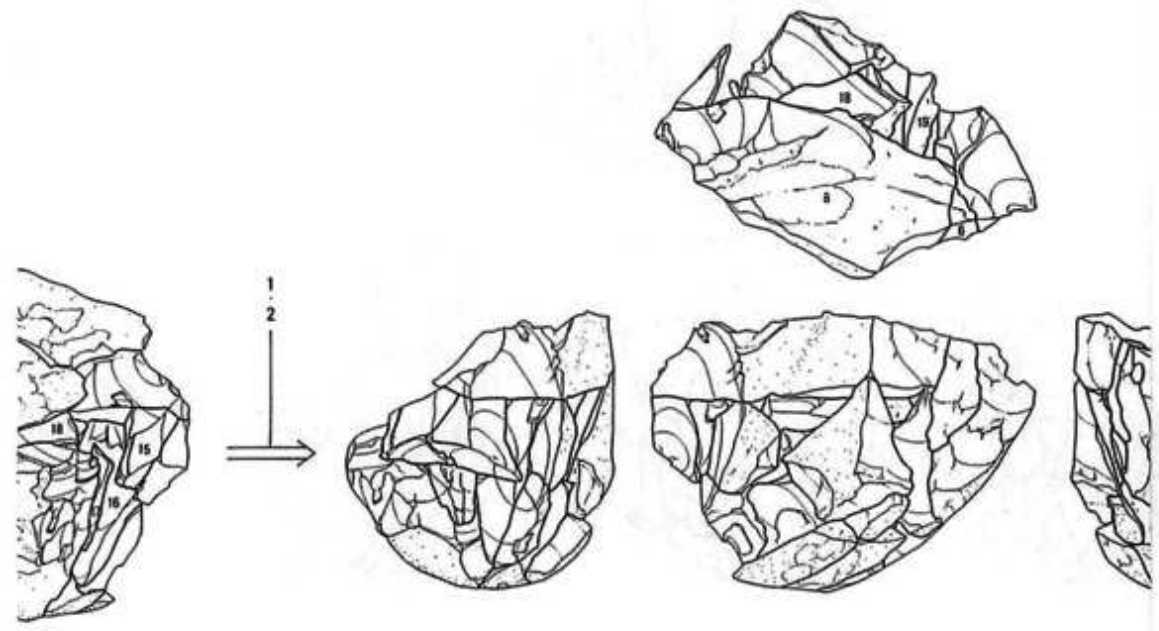
第303図　個体別資料K３－１C⑫

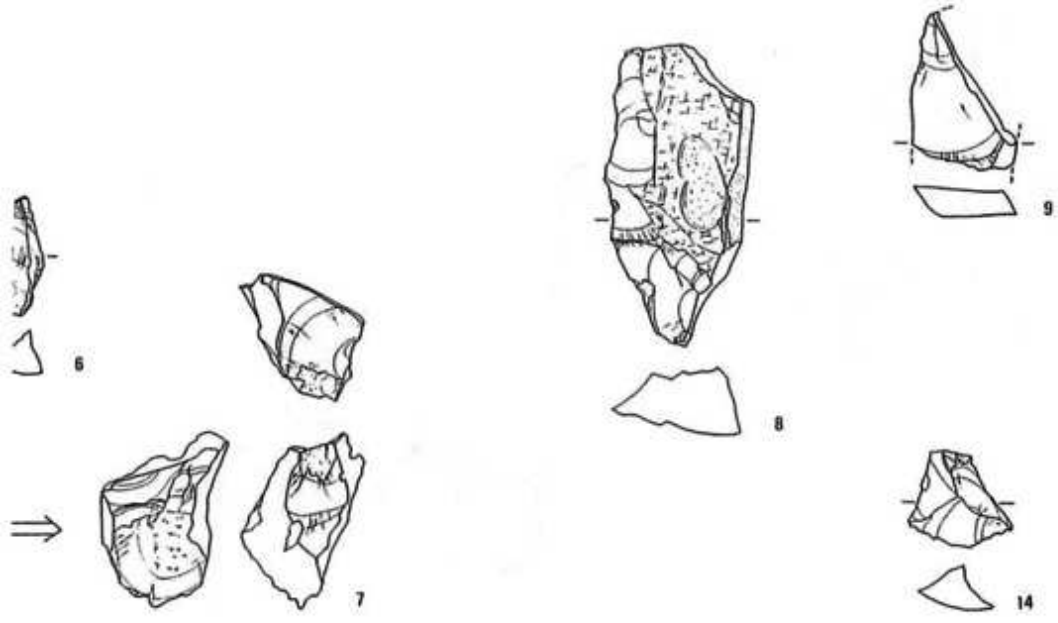


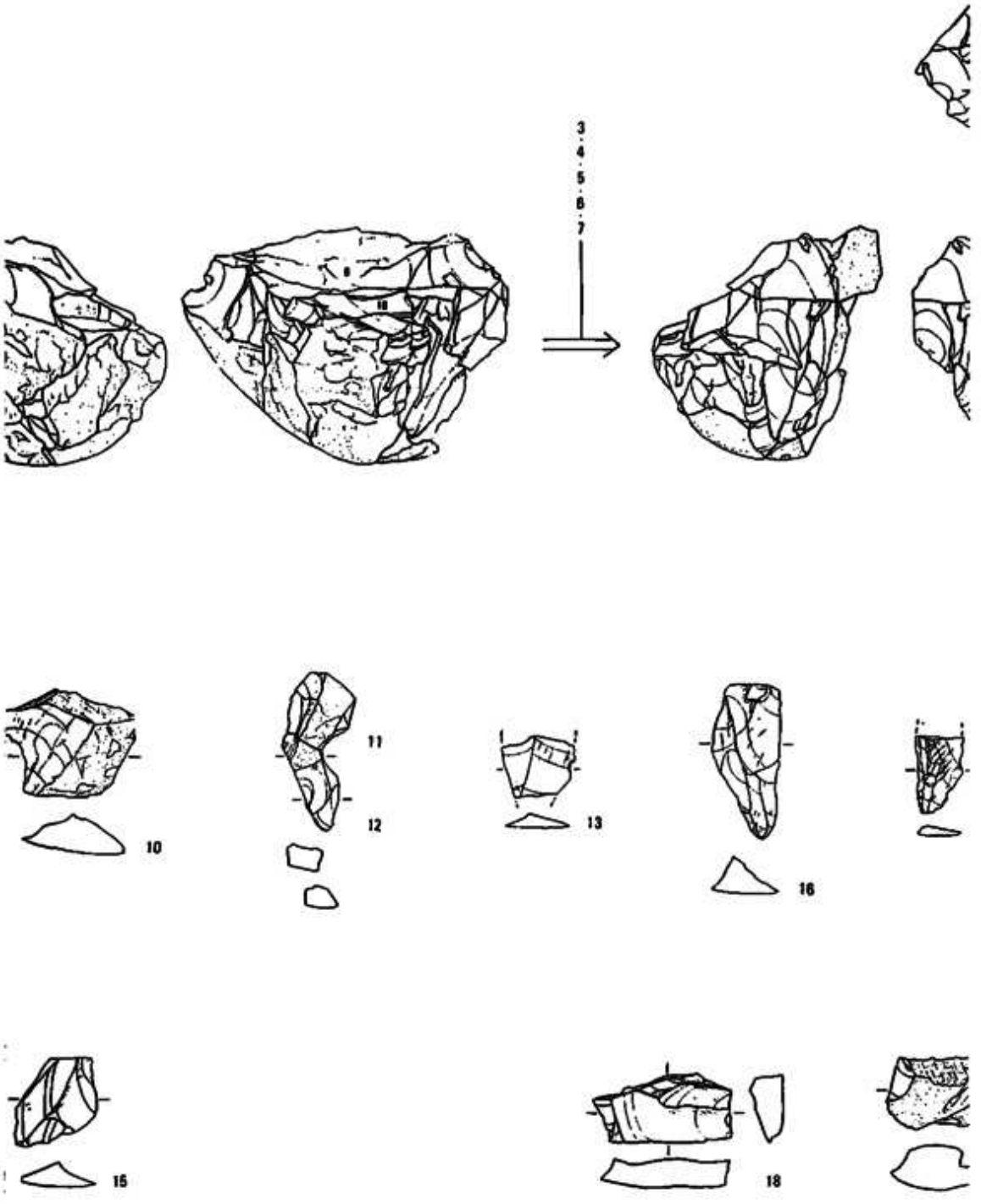
第304図　個体別資料K3－2 D①



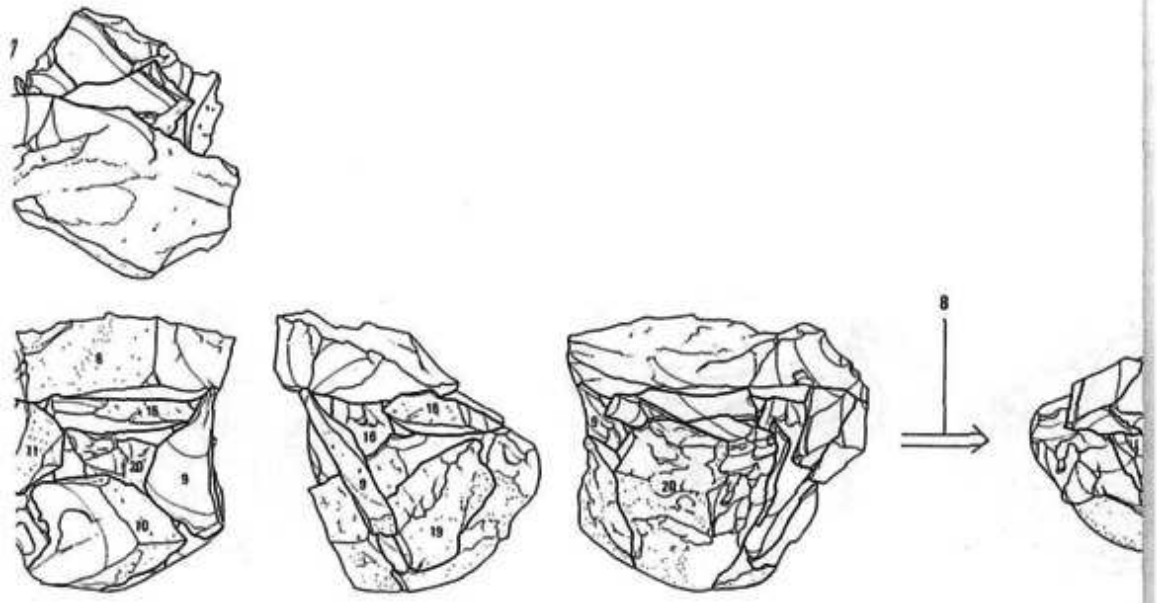


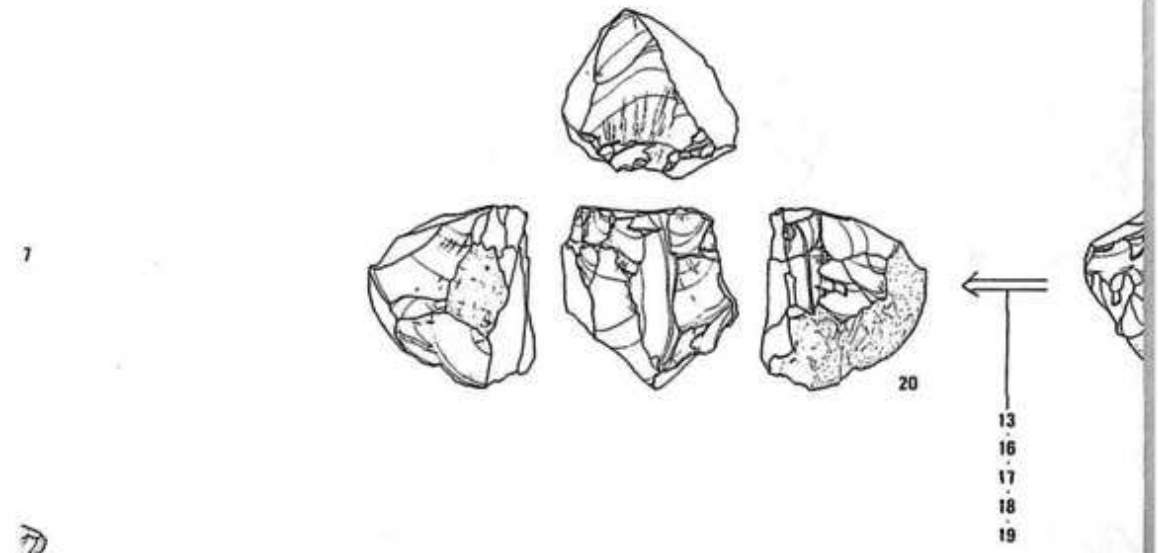

1
2
18
15
16

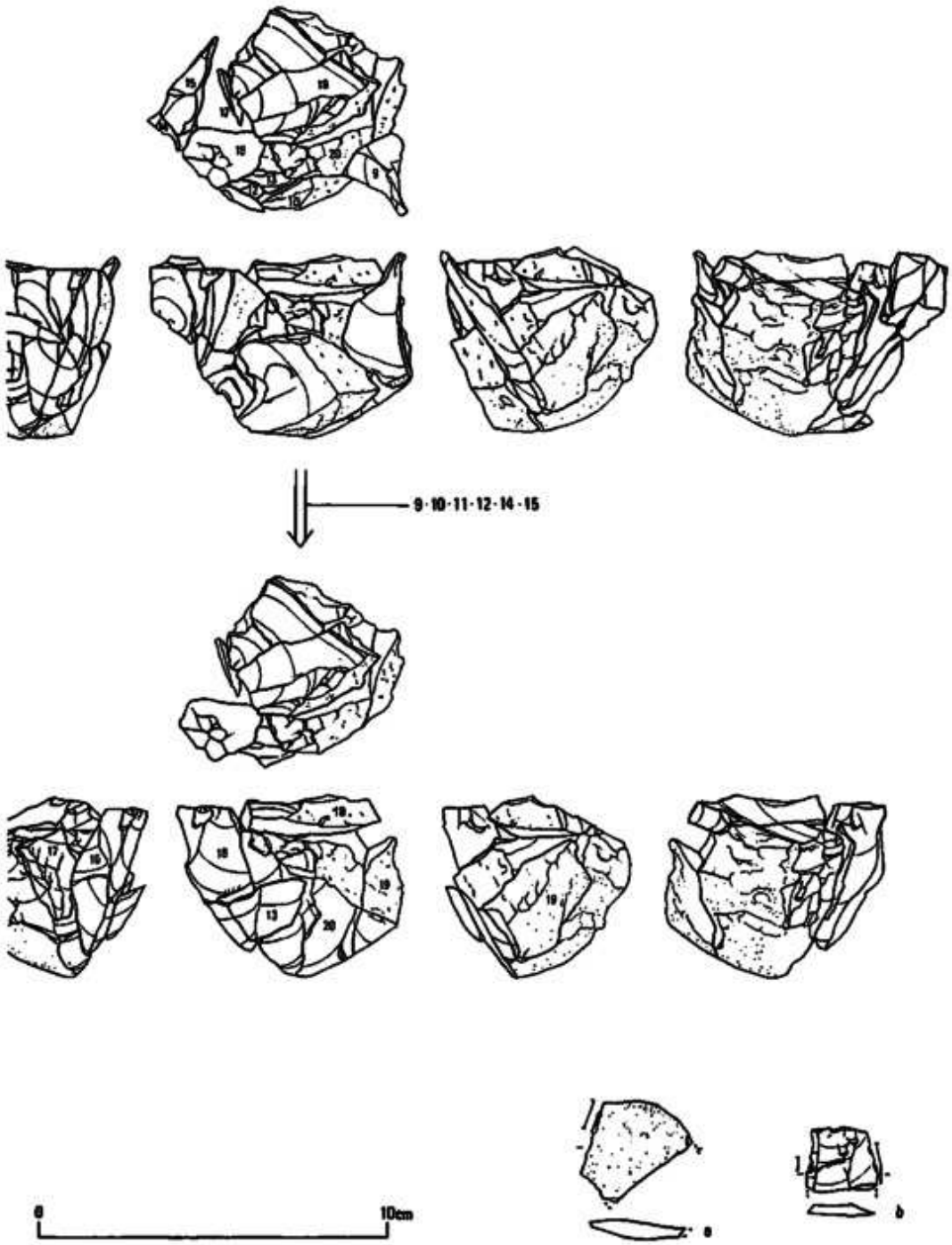

6
7
8
9
14



第305図　個体別資料K３－２Ｄ⑥


8
16
9
19
20


20
13
16
17
18
19


9·10·11·12·14·15
0
10cm
a
b

取る。同じ目的でロ）２枚以上の礫表を持つ剥片を剥がす。打面を90°移し③＋④＋⑤の剥片を取る。節理のために３つに破損している。③以下に前後して，ハ）・ニ）では礫表を剥ぎ落としている。次いで⑥＋⑦＋ホ）の厚手の剥片を取るが，これは剥がしたと言うよりも，受熱のため剥落した可能性が強い。厚手の剥片からホ）と⑯を剥がしたために⑦が石核になっている。⑤・⑦に続いて⑧の大型剥片を取り，いよいよ本格的な剥片剥離に移る。⑧の剥離面を打面に，⑨・⑪＋⑫・⑭が剥がされるが，相互の前後はわからない。⑩は③＋④＋⑤と同じ打面から，⑪＋⑫に先立って剥がされる。⑪＋⑫に続いては⑬が，⑭の次は⑮がそれぞれ⑨・⑪＋⑫・⑭と同じ打面から取られる。⑬に続いてヘ）さらに⑯と剥がされる。ト）～チ）までは数枚の整った剥片を連続して取っており，工程中最も充実している。⑩を除き⑨からチ）までに10枚以上の整った縦長剥片が取られたと考えられる。リ）で90°打面を移し，⑨～チ）の作業面を打面として剥片を数枚取る。再び打面を90°移し，節理面から⑱・⑲を剥がす。一種の体部調整とも解することができる。ヌ）では，リ）と同じ打面にもどり２～３枚の縦長剥片を取り㉚の石核が残される。

本個体でも，最後までに少なくとも６回以上打面を移している。しかし最も頻繁なのは全体を大きく調整する時で，その目的上当然のことと言える。本格的な目的剥片剥離に入る⑨以降では，大きな転移は１回のみで，石核にも90°異なる打面を２ケ所持つに留まる。

目的剥片は10～15枚剥がされたようであるが，そのうち５枚以上は持ち去られている。他の個体に較べると若干搬出率が落ちるように思える。遺跡に残されたとは言え，目的剥片を取る工程に入ってくる剥片は比較的形も整っており，⑨～⑰の９点中６点がＵＦである。これに対し他の工程に入る９点中では，ＵＦはわずかに１点含まれるのみである。

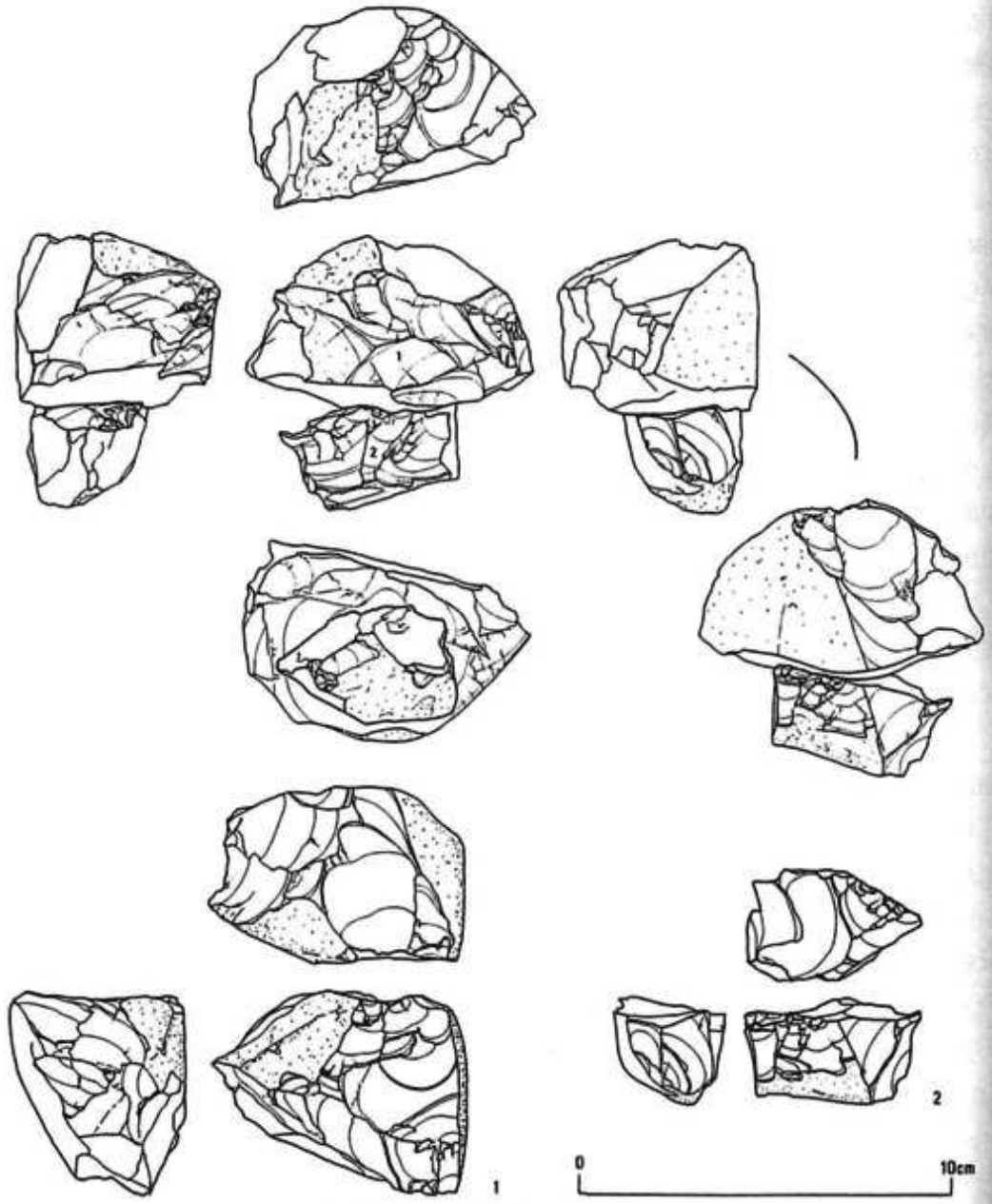
＜Ｋ３－２Ｅ③＞（第306図）　わずかに３点からなる個体である。特徴的であるために個別に解説するが，わずか２点の接合であるため作業手順は示さない。３点のうち２点が石核である。

石核２点が接合している。石材が特徴的であるにも関わらずわずかに１点の剥片しか伴わない事から判断して，他の遺跡で分割された石核素材のうち①２Ｅ２Ａ４はそのまま携帯され，②２Ｅ１Ａ３は幾分剥片が剥がされたのちに本遺跡に持ち込まれたと考えられる。②から取られた剥片は２cm前後と非常に小さく形も整っていない。②の剥離痕を観察すると，少なくとも３ケ所以上の作業面を持っており，打面の頻繁な移動が考えられる。打面他の調整は施さない。

＜Ｋ３－２Ｆ①＞（第307図）　50点で構成される。Ⅱ種接合は１組２点で，資料数は51点になる。ナイフ形石器２点とＲＦ１点を含む。４組24点が接合しているが，最多のＡ群15点についてのみ説明する。他の３組は，これにつづく工程と思われるがＡ群で代表できると考えられる。

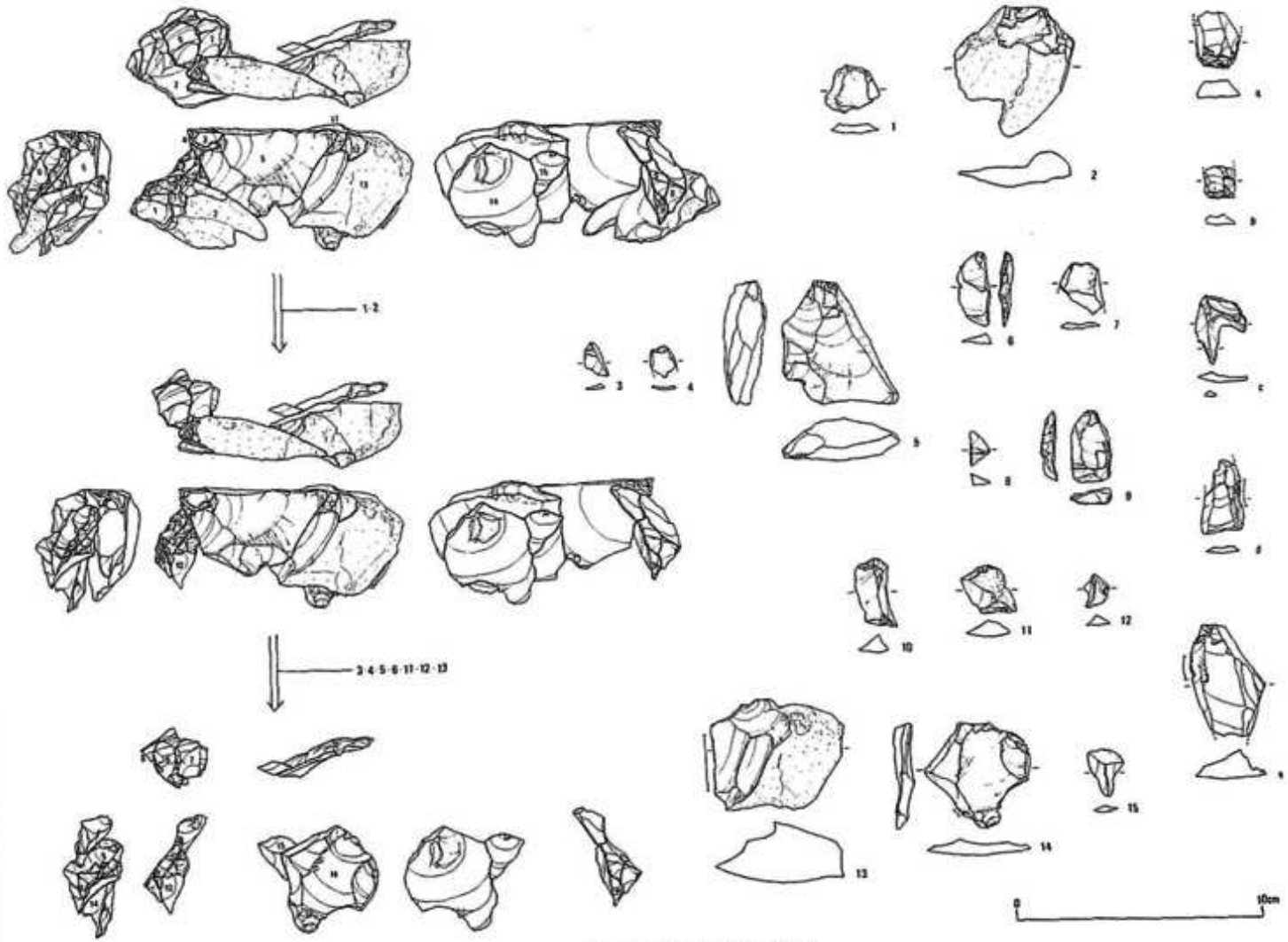
Ａ群

イ→①２F19A34(B)→②２F19A８(B)→ロ→③２F19A22(B)→④２F19A63(B)→ハ→
⑤２F19A41(UF)┼→ニ→⑥２F19A36(B)┬→⑦２F19A10(B)──┬──⑨２F19A21(UF)─
└→⑧２F19A216(B)─┘
→⑩２F19A16(B)┼→ホ┼→⑪２F19A59(B)＋⑫２F19A108(B)→⑬２F19A４(UF)┼→ヘ┼
→⑭２F19A７(UF)→⑮２F19A32(B)



第306図　個体別資料K３－２E③

イ)すでに数枚の剥片を取っているが，最初期の剥片から残っている。①から⑤まで大小合わせて６枚以上の剥片を同じ打面から取っている。ほとんどが礫表を留めており，一連の調整剥離と考えられる。⑤の剥離痕に打面を移し，ニ)数枚の小剥片を取る。続けて⑥・⑦・⑨・⑩と小縦長剥片を連続的に剥がす。⑧のみ90°打面を違えて，同じ作業面から小剥片を取っている。何枚か同様な剥離があったと思われるが，詳細はわからない。ホ)では打面を移し，⑪以下の打面作出のため剥離を施している。⑪～⑬と再び礫表部分の調整を行う。⑬の剥離面を打面に，ヘ)では数枚の整った剥片を取ったと考えられる。最後に，ヘ)の打面調整の様に⑭・



第307図　個体別資料K3－2F①

⑮を取っている。持ち出された石核は長径６cm位のものと考えられる。

本個体は，工程初期から本格的な目的剥片剥離の初期までを含むようである。非接合資料中のナイフ形石器などは整った縦長剥片を利用していると思われる。これらの素材と同時に剥がされたと思われる目的剥片は，持ち去られたのであろう。打面転移はやはり頻繁であったが，K３－２D⑤個体に照らすと，本個体が初期工程を中心とするだけに当然とも考えられる。本個体の素材も，長径10～13cm位の円礫と考えられる。

＜K３－３F③＞（第308図）　25点で構成される。Ⅱ種接合が３組６点あるため，資料数は28点になる。石核を１点含む。３組19点が接合するが，最多接合のA群12点についてのみ詳述する。

A群

イ→①３F11A９(B)→ロ→②３F11A４(UF)→ハ┼→③３F12A１(B)＋④３F11A８(B)―
┼→⑤３F６A２(B)＋⑥３F６A16(B)┼→⑦３F11A10(B)→⑧３F11A５(B)→⑨３F６A７(B)┼―
┬→⑩３F６A４(B)→ニ┼→⑪３F６A６(UF)＋⑫３F７A２(B)→ホ→⑬３F６A14(B)→ヘ
└→⑭３F６A18(B)＋⑮３F６A15(B)

イ)すでに数枚の剥片を取っているが，石核全体を成形する初期工程から残されている。①～ハ)まで，連続的に礫表の部分が調整された後，ハ）の剥離面を打面に再び③＋④で礫表を取り除いている。③＋④が節理で十分に剥がれなかったためか，打面を移し⑤＋⑥で③＋④の延長上にある瘤を取り去っている。⑦～⑨はかつての剥離痕を打面に，やはり連続して礫表を剥がしている。⑩・ニ)は⑨の剥離痕を打面とする。いずれも礫表を持つ剥片である。ニ)では１～３枚の剥片を取っている。⑪～⑬はニ)の面に打面を移して剥片を剥がすが，ホ)の段階でようやく目的剥片を取り始める位であろうか。⑩以後と前後して，⑭＋⑮の調整剥片が取られているが，節理面で剥がれており前後関係が明らかでない。ヘ)では，径５～６cmの整った石核が持ち出されたと考えられる。

本個体はほとんど完全な，石核を準備する段階を示していると思われる。個体中には１点の整った剥片(ａ)を含むが，他は初期工程の典型的な資料である。ｂの石核を１点含むが，これは大型剥片を素材とする石核と考えられる資料で，本個体の中心となるものではないと思われる。このような剥片剥離工程の一段階を示す典型的な個体が存在することは，工程全体を初期とそれ以後に分けることの有効性をより積極的に支持する材料と考えられる。

＜K３－３G①＞（第309図）　44点で構成される。Ⅱ種接合が３組６点あるため，資料数は47点になる。ＲＦを１点含む。接合資料は３組14点あるが最多接合のA群11点のみを示す。

A群

イ→①３G11A61(B)→ロ→②３G11A59(B)→③３G11A50(B)→ハ→④３G11A15(B)＋⑤３G11A８(C)―
→ニ→⑥３G11A47(B)→ホ┬→⑦３G６A１(UF)―――――――――――――――――――
└→⑧３G12A３(B)→⑨３G11A10(B)＋⑩３G11A35(B)→ヘ―┘
→⑪３G11A４(UF)→⑫３G11A34(B)→ト→⑬３G12A２(UF)

イ)すでに礫表は全く残していない。目的剥片剥離に入る直前から始まっている。①～⑤までは，大小の打面調整・再生剥片である。④＋⑤が長さ６×幅２×厚さ１cm位で最も大きく，

これによって打面が再生されている。①～ハ)までは作業面からの打撃であるが，④＋⑤は側方から加撃されている。④＋⑤を打面に，ニ)正面から数枚の縦長剥片を取る。⑥では，④＋⑤と同じ打面から調整剥片を取っている。⑥の位置は，丁度④＋⑤の強いリングの部分に当たっており，その凹凸を取り去ろうとしたものであろう。ホ)以下⑫までは，④＋⑤，⑥で作られた打面を利用し，正面から連続的に縦長剥片を取っている。途中で持ち去られているホ)・ヘ)のおよそ4～5点を加えると，この間に10点余りの整った縦長剥片が取られている。本個体は頁岩中でも堅緻なもので，剥片にも薄くて整ったものが多い。ト)では上下から小剥片が剥がされ，⑬でほぼ作業面全体が剥がされている。

本個体は，目的剥片剥離段階が残されていると考えられるが，接合資料以外には目的剥片と思われる資料が1点あるのみである。多くのものが持ち去られたと考えられる。打面転移はあまり行われない。

＜K3－4I①＞（第310図）　5点で構成される。全てが石核で，うち3点が接合する。

イ→①4I8A5(D)┼→②4I8A7(D)→③4I8A6(D)→ロ

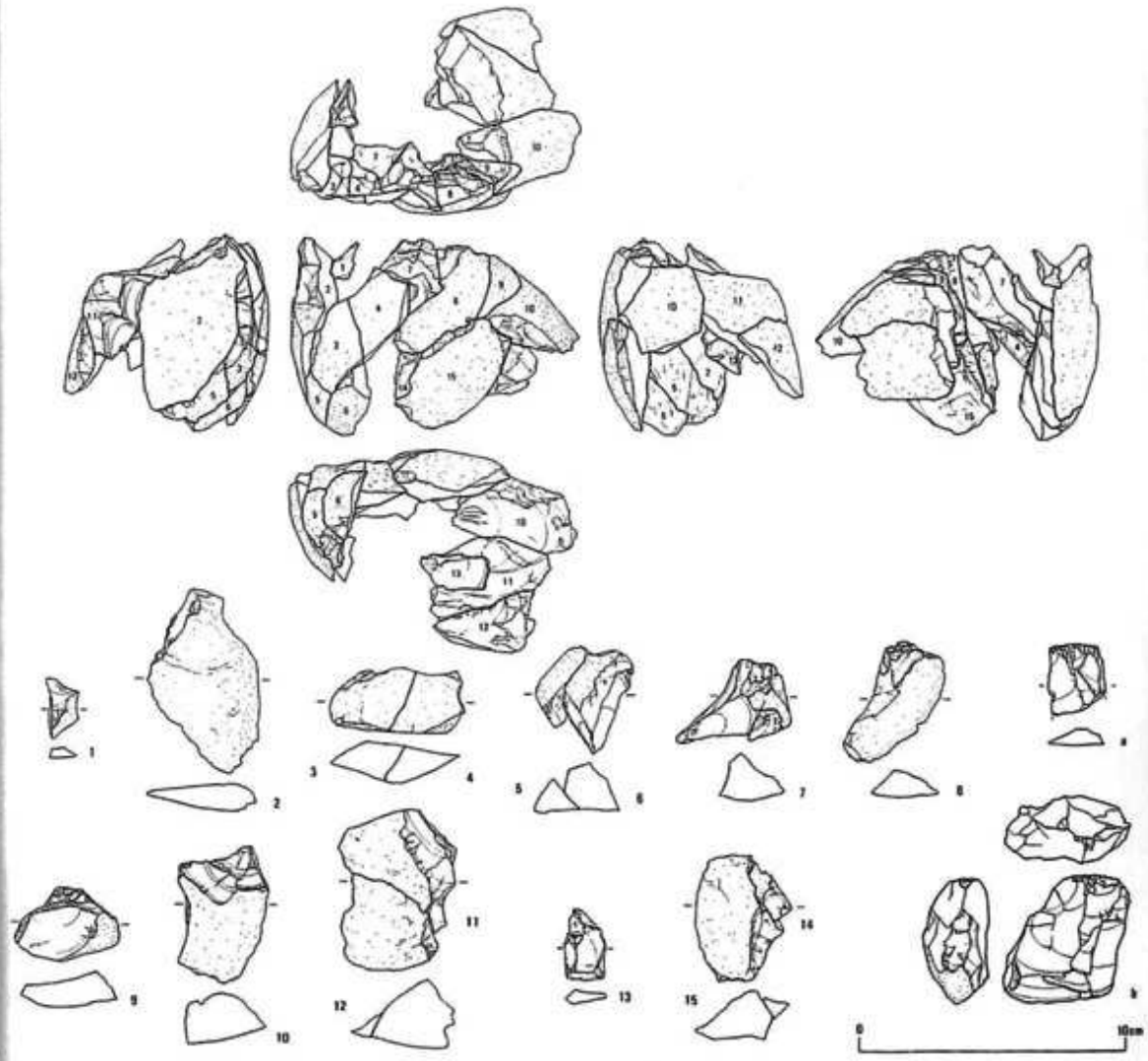
イ)ですでに大きな剥離が何回か施されている。母岩は径15cmほどもあったと考えられる。①～③でも全て大型で部厚い剥片を取っており，それぞれが剥片素材の石核に転用されている。ロ)以降の資料を欠くが，本個体が撹乱溝中に残されたわずかな包含層中からの出土であることを考慮すると，それが搬出されたのか否かの判断は下せない。

本個体も，母岩全体を複数の大型剥片に分割し，各々を石核とする好例である。いずれの石核でも，剥片は1～3枚位しか得られておらず，非常に無駄の多い技術のように思われる。得られる剥片はやや縦長(②・③)から横長(b)までバラエティに富んでいる。目的剥片に対する要求の曖昧さを現しているのであろうか。

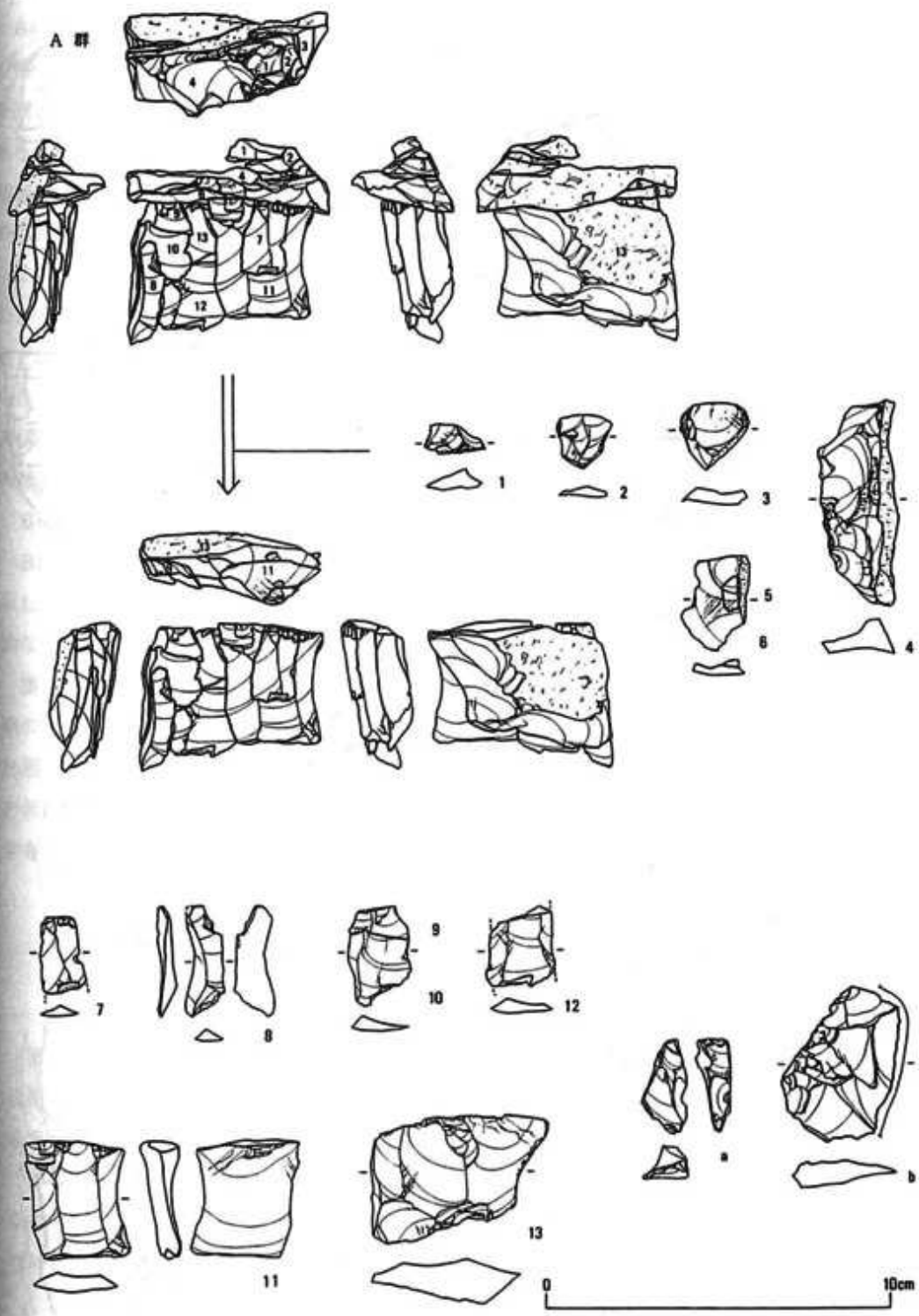
北区も含めて10個体について，接合例の技術的検討を基礎に剥片剥離工程を追ってみた。その結果，基本的には第2b層で示した剥片剥離技術6類型の中で理解できることがわかった。以下A_1～A_4，B_1・B_2の順に類例の検討を行いたい。

A_1類(K3－1C⑦・1C⑫・2D①・2E③・4I①個体)　上記の10例中5例が本類に含まれることからわかるように，第2b層以上に典型的な例が本層には含まれている。それらによると，必ずしも最初から母岩を分割するのではなく，分割までには何がしかの成形と剥片剥離が介在することもあるようである。(K3－1C⑦・2E③)。またK3－4I①のように，分割と言うよりは大型の剥片を素材として剥がして行く例もある。A_2類のように剥片素材石核が単品として出現するのではなく，意図的・組織的にそうした工程を踏んでいるために，A_1類の中で捉えた。

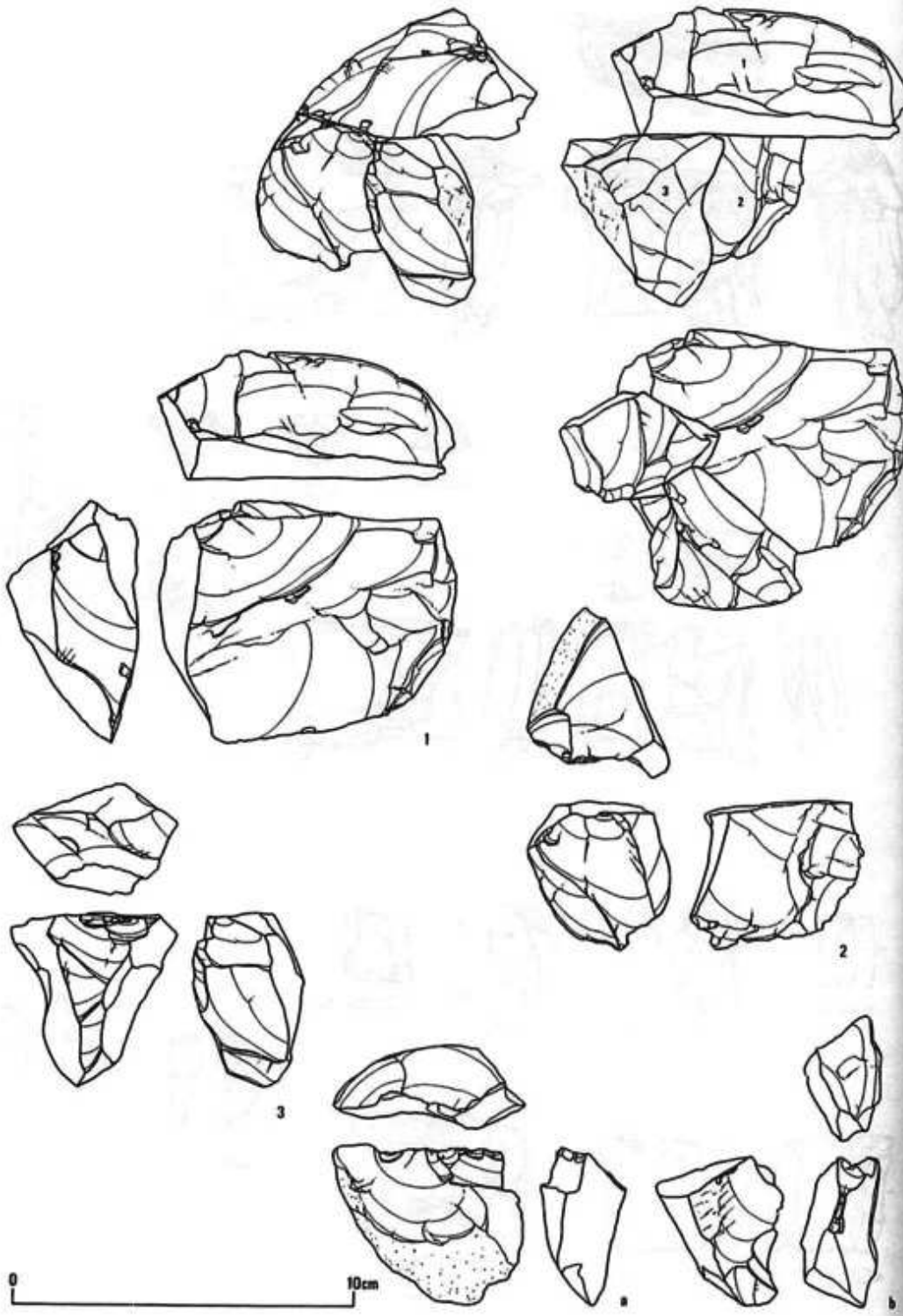
A_2類(K3－1C⑪・2D⑤・3F③・3G⑤個体)　第2b層と同様，付随的な工程であるが，本層では例が稀である。K3－2D⑤・3F③ではA_4類と共存している。K3－1C⑪はA_2類のみの工程であるが，これが組織的であると判断されればA_1類に分類されるものであり，その認定は極めて曖昧である。



第308図　個体別資料K３－３Ｆ⑧



第 309 図　個体別資料K３－３Ｇ①



第310図　個体別資料K3－4 I①

A3類は所属個体が認められない。

A4類(K３－２D⑤・２F①・３F③・３G①個体)　A1類とともに，本層では最も多く見られる技術工程である。工程全てをほぼ完全に捉えられるK３－２D⑤によると，礫表部を剥ぎ落とし石核の概形が完成した後はあまり打面転移は行わず，縦長の目的剥片を連続的に取る。この間，各種の調整と考えられる手順は全く入ってこない。また，偶発的に取られた大型剥片は，任意に石核に転用している。K３－２D⑤以外の個体に認められる現象も，ほぼこの工程の中で理解し得るものである。

このように見てくると，本層で認めたA4類と第2b層のそれには大きな隔たりのあることがわかる。極言するならば共通点は一個体が基本的には一石核に収斂するという点のみである。他では，本層では整った縦長剥片が取られるのに対し，第2b層では不定形剥片に近いものが取られている。また，打面転移・各種の調整においても大きな懸隔があるようである。第2b層のA4類に広いヴァリエーションを認めたために，本層の資料もその中で説明したが，本層のA4類は，非常に限定された内容を持つものであることを銘記しておきたい。

B1類は検出されていない。

B2類(K３－４Ⅰ①個体)　第2b層でもあまり普遍的な技術ではなかったが，本層でも例示した他一例を数えるのみである。K３－４Ⅰ①でも他の技術と共存し，A2類とともに付随的な技術である。

第３層では，A1・A2・A4・B2の４類型の剥片剥離技術が認められたが，A2・B2類の例の少なさから判断して，A1・A4類を中心とした技術基盤を考えることができる。第2b層ではB1類を除く全ての技術が混然一体となり，その不明瞭さにこそ特徴があったが，その前段階たる第３層では，明瞭に識別し得るA1・A4類の卓越という特徴を把握することができた。

(山下)

第４節　石器の分布

第３層石器群の分布状況を遺跡全体で概観すると(別添第４図)，A－C列・D・E列・F－H列・Ⅰ－K列にそれぞれ緩やかなまとまりをもって分布している。本稿では，中央区にあたるF－H列の石器分布について詳しく紹介したい。

本稿での目的は，石器群の分布について分析し，集落復原のためのデータを整理・検討することである。本節では，ブロック等を利用して分析を進め，石器群の分布状況を把握して行きたい。

１．ブロックの設定

中央区石器群として分析するのは，F・G・H列の南北約70m・東西約60mの範囲に分布す

る石器群である。また，２Ｅ区南縁部２Ｅ25区，及び３Ｉ区北東隅から４Ｉ区北西部３Ｉ５・４Ｉ１・７・８・14区に分布する石器群もＦ－Ｈ列の石器分布のまとまりに含まれる可能性があり併せて紹介しておく。なおＨ列南東隅の２Ｈ24・25区は，事前に個体別資料の分布状況を検討した結果，南区に帰属する可能性が高いことがわかったので中央区石器群からは除外した。この点については629頁で記述する。中央区石器群は，総数546点の石器で構成されることになる。石器組成は，ナイフ形石器13点・彫器３点・ＲＦ13点・敲石類12点・石斧１点・台石４点・ＵＦ68点・剥片178点・砕片245点・石核９点となる。これらは何れも原位置を保って出土した資料である。

石器群の分布状況を観察すると，中央区内に均一に分布していないことがわかる。２Ｆ19・20区や３Ｇ11・12区のように石器群が密集して分布する所や，それとは対照的に２Ｇ・４Ｇ・２Ｈ・３Ｈ・４Ｈ・４Ｉ区のように石器群が極めて散漫に分布している箇所が中央区内にはあり，石器群の分布には疎密がある。石器群平面分布図(別添第27図)と石器群分布密度図(第311図)を参考にして検討した結果，みかけ上の石器分布のまとまりであるブロックを計11ケ所抽出できた。具体的には，石器群分布密度図の２ｍメッシュが連なってまとまりを形成していることをブロック認定の基準とし，これに視覚的な修正を加える方法をとった。また，結果的に石器群の一部にはブロックからはずれる資料もあった。これらの資料については，ひとまず一括してブロック外の遺物として取り扱う。

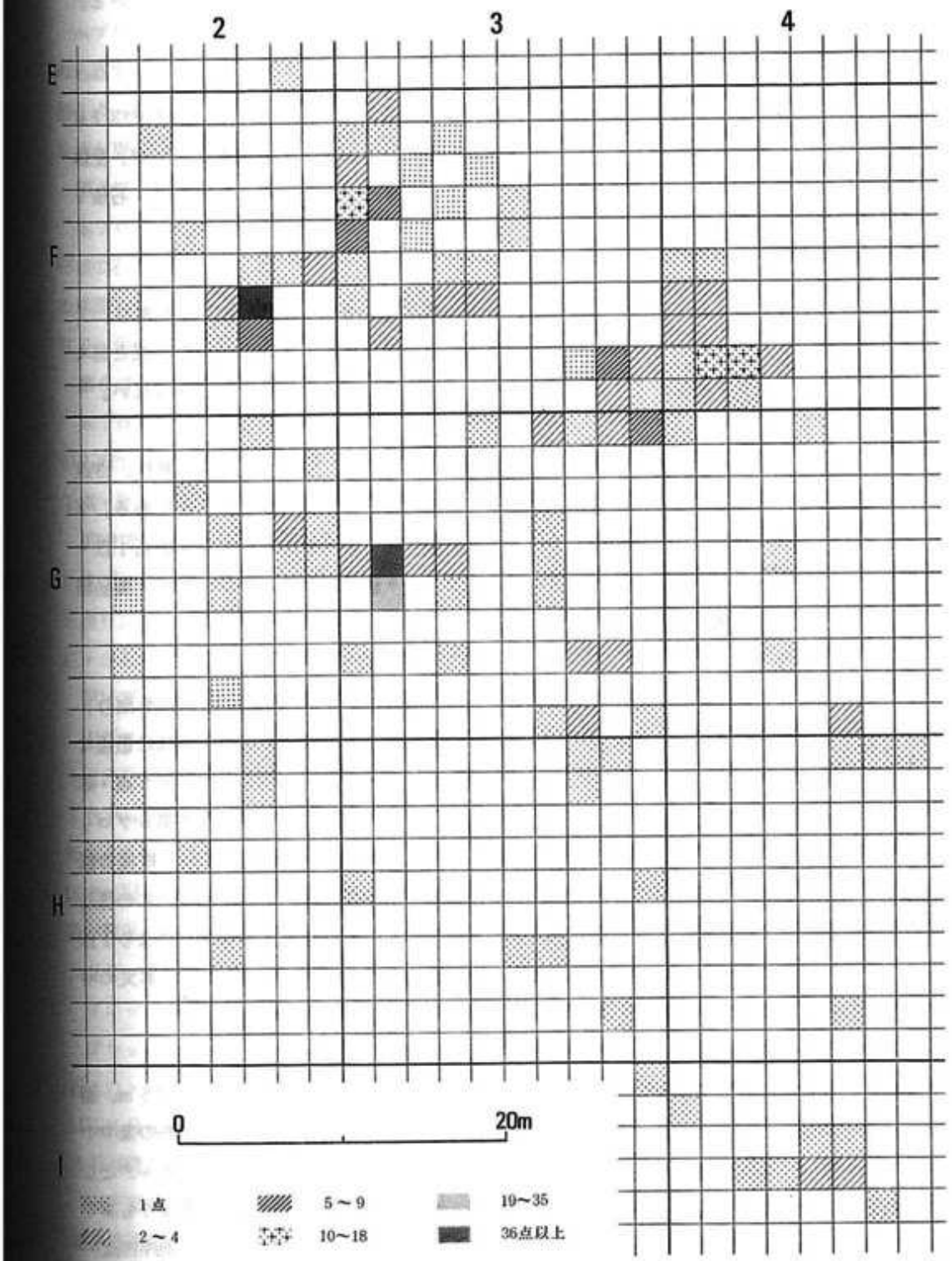
以下に，各ブロックの特徴を記しておく(別添第27図，第69表)。

第１ブロック(Ｋ３－１)

本ブロックは，２Ｆ14・15・19区に位置する。分布範囲は６×２ｍ，面積で6.3㎡を測り，279点の石器で構成される。ブロック中央部の径2.5×２メートルの範囲に極めて密集して石器が分布し，その周囲はまばらな分布状況である。石器組成は，ナイフ形石器３点・ＲＦ１点・

第69表　中央区第３層ブロック別石器組成表

ブロック	構成石器数	ナイフ形石器	彫器	ＲＦ	敲石類	石斧	台石	ＵＦ	剥片	砕片	石核
1	279	3	0	1	1	0	0	8	43	223	0
2	30	0	0	0	0	0	1	8	19	1	1
3	7	0	0	1	0	0	0	1	4	1	0
4	13	1	0	0	1	0	1	2	7	1	0
5	29	3	2	0	0	0	0	7	16	1	0
6	27	2	1	3	0	0	0	9	11	1	0
7	6	3	0	1	0	0	0	0	2	0	0
8	65	0	0	2	0	0	0	5	41	17	0
9	6	1	0	0	0	0	0	0	5	0	0
10	9	0	0	0	1	0	1	7	0	0	0
11	9	0	0	0	0	0	0	3	0	0	6
ブロック外	66	0	0	5	9	1	1	18	30	0	2
計	546	13	3	13	12	1	4	68	178	245	9



第311図　第３層出土石器分布密度図（４㎡単位）

楔石1点・UF8点・剥片43点・砕片223点となる。砕片が極めて多く，80%を占めている。付近に攪乱溝はない。

第2ブロック(K3－2)

本ブロックは，3F1・6・7・11・12区に位置する。分布範囲は7×3m，面積で13.2㎡を測り，30点の石器で構成される。ブロック中央部にやや分布の集中する箇所があるが，全体に散漫な分布状況といえる。石器組成は，台石1点・UF8点・剥片19点・砕片1点・石核1点となる。付近に攪乱溝はない。

第3ブロック(K3－3)

本ブロックは，3F12・17・18区に位置する。分布範囲は4×3m，面積で8.1㎡を測り，7点の石器で構成される。ブロック内には分布の集中する箇所はなく，まばらな分布状況と言える。石器組成は，RF1点・UF1点・剥片4点・砕片1点となる。付近に攪乱溝はない。

第4ブロック(K3－4)

本ブロックは，4F11・16区に位置する。分布範囲は3×3m，面積で6.1㎡を測り，13点の石器で構成される。ブロック内に分布の集中する箇所はなく，まばらな分布状況である。ブロック南縁部付近に，敲石・台石が分布している。石器組成は，ナイフ形石器1点・敲石1点・台石1点・UF2点・剥片7点・砕片1点となる。ブロック構成石器数が少ない割に，製品類が5点と多い。付近に攪乱溝はない。

第5ブロック(K3－5)

本ブロックは，4F16・21・22区に位置する。分布範囲は7×4m，面積で13.3㎡を測り，29点の石器で構成される。ブロック北部には若干分布の集中する箇所があるが，全体に散漫な分布状況である。剥片は，ブロック北半部に分布が偏る。石器組成は，ナイフ形石器3点・彫器2点・UF7点・剥片16点・砕片1点である。彫器は，中央区内では本ブロックと第6ブロックのみが保有している。ブロック南方約1mの位置には，東西約11m，南北約5mの規模の攪乱溝がある。しかし，本ブロックは南方に向っては余り分布が延びないようであり，この攪乱溝はほとんど影響ないと考えられる。なお，ナイフ形石器3点中の2点はII種接合により1点になることが判明している(第268図28)。実際にはこれらは1点と見做し得るが，本文の中では統計上は全て2点として処理してある。

第6ブロック(K3－6)

本ブロックは，3F25・4F21・3G5・4G1区に位置する。分布範囲は6×3.5m，面積で12.0㎡を測り，27点の石器で構成される。ブロック内には北半部と南半部に分布の集中する箇所があり，二分される可能性もある。しかし，相互に近接しているため同一ブロックとして判断した。北半部にはUFを中心にナイフ形石器・RFといった製品類が南半部よりも多く分布している。石器組成は，ナイフ形石器2点・彫器1点・RF3点・UF9点・剥片11点・砕片1点となる。ブロックに南接して第5ブロックで記した攪乱溝が存在し，ブロックの一部が削られている可能性が高い。

第7ブロック(K３－７)

本ブロックは，２G10・15区に位置する。分布範囲は２×２m，面積で2.0㎡を測り，６点の石器で構成される。ブロック内には石器がまばらに分布している。石器組成は，ナイフ形石器３点・ＲＦ１点・剥片２点となり，ナイフ形石器が多い。ブロックの北側には幅約１mの撹乱溝が東西方向に走り，ブロックの一部が削られている可能性がある。

第8ブロック(K３－８)

本ブロックは，３G６・11・12区に位置する。分布範囲は７×４m，面積で12.7㎡を測り，65点の石器で構成される。ブロック中央部の径約1.5mほどの範囲に密集して石器が分布し，その周囲ではまばらな分布状況である。石器組成は，ＲＦ２点・ＵＦ５点・剥片41点・砕片17点となり，剥片・砕片が約90％を占める。付近に撹乱溝はない。

第9ブロック(K３－９)

本ブロックは，３G19・20区に位置する。分布範囲は2.5×1.5m，面積で1.4㎡を測り，６点の石器で構成される。ブロック内に石器はまばらに分布している。石器組成は，ナイフ形石器１点・剥片５点となる。付近に撹乱溝はない。

第10ブロック(K３－10)

本ブロックは，３G24・25，３Ｈ４・５区に位置する。分布範囲は５×３m，面積で9.3㎡を測り，９点の石器からなる。ブロック内には石器がまばらに分布する。石器組成は，敲石１点・台石１点・ＵＦ７点となり，製品が主体である。付近に撹乱溝はない。

第11ブロック(K３－11)

本ブロックは，４Ｉ７・８・14区に位置する。分布範囲は６×３m，面積で10.1㎡を測り，９点の石器で構成される。ブロック内には，石器がまばらに分布している。石器組成は，ＵＦ３点・石核６点となり，石核が多量にある点が注意される。本ブロックは，３Ｈ・４Ｈ区南半部から３Ｉ・４Ｉ・３Ｊ・４Ｊ・３Ｋ・４Ｋ区全域に及ぶ大撹乱溝内に位置する。４Ｉ・４Ｈ区では旧地表面が低かったために撹乱を一部免れていると考えられるが，本ブロックの構成石器が撹乱の影響で失われている可能性は否定できない。

ブロック外

ブロック区分からはずれた石器を中央区内で一括して紹介する。

ブロック外には，66点の石器が分布する。石器組成はＲＦ５点・敲石類９点・石斧１点・台石１点・ＵＦ18点・剥片30点・石核２点である。これらの石器群は，ブロックからはずれてまばらに分布しているが，ブロック周囲に分布する資料と２Ｇ区南半から２Ｈ区に亘って分布する石器群などブロックから離れて分布する資料がある。

一方でブロックは，相互に近接して存在している場合もある。２Ｆ区南東部から３Ｆ区北西部の範囲に位置する第１・２・３ブロック・３Ｆ区南東部・４Ｆ区南西部から３Ｇ区北東部の範囲に位置する第４・５・６ブロック・２Ｇ区東部から３Ｇ北東部の範囲に位置する第７・８ブロック・３Ｇ区南東部から３Ｈ北東部の範囲に位置する第９・10ブロックがそれである。こ

れらの相互に近接したブロックを，ブロック間及び周囲に分布するブロック外の石器群も含めてブロック群と呼称することにしたい。また，ブロック群に含まれるブロック外の遺物は，各群のブロック群周辺部(以下ブロック群周辺部と略称する)と呼称する。各ブロック群のブロック群周辺部のみの石器組成は第71表に提示してある。

以下に各ブロック群の特徴を記しておく(第70表)。

第Ⅰブロック群

本ブロック群は，２Ｆ区南東部から３Ｆ区北西部の範囲に位置する第１・２・３ブロックと，これらのブロック周囲および各ブロック間に分布する石器群で構成される。石器組成は，ナイフ形石器３点・ＲＦ３点・敲石類３点・台石１点・ＵＦ23点・剥片73点・砕片225点・石核１点となり，総石器数は332点である。中央区内では，本群は構成石器数が最多となる。これは，第１ブロックが多量の砕片を含むためである。

第Ⅱブロック群

本ブロック群は，３Ｆ区南東部・４Ｆ区南西部から３Ｇ区北東部の範囲に位置する第４・５・６ブロックと，これらのブロック周囲に分布する石器群により構成される。石器組成は，ナイフ形石器６点・彫器３点・ＲＦ３点・敲石類２点・台石１点・ＵＦ22点・剥片34点・

第70表　中央区第３層ブロック群別石器組成表

	構成石器数	ナイフ形石器	彫器	ＲＦ	敲石類	石斧	台石	ＵＦ	剥片	砕片	石核	製品	(定型石器)	(礫石器)	付随生産物
第Ⅰブロック群	332	3	0	3	3	0	1	23	73	225	1	33	6	4	299
	(100.0)	(0.9)	(0.0)	(0.9)	(0.9)	(0.0)	(0.3)	(6.9)	(22.0)	(67.8)	(0.3)	(9.9)	(1.8)	(1.2)	(90.1)
	(60.8)	(23.1)	(0.0)	(23.1)	(25.0)	(0.0)	(25.0)	(33.8)	(41.0)	(91.8)	(11.1)	(28.9)	(20.7)	(23.5)	(69.2)
第Ⅱブロック群	74	6	3	3	2	0	1	22	34	3	0	37	12	3	37
	(100.0)	(8.1)	(4.1)	(4.1)	(2.7)	(0.0)	(1.4)	(29.7)	(45.9)	(4.1)	(0.0)	(50.0)	(16.2)	(4.1)	(50.0)
	(13.6)	(46.2)	(100.0)	(23.1)	(16.7)	(0.0)	(25.0)	(32.4)	(19.1)	(1.2)	(0.0)	(32.5)	(41.4)	(17.6)	(8.6)
第Ⅲブロック群	75	3	0	3	0	0	0	6	46	17	0	12	6	0	63
	(100.0)	(4.0)	(0.0)	(4.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(8.0)	(61.3)	(22.7)	(0.0)	(16.0)	(8.0)	(0.0)	(84.0)
	(13.7)	(23.1)	(0.0)	(23.1)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(8.8)	(25.8)	(6.9)	(0.0)	(10.5)	(20.7)	(0.0)	(14.6)
第Ⅳブロック群	15	1	0	0	1	0	1	7	5	0	0	10	1	2	5
	(100.0)	(6.7)	(0.0)	(0.0)	(6.7)	(0.0)	(6.7)	(46.7)	(33.3)	(0.0)	(0.0)	(66.7)	(6.7)	(13.3)	(33.3)
	(2.7)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(8.3)	(0.0)	(25.0)	(10.3)	(2.8)	(0.0)	(0.0)	(8.8)	(3.4)	(11.8)	(1.2)

註　(　)内の数字は%　上：資料数　中：組成率　下：配分率

第71表　中央区第３層ブロック群周辺部別石器組成表

	構成石器数	ナイフ形石器	彫器	RF	敲石類	石斧	台石	UF	剥片	砕片	石核	製品	(定型石器)	(礫石器)	付随生産物
第Ⅰブロック群周辺部	16	0	0	1	2	0	0	6	7	0	0	9	1	2	7
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(6.3)	(12.5)	(0.0)	(0.0)	(37.5)	(43.8)	(0.0)	(0.0)	(56.3)	(6.3)	(12.5)	(43.8)
	(2.9)	(0.0)	(0.0)	(7.7)	(16.7)	(0.0)	(0.0)	(8.8)	(3.9)	(0.0)	(0.0)	(7.9)	(3.4)	(11.8)	(1.6)
第Ⅱブロック群周辺部	5	0	0	0	1	0	0	4	0	0	0	5	0	1	0
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(20.0)	(0.0)	(0.0)	(80.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(100.0)	(0.0)	(20.0)	(0.0)
	(0.9)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(8.3)	(0.0)	(0.0)	(5.9)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(4.4)	(0.0)	(5.8)	(0.0)
第Ⅲブロック群周辺部	4	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	1	0	0	3
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(25.0)	(75.0)	(0.0)	(0.0)	(25.0)	(0.0)	(0.0)	(75.0)
	(0.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(1.5)	(1.7)	(0.0)	(0.0)	(0.9)	(0.0)	(0.0)	(0.7)

※第Ⅳブロック群では，ブロック外には遺物は分布しない。
註（　）内の数字は％　　上：資料数　　中：組成率　　下：配分率

砕片３点となり，総石器数は74点である。中央区では本ブロック群のみ彫器を保有する。なお，ナイフ形石器６点中の２点はⅡ種接合資料である。

第Ⅲブロック群

本ブロック群は，２Ｇ区東部から３Ｇ区西部に位置する第７・８ブロックと，これらのブロック周囲に分布する石器群により構成される。石器組成は，ナイフ形石器３点・ＲＦ３点・ＵＦ６点・剥片46点・砕片17点となり，総石器数は75点である。

第Ⅳブロック群

本ブロック群は，３Ｇ区南東部から３Ｇ区北西部の範囲に位置する第９・10ブロックにより構成される。本ブロック群では，ブロック外に石器は分布しない。石器組成は，ナイフ形石器１点・敲石類１点・台石１点・ＵＦ７点・剥片５点となり，総石器数は15点である。他のブロック群に較べて構成石器数が極めて少ない。

ブロック群外の資料には，第11ブロックとブロック外の資料がある。これらの石器群は，ブロック群の範囲外に均一に分布するのではなく，いくつかの地域毎に分布が収まっている。こうした地域を第2b層と同様に散漫分布域と呼称することにしたい。

散漫分布域は，ブロック群外の資料の分布域を示すものであり，それ自体分布の単位を示すブロックをも含む。分析過程上，ブロックを含む散漫分布域をアルファベットの大文字で，ブロックを含まない散漫分布域をアルファベットの小文字で表わすことにする。なお，第2b層で観察されたブロックを含む散漫分布域は第３層では観察されない。ただ，第11ブロックは，散漫分布域ｆに含まれる可能

第72表　中央区第3層散漫分布域別石器組成表

	機成石器数	ナイフ形石器	彫器	RF	敲石類	石斧	台石	UF	剥片	砕片	石核	製品	(定型石器)	(礫石器)	付随生産物
散漫分布域 a	2	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	1
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(50.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(50.0)	(0.0)	(0.0)	(50.0)	(50.0)	(0.0)	(50.0)
	(0.4)	(0.0)	(0.0)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.6)	(0.0)	(0.0)	(0.9)	(3.4)	(0.0)	(0.2)
散漫分布域 b	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(100.0)	(0.0)	(100.0)	(0.0)
	(0.2)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(25.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.9)	(0.0)	(5.9)	(0.0)
散漫分布域 c	10	0	0	3	1	0	0	0	6	0	0	4	3	1	6
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(30.0)	(10.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(60.0)	(0.0)	(0.0)	(40.0)	(30.0)	(10.0)	(60.0)
	(1.8)	(0.0)	(0.0)	(23.1)	(8.3)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(3.4)	(0.0)	(0.0)	(3.5)	(10.3)	(5.9)	(1.4)
散漫分布域 d	3	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	0	0	0
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(100.0)	(0 0)	(0.0)	(0.0)
	(0.5)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(4.4)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(2.6)	(0.0)	(0.0)	(0.0)
散漫分布域 e	7	0	0	0	0	0	0	2	5	0	0	2	0	0	5
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(28.6)	(71.4)	(0.0)	(0.0)	(28.6)	(0.0)	(0.0)	(71.4)
	(1.3)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(2.9)	(2.8)	(0.0)	(0.0)	(1.8)	(0.0)	(0.0)	(1.2)
散漫分布域 f	9	0	0	0	0	0	0	2	5	0	2	2	0	0	7
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(22.2)	(55.6)	(0.0)	(22.2)	(22.2)	(0.0)	(0.0)	(77.8)
	(1.6)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(2.9)	(2.8)	(0.0)	(22.2)	(1.8)	(0.0)	(0.0)	(1.6)
散漫分布域 g	9	0	0	0	5	1	0	0	3	0	0	6	0	6	3
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(55.6)	(11.1)	(0.0)	(0.0)	(33.3)	(0.0)	(0.0)	(66.7)	(0.0)	(66.7)	(33.3)
	(1.6)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(41.7)	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(1.7)	(0.0)	(0.0)	(5.3)	(0.0)	(35.3)	(0.7)

註　( )内の数字は%　　上：資料数　　中：組成率　　下：配分率

性もあるが，同ブロックは３Ｉ・４Ｉ・３Ｊ・４Ｊ・３Ｋ・４Ｋ全域に及ぶ大撹乱溝内にあり，一応散漫分布域ｆとは区分しておく。各散漫分布域の石器組成については，第72表に提示しておく。各散漫分布域を観察すると，散漫分布域ｃ・ｅ・ｆのように広範囲に分布する場合や，散漫分布域ａ・ｂ・ｄのように狭い範囲に分布が収まる場合があり，分布範囲には一定の傾向は窺えない。構成石器数も最低１点から最高10点と幅があり，バラツキが多いと言える。

なお，散漫分布域ｇについては，石器群の分布状況のみから判断すると南方の２H24・25，２Ｉ５区の石器分布と一連のものとして考えられる。しかし個体別資料の分布状況を見ると，３H25区の剥片は南区を中心に分布するＫ３－２Ｉ②個体と同一個体である。これらは，Ｉ～Ｋ列にまとまって分布する南区の石器群に距離的にも近く，以上の様に個体の共有関係も見られることから，南区の石器群に帰属する可能性が高い。したがって中央区石器群として取り扱うのは，散漫分布域ｇとした範囲からとする。また，散漫分布域ｇは，散漫分布域ｃの分布の延長として見ることもできるが，散漫分布域ｇの西南部の２H区南西隅から１H区南東隅に亘って東西約16m，南北約８mの大撹乱溝があり，この点については保留しておく。

ここで設定したブロック群は，ブロックと同様にみかけ上の分布のまとまりである。ブロック群が何を反映するかとか，ブロック群内のブロックの相互関係及びブロック群相互の関係については，接合資料・個体別資料の分析によって検討したい。

また，ブロックを分布状況のみで分類すると以下のようになる。

Ａ類ブロック

ブロック中央部に，径１～２mの分布密集域を持つブロック。なお，密集域の周囲には石器がまばらに分布している。第１・８ブロックが相当する。

Ｂ類ブロック

石器が散漫に分布するブロック。第２・５・６ブロックが相当する。

Ｃ類ブロック

構成石器数も10点前後で，石器がまばらに分布するブロック。第３・４・７・９・10・11ブロックが相当する。

（竹広）

２．器種別分布

１）器種別分布

(1) ナイフ形石器

ナイフ形石器は，総数13点出土した(別添第28図)。分布は，Ｆ・Ｇ列に収まる。ブロック別に見ると，第１ブロックに３点(23.1%)・第４ブロックに１点(7.7%)・第５ブロックに３点(23.1%)・第６ブロックに２点(15.4%)・第７ブロックに３点(25.0%)・第９ブロックに１点(7.7%)が分布し，ブロック外には分布しない(第73表)。ブロックの類型別に見ると，Ａ・Ｂ・Ｃ各類のブロックには保有されているが，全てのブロックに含まれるのではなく，特定の数ブロックに１～３点と余り差がなく保有されている。ブロック内での分布状況は，第

第73表　中央区第3層器種別ブロック別配分表

	構成石器数	ナイフ形石器	彫器	RF	敲石類	石斧	台石	UF	剥片	砕片	石核
1	279	3	0	1	1	0	0	8	43	223	0
	(51.1)	(23.1)	(0.0)	(7.7)	(8.3)	(0.0)	(0.0)	(11.8)	(24.2)	(91.0)	(0.0)
2	30	0	0	0	0	0	1	8	19	1	1
	(5.5)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(25.0)	(11.8)	(10.7)	(0.4)	(11.1)
3	7	0	0	1	0	0	0	1	4	1	0
	(1.3)	(0.0)	(0.0)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(1.5)	(2.2)	(0.4)	(0.0)
4	13	1	0	0	1	0	1	2	7	1	0
	(2.4)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(8.3)	(0.0)	(25.0)	(2.9)	(3.9)	(0.4)	(0.0)
5	29	3	2	0	0	0	0	7	16	1	0
	(5.3)	(23.1)	(66.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(10.3)	(9.0)	(0.4)	(0.0)
6	27	2	1	3	0	0	0	9	11	1	0
	(4.9)	(15.4)	(33.3)	(23.1)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(13.2)	(6.2)	(0.4)	(0.0)
7	6	3	0	1	0	0	0	0	2	0	0
	(1.1)	(23.1)	(0.0)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(1.1)	(0.0)	(0.0)
8	65	0	0	2	0	0	0	5	41	17	0
	(11.9)	(0.0)	(0.0)	(15.4)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(7.4)	(23.0)	(6.9)	(0.0)
9	6	1	0	0	0	0	0	0	5	0	0
	(1.1)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(2.8)	(0.0)	(0.0)
10	9	0	0	0	1	0	1	7	0	0	0
	(1.6)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(8.3)	(0.0)	(25.0)	(10.3)	(0.0)	(0.0)	(0.0)
11	9	0	0	0	0	0	0	3	0	0	6
	(1.6)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(4.4)	(0.0)	(0.0)	(66.7)
ブロック外	66	0	0	5	9	1	1	18	30	0	2
	(12.1)	(0.0)	(0.0)	(38.5)	(75.0)	(100.0)	(25.0)	(26.5)	(16.9)	(0.0)	(22.2)
計	546	13	3	13	12	1	4	68	178	245	9
	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)

(　)内の数字は%　　上：資料数　　下：配分率

1ブロックでは分布集中域の縁辺部とブロックの縁辺部に位置し，第5ブロックでは石器分布がやや集中する箇所の縁辺部に位置する。その他のブロックはいずれもC類ブロックで分布集中域自体がなくブロック内での位置は表現し難いが，第7ブロックで約1mの距離内に3点のナイフ形石器がまとまっている点は注意される。ブロック群別に見ると(第70表)，第Iブロック群に3点(23.1%)・第IIブロック群に6点(46.2%)・第IIIブロック群に3点(23.1%)・第IVブロック群に1点(7.7%)保有される。第IVブロック群が他のブロック群に較べて少ないが，ブロック別に見た場合と違って各ブロック群が少ないながらもいずれも保有している点は注意される。

第VI章第2節では，ナイフ形石器の形態を素材剥片に対する二次加工の在り方から大別4類

細別5類に分類している。A類は，素材剥片の二側縁にブランティング加工を施した資料である。この内，器体が柳葉形を呈する資料をA1類，幾何形を呈する資料をA2類とする。第2b層でA3類に分類されるブランティングを施した二側縁が平行して先端角の広い資料は，第3層では検出されなかった。B類は，素材剥片の一側縁にブランティング加工を施した資料である。C類は，素材剥片の一端を斜めに折断するようにブランティング加工を施した資料である。D類は，素材剥片の打面側を基部とし，基部を中心にブランティング加工を施した資料である。ナイフ形石器の形態別分布状況をブロック群単位で見ると，第Iブロック群はB類2点・D類1点，第Ⅱブロック群はA1類1点・A2類1点・B類1点・C類3点，第Ⅲブロック群はA1類2点・A1類?1点，第Ⅳブロック群はA1類1点となる(第74表)。なお第Ⅱブロック群のC類3点中2点はⅡ種接合資料である。資料数が少ないこともあって明瞭な傾向は見出せないが，第Iブロック群が他ブロック群に保有されるA1類のナイフ形石器を欠くことと，第Ⅱブロック群が多様な形態のナイフ形石器を保有していることは注意される。ナイフ形石器の形態別分布状況をブロック単位で見ると，第1ブロックはB類2点・D類1点，第4ブロックはA1類1点，第5ブロックはA2類1点・C類2点，第6ブロックはB類1点・C類1点，第7ブロックはA1類2点・A1類?1点，第9ブロックはA1類1点となる(第75表，別添第28図)。第7ブロックでA1類?とした資料は，打面再生剥片を素材として，打面側の側縁と末端側の側縁に僅かにブランティング加工を施した資料である。素材の変形度も少なく，部分加工のナイフ形石器と考えることもできよう。なお，第5ブロックのC類2点はⅡ種接合資料である。前節で設定したブロックの類型でまとめてみると，C類ブロックの第4・7・9ブロックはいずれもA1類のナイフ形石器を保有するが，A・B類ブロックはA1類を保有しない。こうしたブロックの類型によるナイフ形石器の形態の偏りは，ナイフ形石器の形態の差を機能差として考えるとブロックの機能差を反映しているものと

第74表　中央区第3層ナイフ形石器ブロック群別形態組成表

	資料数	A1類	A2類	B類	C類	D類	不明
第Iブロック群	3	0	0	2	0	1	0
第Ⅱブロック群	6	1	1	1	3*	0	0
第Ⅲブロック群	3	3**	0	0	0	0	0
第Ⅳブロック群	1	1	0	0	0	0	0
計	13	5	1	3	3	1	0

＊3点中の2点は，4F22A1＋4F22A8(Ⅱ種接合)
＊＊ A1類?を含む

第75表　中央区第3層ナイフ形石器ブロック別形態組成表

	資料数	A1類	A2類	B類	C類	D類	不明
A類ブロック							
1	3	0	0	2	0	1	0
B類ブロック							
5	3	0	1	0	2*	0	0
6	2	0	0	1	1	0	0
C類ブロック							
4	1	1	0	0	0	0	0
7	3	3**	0	0	0	0	0
9	1	1	0	0	0	0	0
計	13	5	1	3	3	1	0

＊4F22A1＋4F22A8(Ⅱ種接合)
＊＊ A1類?を含む

第76表　中央区第3層ナイフ形石器ブロック別残存部位一覧表

	資料数	A類	Ba類	Bb類	Ca類	Cb類	Da類	Db類
A類ブロック								
1	3	0	0	1	0	2	0	0
B類ブロック								
5	3	1	2*	0	0	0	0	0
6	2	0	0	0	0	2	0	0
C類ブロック								
4	1	0	0	1**	0	0	0	0
7	3	0	2	1	0	0	0	0
9	1	1	0	0	0	0	0	0

＊4 F22A 1＋4 F22A 8（Ⅱ種接合）
＊＊A類？

して解釈できよう。

ナイフ形石器の残存状態は第2b層同様A・Ba・Bb・Ca・Cb・Da・Dbの各類に分類される。ナイフ形石器の残存部位別分布状況をブロック単位で見ると，第1ブロックはB類1点・Cb類2点，第4ブロックはBb類1点，第5ブロックはA類1点・Ba類2点，第6ブロックはCb類2点，第7ブロックはBa類2点・Bb類1点，第9ブロックはA類1点となる（第76表，別添第29図）。なお，第5ブロックのBa類2点は先のⅡ種接合資料である。これは，接合した状態での残存部位分類である。ブロックの類型でまとめると，C類ブロックの第4・7・9ブロックは，A類或いはB類といった完形或いは完形に近いナイフ形石器を中心に保有することがわかる。全体的に見ても，D類のようなナイフ形石器の細片は検出されておらず，概して原形に近い資料が多いと言える。この点については，資料数の少なさや発掘度の問題もあり，傾向として捉えるのは差し控えておく。なお，第1ブロックでCb類に分類した2点は，折れ面の衝撃点がブランティング縁付近にあり，製作途中での欠損品の可能性がある。

(2)　彫　　器

彫器は，総数3点出土した（別添第30図，第70・73表）。分布は，3F区南東隅から4F区南西隅の狭い範囲に収まる。ブロック別で見ると，B類ブロックの第5・6ブロックにそれぞれ2・1点保有されている。ブロック内での分布状況は，第5ブロックでは石器分布の中心する箇所とブロックの縁辺部に位置し，第6ブロックではブロック縁辺部に位置する。ブロック群別で見ると3点の彫器はいずれも第Ⅱブロック群に保有される。

(3)　敲石類・台石の分布

敲石類は，合計30点分布する（別添第30図，第70・73表）。第2b層と同様に，ここでも敲石，局部磨製礫，槌石のそれぞれについて，ブロックとの位置関係を中心にしながら分布状況を観察する。

まず各器種ごとの内訳を示すと，敲石21点（70％），局部磨製礫2点（6.7％），槌石

(23.3%)である。中央区ブロック内に分布するものは全部で３点を数える。内訳は敲石２点，槌石１点である。一方，ブロック外には合計６点分布し，この内訳は敲石５点，槌石１点である。

中央区では，全部で11のブロックが認められ，うち３ブロックから敲石類の出土がある。北から順に敲石類の分布状況を記す。

第１ブロックは，非常に多くの遺物が集中する密集域を有している。槌石(Ⅶb類)が１点(第281図26)，この密集部の中心に位置している。

第４ブロックには，敲石(Ⅰa類)が１点分布する。散漫に資料が分布するブロックであるので，位置について言及するのは難しい。資料密集部分のないまばらなブロックであることから，敲石はブロック周辺部に位置していると言えよう。

第10ブロックもまばらに資料が分布する小規模なものである。敲石(Ⅲ類)(第279図17)がブロック北西隅に分布する。

わずか３ブロックのデータだけから，各々の敲石類の分布傾向を捉えることはできない。しかしながら，ここで見られるように敲石一ブロック周辺部，槌石一ブロック中心(密集)部という結果は，全国のブロック内における敲石類の分布傾向と一致するものであり，両者の機能差を象徴するものと言えよう。今後とも敲石類の分布については，慎重に観察して行きたい。

台石は合計４点分布する。北から順に分布状況を観察したい。

３Ｆ区の西側に広がる第２ブロック中に１点分布する(第282図１)。石器分布のまばらなブロック南端に位置し，ブロックの中心区域から明らかにはずれた状況を示している。敲石類との関係を調べると，近辺にはセットとなり得る敲石類の分布例を欠く。最も距離の近いものはほぼ真南の敲石(Ⅰa類)であるが，直線距離にして4.4mを測る。いささか離れすぎている。

３Ｆ14区のほぼ中央に１点分布する(第282図２)。この台石は周辺の石器ブロックから相当の距離を隔てている。遺物分布も認められず敲石とのセット関係は成立しないが，第12配石に隣接する点は注意される。

４Ｆ16区を中心に広がる第４ブロック中にも１点分布する(第283図４)。遺物分布の非常に散漫なブロックであり，台石は本ブロックの南側外縁部に位置している。ここでは敲石類とのセット関係を捉え得る。わずか50cmを隔てた北方にⅠa類の敲石が分布する。

最後の１点は３Ｇ25区に分布する(第282図３)。第10ブロックに属する。資料点数の極めて少ないブロックで，台石はこの最東端に位置している。ブロック中にはⅢ類の敲石を有するが，この台石との距離は3.5mもある。セット関係を成すものかどうか判断し難い状況にある。

(黒坪)

(4) 石　斧

石斧は１点出土したのみである(別添第30図，第72・73表)。散漫分布域ｇに含まれる２Ｈ19区から単独で出土している。第Ⅲ・Ⅳブロック群からは20m以上隔たっている。

(5)　ＲＦ

ＲＦは，総数13点出土した。分布は，Ｈ列北半部以北に限られる(別添第30図，第70・73表)。ブロック別に見ると，第１ブロックに１点(7.7%)・第３ブロックに１点(7.7%)・第６ブロックに３点(23.1%)・第７ブロックに１点(7.7%)・第８ブロックに２点(15.4%)・ブロック外に５点(38.5%)保有され，ブロック外に多いことが分る。ブロックの類型で見ると，Ａ類ブロックはいずれも保有し，Ｂ類ブロックは１例，Ｃ類ブロックは２例のブロックが保有している。各ブロックの保有数は，１～３点とほぼ一定しており，ナイフ形石器と同様に特定ブロックのみに保有される分布形態と考えられる。ブロック内での分布状況は，第１ブロックでは石器分布の密集域内に位置し，第８ブロックでは密集域からはずれて位置している。Ｂ類ブロックの第６ブロックでは，ブロック外縁部に位置し，資料数も少ないためか規則性は認められない。なお，第７ブロックの資料については縦長剥片を素材とし一側縁に粗い加工を施しているが，形態Ｂ類のナイフ形石器の可能性もある。この資料は，基部のみ残存している。次に，ブロック群別に見ると，第Ⅰブロック群に３点(23.1%)・第Ⅱブロック群に３点(23.1%)・第Ⅲブロック群に３点(23.1%)保有されるが，第Ⅳブロック群には保有されない。

(6)　ＵＦ

ＵＦは，総数68点出土した。分布は，ほぼ中央区内の全域に及んでいる(別添第31図，第70・73表)。ブロック別に見ると，第１ブロックに８点(11.8%)・第２ブロックに８点(11.8%)・第３ブロックに１点(1.5%)・第４ブロックに２点(2.9%)・第５ブロックに７点(10.3%)・第６ブロックに９点(13.2%)・第８ブロックに５点(7.4%)・第10ブロックに７点(10.3%)・第11ブロックに３点(4.4%)・ブロック外に18点(26.5%)保有され，2.9～13.2%と若干の増減はあるものの大半のブロックに保有されている。ブロック内での分布状況は，第１ブロックでは石器分布の密集域内とその周囲に分布するが，第８ブロックでは密集域の縁辺部およびその周囲に分布している。また，第６ブロックではやや北半部に集中するようである。ＵＦのブロック内での分布は，分布集中域からやや離れて分布する例と分布集中域とその周囲に広がって分布する例はあるが，分布集中域内に分布が収束することはないようである。ブロックの類型別に見ると，Ａ類ブロックは５～８点(7.4～11.8%)，Ｂ類ブロックは７～９点(10.3～13.2%)，Ｃ類ブロックは０～７点(0.0～10.3%)保有しており，Ｂ類ブロックが多いがＡ・Ｃ類ブロックときわだった量的な差があるとは言えない。ブロック群別に見ると，第Ⅰブロック群に23点(33.8%)・第Ⅱブロック群に22点(32.4%)・第Ⅲブロック群に６点(8.8%)・第Ⅳブロック群に７点(10.3%)保有される。第Ⅰ・Ⅱブロック群が第Ⅲ・Ⅳブロック群の３～４倍のＵＦを保有していることがわかる。

(7)　剥　　片

剥片は，総数178点出土した。分布は，ＵＦと同様に中央区のほぼ全域に及んでいる(別添第32図，第70・73表)。ブロック別に見ると，第１ブロックに43点(24.2%)・第２ブロックに19点(10.7%)・第３ブロックに４点(2.2%)・第４ブロックに７点(3.9%)・第５ブロ

クに16点(9.0%)・第６ブロックに11点(6.2%)・第７ブロックに２点(1.1%)・第８ブロックに41点(23.0%)・第９ブロックに５点(2.8%)・ブロック外に30点(16.9%)保有されており，大半のブロックに保有されていることがわかる。ブロック内の分布状況は，Ａ類ブロックの第１ブロックでは石器分布の密集域内およびその縁辺に分布し，第８ブロックでは密集域内およびその周囲に分布している。Ｂ類ブロックの第２・５ブロックはブロック内のやや分布の集中する箇所とその周囲に分布し，第６ブロックでは集中箇所が北部と南部にあるが，南部の方に剥片がまとまって分布している。Ｃ類ブロックでは，ブロック自体まばらな分布状況を呈しており分布位置は表現し難いが，第４・９ブロックではブロック内に剥片が均一に分布していると言える。各ブロックの剥片の保有量をブロックの類型別に見ると，Ａ類ブロックは41～43点(23.0～24.2%)・Ｂ類ブロックは11～19点(6.2～10.7%)・Ｃ類ブロックは０～７点(0.0～3.9%)保有しており，Ａ類ブロックがＢ・Ｃ類ブロックに較べて多くの剥片を保有している事がわかる。次に，ブロック群別に見ると，第Ⅰブロック群に73点(41.0%)・第Ⅱブロック群に34点(19.1%)・第Ⅲブロック群に46点(25.8%)・第Ⅳブロック群に５点(2.8%)保有されている。第Ⅱ・Ⅲブロック群を基準にして見ると，第Ⅳブロック群は剥片の保有量が極めて少なく，逆に第Ⅰブロック群は多いことがわかる。

なお，目的剥片については，その属性を備えたものとしてＵＦが挙げられる。ＵＦは，剥片の腹面と接する縁辺に連続する刃こぼれ様剥離痕が肉眼的に観察されることが認定基準となっている。このため，肉眼的に観察不可能なＵＦが剥片の中に含まれていることは十分に予想される。また，石器素材である目的剥片の抽出を行っておらず，同様に剥片として分類された資料に含まれる可能性がある。この点については，個体別資料の分析を経て検討したい。

(8) 砕　片

砕片は総数245点出土した。分布はＦ・Ｇ列に収まる(別添第33図，第70・73表)。ブロック別にみると，第１ブロックに223点(91.0%)・第２・３・４・５・６ブロックに各１点(0.4%)・第８ブロックに17点(6.9%)保有されブロック外には分布しない。ブロックの類型別にまとめると，Ａ類ブロックは17～223点(6.9～91.0%)，Ｂ類ブロックは各１点(0.4%)，Ｃ類ブロックは０～１点(0.0～0.4%)となり，Ａ類ブロックがＢ・Ｃ類ブロックに較べてきわだって砕片の保有量が多いことがわかる。特に，第１ブロックは中央区内の砕片の約90%も保有している点は注意される。ブロック内での分布状況は，Ａ類ブロックの第１・８ブロックでは，ブロック内の径数mの範囲内に密集して分布しその周囲にはほとんど分布していない。こうした密集性と共に，その他のブロックでは各１点しか保有されず単独とでも言える分布状況にあり，砕片の分布の二面性が指摘される。砕片の保有量をブロック群別に見ると，第Ⅰブロック群に225点(91.8%)，第Ⅱブロック群に３点(1.2%)，第Ⅲブロック群に17点(6.9%)保有される。第Ⅰブロック群がきわだって砕片の保有量が多い。

なお，我々は砕片・剥片・石核といった石器製作作業に伴う付随生産物については，石器製作作業の場にそのまま遺棄されたと考えている。これについては，岡村道雄氏らは廃棄つまり

作業の場から人意的に他所へ捨てられたという見解を示されている(岡村1978，同1979等)。しかし先土器時代人のこうした行動の存在自体に我々は疑問を持っており，付随生産物の分布する場は石器製作作業の行われた場であったと考えて分析を進めて行きたい。

(9) 石　核

石核は，総数9点出土した。分布は，3H区南東部から4I区北西部の狭い範囲に大半の資料が分布し，H列北半部以北の地域には石核は1点しか分布しておらず，きわだった分布の偏在性があることがわかる(別添第32図，第70・73表)。ブロック別で見ると，第2ブロックに1点(11.1%)・第11ブロックに6点(66.7%)・ブロック外に2点(22.2%)保有され，C類ブロックの第11ブロックが中央区内の石核の⅔を保有している点は注意される。ブロック内での分布状況は，B類ブロックの第2ブロックでは石器分布のやや集中する箇所に位置し，第11ブロックでは径2×4mの範囲内に6点もの石核がほぼ環状をなして分布している。第11ブロックの検出状態の悪さ故に評価は難しい。石核の保有量をブロック群別に見ると，第Iブロック群のみが1点の石核を保有することがわかる。

(10) 受熱石器

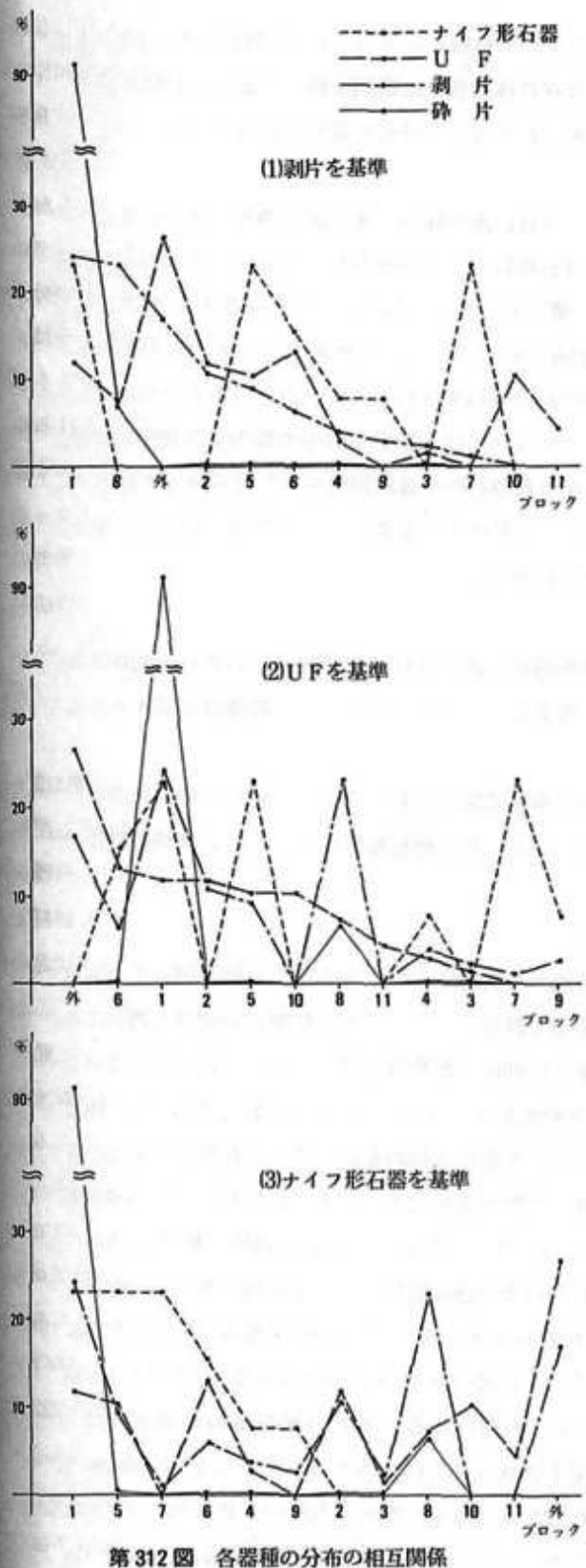
中央区第3層石器群では，3点の受熱石器が認定された。器種は，いずれも剥片である。第3ブロックに1点，ブロック外に2点出土した。ブロック外では，散漫分布域a・cに各1点出土している。

受熱石器の分布は，礫群と共に火処の推定に関わるものである。しかし資料数が余りに少ないため，十分な検討対象とはなり難い。なお，第3層石器群については，水洗選別による赤化砂岩の検出は行っていない。

2)　各器種の分布の相互関係

ここでは，前項で分析を行った器種別分布状況について，それらの相互関係をブロックを分析単位として検討する。併せて，本節1項で設定したブロックの類型との関係も調べてみたい。まず，ブロック単位で算出する組成率とは別に，器種単位で各ブロックにどのように配分されるかを算出した値を各器種のブロック別配分率とする(第73表)。第312図には，特定の器種を選定し，その器種の配分率の多いブロック順にx軸の左から右へと配列してある。その他の器種については，そのブロック順に従って配分率を記入してある。また，ブロックの類型については第313図を参照されたい。ここでは，ナイフ形石器・UF・剥片・砕片についてまず検討を加え，ブロックにあまり保有されないその他の器種については後に補足説明する。

剥片の配分率の高い順にブロックを並べると，第1(24.2%)・第8(23.0%)・第2(10.7%)・第5(9.0%)・第6(6.2%)・第4(3.9%)・第9(2.8%)・第3(2.2%)・第7(1.1%)・第10(0.0%)・第11(0.0%)ブロックの順になる。剥片の配分率の増減とほぼ一致する器種に砕片が挙げられる。砕片は，第1ブロック(91.0%)と第8ブロック(6.9%)に集中し，その他のブロックは1点ずつ配分されるか或いは全く配分されない。砕片は，剥片に較べ分布の密集性が高いことが指摘される。また，剥片の場合，ブロックの類型はAABBBCC…の



第312図　各器種の分布の相互関係

順となり，剥片の配分率の増減はブロックの類型区分に対応することがわかる。砕片の場合は，B類ブロックに１点ずつ，C類ブロックは１点ずつ保有するか或いは全く保有せず，B類ブロックとC類ブロックにあまり差がない。UFは剥片や砕片の配分率の高い第１ブロックにも11.8%と少なからず保有されるが，ピークは第６ブロックの13.2%である。また，剥片を保有しない第10ブロックにも10.3%のUFが保有されており，剥片や砕片の分布状況とは異なると言える。ちなみにUFを基準とした図では，ブロックの類型はBABBCAC…の順に並んでおり，UFはB類ブロックを中心にA・C類ブロックにも少なからず保有されることがわかる。前項で既に触れたようにUFはブロック間で保有量にきわだった差はなく，剥片や砕片のような分布の密集性のない点が指摘される。ナイフ形石器は，剥片・砕片の配分率が多い第１ブロックに23.1%とピークがあるが，剥片・砕片の配分率の少ない第７ブロックにも同量のナイフ形石器が配分されている。ナイフ形石器を基準とした図では，ブロックの類型はABCBCCの順となるが，保有量自体は１～３点と大差はない。前項で指摘したようにナイフ形石器は特定の数ブロックのみに配分され，大半のブロックに保有される剥片やUFとは分布形態が異なると考えられる。

石核は，第2ブロックに11.1%・第11ブロックに66.7%保有され，剥片・砕片を保有しない第11ブロックがピークとなる。石器製作に伴う付随生産物である石核と，同様の性格の剥片・砕片との分布状況が一致しない。この点については，個体別資料の分析を経て検討したい。RFは，第1ブロックに7.7%・第3ブロックに7.7%・第6ブロックに23.1%・第7ブロックに7.7%・第8ブロックに15.4%配分される。A・B・Cの各類のブロックが保有しているが，ナイフ形石器同様少数のブロックにしか保有されていない。そうした状況で，A類ブロックの第1・8ブロックがいずれも保有している点は注意される。RFはブロック外に½以上が分布し，ナイフ形石器がブロック外に分布しないのに較べ対照的である。こうした分布状況の差は，両器種の機能的な差を反映しているのかもしれない。敲石は，第1ブロックに8.3%・第4ブロックに8.3%・第10ブロックに8.3%配分され，A・C類の一部のブロックに保有されることが分る。しかし，約75%の資料はブロック外に分布し，ブロック内に大半の資料が分布する剥片・砕片・UF・ナイフ形石器とは分布状況が異なると考えられる。彫器は，第5ブロックに66.7%・第6ブロックに33.3%配分される。B類ブロックのみに保有されているが，彫器の総数が3点と少ないこともあって規則性として捉えるのは躊躇される。（竹広）

3．ブロックの石器組成

1）ブロックの石器組成

ここでは，各ブロックの石器組成を本節1項で設定したブロックの類型毎に検討する（第313・314図，第77表）。なお，分析過程上各器種を石器製作の目的物と非目的物である付随生産物とに分類する場合がある。目的物とした器種は，素材剥片に二次加工を施したナイフ形石器・彫器・RFと礫を素材とし加工を施した石斧である。これらの器種は道具と考えられる資料である。UF・敲石・局部磨製礫・台石は，加工の有無というよりも使用痕の有無が器種認定の要素となる資料であるが，同様に道具と考えられることから石器製作の目的物に含める。これらを，「製品」と呼称する。これに対し，剥片・砕片・石核は石器製作に伴い付随的に生産されるものであり，「付随生産物」と呼称する。なお，「製品」については，ナイフ形石器・彫器・RFを「定型石器」，敲石・局部磨製礫・台石・石斧を「礫石器」と呼称する場合もある。

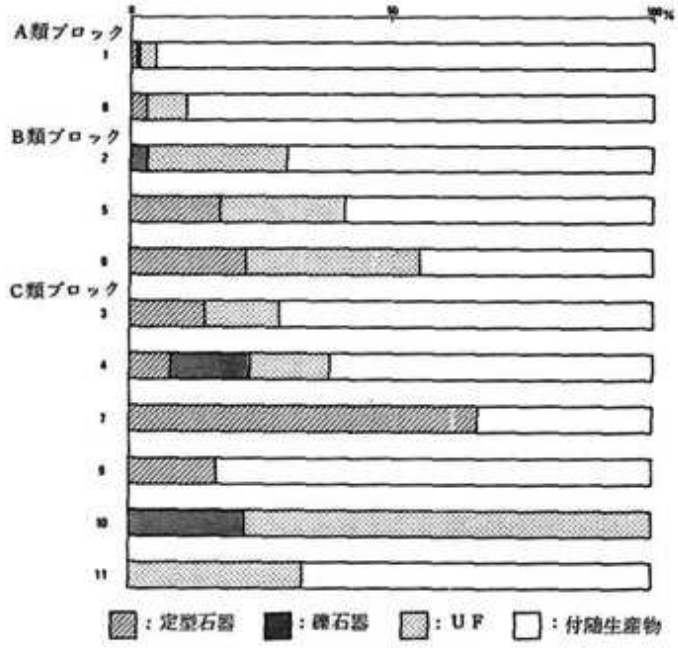
A類ブロック

A類ブロックは，第1・8ブロックが相当する。構成石器数は，それぞれ279点・65点で，極めて差が大きい。仮にブロックの類型区分の指標に構成石器数も加えるとした場合，両ブロックは別扱いにしなければならぬかも知れない。しかし，A類ブロックが二例と少ないこともあって，ここでは一括して取り扱う。石器組成は，第1ブロックではナイフ形石器3点(1.1%)・RF1点(0.4%)・槌石1点(0.4%)・UF8点(2.9%)・剥片43点(15.4%)・砕片223点(79.9%)，第8ブロックではRF2点(3.1%)・UF5点(7.7%)・剥片41点(63.1%)・砕片17点(26.2%)となる。

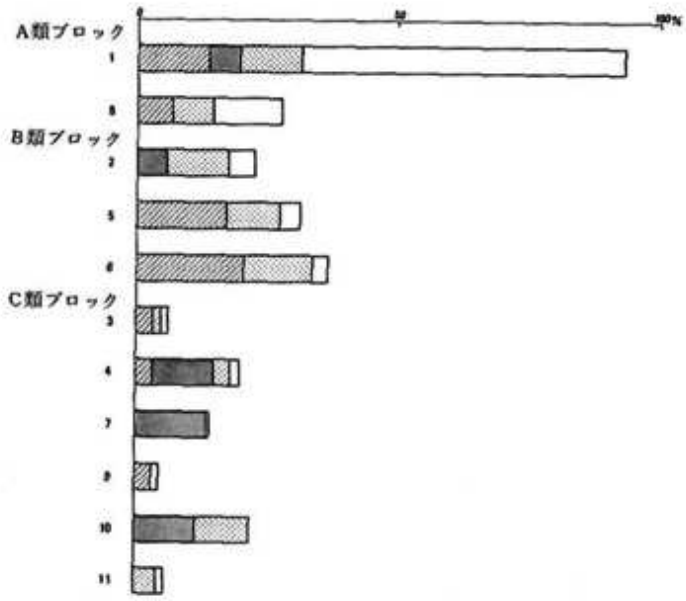
製品は，組成率で第1ブロックは4.7%・第8ブロックは10.8%となり，A類ブロックはブ

ロック内で使用活動を反映する資料の占める比率の低いことがわかる。次に配分率でみると，第１ブロックで11.4%・第８ブロックで6.1%となり，第８ブロックが量的にやや少ないことがわかる。製品を細かく見ると，両者に共通して保有される器種はＵＦ・ＲＦが挙げられるが，ナイフ形石器・敲石は第１ブロックのみに保有され，Ａ類ブロック内に細かな組成差がある。

付随生産物は，組成率で第１ブロックは95.3%・第８ブロックは89.2%となり，Ａ類ブロックはブロック内で石器製作作業を反映する資料の占める比率が高いことがわかる。次に，配分率でみると，第１ブロックは61.6%・第８ブロックは13.4%となり，第１ブロックが量的に多い。これは，第１ブロックでより集中した石器製作作業を行ったためと考えられる。前節の分析では，Ａ類ブロックはＢ・Ｃ類ブロックに較べ多くの剥片・砕片を保有していることが指摘されており，Ａ類ブロックでは石器製作作業が中心となると共に集中して行われたと考えられる。しかし，Ａ類ブロックはいずれも石核を保有していないことは注意される。



第313図　ブロック石器組成率
凡例は等313図～第316図まで同じ



第314図　ブロック石器配分率　凡例は第313図に同じ

Ｂ類ブロック

Ｂ類ブロックには，第２・５・６ブロックが相当する。構成石器数は，それぞれ30・29・27

第77表　中央区第3層ブロック類型別石器組成表

	構成石器数	ナイフ形石器	彫器	RF	敲石類	石斧	台石	UF	剥片	砕片	石核	製品	(定型石器)	(礫石器)	付随生産物
A類ブロック															
1	279	3	0	1	1	0	0	8	43	223	0	13	4	1	266
	(100.0)	(1.1)	(0.0)	(0.4)	(0.4)	(0.0)	(0.0)	(2.9)	(15.4)	(79.9)	(0.0)	(4.7)	(1.4)	(0.4)	(95.3)
	(51.1)	(23.1)	(0.0)	(7.7)	(8.3)	(0.0)	(0.0)	(11.8)	(24.2)	(91.0)	(0.0)	(11.4)	(13.8)	(5.9)	(61.6)
8	65	0	0	2	0	0	0	5	41	17	0	7	2	0	58
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(3.1)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(7.7)	(63.1)	(26.2)	(0.0)	(10.8)	(3.1)	(0.0)	(89.2)
	(11.9)	(0.0)	(0.0)	(15.4)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(7.4)	(23.0)	(6.9)	(0.0)	(6.1)	(6.9)	(0.0)	(13.4)
B類ブロック															
2	30	0	0	0	0	0	1	8	19	1	1	9	0	1	21
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(3.3)	(26.7)	(63.3)	(3.3)	(3.3)	(30.0)	(0.0)	(3.3)	(70.0)
	(5.5)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(25.0)	(11.8)	(10.7)	(0.4)	(11.1)	(7.9)	(0.0)	(5.9)	(4.9)
5	29	3	2	0	0	0	0	7	16	1	0	12	5	0	17
	(100.0)	(10.3)	(6.9)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(24.1)	(55.2)	(3.4)	(0.0)	(41.4)	(17.2)	(0.0)	(58.6)
	(5.3)	(23.1)	(66.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(10.3)	(9.0)	(0.4)	(0.0)	(10.5)	(17.2)	(0.0)	(3.9)
6	27	2	1	3	0	0	0	9	11	1	0	15	6	0	12
	(100.0)	(7.4)	(3.7)	(11.1)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(33.3)	(40.7)	(3.7)	(0.0)	(55.6)	(22.2)	(0.0)	(44.4)
	(4.9)	(15.4)	(33.3)	(23.1)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(13.2)	(6.2)	(0.4)	(0.0)	(13.2)	(20.7)	(0.0)	(2.8)
C類ブロック															
3	7	0	0	1	0	0	0	1	4	1	0	2	1	0	5
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(14.3)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(14.3)	(57.1)	(14.3)	(0.0)	(28.6)	(14.3)	(0.0)	(71.4)
	(1.3)	(0.0)	(0.0)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(1.5)	(2.2)	(0.4)	(0.0)	(1.8)	(3.4)	(0.0)	(1.2)
4	13	1	0	0	1	0	1	2	7	1	0	5	1	2	8
	(100.0)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(7.7)	(0.0)	(7.7)	(15.4)	(53.8)	(7.7)	(0.0)	(38.5)	(7.7)	(15.4)	(61.5)
	(2.4)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(8.3)	(0.0)	(25.0)	(2.9)	(3.9)	(0.4)	(0.0)	(4.4)	(3.4)	(11.8)	(1.9)
7	6	3	0	1	0	0	0	0	2	0	0	4	4	0	2
	(100.0)	(50.0)	(0.0)	(16.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(33.3)	(0.0)	(0.0)	(66.7)	(66.7)	(0.0)	(33.3)
	(1.1)	(23.1)	(0.0)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(1.1)	(0.0)	(0.0)	(3.5)	(13.8)	(0.0)	(0.5)

9	6	1	0	0	0	0	0	0	5	0	0	1	1	0	5
	(100.0)	(16.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(83.3)	(0.0)	(0.0)	(16.7)	(16.7)	(0.0)	(83.3)
	(1.1)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(2.8)	(0.0)	(0.0)	(0.9)	(3.4)	(0.0)	(1.2)
10	9	0	0	0	1	0	1	7	0	0	0	9	0	2	0
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(11.1)	(0.0)	(11.1)	(77.8)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(100.0)	(0.0)	(22.2)	(0.0)
	(1.6)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(8.3)	(0.0)	(25.0)	(10.3)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(7.9)	(0.0)	(11.8)	(0.0)
11	9	0	0	0	0	0	0	3	0	0	6	3	0	0	6
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(33.3)	(0.0)	(0.0)	(66.7)	(33.3)	(0.0)	(0.0)	(66.7)
	(1.6)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(4.4)	(0.0)	(0.0)	(66.7)	(2.6)	(0.0)	(0.0)	(1.4)
ブロック外	66	0	0	5	9	1	1	18	30	0	2	34	5	11	32
	(100.0)	(0.0)	(0.0)	(7.6)	(13.6)	(1.5)	(1.5)	(27.3)	(45.5)	(0.0)	(3.0)	(51.5)	(7.6)	(16.7)	(48.5)
	(12.1)	(0.0)	(0.0)	(38.5)	(75.0)	(100.0)	(25.0)	(26.5)	(16.9)	(0.0)	(22.2)	(29.8)	(17.2)	(64.7)	(7.4)
計	546	13	3	13	12	1	4	68	178	245	9	114	29	17	432
	(100.0)	(2.4)	(0.5)	(2.4)	(2.2)	(0.2)	(0.7)	(12.5)	(32.6)	(44.9)	(1.6)	(20.9)	(5.3)	(3.1)	(79.1)
	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)

点とほぼ一致している。石器組成は，第2ブロックで台石1点(3.3%)・UF8点(26.7%)・剥片19点(63.3%)・砕片1点(3.3%)・石核1点(3.3%)，第5ブロックでナイフ形石器3点(10.3%)・彫器2点(6.9%)・UF7点(24.1%)・剥片16点(55.2%)・砕片1点(3.4)，第6ブロックでナイフ形石器2点(7.4%)・彫器1点(3.7%)・RF3点(11.1%)・UF9点(33.3%)・剥片11点(40.7%)・砕片1点(3.7%)となる。なお，第5ブロックのナイフ形石器3点中2点は，4F22A1＋4F22A8のⅡ種接合資料である。

製品は，組成率で第2ブロックは30.0%・第5ブロックは41.4%・第6ブロックは55.6%となり一定しない。しかしA類ブロックの4.7～10.8%に較べ，各ブロックでの使用活動を反映する資料の占める比率は高くなっている。特にUFは，24.1～33.3%と各ブロックで安定した比率を占め，UFを使用した活動がB類ブロックの形成に大きく関わっていると思われる。次に，配分率で見ると，第2ブロックは7.9%・第5ブロックは10.5%・第6ブロックは13.2%となり，A類ブロックの6.1～11.4%に較べ若干多いもののあまり差があるとは言えない。製品を細かく見ると，第2ブロックが礫石器とUFを保有するのに対し，第5・6ブロックでは定型石器とUFを保有し，B類ブロック内には細かな組成差がある。なお，第5・6ブロックは，第5ブロックがRFを欠いているが，極めて類似した石器組成を持つことが指摘される。

付随生産物は，組成率で第2ブロックは70.0%・第5ブロックは58.6%・第6ブロックは44.4%となり，A類ブロックの89.2～95.3%に較べて比率は低くなる。B類ブロックでは，ブロック内で石器製作作業を反映する資料の占める比率は44.4～70.0%と幅があるが，A類ブロックに較べて低くなることがわかる。次に，配分率を見ると，第2ブロックで4.9%・第5ブロックで3.9%・第6ブロックで2.8%となり，若干バラツキはあるがほぼ一定していると言える。またA類ブロックの13.4～61.6%に較べ低く，B類ブロックは石器製作作業の集中性がA類ブロックに較べ低いと考えられる。

C類ブロック

C類ブロックは，第3・4・7・9・10・11ブロックが相当する。構成石器数はそれぞれ7・13・6・6・9・9点であり，10点内外の石器で各ブロックが構成されていることがわかる。石器組成は，第3ブロックでRF1点(14.3%)・UF1点(14.3%)・剥片4点(57.1%)・砕片1点(14.3%)，第4ブロックでナイフ形石器1点(7.7%)・敲石1点(7.7%)・台石1点(7.7%)・UF2点(15.4%)・剥片7点(53.8%)・砕片1点(7.7%)，第7ブロックでナイフ形石器3点(50.0%)・RF1点(16.7%)・剥片2点(33.3%)，第9ブロックでナイフ形石器1点(16.7%)・剥片5点(83.3%)，第10ブロックで敲石1点(11.1%)・台石1点(11.1%)・UF7点(77.8%)，第11ブロックでUF3点(33.3%)・石核6点(66.7%)となる。

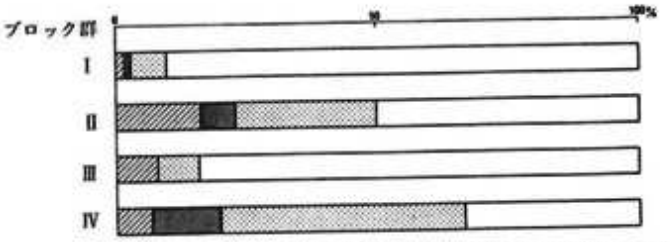
製品は組成率で第3ブロックは28.6%，第4ブロックは38.5%，第7ブロックは66.7%，第9ブロックは16.7%，第10ブロックは100.0%，第11ブロックは33.3%となり，各ブロックでの使用活動を反映する資料の占める比率にはバラツキがあることがわかる。なお，A類ブロックでは4.7～10.8%であり，A類ブロックに較べると各ブロック共に製品の比率は高くなる。次に配分率で見ると，0.9～7.9%で平均3.5%となり，A類ブロックの6.1～11.4%，B類ブロックの7.9～13.2%より低いものの極立った差があるとは言えない。これは，前節での分析でUFは極立った増減の差はなく大半のブロックに保有され，ナイフ形石器・RFはブロックの類型に関係なく特定の数ブロックに保有されることが指摘されたが，こうした状況を反映するものと考えられる。製品について細かく見ると，UFは6例中4例のブロックで，ナイフ形石器は6例中3例のブロックで保有され，RFは6例中2例のブロックで，敲石は6例中2例のブロックで，台石は6例中2例のブロックでそれぞれ保有される。石器数が少ないこともあってセット関係は抽出できないが，多くのブロックがUFを保有している点は注意される。なお，前節の分析でC類ブロックのナイフ形石器の形態は，A・B類ブロックに見られないA1類が主体となることが指摘されたが，ナイフ形石器の形態差を機能差として考えれば，A・B類ブロックとの機能的な差を反映していると解釈できよう。

付随生産物は，組成率で第3ブロックで71.4%・第4ブロックで61.5%・第5ブロックで33.3%・第9ブロックで83.3%・第10ブロックで0.0%・第11ブロックで66.7%となり，製品の場合に対応し各ブロックの石器製作作業を反映する資料の占める比率にバラツキがあることがわ

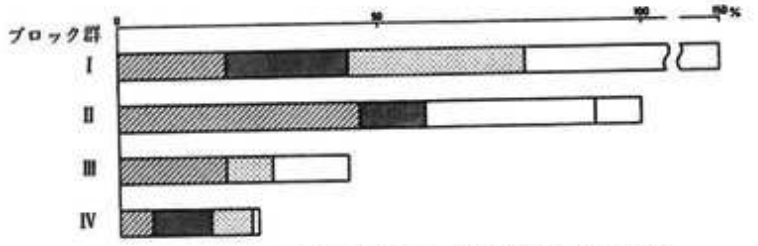
かる。次に配分率で見ると，0.0～1.9%で平均1.0%となり，A類ブロックの13.4～61.6%・B類ブロックの2.8%～4.9%に較べ低いことがわかる。C類ブロックの付随生産物は，絶対数でも０～８点しかなく，石器製作作業の内の剥片剥離作業の存在に疑問が持たれる。また，石核しか保有しないという点で第11ブロックについても同様の疑問が持たれる。これらの点については，個体別資料の分析を経て検討する。

２)　ブロック群の石器組成

ブロックと同様に，みかけ上の石器分布のまとまりであるブロック群についても石器組成を検討する(第315・316図，第70表)。



第315図　ブロック群石器組成率　凡例は第313図に同じ



第316図　ブロック群石器配分率　凡例は第313図に同じ

第Ⅰブロック群は，A類ブロックの第１ブロック・B類ブロックの第２ブロック・C類ブロックの第３ブロックと各ブロックの周囲に分布する石器群により構成される。石器組成はナイフ形石器３点(0.9%)・ＲＦ３点(0.9%)・敲石類３点(0.9%)・台石１点(0.3%)・ＵＦ23点(6.9%)・剥片73点(22.0%)・砕片225点(67.8%)・石核１点(0.3%)となり，石器総点数は332点である。製品は，組成率で9.9%と低く，逆に付随生産物は90.1%と高くなり，第Ⅰブロック群内での石器製作作業の占める比率が高いことがわかる。

第Ⅱブロック群は，C類ブロックの第４ブロック・B類ブロックの第５・６ブロックと各ブロックの周囲に分布する石器群で構成される。石器組成は，ナイフ形石器６点(8.1%)・彫器３点(4.1%)・ＲＦ３点(4.1%)・敲石２点(2.7%)・台石１点(1.4%)・ＵＦ22点(29.7%)・剥片34点(45.9%)・砕片３点(4.1%)となり，石器総点数は74点である。製品は，組成率で50.0%，これに対応し付随生産物も50.0%と一致し，第Ⅱブロック群内での使用活動を反映する資料と石器製作作業を反映する資料の比率が一致することがわかる。

第Ⅲブロック群は，C類ブロックの第７ブロック・A類ブロックの第８ブロックと両ブロックの周囲に分布する石器群により構成される。石器組成は，ナイフ形石器３点(4.0%)・ＲＦ３点(4.0%)・ＵＦ６点(8.0%)・剥片46点(61.3%)・砕片17点(22.7%)となり，石器総点数は75点となる。製品は，組成率で16.0%と低く，逆に付随生産物は84.0%と高く，第Ⅰブロック群と同様に，ブロック群内での石器製作作業を示す資料の比率が高いことがわかる。

第Ⅳブロック群は，C類ブロックの第９・10ブロックで構成される。ブロック外には石器は

分布しない。石器組成は，ナイフ形石器1点(6.7%)・敲石1点(6.7%)・台石1点(6.7%)・UF7点(46.7%)・剥片5点(33.3%)となり，石器総点数は15点である。他のブロック群に較べ小規模なブロック群である。製品と付随生産物を組成率で見るとそれぞれ66.7%・33.3%となり，第Ⅳブロック群内では使用活動を反映する資料が石器製作作業を反映する資料より比率が高いことがわかる。

構成石器数は，15～332点とかなりの幅があるが，第Ⅱ・Ⅲブロック群はそれぞれ74点・75点とほぼ一致している。製品は，組成率で9.9～66.7%と一定せず，各ブロック群内での使用活動を反映する資料の占める比率にはバラツキがある。しかし配分率で見ると，第Ⅰブロック群は28.9%・第Ⅱブロック群は32.5%・第Ⅲブロック群は10.5%・第Ⅳブロック群は8.8%となり，組成率の場合よりバラツキが少なくなる。細かく見ると，定型石器は3.4～41.4%・UFは8.8～33.8%・礫石器は0.0～23.5%となる。各ブロック群でバラツキはあるし礫石器を保有しない例もあるが，比較的各ブロック群とも製品を安定して保有していると言える。器種別に見ても，ナイフ形石器・UFは各ブロック群が保有し，RF・敲石・台石は4例中3例のブロック群が保有している。こうした現象は，ブロックでは見られなかったことである。また，第2項の分析ではナイフ形石器やRFは特定の数ブロックのみに保有されることが指摘されている。ブロック群には，ブロックによる製品組成の偏りを解消するような単位性があるのかもしれない。付随生産物は，組成率で見ると33.3～90.1%と一定しないが，第Ⅰブロック群と第Ⅲブロック群はそれぞれ90.1%・84.0%とほぼ一致していた。しかし，配分率で見ると第Ⅰブロック群は69.2%・第Ⅱブロック群は8.6%・第Ⅲブロック群は14.6%・第Ⅳブロック群は1.2%となり一定しない。第Ⅰブロック群は，ブロック群内での石器製作作業の占める比率が高いと共に，他ブロック群に較べて石器製作作業が集中的に行われたと考えられる。第Ⅳブロック群については，付随生産物が剥片5点と砕片1点のみであり，石器製作作業の内の剥片剥離作業の存在に疑問が持たれる。

3）　ブロック群周辺部・散漫分布域の石器組成

第1項で触れたように，ブロック外はブロックとの位置関係によりブロック群周辺部と散漫分布域に区分される。ここでは，ブロック外の資料を前記の二者に分けて石器組成を検討する。

ブロック群周辺部（第71表）

第Ⅰブロック群周辺部は，構成石器数が16点である。石器組成は，RF1点(6.3%)・敲石2点(12.5%)・UF6点(37.5%)・剥片7点(43.8%)となる。第Ⅱブロック群周辺部は，構成石器数が5点である。石器組成は，敲石1点(20.0%)・UF4点(80.0%)となる。第Ⅲブロック群周辺部は，構成石器数が4点である。石器組成は，UF1点(25.0%)・剥片3点(75.0%)となる。

構成石器数は4～16点と一定せず，資料数が少ないこともあって十分な検討は難しい。全体で見ると，製品と付随生産物の組成率は製品が25.0～100.0%で平均値60.4%，付随生産物が0.0～75.0%で平均値39.6%となり，概して使用活動を反映する資料が中心となると言える。

付随生産物は，配分率で0.0～1.6%で平均値0.8%，実数で０～７点と少なく，剥片剥離作業の存在に疑問が持たれる。製品は配分率で0.9～7.9%で平均値4.4%となる。製品を細かく見ると，ＵＦは３例中３例が保有し，ブロック群周辺部の分布形成にはＵＦを使用した活動が大きく関わっているのかもしれない。また，敲石は３例中２例にＲＦは３例中１例にそれぞれ保有される。前節の分析では，敲石はブロック外に半数以上が配分されており注意される。

散漫分布域（第72表）

散漫分布域ａは，構成石器数が２点である。石器組成は，ＲＦ１点(50.0%)・剥片１点(50.0%)となる。散漫分布域ｂは台石１点のみ保有する。散漫分布域ｃは，構成石器数が10点である。石器組成は，ＲＦ３点(30.0%)・敲石１点(10.0%)・剥片６点(60.0%)となる。散漫分布域ｄは，３点のＵＦを保有する。散漫分布域ｅは，構成石器数が７点である。石器組成は，ＵＦ２点(28.6%)・剥片５点(71.4%)となる。散漫分布域ｆは，構成石器数が９点である。石器組成は，ＵＦ２点(22.2%)・剥片５点(55.6%)・石核２点(22.2%)となる。なお，石核として分類してあるのは，石核の素材礫と考えられる資料であり剥片剥離作業の痕跡は留めない。散漫分布域ｇは，構成石器数が９点である。石器組成は，敲石５点(55.6%)・石斧１点(11.1%)・剥片３点(33.3%)となる。

構成石器数は１～10点と一定せず，資料数が少ないこともあって，ブロック群周辺部と同様に石器組成について十分な検討を行いにくい。製品と付随生産物の組成率は，製品は22.2～100.0%で平均値が58.2%・付随生産物は0.0～77.8%で平均値が41.8%となり，概して使用活動を反映する資料の占める比率が高いと言える。付随生産物は，配分率で0.0～1.6%で平均値0.7%，実数で０～７点と極めて少なく，ブロック群周辺部の例と同様に剥片剥離作業の存在に疑問が持たれる。製品は配分率で0.9～5.3%で平均値2.4%となる。製品について細かく見ると，７例中３例の散漫分布域でＵＦが保有され，７例中２例の散漫分布域でＲＦ或いは敲石がそれぞれ保有されている。

ちなみに，Ｃ類ブロックでは製品と付随生産物の組成率が，製品は16.7～100.0%で平均値が47.3%，付随生産物は0.0～83.3%で平均値が52.7%となり，配分率が，製品は0.9～7.9%で平均値が3.5%，付随生産物は0.0～1.9%で平均値が1.0%となる。Ｃ類ブロックでは，組成率で付随生産物と製品の関係がほぼ等しくなっているが，ほぼブロック群周辺部や散漫分布域と一致した傾向と言える。（竹広）

第５節　個体別資料の検討と分布

１．個体別資料の外観的特徴

中央区第３層出土の石器群は，合計546点である。個体識別できたのは，接合によるもの89点，非接合のもの97点である。接合率16.3%，個体識別率34.1%になる。個体識別の困難な砕

片を除くと，接合率29.6%，個体識別率61.8%になる。個体数は合計16である。この他，単独個体が8点識別されている。

以下，代表的な4個体について，外観的な特徴を記す。

個体別資料番号K3－2F①

石材は頁岩である。全体の色は黄白色である。部分的にではあるが，灰白色の部分が目立つ。黒色の微細粒子が散在する。光沢感，滑感が特徴である。節理面は赤褐色を呈している。

個体別資料番号K3－4F①

石材は頁岩である。全体の色はうすい灰黄色である。黄白色の微細な線が交互に数条ずつ帯状に連なっている。暗灰色の線が，太くなったり細くなったりして帯状を呈する。黄白色のシミ状模様が部分的にある。

個体別資料番号K3－3F⑤

石材は頁岩である。全体の色はうすい灰色である。若干光沢感がある。節理が比較的強く，剥離面に微細な亀裂として現われている。

個体別資料番号K3－4I①

石材は頁岩である。全体の色は灰白色である。灰色の微細な線が存在する。全体に黄白色の小さなシミ状の斑点が散在する。節理面に白黄色の膠着物が薄く付着しており，剥離面に白黄色の微細亀裂面として現われている。岩質は硬質である。（徳永）

2．個体別資料の分類

個々の個体別資料の石器組成は，剥片・砕片が主体となる例や製品のみで構成される例などいくつかの種類がある(第78表)。第2b層のナイフ形石器群同様これを，石器製作作業を示す資料の有無を基準にして分類することにしたい。なお，中央区第3層石器群の剥片剥離技術は，大きく見ると2類型ある。一つは，母岩分割を行い石核を複数個設け，それぞれの石核で目的剥片生産を行うA1類剥片剥離技術である。もう一つは，個体の分割を行わず一つの個体が一つの石核として機能し，これから目的剥片を生産するA4類剥片剥離技術である。この他，石核成形などあらゆる段階で剥離された大型剥片を石核素材とし，少量の目的剥片生産を行うA2類剥片剥離技術もわずかに認められる。A2類のような例は剥片剥離の主体としての位置は占めていないため付随工程として捉え，個体の中でも核となる石核での目的剥片生産とは区別して扱いたい(第3節)。ここでの分類は，A1・A4類のような剥片生産技術の中心工程について行うことにする。

A－2類　剥片・砕片が石器組成の主体となるが，石核を欠いている。ただし，A2類の石核のみを伴う個体は，A－2類に含めることにする。遺跡内で石器製作が行われるが，作業が中断し遺跡外に石核を搬出していることを示す資料。UFも安定して保有し，ナイフ形石器やRFを伴う例もある。K3－2F①・3F③・4F①・3G①・3G②個体が相当する。

A－3類　石核のみで構成される。K3－4I①個体のみが相当する。同個体の剥片剥離技

第78表　中央区第３層の個体別資料一覧表

個体No	石質	資総点料数	個体類型	石器点数	非資接料合数	接資料合数	石器組成 Kn	Pt	Sc	Gr	RF	UF	他	B	C	D	剥離工程	剥離技術	関係ブロック	挿図No.
K３－１C⑦	頁	68		65	47	21					1	8		49	9	1		A1		301
K３－１C⑪	頁	52		48	31	21					1	7		38	4	3		A2		302
K３－１C⑫	頁	51		49	35	14					1	40			5	5		A1		303
K３－２D①	頁	6		6	0	6						3		1		2		A1		304
K３－２D⑤	頁	24		20	4	20						10		12		2		A2 + A4		305
K３－２E③	頁	3		3	1	2								1		2		A1		306
K３－２F①	頁	51	E	50	27	24	2				1	9		35	4		初+中	A4	K３－１・外	307
K３－３F①	頁	2	C	2	0	2						2					(入)	—	K３－３・外	
K３－３F②	頁	4	C	2	0	4					1	2		1			入	—	K３－２・外	
K３－３F③	頁	28	E	25	9	19						5		21	1	1	初+中	A2 + A4	K３－２	308
K３－３F④	頁	8	C	8	4	4				1	1	3		2	1		入(Gr製作)	—	K３－６	
K３－３F⑤	頁	7	不明	7	7	0	1			1		2		3			?+入	—	K３－５	
K３－３F⑥	頁	2	不明	1	0	2								2			?	—	外	
K３－４F①	頁	15	B	12	7	8						5		10			中	—	K３－５・外	
K３－３G①	頁	47	B	44	29	17					1	6		36	4		中	A4	K３－４・８	309
K３－３G②	凝	6	B	6	4	2						1		5			(中)	—	K３－６	
K３－３G③	珪	2	C	2	2	0								2			入	—	K３－９・外	
K３－３G④	頁	2	C	2	0	2						2					入	A	K３－10	
K３－３G⑤	頁	2	不明	1	2	0								1		1	?	A2	K３－８・外	
K３－３G⑥	頁	2	不明	1	2	0						2					?	—	外	
K３－３G⑦	珪	3	C	3	1	2						1		2			入	—	外	
K３－３G⑧	凝	2	C	1	0	2						2					入	—	K３－10	
K３－４I①	頁	5	D	5	2	3										5	(全)	A1 + B2	K３－11	310

凡例は第50表に同じ

術はA1類である。幼児頭大の円礫をいくつかに分割し，分割礫を石核素材とする。いずれの例も，打面形成や打面調整などの石核成形や石核調整はあまり行わず，数枚の目的剥片を生産した後に作業が終了している。おそらく石器製作作業は遺跡内で行われており，数少ない目的剥片はブロック外へ搬出されたと思われる。

B－1類　ナイフ形石器・彫器・RF・UF・剥片のいずれかを数点保有し，これに極少量の砕片が伴う例がある。遺跡外にある石器製作の場からの製品や素材剥片の搬入を示す資料。K3－3F④個体のように，搬入素材に二次加工作業を行った資料も含める。K3－3F①・3F②・3F④・3G③・3G④・3G⑦・3G⑧個体および8点の単独個体が相当する。

ここでは，以上の3類型の個体が認められた。なお第2b層石器群で1a類に分類されたA－2類に石核を伴う場合の資料(A－1類)は，第3層石器群では認められなかった。

石器製作作業の内剥片剥離作業工程を大まかに区分すると，自然面の除去など石核の成形を中心とする「初期作業段階」，打面再生・打面転移を行いながら本格的に目的剥片生産を行う「中期作業段階」，若干の目的剥片生産の後石核が残核として放棄される「終末期作業段階」に分けることができると思われる(山口1980，徳永1982)。中央区第3層の石器製作作業の行われた個体についてこうした分類を行うと，「初期作業段階＋中期作業段階＋終末期作業段階」・「初期作業段階＋中期作業段階」・「中期作業段階」の3類型の個体が認められた。なお，中央区第3層石器群の剥片生産技術には，前述したように一つの個体の中に中心工程と付随工程の認められる資料がある。中心工程とは，その個体の中心となる石核での集中的な目的剥片生産を示す。付随工程とは，中心となる石核の成形剥片等の大型剥片を石核素材とし，打面調整等の石核調整をほとんど行わずに少量の目的剥片を生産した後に石核が残核として放棄されるものを示す。ここでの剥片剥離作業段階の分類は，中心工程に関するものである。例えばK3－3F③個体には石核が含まれているが，これは石核素材面が大きく残り目的剥片は数枚しか剥離されておらず，A2類の石核であろう考えられる。K3－3F③個体の場合，中心となる工程は引き続いて遺跡外で行われたものと考えており，遺跡内には「終末期作業段階」は存在しないものと思われる。また，第2b層石器群では，A2類の石核とこれから剥離されたと考えられる数点の剥片のみで構成される個体がある。こうした場合は，遺跡内では中心となる工程は行われず，剥片素材石核もしくは石核素材剥片が遺跡内に搬入されて剥片剥離作業が行われたという意味で，剥片剥離作業段階の分類を「剥片素材石核」という分類にしてある。第3層石器群ではこうした例は認められなかった。

A－2・3，B－1類という個体別資料の類型区分では，B－1類は搬入品として認識できるし，またA－2類については剥片剥離作業が中断し石核が搬出されていると認識できる。しかし，A－2・3類では石核が遺跡外から搬入されたのか遺跡内で準備されたのかが認識できなかった。こうした不備を，前述した剥片剥離作業の作業段階区分を利用して補うことができる。つまり，「初期作業段階」の有無によって，ある個体の石核が遺跡内で準備されたのか遺跡外から搬入されたのかが認識できるものと思われる。個体別資料の搬入・搬出に着目し再分

類すると次のようになる。この分類法も第2b層のナイフ形石器群と共通する。

B類　A－２類個体で「中期作業段階」の個体が相当する。遺跡外から作業途中の石核が搬入されて，遺跡内で引き続き剥片剥離作業の行われた後に作業が中断し，石核が遺跡外に搬出される。

C類　B－１類個体が相当する。遺跡外にある石器製作の場で生産された製品或いは素材剥片が搬入される。搬入素材剥片を用いて二次加工が行われる例も含める。

D類　A－３類で「初期作業段階＋中期作業段階＋終末期作業段階」の個体が相当する。遺跡内で剥片剥離作業が開始から終了まで一貫して行われ，石核が遺棄される。なお第３層石器群では該当資料はないが，第2b層石器群で認められたA－１類個体で「初期作業段階＋中期作業段階＋終末期作業段階」の個体も，D類に相当することになる。

E類　A－２類個体で，「初期作業段階＋中期作業段階」の個体が相当する。遺跡内で石核が準備され剥片剥離作業が開始された後に作業が中断し，石核が遺跡外へ搬出される。第３層には該当資料はないが，A－２類個体で「初期作業段階」の個体も，E類に相当することになる。

中央区第３層石器群では，以上の４類型の個体が観察された。第2b層石器群でA類に分類された個体は，第３層石器群では認められなかった。ちなみに，A類個体は遺跡外から作業途中の石核が搬入されて，遺跡内で剥片剥離作業が行われた後に作業が終了し石核が遺棄されることを示す資料である。中央区第３層石器群の個体類型の内訳は，B類３例(12.0%)・C類15例(60.0%)・D類１例(4.0%)・E類２例(8.0%)・不明４例(16.0%)である。石器製作作業の行われた個体B・D・E類の計６例の内，石核が遺跡内で準備された後剥片剥離作業が終了し残核として放棄されるに至るまでの一貫した作業の存在を示すD類個体は１例(16.7%)である。大半の個体での剥片剥離作業は，複数の遺跡を通して行われていたことがわかる。

（竹広）

３．個体別資料の分布

ここでは，個々の個体別資料の分布状況を，B・D・E類といった製作個体とC類個体の代表例を各１例づつ紹介して検討する。なお前節で行った分類は遺跡全体(中央区全体)で見た場合の分類であるが，ここではブロックやブロック群単位で見た場合の分類も検討する(第79表)。また各個体別資料の分布の相互関係は，別添第34図に示してある。

１）製作個体の分布

B類個体

B類個体には，K３－４F①・３G①・３G②個体が相当する。

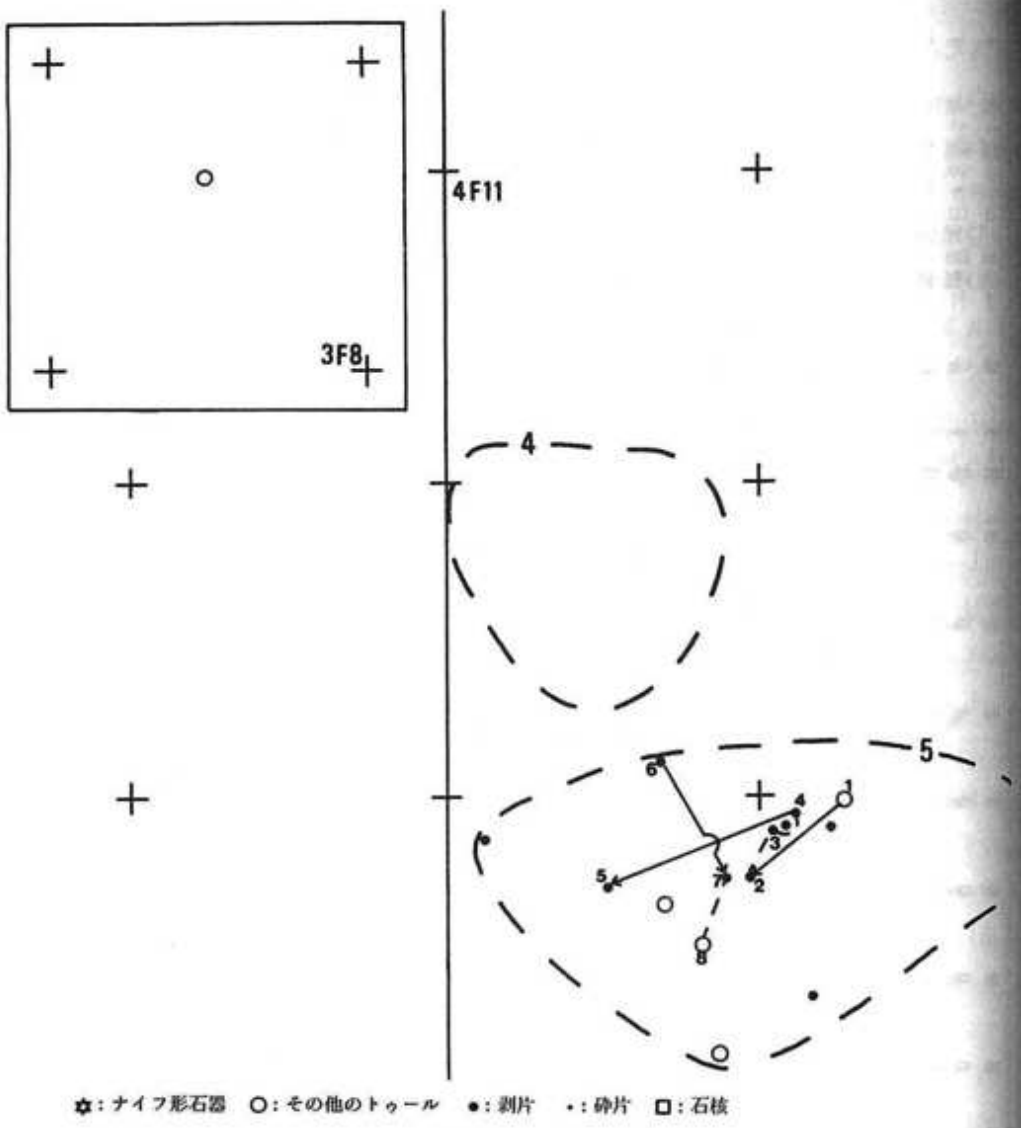
K３－４F①（第317図）

K３－４F①個体は，総石器数15点である。この内接合資料が２組あり，接合石器数は８点である。接合率は53.3%となる。石器組成は，UF５点・剥片10点である。K３－４F①個体

第79表　中央区第3層個体別資料構成表

	ブロック名他	構成石器数	Kn	Gr	RF	UF	B	C	D	組成類型	個体類型	ブロック群での個体類型	作業段階数
K3－2F①	中央区第3層	51	2	0	1	9	35	4	0	A－2	E		2
	K3－1	50	2	0	1	8	35	4	0	A－2	E	第Iブロック群：E	2
	第Iブロック群周辺部	1	0	0	0	1	0	0	0	不明	不明		不明
K3－3F①	中央区第3層	2	0	0	0	2	0	0	0	B－1	C		—
	K3－3	1	0	0	0	1	0	0	0	B－1	C	第Iブロック群：C	—
	第Iブロック群周辺部	1	0	0	0	1	0	0	0	B－1	C		—
K3－3F②	中央区第3層	4	0	0	1	2	1	0	0	B－1	C		—
	K3－2	2	0	0	0	2	0	0	0	B－1	C	第Iブロック群：C	—
	散漫分布域C	2	0	0	1	0	1	0	0	B－1	C		—
K3－3F③	中央区第3層	28	0	0	0	5	21	1	1	A－2	E		2
	K3－2	26	0	0	0	5	19	1	1	A－2	E	第Iブロック群：E	2
	第Iブロック群周辺部	2	0	0	0	0	2	0	0	不明	不明		不明
K3－3F④	K3－6(＝中央区第3層)	8	0	1	1	3	2	1	0	B－1	C	→第Ⅱブロック群：C	—
K3－3F⑤	中央区第3層	7	1	1	0	2	3	0	0	不明	不明		不明
	K3－5	4	1	1	0	1	1	0	0	不明	不明	第Ⅱブロック群：不明	不明
	K3－6	3	0	0	0	1	2	0	0	不明	不明		不明
K3－3F⑥	第Iブロック群周辺部(＝中央区第3層)	2	0	0	0	0	2	0	0	不明	不明	→第Iブロック群：不明	不明
K3－4F①	中央区第3層	15	0	0	0	5	10	0	0	A－2	B		1
	K3－5	14	0	0	0	4	10	0	0	A－2	B	→第Ⅱブロック群：B	1
	第Iブロック群周辺部	1	0	0	0	1	0	0	0	B－1	C	→第Ⅲブロック群：C	—
K3－3G①	中央区第3層	47	0	0	1	6	36	4	0	A－2	B		1
	K3－4	1	0	0	0	1	0	0	0	B－1	C	→第Ⅱブロック群：C	—
	K3－8	46	0	0	1	5	36	4	0	A－2	B	→第Ⅲブロック群：B	1
K3－3G②	K3－6(＝中央区第3層)	6	0	0	0	1	5	0	0	A－2	B	→第Ⅱブロック群：B	1

K３－３G③	中央区第３層	2	0	0	0	0	2	0	0	B－1	C		—
	K３－９	1	0	0	0	0	1	0	0	B－1	C	→第Ⅳブロック群：C	—
	散漫分布域e	1	0	0	0	0	1	0	0	B－1	C	—	—
K３－３G④	K３－10(＝中央区第３層)	2	0	0	0	2	0	0	0	B－1	C	→第Ⅳブロック群：C	—
K３－３G⑤	K３－8(＝中央区第３層)	1	0	0	0	0	1	0	0	不明	不明	→第Ⅲブロック群：不明	不明
	(第Ⅱb層出土)	1	0	0	0	0	0	0	1	—	—	—	—
K３－３G⑥	散漫分布域d	2	0	0	0	2	0	0	0	不明	不明	—	不明
K３－３G⑦	中央区第３層	2	0	0	0	1	1	0	0	B－1	C		—
	第Ⅰブロック群周辺部	1	0	0	0	1	0	0	0	B－1	C	→第Ⅰブロック群：C	—
	第Ⅲブロック群周辺部	1	0	0	0	0	1	0	0	B－1	C	→第Ⅲブロック群：C	—
	(第Ⅱb層出土)	1	0	0	0	0	1	0	0	—	—	—	—
K３－３G⑧	K３－10（＝中央区第３層）	2	0	0	0	2	0	0	0	B－1	C	→第Ⅳブロック群：C	—
K３－４I①	K３－11（＝中央区第３層）	5	0	0	0	0	0	0	5	A－3	D	—	3
単独個体別資料													
2F 3A 1	散漫分布域a（＝中央区第３層）	1	0	0	0	0	1	0	0	B－1	C	—	—
3F25A13	K３－6(＝中央区第３層)	1	0	0	1	0	0	0	0	B－1	C	→第Ⅱブロック群：C	—
4F21A 1	K３－6(＝中央区第３層)	1	0	0	0	1	0	0	0	B－1	C	→第Ⅱブロック群：C	—
2G10A 1	K３－7(＝中央区第３層)	1	0	0	0	0	1	0	0	B－1	C	→第Ⅲブロック群：C	—
2G10A 3	K３－7(＝中央区第３層)	1	1	0	0	0	0	0	0	B－1	C	→第Ⅲブロック群：C	—
2G15A 1	K３－7(＝中央区第３層)	1	1	0	0	0	0	0	0	B－1	C	→第Ⅲブロック群：C	—
3G 9A 1	散漫分布域d（＝中央区第３層）	1	0	0	0	1	0	0	0	B－1	C	—	—
4G17A 1	散漫分布域e（＝中央区第３層）	1	0	0	0	0	1	0	0	B－1	C	—	—



第317図　個体別資料K３－４Ｆ①分布図

の石器群は，幅広の剥片を主体としている。また，自然面の付着した剥片は３例と少ない。これらは，背面に部分的に自然面の観察される資料である。こうした点と共に石核を保有しないことから，本個体は剥片剥離作業の中期段階の資料で構成されていると考えられる。

Ｋ３－４Ｆ①個体の分布をブロックを単位として見ると，第Ｉブロック群周辺部で１点，第５ブロックで14点出土している。接合資料の分布は，第５ブロックに収まる。石器組成は，第Ｉブロック群周辺部でＵＦ１点，第５ブロックでＵＦ４点，剥片10点となり，第５ブロックで剥片剥離作業が行われたと考えられる。第５ブロックでは，ブロック北半中央に大半の資料が分布し，ブロック外縁部付近には計４点の資料がまばらに分布している。第Ｉブロック群周辺部の資料については，本資料が石器製作の目的物であり，距離的にも第５ブロック外縁から約

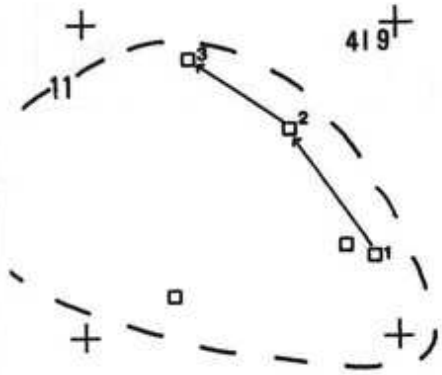
16mの位置にあり，第５ブロックから第Ⅰブロック群周辺部への搬入品としての可能性が高いと考えられる。したがって，K３－４F①個体の個体類型は，中央区全体で見るとB類個体に相当し，ブロック単位で見ると第５ブロックでB類個体，第Ⅰブロック群周辺部でC類個体となる。またブロック群単位で見ると，第Ⅰブロック群でC類個体，第５ブロックの属する第Ⅱブロック群でB類個体となる。

D類個体

D類個体には，K３－４Ⅰ①個体のみが相当する。

K３－４Ⅰ①（第318図）

K３－４Ⅰ①個体は，５点の石核で構成される。この内接合資料が１組あり，接合石器数は３点で接合率60.0%となる。K３－４Ⅰ①個体の分布は第11ブロックに収まり，ブロック内にまばらに分布している。なお，第11ブロックは撹乱の影響を受けていると思われ，本個体の一部の資料が欠落している可能性もある。



第318図　個体別資料K３－４Ⅰ①分布図

K３－４Ⅰ①個体の石核の剥離面の観察や接合資料の状況から判断すると，本個体では幼児頭大の頁岩円礫をいくつかに分割し，分割礫を石核素材として石核成形や石核調整などはあまり行わず，数枚の目的剥片を生産したのち作業が終了していると考えられる。また，本個体の大半の石核は，大部分が分割面と自然面で覆われており，これらの内３例が接合する。おそらく，第11ブロックで個体の分割が行われており，少量の目的剥片を生産した後に作業が終了し石核を残核として遺棄したものと思われる。少量の目的剥片はブロック外或いは遺跡外に搬出されていると思われる。また，残された資料のみからでは完全に原礫状態まで復原されず，分割礫の一部が石核素材として搬出されている可能性もあるが，撹乱の問題もありこれらの点については不明である。K３－４Ⅰ①個体の個々の石核での目的剥片生産は極めて低調であり，剥片剥離作業の段階区分は曖昧なものとなる。それと共に，K３－４Ⅰ①個体は個体の分割を行っており，中央区第３層石器群では唯一のA$_1$類剥片剥離技術個体である。剥片剥離作業の段階区分は個々の石核についてのものであるので，この様に個体分割を行う資料の場合，完全な原礫状態まで復原されない限り，厳密にはこうした区分を適用するのは困難である。ここでは，K３－４F①個体の個体分割が遺跡内で行われ，それらの大半の分割礫が遺跡内で石核として用いられ，少量ではあるが目的剥片を生産した後に作業が終了し，石核が残核として遺棄されていると解釈して，便宜的にD類個体として取り扱うことにする。K３－４Ⅰ①個体は，遺跡全体の場合とブロック単位の場合と共にD類個体となる。

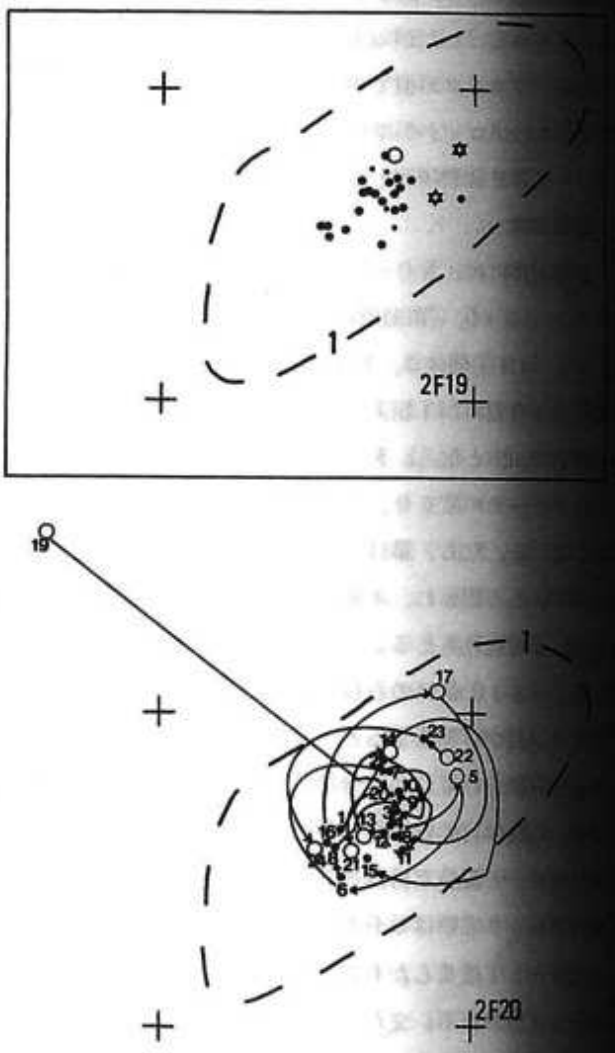
E類個体

E類個体には，K３－２F①・３F③個体が相当する。

K３－２F①（第319図）

K３－２F①個体は，総石器数51点である。この内接合資料が４組あり，接合石器数は24点で接合率47.0％となる。石器組成は，ナイフ形石器２点，RF１点，UF９点，剥片35点，砕片４点である。K３－２F①個体の石器群は，目的剥片と考えられる縦長剥片や，打面調整剥片等の調整剥片を主体に構成されている。また，剥片には初期の石核成形剥片と思われる背面に自然面の観察される剥片がまとまって観察されることや石核を保有しない点から判断して，剥片剥離作業の「初期作業段階＋中期作業段階」に相当する資料で構成されていると考えられる。

K３－２F①個体の分布をブロック単位で見ると，第１ブロックで50点，第Ⅰブロック群周辺部で１点である。石器組成は，第１ブロックでナイフ形石器２点，RF１点，UF８点，剥片35点，砕片４点，第Ⅰブロック群周辺部でUF１点である。第１ブロックでは，ブロック中央の径2.5×2mの範囲に大半の資料が密集して分布する。第Ⅰブロック群周辺部の資料は，第１ブロック外縁から４mの位置にある。本資料は，第１ブロックの資料と接合し，第Ⅰブロック群周辺部の資料→第１ブロックの資料の順で剥離作業が進行している。石器製作作業は，第１ブロックで行われていると考えられるが，第Ⅰブロック群周辺部の資料については距離的に近いため第１ブロックからの石器製作作業の移動とか製品の移動といった人為的な移動であることを証明し難い。ただ，K３－２F①個体の分布は，第１ブロック内の小範囲に密集しその周囲には全く分布せず，やや離れて１点の資料が分布しており，分布の断続性を指摘できる。併せて第Ⅰブロック群周辺部の資料は製品であり石器製作の目的物と考えられ，或いは第１ブロックからの移入であったのかもしれない。K３－２F①個体の個体類型は，中央区全体で見るとE類個体に相当し，ブロック単位で見ると第１ブロックでE類個体に相当すると考えられるが，第Ⅰブ



第319図　個体別資料K３－２F①分布図

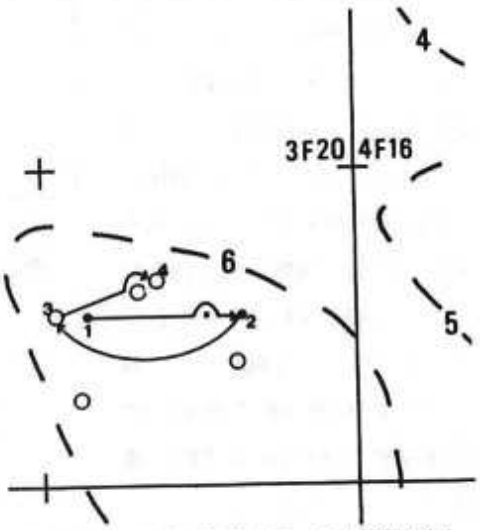
ク群周辺部では一応不明として取り扱っておく。また，ブロック群単位で見ると，両者の属する第Ⅰブロック群でE類個体となる。なお，第１ブロックの２点のナイフ形石器は，いずれも製作途中の欠損品の可能性のある資料であり，或いは製作の場に欠損品としてそのまま遺棄された資料かもしれない。

２）　C類個体の分布

C類個体には，K３－３F①・３F②・３F④・３G③・３G④・３G⑦・３G⑧個体と８点の単独個体が相当する。ここでは資料数の多いK３－３F④個体について詳しく紹介する。

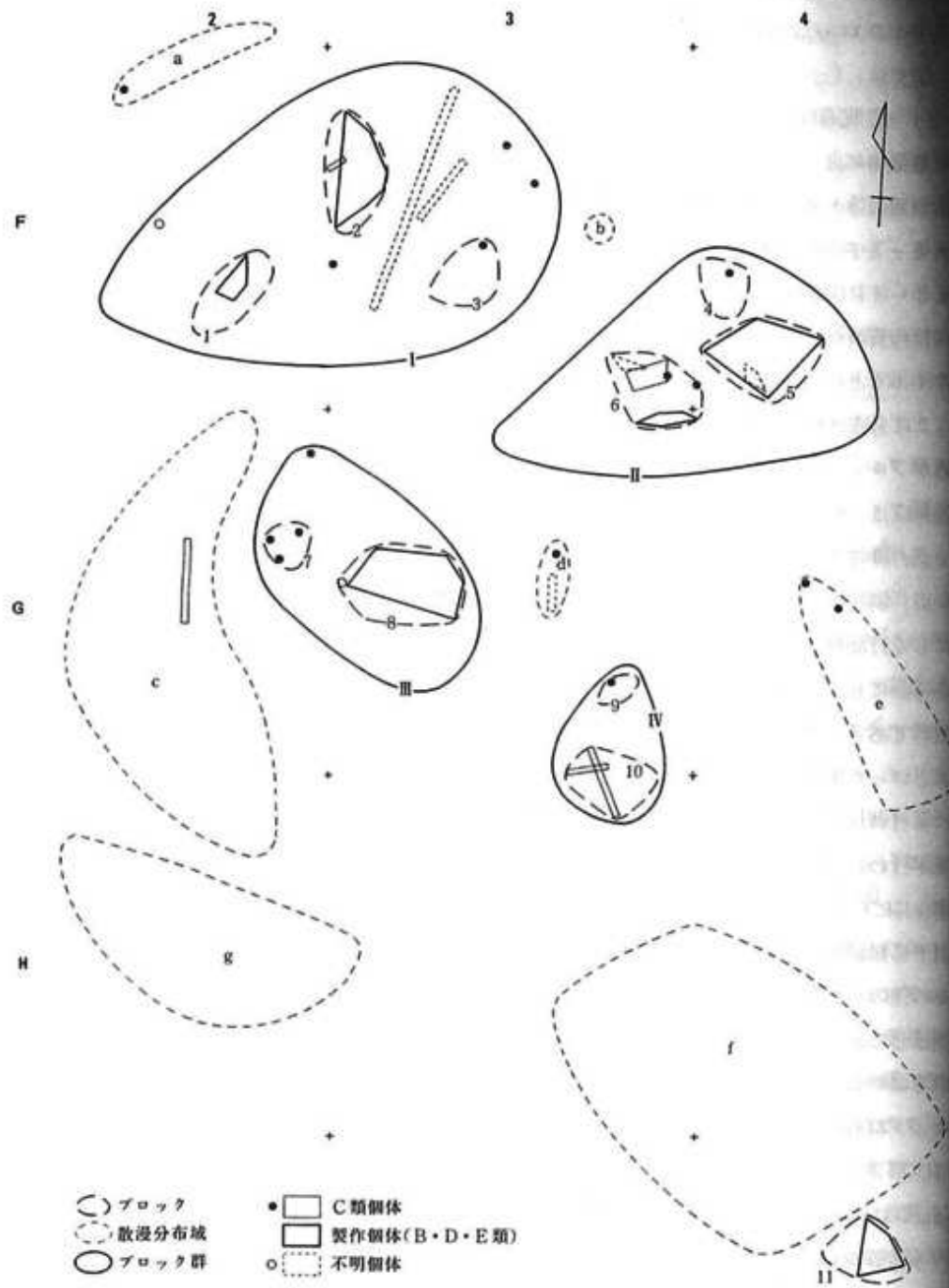
K３－３F④（第320図）

K３－３F④個体は，総石器数８点である。この内接合資料が１組あり，接合石器数は４点で接合率50.0％となる。K３－３F④個体は，第６ブロックに分布が収まる。なお，ブロック内では各石器がブロック北半部にまばらに分布している。石器組成は，彫器１点，RF１点，UF３点，剥片２点，砕片１点となる。この内，彫器１点，UF１点，剥片２点が接合しており，縦長剥片を素材にして打面部を数回の剥離で除去し，この剥離面を打面にして彫刀面を作出していることがわかる資料である。彫器製作に伴う付随生産物以外はUFといった製品で構成されており，剥片剥離作業の存在を示す資料はない。K３－３F④個体は素材剥片或いはUFとして第６ブロックに搬入され，素材剥片の一つを用いて二次加工作業が行われたことがわかる。したがって個体類型は，中央区全体で見た場合とブロック単位の場合共にC類個体となる。また，ブロック群単位で見ると，第６ブロックの属する第Ⅱブロック群でC類個体となる。



第320図　個体別資料K３－３F④分布図

その他のC類個体については，各個体毎で構成石器数・石器組成・出土ブロック等を第79表に提示してある。また，第321図には，B・D・E類といった製作個体とC類個体に区別してそれぞれの分布を示してある。なお，この場合の個体の類型区分は，ブロック・散漫分布域・ブロック群周辺部それぞれを単位としたものである。第１・５・８・11ブロックは製作個体のみを，第３・４・７・９・10ブロックはC類個体のみを，第２・６ブロックは両者を保有している。ブロック外では，第Ⅰブロック群周辺部・散漫分布域a・c・eがC類個体を保有する。ブロック等を単位として見ると，製作個体とC類個体の分布が概して重複していない傾向にあることが指摘できる。また，製作個体とC類個体の両者を保有する第２・６ブロックは，ブロック内で製作個体の分布域内にC類個体がほとんど入り込んでいない。製作個体とC類個体の分布が，以上のように分布が重複しない傾向にあることは注意される。　（竹広）



個体類型の●・○は1点，四角で囲ったものは複数点で構成されるが，
点数は同一ブロック等内での資料数を示す。

第321図　C類個体と製作個体の分布関係図

4．ブロック等の個体構成

1）ブロックの個体構成

ここでは，各ブロックがどのような個体別資料から構成されているかを整理し，各ブロックの分布の形成過程について検討を加える。各ブロックの個体構成を，第４節で設定したブロックの類型毎に集成したのが第80表である。個体別資料の分類は，２項で設定したＡ類(搬入→製作→終了)・Ｂ類(搬入→製作→搬出)・Ｃ類(素材剥片搬入・製品搬入)・Ｄ類(製作開始→終了)・Ｅ類(製作開始→搬出)という５分類で行う。同表には各類の個体の点数と共に修正値(446頁参照)も示してある。各ブロックの砕片を除く個体識別率は8.3%～93.1%とかなりの幅があり，実数のみではブロック間の相互比較が十分に行いにくい状況である。こうした不備を補うために，修正値も使用して検討する。また，砕片については個体識別が行い難く，大半の資料が未識別となっている。ここでは，砕片を計算上全て除外してある。

Ａ類ブロック（第80表）

Ａ類ブロックには，第１・８ブロックが相当する。第１ブロックは，個体石器数が50点・ブロック構成石器数が279点で，それぞれ砕片を４点・223点含んでいる。砕片を除く個体識別率は，82.1%となる。個体構成は，Ｅ類１例(修正値：1.2)のみとなる。第１ブロックでは，１個体を利用して石器製作作業が行われた後作業が中断し，ブロック外或いは遺跡外に石核を搬出していることがわかる。第８ブロックは，個体石器数が47点・ブロック構成石器数が65点で，それぞれ砕片を４点・17点含む。砕片を除く個体識別率は，89.6%となる。個体構成は，Ｂ類１例(修正値：1.1)・不明１例(修正値：1.1)となり，総個体数は２例(修正値：2.2)である。不明とした個体は，Ｋ３－３Ｇ⑤個体である。これは，第３層の１点の剥片と第2b層の１点の石核で構成されるため帰属層位が不明瞭であり，不明として取り扱った。第８ブロックでは，ブロック内に作業途中の石核を搬入し，これを利用して石器製作作業が行われた後，作業を中断しブロック外へ石核を搬出していることがわかる。

両ブロックは個体構成は異なるが，共に製作個体を保有し，石器製作作業を中断し遺跡外へ石核を搬出している点で共通している。また，両ブロックの総個体数は実数で１～２例，修正値で1.2～2.2となり，両ブロックとも分布形成に関わる個体数が少ないことがわかる。両ブロックの石器群の観察所見では，第１ブロックでＣ類個体が存在する可能性はあるものの，いずれのブロックも砕片を含めて大半の資料が１個体に帰属する可能性が高く，ほぼ一致した傾向と言える。Ａ類ブロックは，１個体に対する石器製作作業によって産出された資料を中心にして構成されていると考えられる。

また，石器製作作業を初期・中期・終末期作業段階に区分し，各作業段階の作業量を同一であると仮定して集計した値を累積作業段階数とする。これを各ブロックで算出し，各ブロックの石核総消費量の一応の目安としたい。また，一製作個体当りの平均作業段階数を各ブロックでの石器製作作業の集中性すなわち石核の消費率を示す目安としたい。なおブロックの場合，

第80表　中央区第3層ブロック類型別個体別資料構成表

	ブロック構成石器数	砕片を除くブロック群構成石器数	個体別資料石器数	砕片を除く個体別資料石器数	砕片を除く個体識別率	個体別資料数	A類	B類	C類	D類	E類	不明	製作個体数	累積作業段階数	平均作業段階数
A類ブロック					(%)										
1	279	56	50	46	82.1	1	0	0	0	0	1	0	1	2	2
						(1.2)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(1.2)	(0.0)	(1.2)	(2.4)	
8	65	48	47	43	89.6	2	0	1	0	0	0	1	1	1	1
						(2.2)	(0.0)	(1.1)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(1.1)	(1.1)	(1.1)	
B類ブロック															
2	30	29	28	27	93.1	2	0	0	1	0	1	0	1	2	2
						(2.1)	(0.0)	(0.0)	(1.1)	(0.0)	(1.1)	(0.0)	(1.1)	(2.1)	
5	29	28	18	18	64.3	2	0	1	0	0	0	1	1	1	1
						(3.1)	(0.0)	(1.6)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(1.6)	(1.6)	(1.6)	
6	27	26	19	18	69.2	5	0	1	3	0	0	1	1	1	1
						(7.2)	(0.0)	(1.4)	(4.3)	(0.0)	(0.0)	(1.4)	(1.4)	(1.4)	
C類ブロック															
3	7	6	1	1	16.7	1	0	0	1	0	0	0	0	−	−
						(6.0)	(0.0)	(0.0)	(6.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(−)	
4	13	12	1	1	8.3	1	0	0	1	0	0	0	0	−	−
						(12.0)	(0.0)	(0.0)	(12.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(−)	
7	6	6	3	3	50.0	3	0	0	3	0	0	0	0	−	−
						(6.0)	(0.0)	(0.0)	(6.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(−)	
9	6	6	1	1	16.7	1	0	0	1	0	0	0	0	−	−
						(6.0)	(0.0)	(0.0)	(6.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(−)	
10	9	9	4	4	44.4	2	0	0	2	0	0	0	0	−	−
						(4.5)	(0.0)	(0.0)	(4.5)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(−)	
11	9	9	5	5	55.6	1	0	0	0	1	0	0	1	3	3
						(1.8)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(1.8)	(0.0)	(0.0)	(1.8)	(5.4)	

1個体以上の製作個体を保有しないため，結果的に平均作業段階＝累積作業段階数となる。第1ブロックでは，製作個体はK３－２F①のみである。本個体は初期＋中期の作業を行っており，第1ブロックの累積作業段階数は2となる。なお，個体数の場合と同じ方法で修正値を算出すると2.4となる。第8ブロックでは，製作個体は中期作業を行ったK３－３G①のみであり，累積作業段階数は1(修正値：1.1)となる。両ブロックとも製作個体を1例しか保有しておらず，第1ブロックが第2ブロックより石器製作作業が集中して行われたと考えられる。これは，前章の分析で第1ブロックが第8ブロックに較べ多くの付随生産物を保有することを指摘したが，こうしたことを反映すると思われる。

B類ブロック（第80表）

B類ブロックには，第2・5・6ブロックが相当する。第2ブロックは，個体石器数が28点・ブロック構成石器数が30点で，それぞれ砕片を1点ずつ含む。砕片を除く個体識別率は，93.1％となる。個体構成は，C類1例(修正値：1.1)，E類1例(修正値：1.1)となり，総個体数は2例(修正値：2.1)である。第2ブロックでは，ブロック内で1個体を利用して石器製作作業が開始された後，作業が中断し石核がブロック外に搬出され，また，ブロック外から素材剥片或いは製品の搬入を受けていることがわかる。第5ブロックは個体石器数が18点・ブロック構成石器数が29点で，ブロック構成石器数には砕片が1点分含まれる。砕片を除いた個体識別率は64.3％となる。個体構成はB類1例(修正値：1.6)，不明1例(修正値：1.6)となり，総個体数は2例(修正値：3.1)である。第5ブロックではブロック内に作業途中の石核を搬入し，これを利用して石器製作作業が行われた後，作業を中断しブロック外へ石核を搬出していることがわかる。不明とした個体は，K３－３F⑤である。本個体は，同ブロックでは，ナイフ形石器1点，彫器1点，UF1点，剥片1点で構成され，製品が中心となり，C類個体の可能性もある。しかし，この剥片1点は性格不明のものであり，K３－３F④個体のように，素材剥片を用いた二次加工が行われたことは認め難い。第6ブロックは個体石器数が19点・ブロック構成石器数が27点で，それぞれ砕片を1点ずつ含んでいる。砕片を除く個体識別率は69.2％となる。個体構成は，B類1例(修正値：1.4)，C類3例(修正値：4.3)，不明1例(修正値：1.4)となり，総個体数は5例(修正値：7.2)である。第6ブロックは，製作個体は第5ブロックと一致するが，本ブロックはC類個体を保有する点で異なる。本ブロックのC類個体の内K３－３F④は，素材剥片を搬入して二次加工作業が行われたことを示す資料であり注意される。なお，不明とした個体は，K３－３F⑤である。本個体は，第6ブロックではUF1点，剥片2点で構成される。剥片の性格は不明であり，資料数も少ないことから不明として取り扱った。

各ブロックは，B・E類といった製作個体を保有している点で共通しているが，C類個体は第5ブロックには保有されず，各ブロックの共通性は指摘し難い。第2ブロックに保有される製作個体は，K３－３F③である。同ブロックでの本個体の資料数は計26点であり，第2ブロックの構成石器数の大半を占めることになる。こうした傾向はA類ブロックで指摘されており，個体構成から見ると第2ブロックはA類ブロックに類似していると考えられる。なお，累積作

業段階数は，第2ブロックで2(修正値：2.1)，第5ブロックで1(修正値：1.6)，第6ブロックで1(修正値：1.4)となる。各ブロックとも製作個体を1例しか保有しておらず，第2ブロックは他ブロックに較べて石器製作作業が集中して行われたことがわかる。

C類ブロック（第80表）

C類ブロックは，第3・4・7・9・10・11ブロックが相当する。第3ブロックは，個体石器数が1点，ブロック構成石器数が7点で，ブロック構成石器数には砕片が1点含まれる。砕片を除く個体識別率は，16.7%となる。個体構成は，C類1例(修正値：6.0)のみとなる。第4ブロックは個体石器数が1点，ブロック構成石器数が13点で，ブロック構成石器数には砕片が1点分含まれる。砕片を除く個体識別率は8.3%となる。個体構成は，C類1例(修正値：12.0)のみとなる。第7ブロックは個体石器数が3点，ブロック構成石器数が6点で，砕片は含まない。個体識別率は50.0%となる。個体構成は，C類3例(修正値：6.0)のみとなる。第9ブロックは個体石器数が1点，ブロック構成石器数が6点で，砕片は含まない。個体識別率は16.7%となる。個体構成は，C類1例(修正値：6.0)のみである。第10ブロックは個体石器数4点，ブロック構成石器数が9点で，砕片は含まない。個体識別率は44.4%である。個体構成は，C類2例(修正値：4.5)のみとなる。第11ブロックは個体石器数が5点，ブロック構成石器数が9点で，砕片は含まない。個体識別率は55.6%となる。個体構成は，D類1例(修正値：1.8)のみとなる。本ブロックに保有される個体は，K3－4Ⅰ①である。3項で指摘したように，本個体はブロック内に石器製作の開始から終了までの資料を留めている。したがって累積作業段階数は3(修正値5.4)となるが，本個体での目的剥片剥離は極めて低調であり，集中的な石器製作作業が存在したとは考え難い。石核素材獲得のための礫分割が主目的だったのかもしれない。

各ブロックは，大半がC類個体のみによって構成されている。C類ブロックは，他ブロック或いは遺跡外にある石器製作の場から搬入された素材剥片或いは製品が主体となって構成されていると考えられる。

ブロック群周辺部・散漫分布域（第79表）

ブロック群周辺部では，第Ⅰブロック群周辺部にC類個体3例・不明3例が第Ⅲブロック群周辺部にC類個体1例がある。不明は，K3－2F①・3F③・3F⑥である。K3－3F③は第2ブロックに計26点のUF・剥片・砕片・石核が分布し，ここで石器製作が行われたと考えられるが，同ブロックから僅かに3～4m離れた箇所にも2点の剥片が分布している。これについては，第2ブロックの資料と余り距離がなく，分布の断続性も認め難いことから，同ブロックからの石器製作作業の移動とか剥片の搬出といった人為的な移動としては認め難い。したがって不明品として取り扱った。散漫分布域では，a・c・eで各1・1・2例のC類個体を保有し，dはC類個体1例・不明個体1例を保有する。不明とした個体はK3－3G⑥個体である。本個体は2点のUFで構成されC類個体の可能性もあるが，石材が特徴的でなく資料が増える可能性もあり不明とした。各ブロック群周辺部・散漫分布域で構成石器数も

一定せず石器数自体少ないせいか，全てのブロック群周辺部・散漫分布域が個体識別された資料を保有している訳ではない。全体的な傾向としては，ブロック群周辺部・散漫分布域ではC類個体が主体となるようであり，C類ブロックに類似していると考えられる。

第4節3項の分析では，A・B・C類ブロックの区分は石器製作作業に伴う付随生産物の量と対応関係にあることが指摘された。すなわち，A類ブロックは50点以上の付随生産物を保有し，B類ブロックは10～20点程度の付随生産物を保有し，C類ブロックは5点内外の付随生産物を保有していた。各類ブロックの個体構成は，A・B類ブロックはB・E類個体といった製作個体を保有し，C類ブロックは第11ブロックでのK３－４１①個体といった特殊な例を除き製作個体は保有していなかった。C類ブロックは，他ブロック或いは遺跡外の石器製作の場からの搬入を示すC類個体が中心となっている。第4節3項で課題としておいたC類ブロックでの石器製作作業の内の剥片剥離作業の存在の有無については，個体構成から判断するとC類ブロックでは剥片剥離作業は行われず搬入素材剥片を用いた二次加工作業が行われたと考えられる。個体構成がC類ブロックと同様の傾向にあったブロック群周辺部・散漫分布域についても，やはり石器製作作業の内の二次加工作業が行われたと考えられる。また，第4節2項で課題としておいた目的剥片の問題であるが，C類ブロック・ブロック群周辺部・散漫分布域の剥片は他所にある石器製作作業の場からの搬入素材剥片と考えられ，これらを目的剥片として捉えることができる。A・B類ブロックは共に製作個体を保有している点で共通性を指摘できる。B類ブロックは，C類個体を保有する例がある点でA類ブロックとは異なる。しかし，先に指摘したようにA類ブロックの第1ブロックはC類個体を持つ可能性もあり(657頁参照)，またB類ブロックの第2ブロックはA類ブロックとの類似性も指摘され(659頁参照)，個体構成からするとA類ブロックとB類ブロックの区分は曖昧になると言わざるを得ない。付随生産物の量からすると，A類ブロックとB類ブロックの間には画然とした差があり，A類ブロックでは1個体に対し集中して石器製作作業が行われたと予想される。しかし，平均作業段階数を比較すると，A類ブロックの第1・8ブロックでそれぞれ2・1，B類ブロックの第2・5・6ブロックで2・1・1となり，A類ブロックとB類ブロックとの間に差がないことがわかる。付随生産物の量は，必ずしも石器製作の集中性と対応関係にないのかもしれない。なお，製作個体のブロックでの個数は，修正値でも第11ブロックの1.8点が最高であり，同一ブロックで複数の個体を用いて石器製作作業を行っていないと考えられる。ただし，これにはC類個体で行われる二次加工作業は含めない。

２)　ブロック群の個体構成

ここでは，ブロック同様にみかけ上の石器分布のまとまりであるブロック群について，個体構成を検討する。第81表には，ブロックの個体構成で行った方法に準じて，ブロック群別の個体構成および累積作業段階数が実数並びに修正値で提示してある。なお，各ブロック群でブロック群外或いは遺跡外の石器製作の場に対する依存度を検討するために次の操作を行う。依存度を，ブロック群内で行われた石器製作作業とブロック群外或いは遺跡外にある石器製作作業の

場からの搬入素材剥片・搬入製品との対応関係で把握する。各ブロック群の依存度を等式で表わすと，次式になる。

$$Q=\frac{P}{P+O}$$

Q：依　存　度
P：C類個体数
O：累積作業段階数

Oで製作個体数の代わりに累積作業段階数を用いたのは，個体によって石器製作の集中度が異なるからである。例えば，Xブロック群に「初期＋中期＋終末期」作業を行った製作個体が1例保有され，Yブロック群に「中期」作業を行った製作個体が1例保有されていた場合，個体数のみの比較では石器製作作業についてはXブロック群＝Yブロック群となるが，石器製作作業の集中性も考慮に入れるとXブロック群＞Yブロック群となる。

第Ⅰブロック群（第81・82表）

第Ⅰブロック群は，A類ブロックの第1ブロック，B類ブロックの第2ブロック，C類ブロックの第3ブロックと各ブロックの周囲に分布する石器群により構成される。個体石器数が86点，ブロック群構成石器数が332点で，砕片をそれぞれ5点・225点含む。砕片を除く個体識別率は，75.7%となる。個体構成は，C類4例(修正値：5.3)・E類2例(修正値：2.6)・不明1例(修正値1.3)となり，総個体数は7例(修正値：9.2)である。不明個体はK3－3F⑥である。第Ⅰブロック群では，ブロック群で2個体を利用して石器製作作業が開始され，両個体ともブロック群内で作業が中断し，ブロック群外へ石核を搬出していることがわかる。また，最低4個体分の素材剥片或いは製品をブロック群外或いは遺跡外から搬入している。累積作業段階数は4(修正値：5.3)で，平均作業段階数は2となる。第Ⅰブロック群では，一個体に対して集中的な石器製作作業が行われたことがわかる。また，第Ⅰブロック群外或いは遺跡外の石器製作の場に対する依存度は0.50であり，中央区ブロック群では最低となる。

第Ⅱブロック群（第81・82表）

第Ⅱブロック群は，C類ブロックの第4ブロック・B類ブロックの第5・6ブロックと各ブロックの周囲に分布する石器群で構成される。個体石器数が38点，ブロック群構成石器数が74点で，砕片をそれぞれ1点・3点含む。砕片を除く個体識別率は，52.1%である。個体構成は，B類2例(修正値：3.8)・C類4例(修正値：7.7)・不明1例(修正値：1.9)となり，総個体数は7例(修正値：13.4)である。不明個体は，K3－3F⑤である。第Ⅱブロック群では，最低2個体分の作業途中の石核が搬入され，ブロック群内でこれを利用して引き続き石器製作作業が行われた後，再び作業を中断して石核をブロック群外或いは遺跡外へ搬出していることがわかる。また，最低4個体分の素材剥片・製品が搬入されている。この内，K3－3F④個体では素材剥片を用いて二次加工が行われたことが確認された。累積作業段階数は2(修正値：3.8)で，平均作業段階数は1となり，第Ⅰブロック群に較べて1個体に対する石器製作作業の集中性が低いことがわかる。また，第Ⅱブロック群或いは遺跡外の石器製作の場に対する依存度は0.67となり，第Ⅰブロック群の約1.3倍の値となる。

第Ⅲブロック群（第81・82表）

第Ⅲブロック群は，C類ブロックの第７ブロック・A類ブロックの第８ブロックと各ブロックの周囲に分布する石器群により構成される。個体石器数が51点，ブロック群構成石器数が75点で，砕片をそれぞれ４点・17点含んでいる。砕片を除く個体識別率は，81.0%である。個体構成は，B類１例（修正値：1.2）・C類４例（修正値：4.9）・不明１例（修正値：1.2）となり，総個体数は６例（修正値：7.4）である。不明個体はK３－３G⑤である。第Ⅲブロック群では，ブロック群外或いは遺跡外から１個体分の作業途中の石核を搬入し，ブロック群内で引き続き石器製作作業を行った後，再び作業を中断して石核を搬出していることがわかる。また，最低４個体分の素材剥片・製品を搬入している。累積作業段階数は１（修正値：1.2）で，平均作業段階数も１となり，第Ⅱブロック群と同様に１個体に対する石器製作作業の集中性の低いことがわかる。また，第Ⅲブロック群外或いは遺跡外の石器製作の場に対する依存度は0.80であり，第Ⅰブロック群の約1.6倍の値となる。

第Ⅳブロック群（第81・82表）

第Ⅳブロック群は，C類ブロックの第９・10ブロックで構成される。個体石器数が５点，ブロック群構成石器数が15点で，砕片は含まれない。個体識別率は33.3%であり，極めて低い。個体構成は，C類３例（修正値：9.0）のみとなる。第Ⅳブロック群は，ブロック群外或いは遺跡外の石器製作の場からの搬入素材剥片・製品が主体となると考えられ，依存度は1.00となる。

各ブロック群は，C類個体は実数で３～４

第81表　中央区第３層ブロック群別個体別資料構成表

	ブロック群構成石器数	砕片を除くブロック群構成石器数	個体別資料石器数	砕片を除く個体別資料石器数	砕片を除く個体識別率	個体別資料数	A類	B類	C類	D類	E類	不明	製作個体数	累積作業段階数	平均作業段階数
第Ⅰブロック群	332	107	86	81	75.7(%)	7	0	0	4	0	2	1	2	4	2
						(9.2)	(0.0)	(0.0)	(5.3)	(0.0)	(2.6)	(1.3)	(2.6)	(5.3)	
第Ⅱブロック群	74	71	38	37	52.1	7	0	2	4	0	0	1	2	2	1
						(13.4)	(0.0)	(3.8)	(7.7)	(0.0)	(0.0)	(1.9)	(3.8)	(3.8)	
第Ⅲブロック群	75	58	51	47	81.0	6	0	1	4	0	0	1	1	1	1
						(7.4)	(0.0)	(1.2)	(4.9)	(0.0)	(0.0)	(1.2)	(1.2)	(1.2)	
第Ⅳブロック群	15	15	5	5	33.3	3	0	0	3	0	0	0	0	—	—
						(9.0)	(0.0)	(0.0)	(9.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(—)	

（　）内の数字は修正値

第82表－1　中央区第3層ブロック依存度

	C類個体数	累積作業段階数	依存度
A類ブロック			
1	0	2	0.00
	(0.0)	(2.4)	−
8	0	1	0.00
	(0.0)	(1.1)	−
B類ブロック			
2	1	2	0.33
	(1.1)	(2.1)	−
5	0	1	0.00
	(0.0)	(1.6)	−
6	3	1	0.75
	(4.3)	(1.4)	−
C類ブロック			
3	1	0	1.00
	(6.0)	(0.0)	−
4	1	0	1.00
	(12.0)	(0.0)	−
7	3	0	1.00
	(6.0)	(0.0)	−
9	1	0	1.00
	(6.0)	(0.0)	−
10	2	0	1.00
	(4.5)	(0.0)	−
11	0	3	0.00
	(0.0)	(5.4)	−
各類ブロック平均	−	−	0.55
同標準偏差	−	−	0.46

(　)内の数字は修正値

第82表－2　中央区第3層ブロック群依存度

	C類個体数	累積作業段階数	依存度
第Ⅰブロック群	4	4	0.50
	(5.3)	(5.3)	−
第Ⅱブロック群	4	2	0.67
	(7.7)	(3.8)	−
第Ⅲブロック群	4	1	0.80
	(4.9)	(1.2)	−
第Ⅳブロック群	3	0	1.00
	(9.0)	(0.0)	−
平均値			0.74
標準偏差			0.18

(　)内の数字は修正値

例・修正値で4.9～9.0と比較的安定して保有している。製作個体は，第Ⅳブロック群の様に保有しない場合もあり，必ずしも安定して保有されているとは言い難い。第Ⅳブロック群は，構成石器数も15点であり，他ブロック群に較べ極めて小規模である。なお，第4節で課題としておいた剥片剥離作業の有無については，個体構成から判断すると搬入素材剥片を用いた二次加工作業が行われたと考えられる。次に，ブロック群構成石器数の安定した第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲブロック群について比較する。総個体数は，修正値でそれぞれ9.2例・13.4例・7.4例である。第Ⅰブロック群を1とすると，第Ⅱ・Ⅲブロック群はそれぞれ1.5・0.8となる。第Ⅱブロック群は分布の形成に第Ⅰブロック群の1.5倍の個体が関与し，第Ⅲブロック群では第Ⅰブロック群の0.8倍の個体が関与しているが，極立った差があるとは言えない。石核の消費率に対応すると考えられる1個体当りの平均作業段階数は，第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲブロック群でそれぞれ2・1・1となる。また，石核の総消費量に対応すると考えられる累積作業段階数は，修正値でそれぞれ5.3・3.8・1.2となり，第Ⅰブロック群が石核の消費率と共に総消費量が他ブロック群に較べて多い点が注意される。各ブロック群のブロック群外或いは遺跡外にある石器製作の場に対する依存度は，第Ⅳブロックを含めて，0.50～1.00で平均値0.74・標準偏差0.18となる。ちなみにブロック毎に依存度を算出すると，A類ブロックは第1・8ブロックとも0.00，B類ブロックは第2ブロックで0.33・第5ブロックで0.00・第6ブロックで0.75，C類ブロックは第3・4・7・9・10ブロックで1.00・第11ブロックで0.00となる(第82表)。各ブロックの依存度は，0.00～1.00の範囲にあり，平均値0.55・標準偏差0.46となる。ブロック群の依存度は，ブロックに較べてバラツキが小さいと

とがわかる。また，石器製作を行っているA・B類ブロックと搬入品のみで構成されるC類ブロックの間には，「製作の場」と「消費の場」といった対応関係があると考えられる。なお，C類ブロックで唯一第11ブロックが製作個体を保有するが，これは通常の石器製作というより礫分割が主目的であったとも考えられる。A・B類ブロックには製品も保有されており，製作と共に消費活動もブロックの分布の形成要因として挙げられる。なおナイフ形石器の形態別分布は，A・B類ブロックとC類ブロックの間にA1類形態のナイフ形石器の有無という点で相違がある。ナイフ形石器の形態差を機能差と考えれば，A・B類ブロックとC類ブロックは，分布形成に関する消費活動に機能的な差があると解釈される。こうした点からすると，ブロック群はいくつかの異なる機能のブロックを包括する単位として考えることもできる。これは，第４節の分析でブロック群はブロックでの製品の偏りを解消するような単位性のあることを指摘したが，こうしたことを反映するのかもしれない。（竹広）

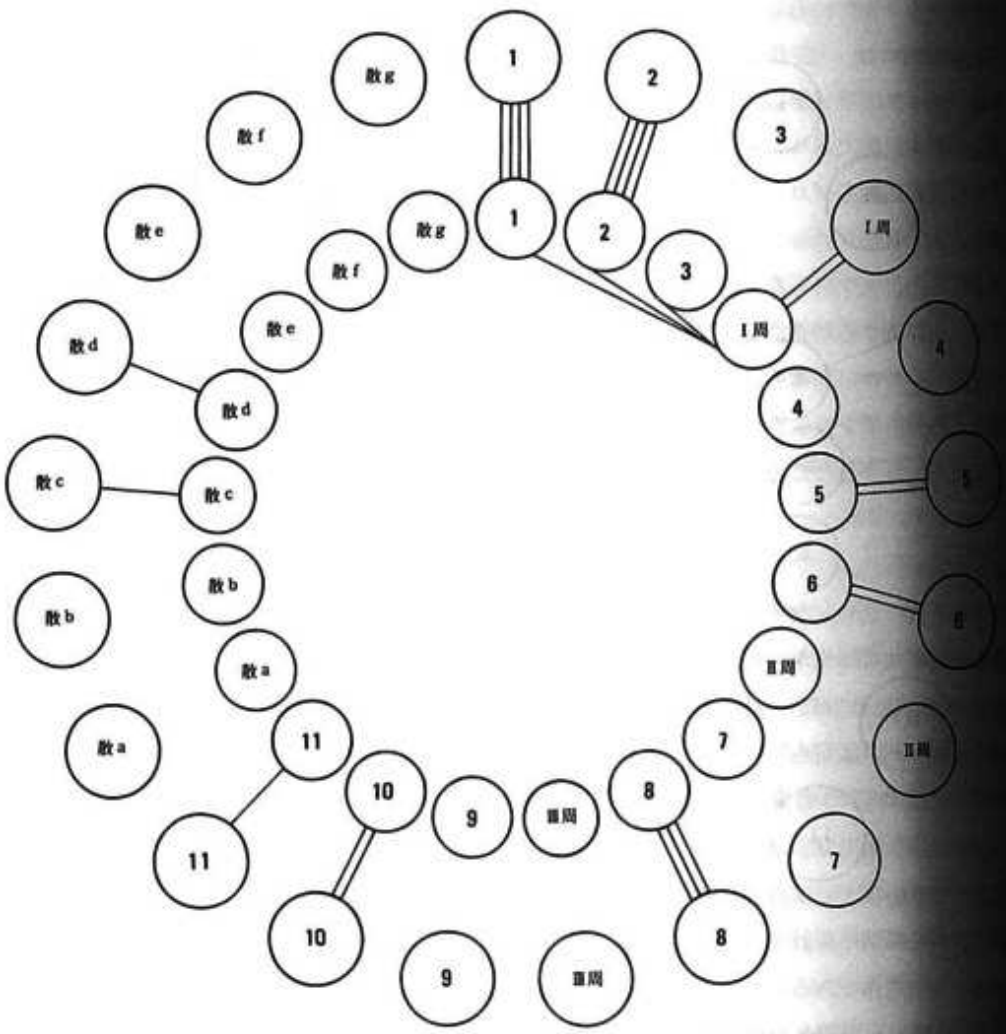
5．ブロックの相互関係

本節では，ブロック相互の関係・ブロック群内及びブロック群相互の関係を，接合資料・個体別資料の共有関係から検討する。これと共に，静岡県寺谷遺跡(鈴木忠他1980)・富山県野沢遺跡(鈴木忠他1982)で追求されてきた集落景観・集落構造の復原への方法論的な一段階としてユニットの設定も行いたい。

１）接合資料の共有関係

中央区第３層では，計13個体で接合資料を抽出することができた。個体別資料によっては，K３－２F①などのように複数の接合資料が観察される場合もある。個体別資料の枠を払って接合資料を個別に集計すると，計22組で総石器数は89点となり，接合率は16.3%である。ここでは，同一個体であることが確実な接合資料の共有関係について検討する。なお，２組の接合資料は，構成石器数２点の内１点が第2b層に属している。第2b層での再利用の可能性もあり，ここでは分析対象外とする。

中央区に分布する石器群をブロック・ブロック群周辺部・散漫分布域に区分して，これらの間での接合資料の共有関係を示したのが第322図である。同図では，ブロック間或いはブロック内で１組の接合資料を共有していた場合，各接合資料の構成石器数に関係なく一律に一本の線で表わしてある。ブロック間での共有は，第１ブロックと第Ⅰブロック群周辺部，第２ブロックと同群周辺部・第３ブロックと同群周辺部に見られる。以上３例の接合資料を除くと，いずれの資料も同一ブロック内で分布が収まっている。前述の３例は，K３－２F①・K３－３F①・K３－３F③個体に属する接合資料である。これらは，いずれも各ブロックの周辺域との共有であり，特にK３－２F①，K３－３F③個体については人為的な移動として認識するには躊躇される資料であった。こうした接合資料のブロック間での共有関係が稀少なことからすると，接合資料の分布の各ブロックでの収束性の強さとでもいうべき特徴が指摘される。



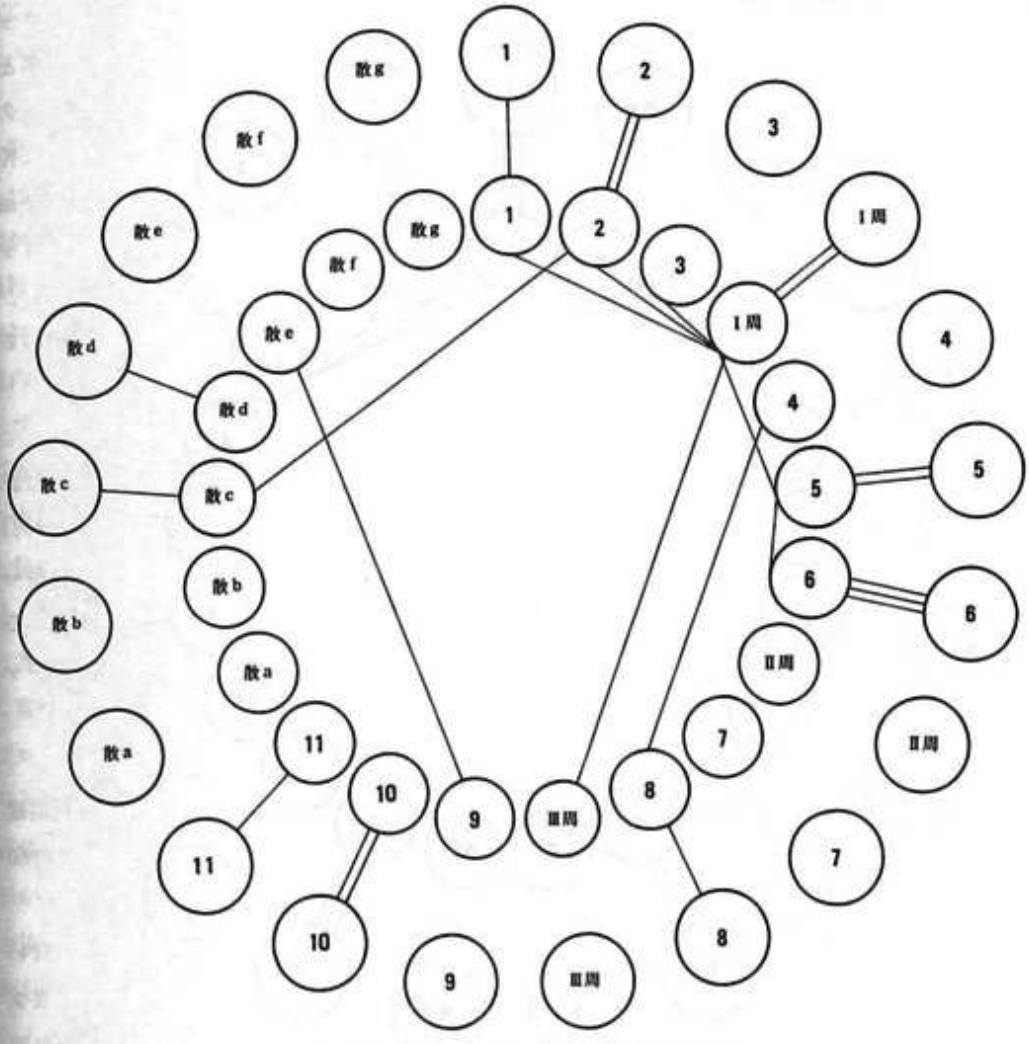
1組の接合資料の共有を1本の線で示してある。例えばK3－2F①個体の接合資料Cは，第1ブロックに2点，第Iブロック群周辺部に1点の資料が保有される。この場合，理論的には第1ブロック相互と第1ブロックと第Iブロック群周辺部の2例の共有関係があり，①－①，①－第Iブロック群周辺部の2本の線が引かれる。

第322図　接合資料共有関係模式図

2）　個体別資料の共有関係

中央区第3層石器群では，計17例の個体別資料が抽出された。総石器数は186点で，個体別率は34.1%となる。この内1例の個体は，構成石器数2点の内の1点が第2b層に属しているこのため本個体の帰属層位が不明瞭となり，ここでは分析対象外とする。また，単独個体の1点についてもブロック間の共有関係の検討には使えず，分析対象外とする。これについては別に検討する。分析対象としたのは，計16例の個体別資料である。ここでは，ブロック間およびブロック群間での個体別資料の共有関係を検討する。

第323図には，接合資料の場合と同じ方法で，個体別資料のブロック間での共有関係を



第323図　個体別資料共有関係模式図　凡例は第322図に同じ

してある。ブロック間での共有は，計９例あり，接合資料の場合よりも増加している。また，ブロック内に分布が収束する資料は計７例であり，接合資料の場合よりも減少している。個体別資料のブロック間での共有関係をブロック群を単位としてまとめてみると，ブロック群内でのブロック間の共有が計４例，複数ブロック群に亘る共有が計５例となる。

前者は，第Ⅰブロック群の第１ブロックと第Ⅰブロック群周辺部(K３－２F①個体)・第３ブロックと同群周辺部(K３－３F①個体)・第２ブロックと同群周辺部(K３－３F③個体)での共有と第Ⅱブロック群の第５ブロックと第６ブロック(K３－３F⑤個体)での共有である。第Ⅰブロック群の各ブロックと同群周辺部の共有は，いずれも各ブロックの周辺との共有であり，特にK３－２F①，K３－３F③個体の場合必ずしも人為的な移動とは言い難く，共有として認識するのは躊躇される。ブロック群内でブロック相互に個体の共有があるのは１例のみであり，ブロック群内の個体の共有の稀少性が指摘できる。

後者は，第Ⅰブロック群の第2ブロックと散漫分布域c（K3－3F②個体）・第Ⅰブロック群周辺部と第Ⅱブロック群の第5ブロック（K3－4F①個体）・第Ⅰブロック群周辺部と第Ⅲブロック群周辺部（K3－3G⑦個体）・第Ⅱブロック群の第4ブロックと第Ⅲブロック群の第8ブロック（K3－3G①個体）・第Ⅳブロック群の第9ブロックと散漫分布域e（K3－3G③個体）での共有であり，これらの共有距離はそれぞれ23m・14m・11m・22m・12mである。ブロック群を単位として見ると，第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲブロック群と散漫分布域c・第Ⅳブロック群と散漫分布域eは，僅かではあるが個体を共有するグループとして抽出される。しかしブロック群を越えた個体の共有例は5例であり，ブロック群内の場合ほどではないが，決して多いとは言えない。

3）　ユニットの設定

接合資料の分析では，接合資料の分布がブロック内に収束する傾向が強いことが指摘され，個体別資料の分析では，ブロック群内でのブロック等相互の個体の共有の稀少性が指摘され，またブロック群を越えた共有も計5例であり必ずしも多いとはいえない状況にあることがわかった。このため，接合資料や個体別資料のみからではユニットを設定することは困難である。ここでは，みかけ上の分布のまとまりであるブロック群や石器群の分布状況も手掛りにしてユニットの設定を行った。

第1ユニット

第1ユニットは，第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲブロック群と散漫分布域a・b・cから構成される。石器組成は，ナイフ形石器12点，彫器3点，RF13点，敲石類6点，台石3点，UF51点，剥片1点，砕片245点，石核1点であり，石器総数は494点となる。

個体別資料の分析では，ブロック群を単位として見ると，第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲブロック群は少ないながら個体を共有するグループとして抽出された。散漫分布域a・b・cは，第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲブロック群に隣接しており，また散漫分布域cは第Ⅰブロック群と個体を共有しており，それぞれこのグループに帰属させた。これを第1ユニットとした。

第2ユニット

第2ユニットは，少ないながら個体を共有する第Ⅳブロック群と散漫分布域eから構成される。石器組成は，ナイフ形石器1点，敲石1点，台石1点，UF9点，剥片10点であり，総石器数は22点である。

ここで設定したユニットは，少ないながら個体の共有の見られる石器分布の視覚的なまとまりである。ユニット内での個体の共有数も少なく，ユニット内の石器群の結びつきは弱いといわざるを得ない。このため，ユニット内の石器群が厳密な意味での同時性をもって形成されたか否かはわからない。また，こうしたユニット内のブロック或いはブロック群相互の個体共有の稀少性からすると，ユニット区分からはずれた石器群（第11ブロック・散漫分布域d・f・g）が本来的には統合されるべきものである可能性もある。こうした中央区の二つのユニットが何を反映しているか，更にはユニット内のブロック群が何を反映しているのかなどの点は

いては，次項で今まで行ってきた分析結果をもとに検討したい。　（竹広）

6．石器群の分布から見た集落の景観と構造

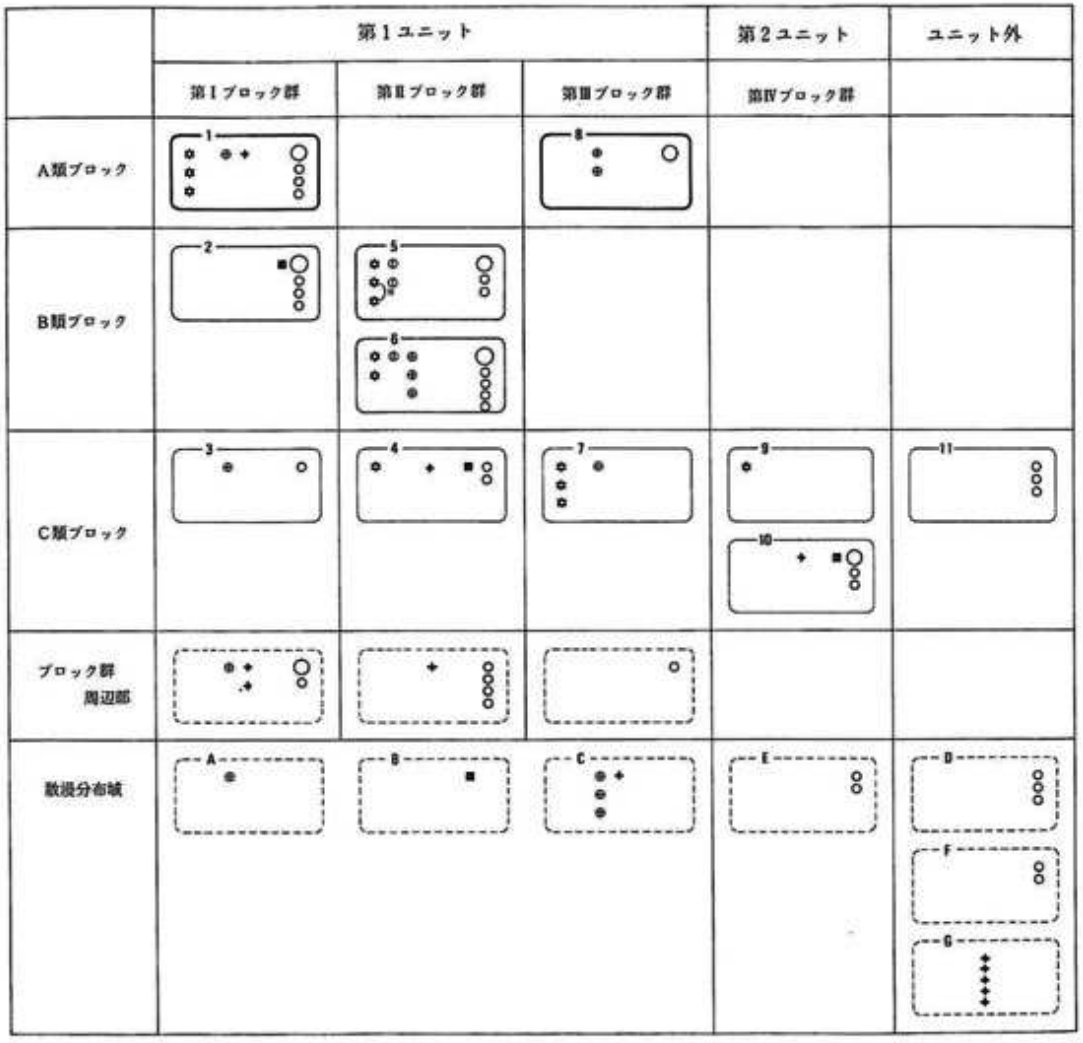
第４節では，ブロック及びブロック群を分析単位として石器の分布状況を把握した。また，これらの石器組成をブロックの分布状況により設定したA・B・Cのブロック類型を基準としながら検討した。本節では個体別資料の分布を分析し，ブロック及びブロック群の分布の形成過程を検討した。また，ブロック等間の結びつきを，接合資料及び個体別資料の共有関係から検討した。ここでは，今まで行ってきた分析結果を検討し，石器群の分布という側面から中央区内の集落景観・集落構造を復原してみたい。

ブロックの分布状況により設定されたA・B・C類のブロック類型は，剥片・砕片といった石器製作に伴う付随生産物の増減に対応している。A・B類ブロックは，石器製作作業が集中の程度に差はあるもののいずれも行われたと考えられ，C類ブロックは付随生産物が５点内外と量的に少ないことから石器製作の内の剥片剥離作業の存在に疑問が持たれる。C類ブロックは，個体構成からするとC類個体が中心となり，素材剥片を搬入して二次加工作業が行われたと考えられる。また，ブロック群周辺部・散漫分布域についても同様の傾向が認められ，同じく素材剥片を搬入して二次加工作業が行われたと考えられる。製品は，A・B・C類ブロック・ブロック群周辺部・散漫分布域の各箇所に若干の多少の差はあるものの保有されており，各箇所とも使用活動を反映する資料を保有すると言える。なお，各ブロックでブロック外或いは遺跡外の石器製作の場に対する依存度は，A・B類ブロックが0.00～0.75で平均0.22，C類ブロックが0.00～1.00で平均0.83と両ブロック間に画然とした差がある。A・B類ブロックは「製作の場」，C類ブロックは「消費の場」といった対応関係にある。また，A・B類ブロックにも製品は保有されており，「製作の場」であると共に「消費の場」であると考えられる。ナイフ形石器の形態別分布状況は，A・B類ブロックとC類ブロックの間にA1類形態の有無という点で相違がある。C類ブロックは，A・B類ブロックに見られないA1類形態のナイフ形石器を中心に保有している。ナイフ形石器の形態の差を機能の差として考えるならば，両ブロックの分布形成に関わる消費活動に機能的な差があると理解される。以上のように，中央区内の各ブロック等には，いくつかの異なる機能があることが考えられる。

中央区には４ケ所のブロック群があり，これらはいくつかの異なる機能のブロックを包括している。第Ⅰブロック群は，各１例のA・B・C類ブロックで構成される。第Ⅱブロック群は，２例のB類ブロックと１例のC類ブロックで構成される。第Ⅲブロック群は，各１例のA・C類ブロックで構成される。第Ⅳブロック群は，２例のC類ブロックで構成される。第Ⅳブロック群は，同類のブロックのみで構成されているが，両ブロックの石器組成を見ると，第９ブロックがナイフ形石器１点，剥片５点，第10ブロックが敲石１点，台石１点，UF７点となり異なる組成と言える。両ブロックの分布の形成に関わる消費活動には，機能的な相違があるのかもしれない。なお，石器組成については，各ブロック群は，各ブロックでの保有製品の偏りを解

消するような単位性が指摘されている。ブロック群の以上の特徴やブロック群が分布上のまとまりである点から判断して，ブロック群は世帯に対応するような石器分布のまとまりとして解釈することができよう。各ブロック群は，いずれも製品消費と関係があるC類ブロックを保有しているが，石器製作作業の行われたA・B類ブロックは第Ⅳブロック群では見られない(第324図)。第Ⅳブロック群は付随生産物を保有するが，量的に少ないことや個体構成がC類個体主体であり，剥片剥離作業は行われず素材剥片を搬入して二次加工作業が行われたと考えられる。また，各ブロック群はC類個体を安定して保有するが，これは先土器時代人が遺跡に訪れた際の装備品の一部であったと考えられる。集落運営の初期では，前遺跡からの移動の際に携帯していた装備品を利用して活動が行われ，その後装備品が諸活動に伴い欠落した場合に石器製作作業を行って装備の補充を行ったことも想定される。こうした想定からすると，石器製作は集落運営の中でも補充的な活動とも考えられる。第Ⅳブロック群がA・B類ブロックを保有しないのは，こうした点から説明されよう。つまり，第Ⅳブロック群では補充活動を行うほど居住期間が長くはなかったものと考えられる。またこれは，いずれのブロック群にも含まれるC類ブロックが集落の活動の中でもより日常的な活動に伴い分布が形成されたという点も説明している。C類ブロックを，例えば住居内およびその周囲での活動といった居住活動に伴って分布が形成されたと解釈できよう。またA・B類ブロックは，居住空間以外での活動と結び付いていると考えられる。具体的には石器製作が行われた場と考えられるが，ナイフ形石器等の製品類も保有しており，石器製作以外の活動が分布形成に関わっている可能性がある。なお，ブロック群からはずれる散漫分布域は，ブロック群と個体の共有関係にあるのが散漫分布域c・eのみである。ブロック群と散漫分布域の関係は十分に摑みにくいが，おそらくブロック群内での諸活動と並行して分布が形成されたものと思われる。散漫分布域やブロック群周辺部といったブロック外の箇所は，ブロックでは少ない礫石器を多く保有している。ブロック外の分布の形成には，ブロックの場合とは異った活動が関係していると考えられる。

ただ，ブロック等の分布形成に関わる活動を直接的にその場と結び付けるのは，遺棄・廃棄という点で問題がある。我々は前述した様に付随生産物の分布については，廃棄行為の存在に対する疑問から遺棄されたものと考えている。しかし，製品については，遺棄・廃棄についての検討が困難な状況である。例えば，付随生産物の分布する場に製品が分布するが，これらが全て遺棄されたものであるとは限らない。付随生産物の遺棄の場が，製品の廃棄の場である，つまり石器製作の場が製品の廃棄の場である可能性も十分あり得ると思う。A・B類ブロックの製品には，各ブロックの製作個体と同一個体の製品と搬入個体がある。前者にはUFが安定して保有されており，石器製作の補助的道具としても解釈される。また，UF以外の器種には，ナイフ形石器，RFがあり，これらは必ずしも石器製作に関連したものとは言えない。ただ，第1ブロックの2点のナイフ形石器はこの点について示唆的資料である。本資料は同ブロックで製作の行われたK3－2F①個体と同一個体であり，いずれもブランティング付近からの衝撃で折れており，製作途上の欠損品の可能性が高い。解釈に解釈を重ねた上ではあるが，同一個



第324図　ユニット・ブロック群のブロック等構成状況

第83表　中央区第3層個体別資料搬入搬出関係表

個体別資料名*	個体類型〈中央区第3層〉	第1ユニット														第2ユニット			ユニット外				遺跡外との関係**
		第Ⅰブロック群				第Ⅱブロック群				第Ⅲブロック群			散漫分布域			第Ⅳブロック群		散漫分布域	—	散漫分布域			
		第1ブロック	第2ブロック	第3ブロック	ブロック群周辺部	第4ブロック	第5ブロック	第6ブロック	ブロック群周辺部	第7ブロック	第8ブロック	ブロック群周辺部	a	b	c	第9ブロック	第10ブロック	e	第11ブロック	d	f	g	
K3-2F①	B	─○─																					搬出
K3-3F①	C																						搬入
K3-3F②	C																						搬入
K3-3F③	E		─○─																				搬出
K3-3F④	C																						搬入
K3-3F⑤	不明																						—
K3-3F⑥	不明																						—
K3-4F①	B						─○─																搬入 搬出
K3-3G①	B										─○─												搬入 搬出
K3-3G③	B							─○─															搬入 搬出
K3-3G⑧	C																						搬入
K3-3G④	C																						搬入
K3-3G⑤	不明																						—
K3-3G⑥	不明																						—
K3-3G⑦	C																						搬入
K3-3G⑧	C																						搬入
K3-4I①	D																		─○─				—
2F3A1	C																						搬入
3F25A13	C																						搬入
4F21A1	C																						搬入
2G10A1	C																						搬入
2G10A3	C																						搬入
2G15A1	C																						搬入
3G9A1	C																						搬入
4G17A1	C																						搬入

凡例
─○─　剥片剥離作業の行われたブロック等を示す。
───　製品或いは素材剥片が搬入されたブロック等を示す。素材剥片を搬入して，二次加工作業の行われる場合も含む。
┈┈┈　不明。

* 2F3A1以下は単独個体。
** 遺跡外との関係は個体類型から判断した。製作個体のA・B・E類については遺跡外と石核の搬入・搬出関係にあることを示し，C類個体については遺跡外の石器製作の場からの製品或いは素材剥片の搬入を示している。製作個体の内のD類個体については，石核が遺跡内で準備された後作業終了にまで至り，遺跡外との関係は認めない。実際には，D類個体及びその他の製作個体は遺跡外に製品或いは素材剥片の搬出を行っていると十分に考えられる。しかし，実資料からこうした行為を把握することは困難であり，ここでは検討の対象外とする。なお，中央区第3層内では，ブロック等相互の搬入搬出関係については厳密に言えば，十分な検討に耐え得る資料はない。中央区第3層内での個体の移動経は不明である。

体のＵＦや製作途上の欠損品は，付随生産物同様に遺棄されたものと推察される。後者については，同一個体の一部の製品同様に石器製作に関わる資料であるかどうか不明であり，遺棄されたものでない可能性もある。もちろんＡ・Ｂ類ブロックで石器製作以外の活動が行われた結果遺棄された可能性もある。こうした点については今後の課題としたい。

中央区には，２ケ所のユニットがある。両ユニットは，共にブロック群と散漫分布域から構成されている。この内第１ユニットは，複数のブロック群で構成される。これら世帯を反映すると考えられるブロック群は，相互に少ないながらも個体を共有しており，ユニットを相互に関係を持った世帯群として認識でき，集落に対応するものとして考えることができる。しかし，ユニット内での個体の共有数は少なく，二つのユニットやユニット区分からはずれた箇所が本来的には統合されるべきものである可能性もある。第１ユニットは三つのブロック群があり三つの世帯によって構成されていると考えられるが，前述したようにブロック群相互の個体の共有は僅かしかなく，これらが厳密な意味での同時性を保って共存していたとは必ずしも言えない。また，同一世帯が第１ユニット内を移動して三つのブロック群を残した可能性もある。しかしこうした点については，度々述べてきているようにブロック群相互で個体の共有数が少ないために十分な検討は行えない。なお，第１ユニットの各ブロック群は，石核消費量や個体数，製品量に差があり，各世帯の居住期間が一定しない可能性もある。第83表にはブロック相互および遺跡外との個体の搬入搬出関係を示してある。同一ブロック群内での個体の共有の稀少性と共に，ブロック群内の石器製作の場で生産された製品がブロック群内の他のブロックにほとんど供給されていない点が指摘できる。大半のブロック群内のブロックは，遺跡外と石核・素材剥片・製品の搬入搬出関係にあり，ブロック群内の個々のブロックは遺跡外との結び付きが強いと言える。ブロック群が継続して利用された場合，ブロック群内で自給された製品を利用した活動に伴ってその製品がブロック群内に残されることが予想されるが，実際には製作を行ったブロックに保有される例はあるが，ほとんど他ブロックには供給していない。こうした現象は，ブロック群での滞在期間が短かかったため，自給製品を用いた活動を行うまでに至らなかったと解釈される。また，ブロック群が数時期に亘って断続的に利用されたために，こうした現象が現れた可能性もある。

ここでは，石器群の分布を基に中央区内の集落景観・集落構造を復原してみた。最終的な集落景観としては，第１ユニットでは３世帯，第２ユニットでは１世帯が居住していたことになるが，ブロック群間での個体の共有が少ないこともあって厳密な意味での一時期に何世帯が共存していたかはわかり難い。また，両ユニットが統合される可能性もある。恐らく相互に関連を持つ世帯が，広野北遺跡の中央区に相当する場所に訪れ，第Ⅰブロック群や第Ⅱブロック群のように相対的にではあるがやや利用期間の長い世帯もあれば，第Ⅳブロック群のように極めて利用期間が短い例もあり，各世帯で滞在期間も異なり集落運営期間中を通して全ての世帯が併存していないと考えられ，随時世帯の出入りがあったと思われる。また，各世帯の居住期間も概して短いように思われる。こうした点や個体の共有の少なさから判断して，各世帯相互の

結びつきが弱いと推察される。また，こうした現象の背景にある集団像としては，各世帯は極めて孤立に近い状況にあり，これらが弱い結びつきを持って集団を構成していると思われる。これが集団像の一面的なものに過ぎないのかどうかは，今後他遺跡等でも分析を行って検討して行く必要がある。なお，最終的な判断は，中央区第3層の全分析を待って行いたい。

（竹広）

第6節　小　　結

第3層出土の遺物については，すでに各節で触れたように接合例に乏しく，遺物分布間の時間的前後関係を明確に示すような条件には恵まれていない。しかしながらわずかな接合・個体別資料の共有関係を参考に，出土層準・石器形態から判断する限り，石器群全体が時間的にほぼまとまりを持って残されたと考えられるに至った。その時期は，石器形態・火山ガラスの検出層準・^{14}C年代測定等の分析結果では，南関東第Ⅱ期後半に比定し得ると考えられる。ここではK2文化に習い，石器ブロックを含む遺構群の分布の視覚的統合を基準に中央区内の集落構造・景観の復原を試みたい。

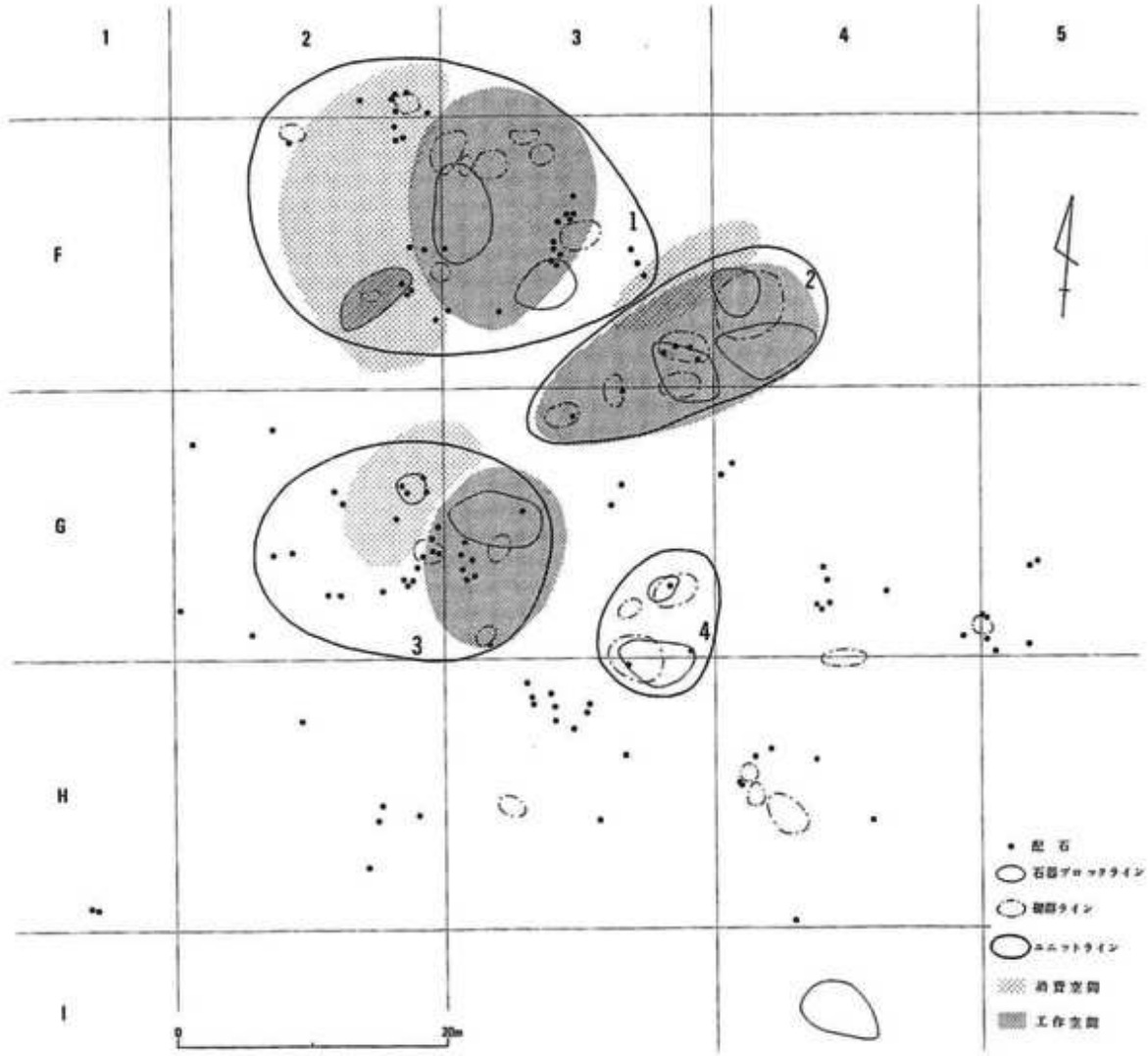
1．世帯ユニットの設定

石器群の分析からは，最終的に中央区に二つのユニットが考えられたが，それらはブロック群という形で顕在化した最低四つの世帯によって成立する一つの集落に統合されようというものであった。また，礫群・配石の分析でもほぼ同様の結論が得られており，こちらは遺構の数が多いだけに様々に分析単位が複合し，八つのユニットの存在が考えられている。両者の結論を統合する中で世帯ユニットの摘出を企てるとともに，特定機能空間の存在についても考えてみたい。

まず両者の結果がほぼ符合する部分を取り上げてみると，第Ⅰブロック群＋散漫分布域a・bと第一礫群群と周囲の礫群・配石の重複分布する範囲を一つの単位と見ることができる。これを第1ユニットとする。第Ⅱブロック群と第二礫群群の重複分布単位を第2ユニットとする。第Ⅲブロック群＋散漫分布域cと第三礫群群と西方の配石群の重複分布単位を第3ユニットとする。第Ⅳブロック群と第四礫群群の重複分布単位を第4ユニットとする（第325図）。

これら四つのユニットはいずれも石器ブロック・礫群・配石から成っており，規模の大小はあれ質的には近似したものと言える。トゥール類の少ない中で，全てのユニットでナイフ形石器は保持されている。また，各ユニットを構成するブロック個々の類型には違いが認められるものの，ユニット単位ではそうした相違を相殺する形での均質化現象が認められており，第4ユニット以外ではいずれも石器の生産と消費を示すブロックを保有している。

規模の大小は，ユニットを構成する遺構群の量比において顕著である（第84表）。第1ユニッ



第325図　第3号ナイフ形石器群集落概念図

トが最も安定した内容を示しており，順次第４ユニットまで序々に不安定になる。第３ユニットで配石の数の突出が認められるが，原因は定かでない。規模の大小は石器ブロックの質とも関連するのか，最も小規模な第４ユニットのみは消費的性格の強いＣ類ブロックのみで成立している。他は全てにＡ・Ｂ類の石器生産的なブロックを含んでいる。ユニットを構成するブロックに石器生産的性格のものを含んでいるか否か，換言するならばユニット構成石器類の多少が必ずしもその地点における居住期間の長短とパラレルに対応するものではないと考えられるが，本遺跡の場合は礫群・配石の量比も石器とゆるい相関関係にあり，ユニット規模の大小がそうした事実を反映したものである可能性もあろう。

第84表　中央区第３層ナイフ形石器文化ユニット別属性表

ユニットNo.	石器ブロック A	B	C	礫群	配石	散石類	面積（㎡）
1	1	1	1	9	12	2	430
2		2	1	5	3	2	180
3	1		1	3	11	—	180
4			2	3	3	1	48

さて，これら規模の大小を持ちつつも質的に近似した四つのユニットをここでは世帯ユニットとして捉えたい。各世帯ユニットの構造と機能空間の配置を，順を追って見て行きたい。

第１世帯ユニットを構成するブロックにはＡ・Ｂ・Ｃ類が各々一つずつ含まれる。Ａ類は典型的な石器製作ブロックであるが，構成個体数が限定されており，そこが固定的な石器製作空間であったと見なすよりは，現段階ではたまたまある個体の剥片剥離が集中的に行われた痕跡を留めるに過ぎないと言えよう。Ｂ類も石器製作的性格を帯びるが，他方では消費的性格も増大する。Ｃ類はさらに消費的性格を強くする。これら三者は近接してはいるものの，個体の共有・接合等の相互の関係を物語る条件は整っていない。したがって，Ａ類あるいはＢ類のブロックからＢ・Ｃ類ブロックへ石器が供給されるという関係は把握できず，むしろ新規に生産されたものは遺跡外へ搬出されるという関係を示していると考えられる。逆に，Ｂ・Ｃ類ブロックに残る定型的な石器は，他遺跡からの搬入品が多いということになる。三者の関係は，時間的な同時性をも含めて不明瞭な点が多いが，少なくともＡ類ブロックが単独で存在することは考え難く，ＢあるいはＣ類ブロックとの共存が想定される。三者が一体のものかそれとも複数の単位を示すものかは，他のユニット構成要素との関係から語られる部分も多いであろう。

これら石器ブロックを取りまいて，数多くの礫群・配石が分布している。それらを詳細に見ると，第１・４・９礫群と第３・５・６・７・８礫群では，特に配石との関係において大きな違いがあることが知られている。この違いの意味する所はわからないが，取り扱われ方に差のある礫群の存在した可能性がある。

さて，これら石器ブロックと礫群・配石との分布関係を見ると，数多くの礫群・配石のわずかの合い間をぬって見事に石器ブロックの配されていることがわかる。相互の分布関係は偶然とするにはあまりに合理的であり，この事実のみをしても各遺構の同時並存を主張し得るかと考える。ただしこの場合の同時並存は，相互の存在を意識し得るというレベルでのものであり，完全な時間的な同時性をも要求している訳ではない。以上をもって，第１世帯ユニットを構成

する各遺構が，広義の同時存在の関係にあると考えることができよう。

本ユニットにおける機能空間の配置は不明瞭である。A類ブロックのあるユニット南西部に石器製作空間，礫群の優勢な地域に調理・祭式空間を考えることができるが，他は不明とせわざるを得ない。ユニット南縁に敲石が1点分布するが，他にこれに関連する遺物を欠いている。また，C類ブロックは直接的に居住空間との対応を示すわけではないが，石器の消費場として住居との近接も考えられる。しかしこれらのブロック周辺はユニット中でも低い位置にあり，しかもこの位置だと北西に開いた住居を考えなければならないことになる。当時の気候環境を想定する時，北西に開く住居の可能性は乏しいのではあるまいか。さらに石器群と礫群・配石の量比から考えても，必ずしも石器ブロックと居住空間とを結ぶ必要はなく，むしろ遺構群全体の分布の中で検討する方が良策と考えられる。常識的にはユニットの西から北に考えられようか。

第2世帯ユニットも三つのブロックで構成されるが，ここにはA類は含まれない。したがって集中的な剥片剥離作業の痕跡は残していないが，石器製作の痕跡を少なからず持つB類ブロック二つと，消費的性格の強いC類ブロック一つを含んでいる。これらでも個体の共有関係は乏しく，相互に孤立的である。しかしながら第1世帯ユニット同様，礫群との分布関係にこれら遺構群の共存は認められ，孤立的な性格は形成時期の違いを反映したものではないと考えられる。またブロック相互がわずかに1～2mしか隔たっていないため，それぞれに作業空間を考えることも難しかろう。消去法では，やはり一世帯の個別の活動が単位的に展開した結果と考えられよう。石器ブロックと整合的な分布を示す礫群についても同様の理解が得られよう。

本ユニットでは，第1世帯ユニットのような礫群・配石の分布形態の違いは明瞭でない。第12礫群と第14配石の関係がそうした一例とも考えられるが，配石が他の礫群と重複分布するため認定が躊躇される。

さて，本ユニットの機能空間の配置はどのように考えられるのであろうか。一つの大きな特徴として，本ユニットが東方に傾斜する地形面上に立地する点を念頭に置いておきたい。この点で遺構群の配置を見ると全体に東西方向に延びており，C類ブロックが消費的であるとすると住居の位置はこの北方に当ると考えられる。遺構群の南側に考えられなくはないが，やはり北方に開く可能性は少なかろう。調理空間は敲石・台石と礫群との位置関係から見ていこう。まず礫群は儀式的な意味を持ちつつも，他方では厨房的機能も示唆されている。これは北東から西南西に向い約20mに亘って連なっている。敲石は第4ブロックと，第13礫群に接して，台石も第4ブロックに分布する。第4ブロック中の敲石と台石は第26礫群にも接している。この分布を見ると，やはり敲石・台石と礫群は相互に関連がありそうである。全ての礫群に敲石・台石が伴う訳ではないが，これは両者の可動性の違いとも考えられる。多量の礫で構成される礫群は可動性が乏しく，一度使用されるとそこに何等かの痕跡を留めるが，敲石・台石といった単独の石器'はより可動性に富み，随時使用場所に従って移動したとも考えられる。

そうであるとすれば，一つには住居に隣接した調理空間が個別に存在した可能性はあるが，他方では礫群に伴う調理空間は礫群の移動に伴って可動的であったと考えることができよう。火処については推定材料を欠く。本ユニットでも礫群と石器分布が隣接しつつモザイク状に分布するなど，性格を違える空間が交錯する例が多い。大きく居住空間と屋外という機能空間の分化は推定できるものの，それ以上の分化は成立していないように考えられる。

第３世帯ユニットは，Ａ・Ｃ類の二つの石器ブロックを持つ。両者の関係は第１世帯ユニットで見たと同じで，Ａ類で生産されたものが必ずしもユニットあるいは遺跡内には残されておらず，またＣ類の遺物には搬入品が多い。両者は孤立的であるが，他の遺物・遺構分布から同時存在が考えられ，同一世帯による異なる二つの活動の側面を表わすと解される。さらに，Ｃ類ブロックに居住空間的(消費的)性格を認めるとすれば，ユニット北側に一つの住居を想定することができよう。

本ユニットには配石が多い。主にユニット中央から西方に展開するが，配石そのものの性格が不明瞭なだけに，この現象を解釈することもできない。礫群は配石とは逆に，主にユニットの中央から東方に分布する。

石器ブロックがユニット北縁に分布することとともに，本世帯ユニットでは各機能空間の偏りを遺構群の分布として明瞭に捉えることができる。ユニット中央北側に住居が，西方には配石，東方には礫群が位置する。したがって調理空間は東半に偏っていたと考えられることができよう。火処は特定できない。

第４世帯ユニットも二つの石器ブロックを持つ。これらはいずれもＣ類であるが，その石器組成の違いから異なる性格を帯びている可能性が指摘されている。他のユニットと同じく，両者は孤立的である。両者とも礫群とほぼ重って分布している。このためＣ類ブロックが消費的性格を帯びるとは言え，ブロックに重ねて住居空間を想定することは難しかろう。本ユニットの場合は全体的に情報の不足があり，世帯としての空間構成を推定することはできなかった。

さて，以上の４世帯ユニットの他に，石器では第11ブロック・散漫分布域ｄ・ｅ・ｆ・ｇ，礫では第五礫群群・第19・21礫群・非焼け礫群・20ケ所以上の配石等，世帯を単位とする遺構群として統合できないものが数多くある。これらの中には非焼け礫群を代表に，いずれかの世帯ユニットに属すると察せられるものの，帰属の不明確な特定の機能を負ったユニットが含まれると考えられる。それらについては判断材料をほぼ完全に欠いているため，ここでは割愛する。第19礫群とその周囲の配石も第１世帯ユニットに典型的に認められた礫群・配石の一つの在り方であるが，ここではそれらが他の要素と絡むことなく単独で分布するために如何ともできない。また第21礫群と散漫分布域ｅの重複分布も，礫群形成に伴う石器分布と考えられ，単一の機能空間と言えるのではあろうが，その帰属すべき世帯ユニットが特定できない。４Ｇ区南西隅に巨大な攪乱があり本来は第４世帯ユニットと繋がっていた可能性もあるが，第４世帯ユニットそのものの分布があまり東方に伸びるようには見えない。この他第五礫群群と散漫分布域ｆの重複分布もかなり規模が大きく，礫群が安定しているだけに等閑視できない。これら

は第4世帯ユニットと第11ブロックの間に分布するが，いずれとも直接的な繋がりを持たない。礫群の安定度からは独立した世帯ユニットを設定し得るかとも考えられるが，あまりに石器の分布が乏しい。世帯ユニットを設定する最低条件として，礫群と遺構としても認定し得る石器ブロックの並存を課することが許されるならば，第五礫群群の周囲からは石器ブロックが欠落していることになる。こうした分布状況は礫群が非常に安定しているとは言え先の第21礫群と散漫分布域eの重複分布と同じことになり，やはり礫群のみが個別に主体的に役割を果たした空間と考えることができよう。それがいずれか特定の世帯ユニットに属するものなのか，それとも集落全体に関わるものなのかの指針は得られなかった。

2．集落の景観

中央区第3層では最終的に四つの世帯ユニットと複数の所属不明の個別機能空間が設定されたが，それらは相互にどのような関係にあるのであろうか。世帯ユニット間での個体の共有関係や礫の接合関係が非常に稀であるために観念的な推論に陥る可能性は否定できないが，規模・機能空間の全体の配置を一応検討しておきたい。

第5節6項でも集落に対応する可能性のあるユニットが二つ設定されながら，最終的には接合される可能性が示唆されていた。ここでも全体を一集落と考え以下の説明を行う。

まず遺物分布域の南北が撹乱により削られているために集落全体の広がりは確定できないが，少なくとも60×50＝3,000㎡以上の広さを持っていたものと推察される。その中に四つの世帯ユニットが残されているが，それらは比較的平坦な北・西方に位置している。これに対し礫群を伴う個別の調理・儀式空間は，南東部の傾斜が増し崖線に近い位置を占めている。また礫群は一部礫群とほぼ重なる分布を示しつつ，さらに南から西方にまで広がりを見せている。

四つの世帯ユニットは規模の大小こそあれ，質的には近似した内容を示している。E2XXの小結でも既に述べたが，当時の人々の回帰的生活様式を前提とするならば，本集落を利用する世帯は質的にも似たものであったと考えられよう。その中で規模の大小は構成員の多少あるいは回帰回数・定着度の違いとして理解されよう。四つの世帯ユニットは常時同時並存であったのではなく，むしろ任意に世帯単位の移動があったと考えられる。世帯ユニット相互の接合・個体の共有の乏しさはそのような各世帯の独自性の強さの一端を示しているのであろう。したがって景観としての集落は，住居が全くない状態から最大4世帯並存までの変動を伴うと判断される。

（山下，保坂，竹[illegible]）

第Ⅷ章　縄　文　時　代

第1節　遺　　構

縄文時代の遺構としては，竪穴住居址2軒，土坑22基を検出した(第326図，第85表)。

1号竪穴住居址(第333図，図版41)

5号方形周溝墓南東角に重なっているが，削平されておりわずかに柱穴と炉址と思われる焼土の一部が確認されたに留まる。柱穴は5ケ所検出され，これをもとにプランを推定した。直

第85表　広野北遺跡縄文時代土坑一覧表

No.	地　区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形	断面形	備　考
1	1C−20 2C−16	0.7	0.32	0.32	変形楕円形 (ひさご形)	すり鉢形	
2	1E−21・22	0.75	0.64	0.15	円形	すり鉢形	
3	1E−23	1.45	0.92	0.41	楕円形	すり鉢形	
4	1F−3	0.4	0.39	0.21	円形	すり鉢形	
5	1F−8・9	0.81	0.83	0.17	円形	円筒形	浅い
6	1F−9	1.18	0.94	0.25	円形	すり鉢形	
7	1F−9	0.62	0.53	0.29	楕円形	すり鉢形	
8	1F−11・16	1.92	1.3	0.6	楕円形	すり鉢形	
9	1F−25	1.4	0.87	0.13	変形楕円形 (ひさご形)	すり鉢形	浅い
10	2F−1	1.45	1.05	0.57	楕円形 (角丸方形)	すり鉢形	
11	2F−11	1.4	1.14	0.16	楕円形	すり鉢形	浅い
12	4F−14・19	1.93	0.94	0.14	変形楕円形 (くも形)	すり鉢形	浅い
13	1G−1	3.24	2.36	0.57	変形楕円形 (くも形)	すり鉢形	
14	4H−8	2.07	1.07	0.61	変形楕円形 (くも形)	すり鉢形	
15	4H−9	1.94	0.58	0.48	変形楕円形 (くも形)	円筒形	底はややくぼむ
16	1I−24	1.87	1.15	0.87	楕円形	円筒形	
17	2I−1・6	0.7	0.38	0.75	楕円形	円筒形	
18	2I−1・6	0.5	0.29	0.21	楕円形	すり鉢形	
19	1K−4・9	1.55	1.25	0.53	楕円形	すり鉢形	
20	2K−4・5	1.53	1.18	0.17	変形楕円形	すり鉢形	

径約4.5mの円形を呈していたと思われる。遺物は伴出しておらず正確な時期は不明であるが，周囲の遺物出土状態から2号竪穴住居址と同じく中期末に属すると考えられる。

2号竪穴住居址（第327図，図版41）

1D区から2D区にかけて位置するが，かなり削平されており明確なプランを確認することはできなかった。南北，東西共に5.58mの円形を呈す。幅33～55cm，深さ15cmの周溝がめぐり，その内壁に直径22～40cm，深さ65～75cm程度の柱穴が4ケ所検出された。このうち，南側2ケ所は1回柱を建て直している。また明確な床面を検出することはできなかったが，ほぼ土器片のレベル等から推定することができた。中央部に南北1.7m，東西0.94mの炉址を検出したが，削平により炉中央部に直径25cmの焼けた礫と焼土層を留めるにすぎない。遺物は，土器の小破片を多数検出した。これらの遺物から，本遺構は縄文中期末に属すると思われる。

土　　坑

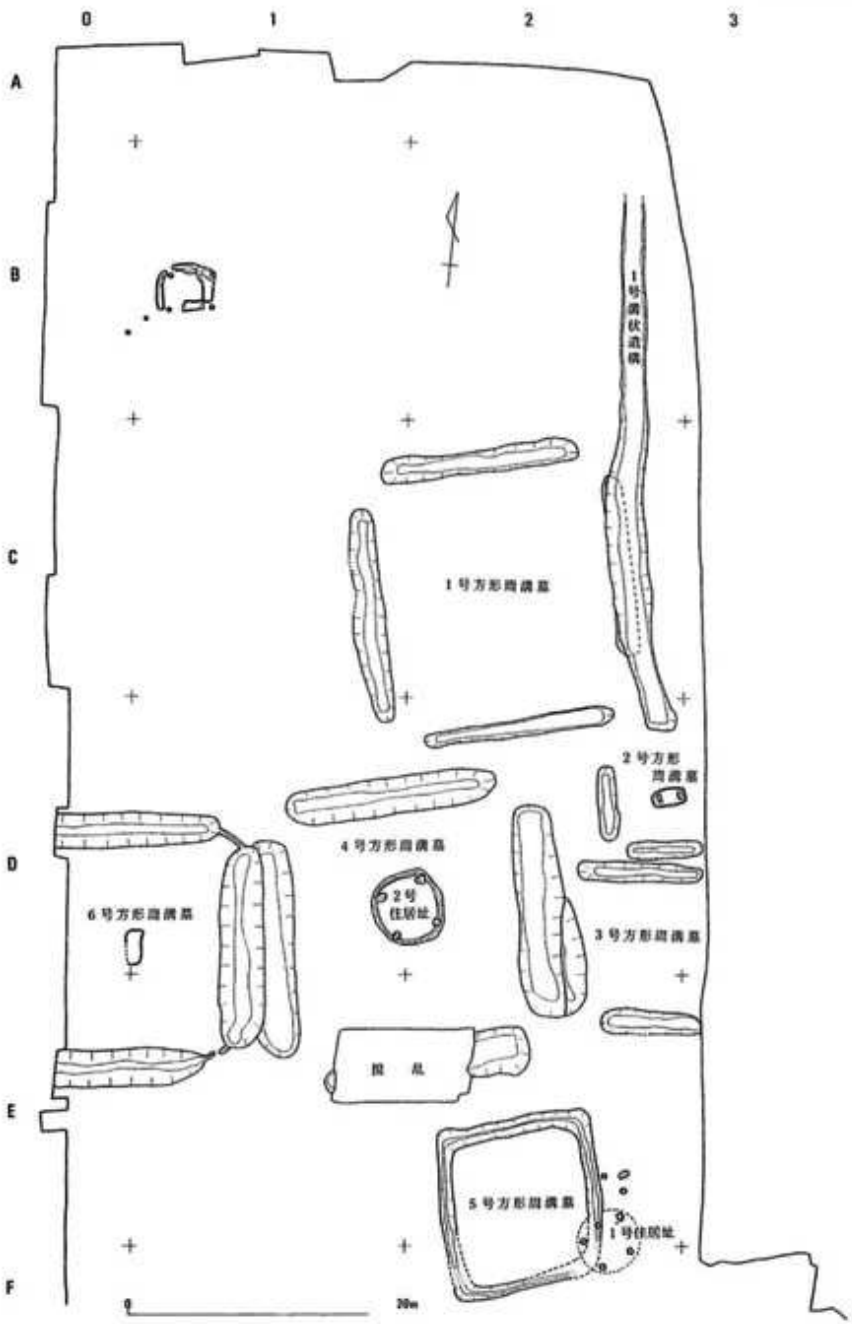
1E・2E区の南端から1F・2F区及び1G区の北端にかけてと，1I・2I区，1K・2K区で検出されている。また，1C・2C区の境界付近，4F・4H区でも計5基の土坑を検出している。平面形が楕円形ないしは円形にちかい形状を呈するものが多い。断面形は，ほぼ垂直に壁が落ちこみ底部が平坦なものと，すり鉢状のものとに大別できる。覆土は個々の土坑で異なるが，基本的には黒色土あるいは黒褐色土と暗茶褐色土である。ほとんどが第2層黒色土層から第3層暗褐色土層まで切り込んでいる。

2K区北東端付近の土坑で黒曜石のチップをかなり検出している。また，その周辺でも局所的に黒曜石チップが集中して検出されていることから，石器の製作址の可能性が強い。

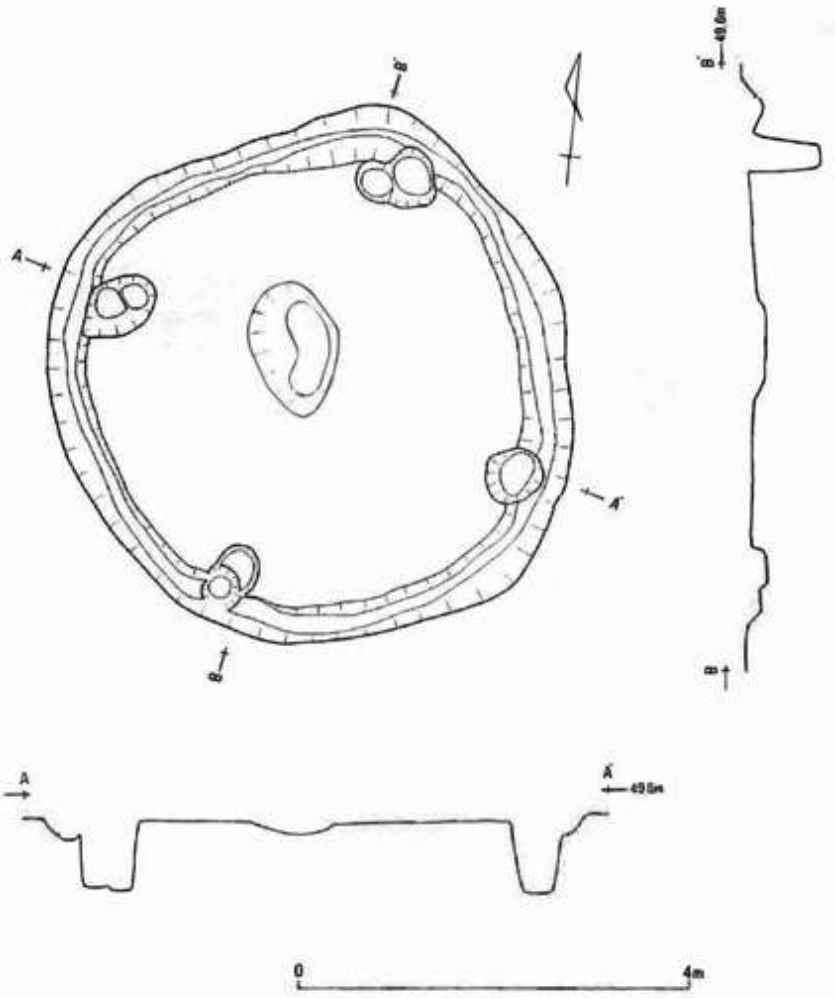
第2節　遺　　物

今回の調査で出土した遺物には縄文土器・石鏃などがあるが量的には少量である。ここでは土器についてのみ説明する（第328図）。それらの年代は縄文時代中期後半から後期前半に属するものと考えられる。

縄文時代中期の土器には縄文を地文とし幅広の沈線により縦方向に長い縄文帯を区画した曽利E式に属すると考えられる物（1～7）が多いがいずれも小片のためにその詳細については、はっきりしない。6もこの範疇に入るが，周辺の破損が人為的な打ち欠きによるものと考えられ土器片を利用した土製円板である。7は胴上部で屈曲ぎみに外に開く器形と思われる。屈曲部の上側では隆線による横方向の区画内に条線を充填しており，区画は窓枠状を呈しているものと思われる。加曽利E式の末期の土器であろう。一方同じ中期後半に属すると考えられるが加曽利E式に属さないと考えられる資料もある。8・9の土器は接合しないが同一の個体



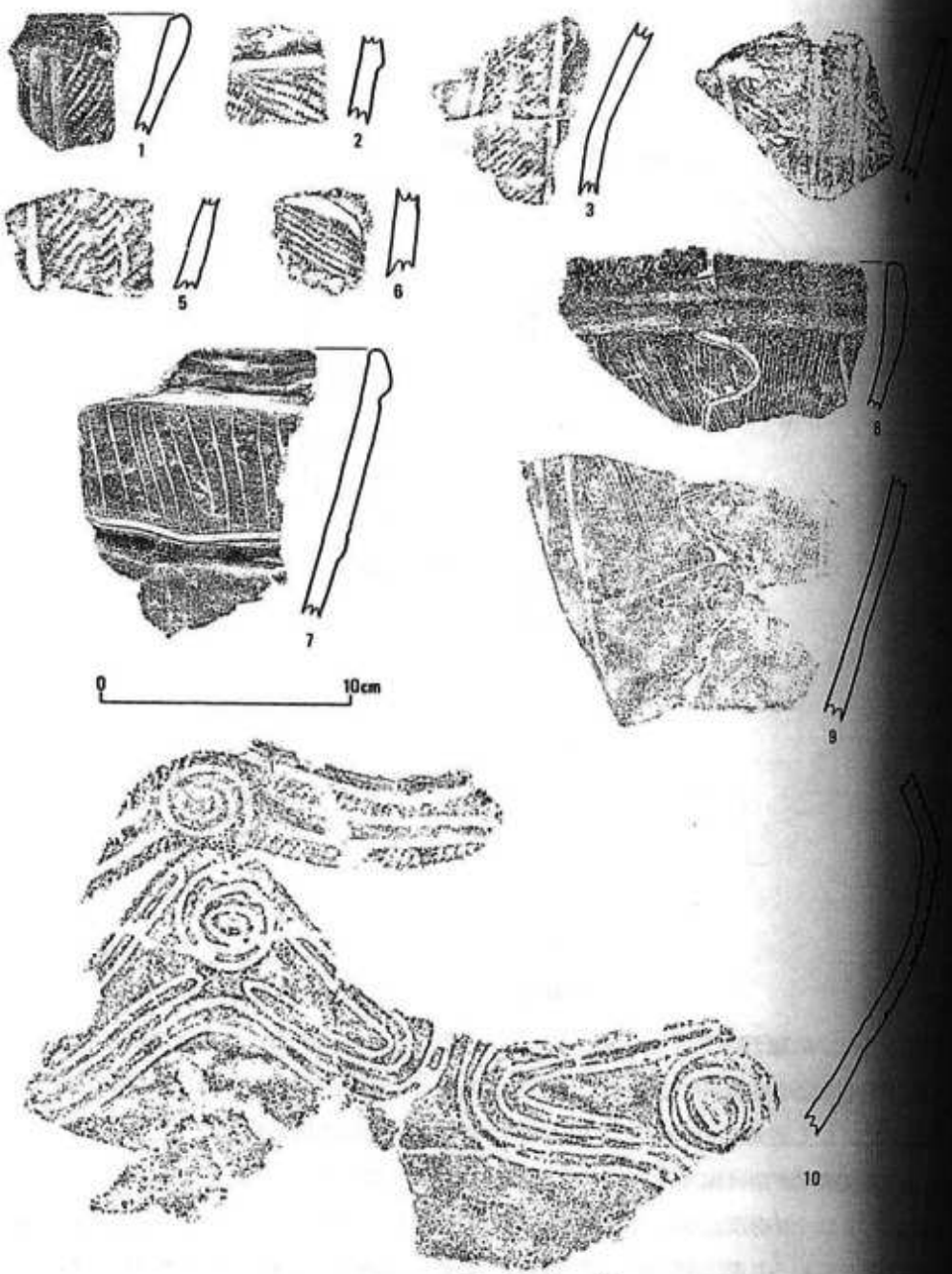
第326図　縄文・弥生時代の遺構配置図



第327図 2 号 住 居 址

考えられる。口縁部は肥厚し口縁直下には2条の幅広の沈線が描かれ，この沈線の下には全面に渡って刷毛目状の条線が施されている。文様はこの地文の上に蛇行及び直線の懸垂文が交互に描かれている。縄文時代中期後半の曽利Ⅲに属するものと思われる。

一方，縄文時代後期に属すると考えられる土器には小破片が多くまとまりを持たないが，一点についてはその器形がおおよそ窺える程度の破片が出土している。10の土器は口縁部で約¼が残存している。器形は胴上部でくびれ，おそらく四山と思われる波状口縁を持つ。口縁は逆に「く」字状に内折する。文様は細沈線によって頸部以上に描かれており，波状部に対応して2本の波状沈線による変形した三角形状に区画され，その内部は把手状の波状部に施されたS字状渦巻き文を中心とし横U字状のモチーフを施す。又，折り返しより上の部分には縄文が施されている。この土器は縄文時代後期初頭に位置づけられる土器と考えられ，同様な器形，文様構成を持った土器群は近畿地方を中心として福井県から島根県にまで分布し，中津式に共伴した例が下限とされている。



第328図　縄　文　土　器

このように今回の資料は量的にも少なく，又小破片が多い事などから成果と呼べるも[illegible]ないが，加曽利，曽利，西日本地方とそれぞれ分布を異にする土器が出土していることから遺跡の所在する地域が土器分布圏の末端近くにあり接触しあっているという地域的特色を[illegible]ていると言えよう。

第3節 小　　結

縄文時代の遺構として確認できたものは，縄文時代中期末のものと考えられる住居址2基である。ただし1号竪穴住居址は黒色土層中に住居床面を構築しているために，遺構全体を検出することが困難であった。したがって，柱穴の配列状況と2号竪穴住居址の規模とプランを参考例として1号竪穴住居址の規模を推定した。2号竪穴住居址は，床面，壁溝を黄色土層(第2層)中に構築したものであるので，その規模と床面，壁溝，炉址等を確認できた。竪穴住居址壁面に添って幅約40cmの壁溝が周り，4ケ所に柱穴，床面中央部よりやや偏って焼土が認められた。住居址規模は直径5.6mの円形である。遺物出土量は比較的少なく，住居址は2基のみということから集落址としては小規模であり，調査区外にその中心が存在する可能性が考えられる。

(山田元)

第Ⅸ章　弥生時代

第1節　遺　　構

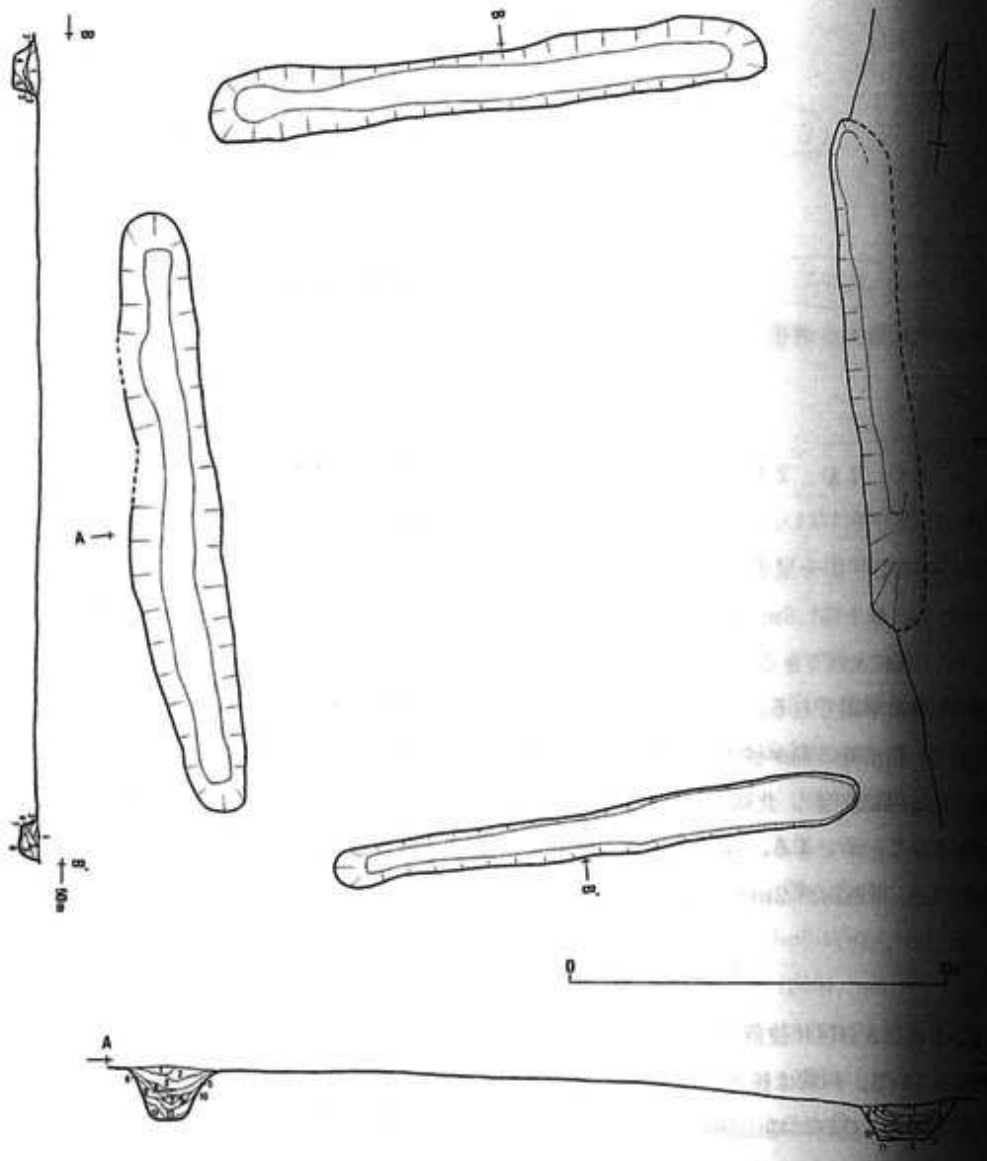
弥生時代に属する遺構は，方形周溝墓6基である(第326図)。

1号方形周溝墓(第329図,図版22)

1C，2C，1D，2Dの4区に位置している。東西南北4本の溝で構成されている。各溝の間に連結部分等はない。北溝は長さ14.2m，幅は最大1.9m，最小1.4m，深さ約0.7mを測り，底部が平坦なU字形を呈する。覆土は暗黄褐色土と黒色土に大別できる。西溝は長さ15.2m，最大幅2.3m，最小幅1.8m，深さ1.35mで底部は平坦である。覆土は，黒灰色，暗灰褐色，暗黄褐色土の三層に大別できる。南溝は長さ13.6m，最大幅1.3m，最小幅0.9m，深さ0.5mを測り，底部は同様に平坦である。覆土は，暗黄褐色土と，黒灰褐色土に区別できる。南溝は削平が進んでおり，検出時の幅が狭い。東溝は，2Bから2D区に延びる1号溝状遺構にほとんどが切られている(第326図)。北端と南端のそれぞれ一部がわずかに残存しており，ようやくその規模を窺むことができる。長さは13m，幅は他の溝から1.7m前後と推定される。南北溝の距離は約20.6m，東西約20.3mと4号方形周溝墓に次ぐ規模である。主体部は検出できなかった。

2号方形周溝墓(第330図，図版42)

2Dおよび3D区に位置する。北溝と東溝は削平により残存しない。検出された西溝と南溝は独立している。西溝は長さ5.8m，幅1.3m，深さ0.55mを測る。断面は底の平坦なU字形を呈する。覆土は，底部に地山層の暗褐色土ブロックを含む黒茶褐色土が堆積している他は，細分できるものの黒色土が全面に堆積している。南溝は長さ約5.4m，幅約1.2m，深さ0.45mを測り，西溝と同様の形状を示す。ただし，断面形については西溝より底が狭く，またすり鉢状に近いU字形となっている。覆土は，底部あるいは壁面付近での地山ブロックを含んだ土と，黒色土に分層できる。主体部と思われる掘り込みを検出した。東西2.35m，南北1.25m，深さ0.24mを測る。さらに，底部の左右両端に長さ55～60cm，幅27～35cm，深さ約20cmの掘り込みが検出された。以上から，この周溝墓は棺がすえつけ式であったことがわかる。主体部からは遺物は全く検出されていない。西溝と南溝の規模から，この遺構は東西・南北各9m前後の方形周溝墓となり方形周溝墓6基のうち最も小型であることが推定できる。遺物は検出されず時期については不明である。



1. 黒色土層
2. 暗黒黄褐色土層① 暗黄褐色土粒子を含む
3. 暗黄灰褐色土層① 黄色が強い
4. 暗黒黄褐色土層② 2層より粒子が粗
5. 暗黄灰褐色土層② 3層より明るい

南　溝

1. 黒灰色土層 黒色土に暗黄褐色土粒子混入
2. 黒灰褐色土層① 暗黄褐色土粒子を含む
3. 黒灰褐色土層② 2層より明るい
4. 暗黄灰褐色土層① 暗黄褐色土粒子を含む
5. 暗黄灰褐色土層② 4層より明るい
6. 黒灰色粘質土層 炭化物を含む
7. 黒灰褐色土層③ 2層より暗い

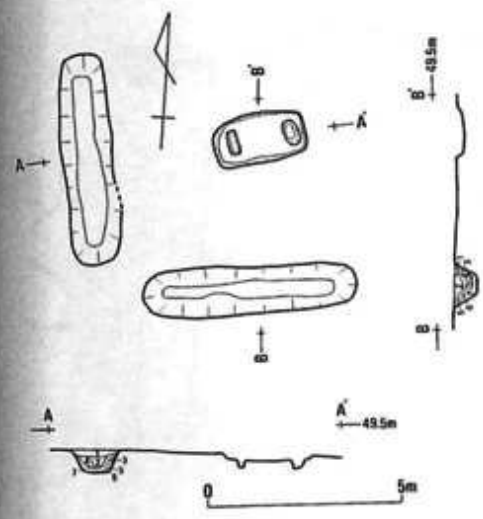
西　溝

1. 黒灰色土層①
2. 黒黄灰色土層
3. 黒灰褐色土層
4. 暗灰褐色土層①
5. 暗黄灰褐色土層①
6. 暗灰褐色土層② 4層より明るい
7. 黒灰色土層②
8. 暗黄褐色土層①
9. 暗黄灰褐色土層② 黒色土粒子、炭化物含む
10. 暗黄褐色土層② 8層より粒子が密
11. 暗黄褐色粘質土層①
12. 暗黄褐色粘質土層② やや明るい

東　溝

1. 黒色土層① 2層より黄色味を帯びる
2. 黒色土層②
3. 黒灰褐色土層①
4. 黒灰褐色土層② 3層より灰色味を帯びる
5. 黒灰色土層①
6. 暗灰色土層①
7. 暗黄灰褐色土層①
8. 暗灰色土層② 6層より黒い
9. 黒灰色土層② 5層より明るい
10. 暗黄灰褐色土層② 地山の崩壊層
11. 暗黄灰褐色土層③ 10層より粒子が粗

第329図　1号方形周溝墓



西　溝
1. 黒　色　土　層①　やや茶色味を帯びる
2. 黒　色　土　層②　最も暗い
3. 黒　色　土　層③　暗黄褐色土粒子を含む，土器片を含む
4. 黒　色　土　層④　暗黄褐色土粒子を含む，2層より明るい
5. 黒　色　土　層⑤　暗黄褐色土ブロックを含む，他の黒色土に較べ粘性強
6. 黒茶褐色土層①　暗黄褐色土ブロックを含む
7. 黒茶褐色土層②　6層より暗い

南　溝
1. 暗茶褐色土層
2. 黒　色　土　層①
3. 黒　色　土　層②　暗黄褐色土粒子を含む
4. 暗黒茶褐色土層①
5. 暗黒茶褐色土層②　4層より暗い
6. 茶　褐　色　土　層①
7. 茶　褐　色　土　層②　6層より明るい

第330図　2号方形周溝墓

3号方形周溝墓(第331図，図版42)

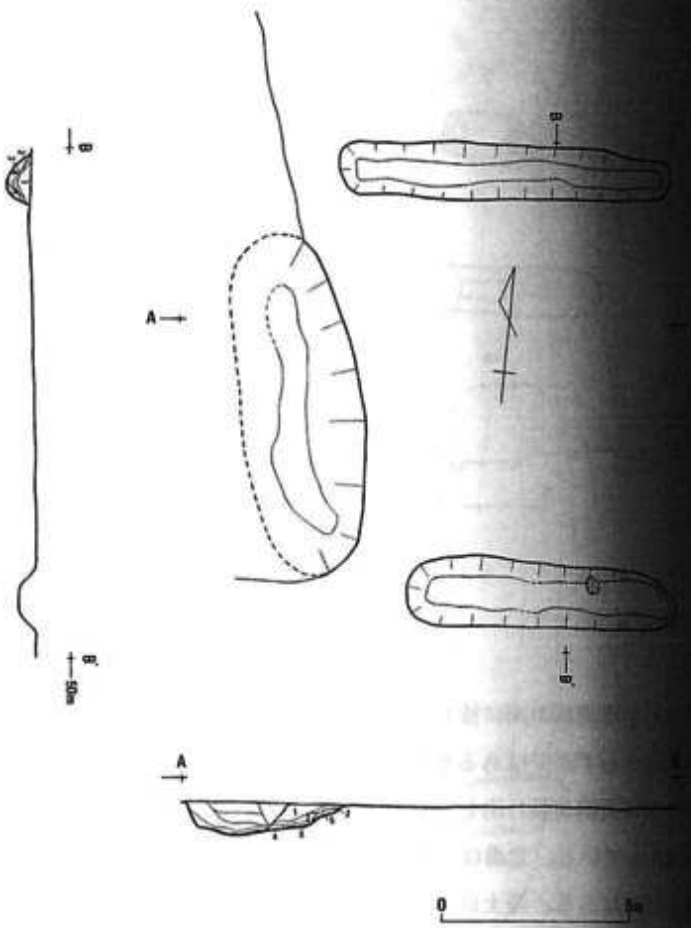
2号方形周溝墓の南に接して位置している。東溝は削平により残存しない。北溝及び南溝も東端部分がわずかではあるが欠除している。西溝は4号方形周溝墓東溝と重なっているが，わずかながら東側が張り出しており，規模を測ることができる。溝は他の方形周溝墓と同様いずれも独立している。北溝は長さ約9m，幅約1.3mで，底部はほぼ平坦である。壁面の中腹がやや張る傾向にある。覆土は，地山ブロックを含んだ土と，黒色土の二層に大別できる。西溝は長さ約8.6m，幅約2.3m程度と推定される。他の二つの溝に較べると幅が広がる傾向にある。南溝は長さ約7.3m，幅約1.6mを測る。底部は同様に平坦なU字形を呈している。覆土はやや明るいが，北溝と基本的に同様の堆積状態を示している。底部は平坦で東側壁面の傾斜が緩かで，一部にやや平坦な部分も見られる。これが北溝，南溝より幅の広い理由である。この部分はテラスのようにも見えるが，遺物の検出もなく何等かの痕跡を示すものは未検出であった。主体部は，検出されなかった。

遺物が未検出のため遺構の時期は不明であるが，4号方形周溝墓に切られていることから弥生中期末以前の遺構であろう。本方形周溝墓は，南北10.2mで5号方形周溝墓とほぼ同規模である。

4号方形周溝墓(第332図，図版42)

1D，2D，1E，2E区に位置する。西溝は6号方形周溝墓の東溝に半分切られ，東溝は3号方形周溝墓の西溝を切り込んでいる。また，南溝は，およそ⅔が撹乱を受けている。また他の周溝と同様，各溝は独立して四隅は切れている。北溝は長さ15.2m，幅は約2.6m，深さ約1.5mを測る。底部は平坦で壁面中腹がやや張っている。覆土は底部に黒黄褐色土，その上に黒

色土が堆積している。西溝は長さ15.6m，幅約3.4m(推定)，深さ1.05mで底部はやはり平坦である。覆土は暗黄褐色土および暗褐色土に大別できる。南溝は長さ15m，残存部の幅3.3mを測り，底から壷を検出した。東溝は長さ15.3m，幅約3.3m，深さ0.85mを測る。底部は他の溝同様平坦である。南側半分は3号方形周溝墓西溝と重なり，切りこんでいる。覆土は黒色土である。4条の溝以外に主体部等他の施設は残存していない。南北22.2m，東西23.2m(推定)と6基の方形周溝墓中最大である。時期は，遺物から弥生中期の最終末頃と思われる。



北　溝
1. 黒　色　土　層①
2. 黒　色　土　層②　1層より明るい
3. 黒　色　土　層③　1・2層より粘性強
4. 暗茶褐色土層①
5. 暗茶褐色土層②　4層より粘性強

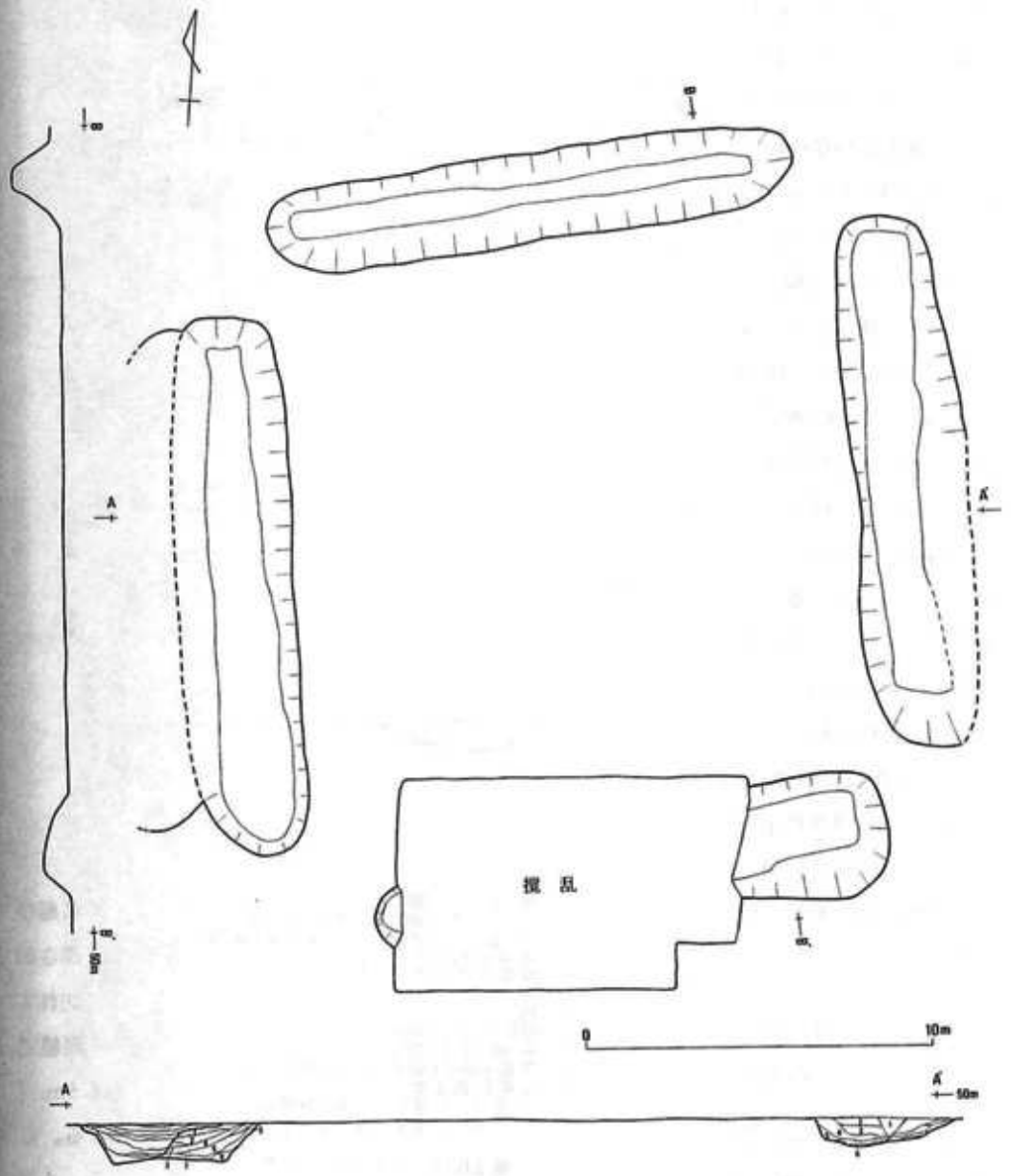
西　溝
1. 暗黒茶褐色土層①
2. 茶　褐　色　土　層①
3. 暗黒茶褐色土層②　1層よりやや暗い
4. 暗茶褐色土層
5. 茶　褐　色　土　層②　2層より明るい
6. 茶　褐　色　土　層③　暗黄褐色土ブロックを含む

第331図　3号方形周溝墓

5号方形周溝墓

（第333図，図版43）

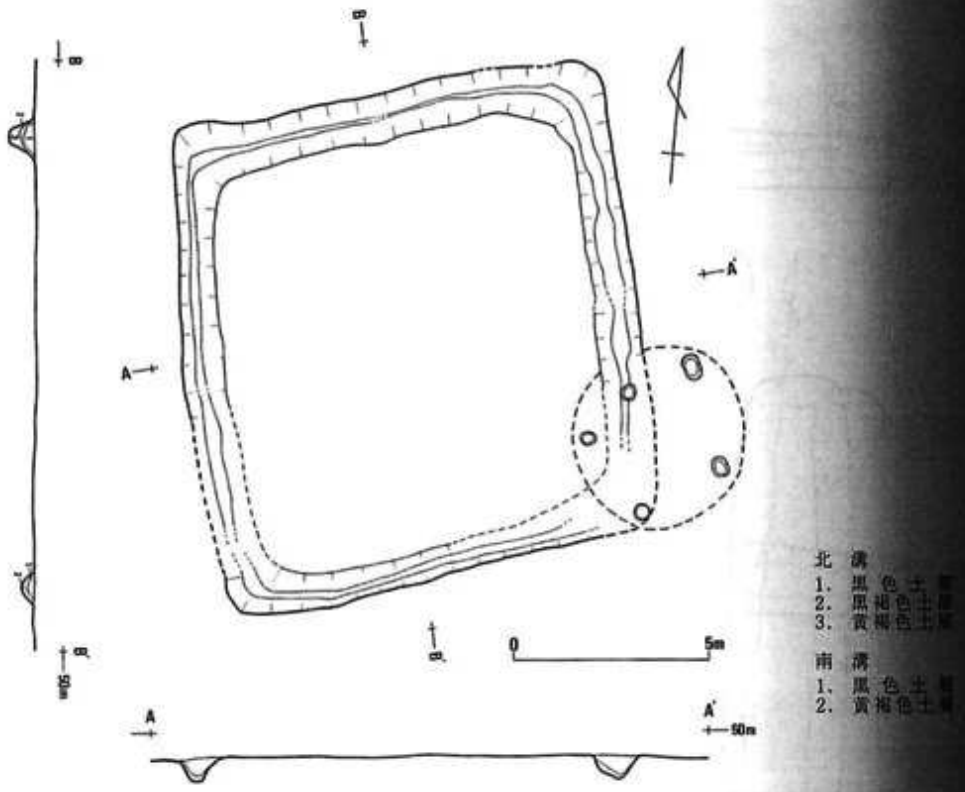
2Eおよび2F区に位置している。南西隅付近および南東隅が削平されてはいるが，この遺構のみ四隅に溝が周り完全な方形となっている。しかし他と同様残存状態はあまり良好ではない。南北約12.2m，東西約11.6m，幅は最大[illegible]m，最小0.7mを測る。コーナーはやや広がる傾向がある。溝の底は狭く平坦な部分も見られるが，ほとんどが丸く掘りこまれており他の周溝とは異なっている。覆土は最下層に地山のブロックが混入している。暗茶褐色土の上に黒色土が堆積している。深さは約0.4～0.7m。主体部は残存していない。遺物は検出されずこの周溝墓の時期を判定することはできない。本周溝墓は南北12.3m，東西10.5mを測る。



東　溝
1. 暗褐色土層①
2. 暗褐色土層②
3. 暗茶褐色土層
4. 暗黄褐色土層①
5. 暗褐色土層③
6. 黒褐色土層
7. 暗黄褐色土層②
8. 暗黄褐色土層③

西　溝
1. 黒色土層①　2・3層より明るい
2. 黒色土層②　2層に較べやや茶色味を帯びる
3. 黒色土層③
4. 黒色土層④　茶色味を帯びる
5. 黒色土層⑤　暗黄褐色土ブロックを含む
6. 暗茶褐色土層　暗黄褐色土を含む

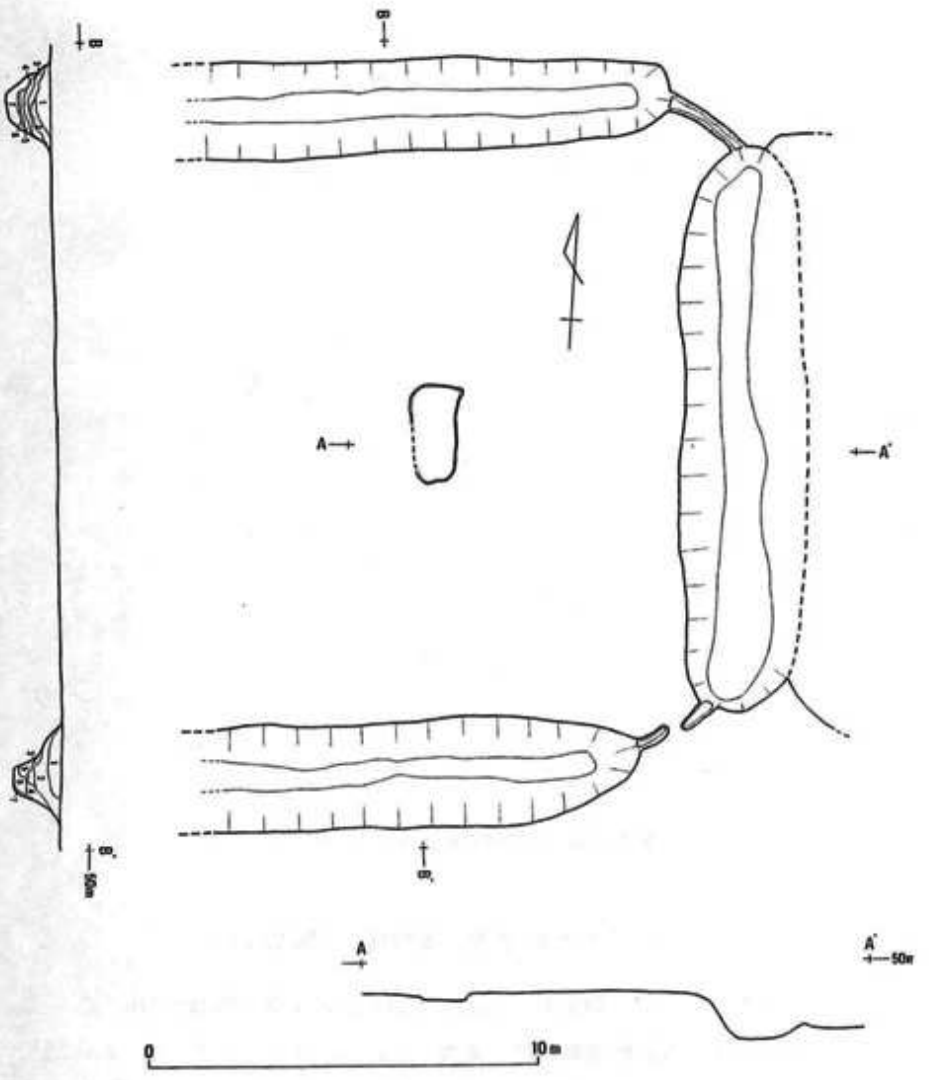
第332図　4号方形周溝墓



第333図　1号住居址・5号方形周溝墓

6号方形周溝墓(第334図，図版43)

0D，1D，0E，1E区に位置し，西溝および北溝と南溝の西端部分は発掘区域外に延びている。また東溝は4号方形周溝墓西溝と重複している。北溝と東溝とは，幅約30cm，深さ約10cmの小さな溝で連結している。同様に南溝と東溝も同規模の溝がのびているが中間で切れている。北溝は検出部分の長さ約11.9m，最大幅2.5m，最小幅2m，深さ約1mという計測値である。底の平坦なU字形を呈し，黒黄褐色土および黒色土が堆積している。東溝は長さ14.5m，最大幅約3.3m(推定)で南溝に延びる小溝は長さ0.9m，幅0.6m，深さ約0.11mほどである。この東溝は壁面上部がやや張っている。底部に暗黄褐色土，その上に黒褐色土が堆積する。1号方形周溝墓の西溝を切り込んでいる。南溝は検出部分の長さが10.9m，最大幅2.8m，最小幅2.1m，深さ1.35mで暗黄褐色土および黒褐色土が覆土となっている。また東溝ほどではないが，溝の壁面が中間当りでやや張っている。底部は他の溝と同様に平坦である。東溝へ延びている小溝は長さ0.9m，幅0.3m，深さ約0.1mである。この周溝墓からは，主体部と思われる遺構が検出された。南北2.5m，東西1.3mの長方形であるが，深さは0.09m前後と浅く，また中央部が攪乱を受けている。遺物は検出されていない。南北溝の間は19.8mを測り1号方形周溝墓とほぼ同規模とみなされる。時期は遺物が検出されていないため不明であるが，4号方形周溝



北 溝
1. 黒 色 土 層①
2. 黒 色 土 層② 1層に較べ茶色味を帯びる
3. 黒 色 土 層③ 2層より茶色味を帯びる
4. 黒 色 土 層④ 2・3層より暗い
5. 黒 色 土 層⑤ やや灰色味を帯びる
6. 黒茶褐色土層
7. 暗黄褐色土層

南 溝
1. 黒 色 土 層
2. 黒 褐 色 土 層①
3. 黒 褐 色 土 層②
4. 暗 褐 色 土 層
5. 黄 褐 色 土 層①
6. 暗黄褐色土層
7. 黄 褐 色 土 層②

第 334 図　6 号方形周溝墓

に切られていることから弥生中期最終末以前と考えられる。

1 号溝状遺構(第326図，図版22)

長さ約38m，幅は最大2.2m，最小1.5m，深さは南端部で約 1 mを測る。当初，この遺構は，1 号方形周溝墓の東溝あるいは別の周溝墓の一部と解された。しかし，北方へ40m近く延びており，さらに続く可能性もあった。北端部は浅くなり消えてしまい，どこまで続くか確認することができなかった。底部は他の溝に較べ広く，全くの平坦部分のみである。このように周溝

墓の溝とは性格を異にしている部分が見られる上に，耕作等により東側が削平されているため，この溝の性格をつきとめることはできなかった。覆土は黒灰褐色土が主体となっている。4号方形周溝墓東溝を切り込んでおり，それより新しい遺構である。（山田）

第2節　遺　　物

検出された遺物は，壺形土器6，台付甕2，高坏1，坩1である(第335図)。以上の遺物は完形のものの他，器形を推定することのできる一部分のみのものもある。この他に若干の破片も検出された。

4号方形周溝墓の溝内出土土器

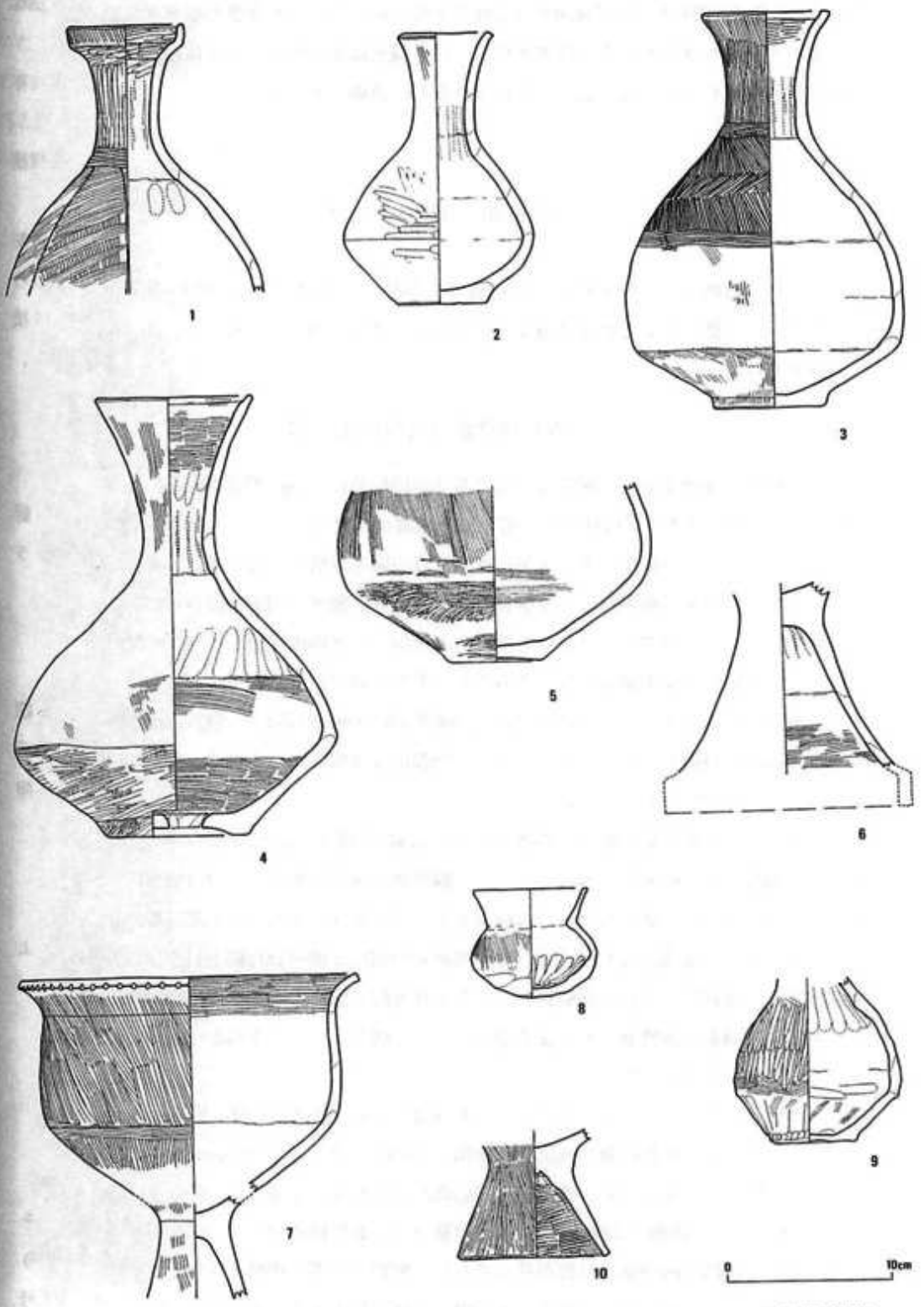
1．細頸形の壺形土器で，総高は不明であるが口縁部径7cm，頸部最小径3.4cmである。口縁部は1.2cmほど立上り受口状となっている。色調は暗褐色を呈し，胎土中には頁岩，石英粒を多く含んでいる。口縁部立上り部分には右下りの刷毛目状の文様を施し，内面にはヘラ磨き痕が見られる。頸部は縦方向にヘラ磨き痕が見られる。頸部と胴部の接点には7条の櫛描沈線文を巡らしている。胴部表面は全体を縦方向の沈線で6区画に区分し，6条単位の左下りの刷毛目が4条ないし5条単位施され，その間を右下りの刷毛目でうめている。

2．細頸形の壺形土器で，高さ16.4cm,口縁部径5.9cm，胴部最大径11.7cmである。頸部には縦方向の刷毛目痕がわずかに残っている。胴部には研磨痕が見られる。底部は中央部がわずかにへこみ，輪状を呈している。

3．細頸形の壺形土器であり，高さ23.8cm，口縁部径7.6cm，頸部最小径4.8cm，胴部最大径は17cmである。口縁部は外反している。胴部の下部で急角度でくびれ底部にいたる。この部分は作成工程の一段階にあたる。口縁部から頸部にかけて縦方向の刷毛目を施し，頸部と胴部上半部に7条の櫛描沈線を巡らし，この横線文の間に3段の斜行刷毛目を施している。胴部中央部分は，縦方向刷毛目の調整後さらに右下り方向の撫による器面調整痕が認められる。胴部下半部には刷毛目調整痕がそのまま認められる。底部は，他の土器が一般に中央部がへこむのに対し，この土器は平坦である。

4．細頸形の壺形土器で高さ26.5cm，口縁部径9.6cm，頸部最小径4.3cm，胴部最大径[illegible]cmである。口縁部は比較的強く外反し，胴部下半部のくびれ方も強い。底部は外縁が輪状を呈するように中央がへこんでいる。底部には中心部からやや偏って穿孔されており，この穿孔は成後行われている。頸部には縦方向の刷毛目が施され，胴部は研磨によって光沢を持っている。胴部下半部には縦方向の刷毛目痕が残っており，胴部上半部の研磨に比較して疎略である。

5．胴部から底部にかけての破片であるので全体を想定することは難しいが，胴部，[illegible]形態から細頸形の壺形土器と考えられる。胴部最大径19.3cm，底部径5.6cmであり，[illegible]



第 335 図 弥生式土器（1～7：4 号方形周溝墓，8：5 号方形周溝墓，9：6 号方形周溝墓，10：1 号方形周溝墓）

央部に向かってへこんでいる。胴部上半部には縦方向の刷毛目が見られ，下半部にはヘラ状の調整痕が見られる。胎土中には石英粒を多く含んでいる。

6．高坏の脚部と考えられるが，表面の風化が著しく脚部末端が欠損しているので詳細は不明である。

以上6点の土器の年代については同一時期のものと考え，1の受口状口縁部の形態，文様構成，2の文様構成等から弥生時代中期末と判断した。

7．台付甕形土器。胴部下半部と台部下端が欠損しているので総高は不明であるが，口縁部径20cm，胴部最大径18.2cm，台部最小径4.2cmである。口唇部にはヘラによると思われる刻目が，全面に右下り方向の刷毛目が，胴部くびれ部分(製作の一段階の部分にあたる)には縦方向の刷毛目が施されている。口縁部内面には横方向の刷毛目が施されている。焼成は悪く，胎土中に石英粒，頁岩粒が多く含まれている。

5号方形周溝墓出土土器

8．坩。高さ6.6cm，口縁部径6.6cm，頸部最小径5.4cm，胴部最大径7.7cmである。口縁部は横方向に「撫」により調整し，胴部には刷毛目が見られ，胴下部から底部にかけてはヘラ削りで整形している。内面の底部から胴部にかけては，下から撫上げて整えている。

6号方形周溝墓出土土器

9．頸部より上半を欠損しているので全体の形態は不明であるが，残存している部分から長頸形の壺形土器と考えられる。残存高9.8cm，胴部最大径9.5cm，底部径5.3cmである。胴部は刷毛目が一部残っているが全体的にはヘラ状工具により研磨されている。底部は指による押えによって形状を整えている。

1号溝状遺構出土土器

10．台付甕形土器の台部のみである。器面表面は刷毛地により調整し，内面は板状工具により整形されている。

第3節　小　　結

弥生時代の遺構として方形周溝墓6基，性格不明の溝状遺構1条を確認した。4号周溝墓，6号周溝墓については出土土器から弥生時代中期末と考えた。なお，2号，3号についてもその形態等から4号，6号と同時期のものと考えたい。5号周溝墓は形態，出土土器より，やや後出のものと考えた。方形周溝墓は東方への緩斜面にあり，より低位置に小規模な2号，3号が位置し，高所に4号，6号の大規模なものが位置している。このことは墓域の設定と密接

における個々の墳墓の占地等に共同体内の政治的関係が具現しているのであろうと考えられる。また5号方形周溝墓の周溝のみが連続して周っている点が他のものと異り，この周溝墓は全体の中ではより後出のものである可能性があり，出土土器の特徴とも一致する。これら方形周溝墓と関わる集落址の位置等については今後の調査に待ちたい。（堀田）

第X章　古墳時代

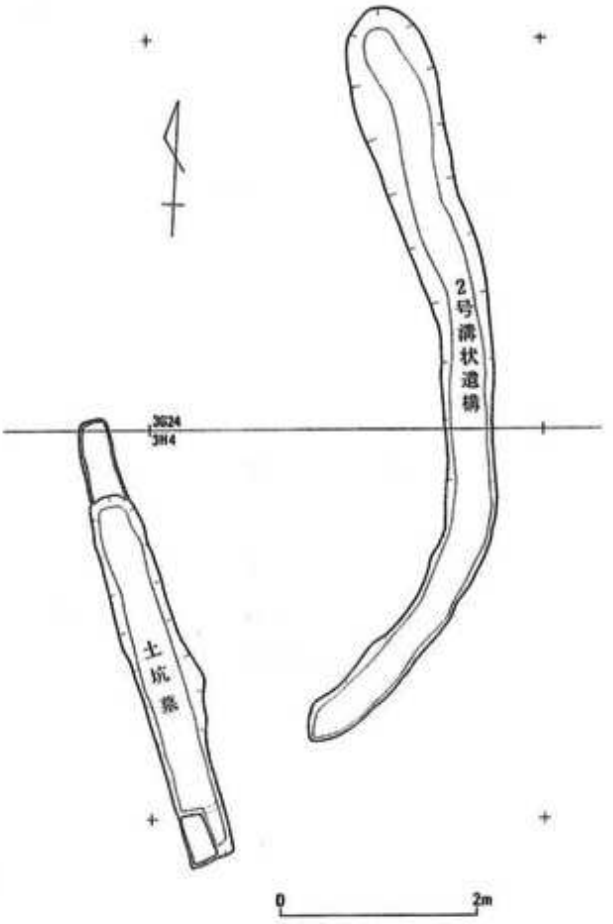
第1節　遺　　構

古墳時代の遺構は，土壙墓1基である。

土　壙　墓(第336図，図版43)

3H区に位置し，ほぼ南北の方向に主軸を向けているがやや磁北より西に傾いている。長さ4.66m，最大幅0.68m,最小幅0.35m。南北両端は浅く段ちがいになっている。底部は平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。この他に大きな特徴は見られないものの，埋葬方法は直接埋葬した木棺直葬の形態をとっていたと思われる。

遺物はほぼ中央から検出された。須恵器の坏蓋3，坏身2，高坏1，平瓶1，他に坏蓋の破片1個体相当がその内訳である。土器以外については未検出である。これらの遺物は，坏蓋2，平瓶を除き破片で検出された。また，底面からかなり浮いた状態ですべて散乱していた。このように，後世になって大きく手が加わり埋葬状況を知ることはできない。伴出遺物から遺構の時期は7世紀後半と思われる。(山田元)

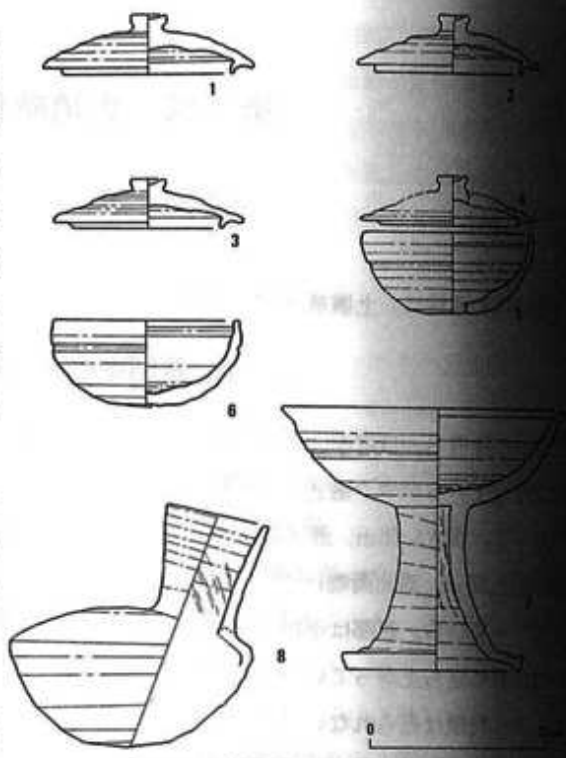


第336図　土壙墓と2号溝状遺構

第2節　遺　　物

土壙墓内より一括検出された須恵器のみである。内訳は，坏蓋3，坏身2，高坏1，平瓶1の他に坏蓋の破片1個体分である(第337図)。なおこの他に共伴遺物は検出されていない。

1～4，坏蓋。口径10.9cm～9.8cm，器高3.1cm～2.6cm。天井部は回転削りで調整し，他は回転横撫調整をしている。つまみは頂部がへこみ，身受けの部分の返り部分は短く外反し，口縁部よりわずかに下に突出している。つまみと返りはともに貼付けのようである。胎土は緻密であり，焼成は良好で色は灰白色である。以下2，3，4とも全く同じ特徴をもっている。ただし，3は約½が欠損しており，4はつまみと口縁部の小破片であるので1，2に模して図上復原をした。また1は他のものと比較して口径，器高ともに大きいのが目立つ。



第337図　古墳時代の土壙墓出土土器

5・6，坏身。口径9.8cm，器高4.2cm，4.4cmである。底部は丸底状に作られ，全体的には半球形に近く比較的深みのある作りである。口縁部の内面，外面にそれぞれ一本の沈線を施している。製作技法上の特徴としては，底部外面では回転削り整形をし，他は回転横撫調整をしている。胎土は緻密で，色調は灰白色をし焼成は良好である。また，5，6とも大部分を欠損しており全体の形態は図上で復原した。

7，高坏。口径16.0cm，器高13.5cm，脚部最上部径4.1cm，脚部最小径3.6cm，脚部最大径10.1cmである。外反する脚部とやや扁平な半球形をした坏部とからなり，口縁部は外反しているが内面は内傾する端面を持っている。坏部中央の外面には一本の沈線が施されている。脚部の端部は断面が三角形を呈し，0.9cmの端面を形作っている。製作技法上の特徴としては，坏部下半部に回転削り整形の跡が見られ，他は回転横撫調整が行われている。胎土は緻密で，色調は灰白色を呈し，焼成はやや軟質である。

8，平瓶。口径5.4cm，器高13.0cm，胴最大径12.5cm，頸部高5.5cmである。頸部は単純に逆八字形に開き，胴部はやや扁平で，胴部上半部に稜線をもって屈曲している。製作技法上の特徴は，胴部下半部に回転削り整形の痕跡があり，他は回転横撫調整が行われている。胴部上半部には緑色灰釉が認められる。胎土は緻密であり，色調は青灰色を呈し，焼成はより良好である。他の須恵器とあるいは供給源が異るとも外見できる。

以上8点の須恵器は，特異な墳墓と考えられる土壙墓に同時に副葬されたものと思われる。これらの須恵器の推定年代は器形の特徴等から7世紀後半の初めと考えられる。性格については次節で述べることとする。

第3節 小　　結

古墳時代の遺構・遺物の年代については，須恵器の特徴から7世紀後半のものと考えられる。唯一確認検出した古墳時代の方形土壙は幅約0.7m，長さ4.66m，確認面よりの深さ約0.35mであり，形態，規模，遺物(須恵器)の出土状況等より，これは特殊な墳墓と考えられる。当地域では，この墳墓の築造時期には横穴式石室墳の群集するのが通例である。しかし，この土壙は唯一単独で存在し，土壙内に板壁等の存在を考えさせる痕跡も検出されていない。土壙の深さも浅い。このようなことから，方形木棺を直葬した非常に簡略化された墳墓と考えられる。以上から，この墳墓は非常に特殊な状況下において(例えば被葬者と共同体内における特異な関係の発生，あるいは被葬者の突発的な特異な死因など)行われた送葬のためのものであったとも考えられる。なお先述した通りこの墳墓の年代は7世紀後半としたが，さらに時期を限定すれば7世紀第3四半期を想定できないであろうか。なお，土壙墓の東に隣接する2号溝状遺構については，伴出遺物がなく，帰属時期・性格とも不明である。　　(堀田)

第XI章　年　代　測　定

第1節　礫群伴出炭化物の ^{14}C 年代

1. はしがき

放射性炭素 ^{14}C による年代決定は，古代遺跡と共に地中に埋没した炭素の中に含まれる微量の ^{14}C 原子の数を測定することによって行われる。現代の標準炭素1グラム中に既知量の N_0 個の ^{14}C 原子が存在し，古代遺物中の炭素1グラムの中にN個の ^{14}C 原子が存在することが判明したとすれば，遺物が地中に埋没してから現在までに経過した時間tは次式で与えられる。

$$t = (\ ^{14}C\text{の平均寿命}) \times \log e \frac{N_0}{N}$$

eは自然対数の底で，2.718282……という無理数である。

このようにして得られた ^{14}C 年代が正しい結果を与えるかどうかを知るには年数のはっきりしている試料を測ってみれば一目瞭然である。現在では年輪の確実な古い大木について今から7,000年程度以前の年代まで ^{14}C 年代と年輪年代との比較がなされている（Rolph et al 1973; Michael et al 1974)。それを見ると，^{14}C 年代と年輪年代はほぼ一致しているが，近世において最大200年程度，縄文前期・早期において最大700年程度のずれがあるので，厳密な絶対年代を知りたいときは年輪年代で比較補正する必要があることがわかる。しかしこのことは ^{14}C 年代が正しくないということではなく，今から7,000年前までなら ^{14}C 年代がわかればほぼ完全に絶対年代がわかるということを意味するものである。7,000年より以前については，細かな値はわからないが ^{14}C 年代をほぼ絶対年代の近似値と見てよいということでもある。

^{14}C の半減期を5,568年とおくと，^{14}C の平均寿命は8,033年という数になる。国際的約束ではこの値がずっと用いられている。近年では，^{14}C の半減期は5,730±30年が最も確からしいとされているが，混乱を起さないために ^{14}C 年代の表記のときには5,568年が将来も用いられ続けるであろう。

2. 測　定　結　果

KSU－671　第3礫群（3R3）　$22,300^{+800}_{-700}$　B.P.

木炭，炭素量2.13g，測定時間2000分，AT火山灰直上。

KSU－672　第5礫群（3R5）　$22,100^{+800}_{-700}$　B.P.

木炭，炭素量1.85g，測定時間2000分，ＡＴ火山灰直上。測定結果としては上記の
Ｕ－671と誤差範囲で一致する。

ＫＳＵ－673　第８礫群（３Ｒ８）　$25,300^{+3,500}_{-2,000}$　Ｂ．Ｐ．

木炭，炭素量0.728g，測定時間2000分。ＡＴ火山灰の下。

尚，Ｂ．Ｐ．はBefore Presentの略で，ＡＤ1950年を０とする。誤差は１標準偏差（１シグマ）の統計誤差のみを取っている。１シグマの中に真の値が含まれる確率は68％であり，２シグマを取ると95％の確率になる。

３．　結果の考察

ＡＴ火山灰をはさむ石器時代の遺跡の^{14}C年代が確定されるようである。これと並んで，静岡県蒜山高原において岡山理科大，京大，京都産業大の協同で調査された石器時代の遺跡の炭がＡＴ直下で

ＫＳＵ－612　23,400±500　Ｂ．Ｐ．

として得られている（山田他1984）。これらからＡＴ火山灰の降下年代は22,000Ｂ．Ｐ．頃し23,000Ｂ．Ｐ．頃と考えられる。

石器時代の編年のために広野北遺跡の調査の結果は役立つことが多いであろう。今後の発掘の成果を期待する。

（山田治，小[illegible]）

第２節　礫群構成礫による熱ルミネッセンス年代

今回，広野北遺跡の第2b層中位，第2b層下位および第３層下位の礫群の中の砂岩と花崗岩質のものについて，熱ルミネッセンス法による年代測定を行った。このうち，花崗岩質の焼石については石英粒子の抽出が困難で測定することが出来なかったので，砂岩についてのみ結果を報告する。測定された試料は第86表に示されているように，第2b層中位で２点，第2b層下位で２点，第３層で３点の計７点である。

表における蓄積線量は焼石中の石英粒子が焼かれた時から現在まで地中で受けてきた放射線の量である。蓄積線量を測定するためには，まず焼石の表面を２mmの厚さはく離した後これを粉砕し，得られた粉末を篩分け，電磁分離機による鉱物分離，フッ化水素酸による酸処理によって直径約0.1mm程度の石英粒子を取り出した。この石英粒子を試料として，熱蛍光測定装置によって熱発光曲線を記録し，その発光強度から試料の蓄積線量を算出した。熱発光強度を蓄積線量に換算するための校正にはコバルト－60のガンマ線が使用された。

第86表　焼石のＴＬ年代

試　　料	蓄積線量（ラド）	ベータ線量（ラド）	ガンマ線量（ラド）	年間線量（ラド）	ＴＬ年代（B.P.）
1. 1 G 3 ・ B68(2R41)	5,680	0.17	0.15	0.32	17,750
2. 1 G 3 ・ B63(2R41)	5,970	0.18	0.15	0.33	18,090
3. 3 H13 ・ B33(2R37)	7,300	0.17	0.15	0.32	22,810
4. 3 H13 ・ B88(2R37)	7,650	0.17	0.15	0.32	23,910
5. 3 F25 ・ B72(3R11)	9,780	0.18	0.15	0.33	29,640
6. 3 F 1 ・ B979(3 R3)	8,590	0.17	0.15	0.32	26,840
7. 3 F 1 ・ B1267(3R3)	7,700	0.16	0.15	0.31	24,840

1，2は尖頭器文化段階に，3，4は第2b層のナイフ形石器文化段階に，5～7は第3層のナイフ形石器文化段階に属する。

表中のベータ線量とガンマ線量の測定には，$CaSO_4$：Tmの熱ルミネッセンス線量計が使用された。ベータ線量は焼石を紛砕した時得られた300メッシュ以下の紛末をベータ線源として，$CaSO_4$：Tmによって測定した。ガンマ線は遺跡の文化層中に$CaSO_4$：Tmを封入した銅のパイプを押込んで測定した。こうして求めたガンマ線量とベータ線量を加えたものが，試料が一年間当り受けてきた放射線の量(年間線量)である。

この年間線量で前述の蓄積線量を割ったものが熱ルミネッセンス年代で，表の最後の欄に示されている。

（市川）

第XII章　結　　語

広野北遺跡では石器約10,500点礫約18,000点合計約28,500点の遺物が発見された。このうちの分析対象は中央区約6000㎡から出土した石器8,394点礫9,929点であった。また，中央区内で確認・設定された遺構は合計石器ブロック48，礫群66，配石111，土坑９であった。これらは二つの異なる層準から検出されており，さらに石器の形態研究を通して六つの異なる文化段階に区分された。それらは古い順に第３層ナイフ形石器文化(Ｋ３)，第2b層ナイフ形石器文化第Ⅰ期～第Ⅲ期(Ｋ２第Ⅰ期・Ｋ２第Ⅱ期・Ｋ２第Ⅲ期)，尖頭器文化(Ｐ)，細石刃文化(M)である。各文化段階に属する遺構・遺物の分析は基本的に集落構造・景観の復原に収斂するが，他方では個々の機能復原を目的とした分析もある。以下，本報告書で行った各種の分析中，特に大きな意味を持つと考えられる礫群，配石，土坑，水洗選別結果のまとめを行い，次に集落構造・景観の変遷を見てみたい。

第１節　礫　　群

ここでいう礫群とは，焼け礫を中心とした礫の群集である。本報告では，用途の推論，集落景観の復原の二つを目標に分析を行った。用途論は，使用対象，過程，効果，役割といった内容を含むが，ここでは実資料の考古学的な分析から直接推論ができる使用過程を主眼に分析を進めた。まず，礫群相互の相違点と共通点の把握につとめた。相違点では，使用過程復原にかかる属性の中から，特に平均重量と礫数に着目し，**多重型・少重型・多軽型・少軽型**の４種に分類した。そして他の属性との対応関係を見た。Ｋ２文化や尖頭器文化では，多重型・少重型が完形度の大きい礫が多く，接合率が高く，平面分布の集中度が高いものが多い。少軽型はこの逆で，多軽型は両者の中間的な性格を持っていた。Ｋ３文化では，接合率・平面分布でＫ２文化に似るが，完形度・完形礫重量は異なる。完形度では，多重型に小さい礫が多いものが多く，少軽型に大きい礫が多いものが多い点である。完形礫重量ではＫ３文化の少軽型は軽いものばかりである。

一方共通点では，焼け礫が大半を占めるにもかかわらず構成礫に非焼け要素が多く見られることがまず挙げられる。非焼け礫を必ず含むこと，非焼け割れ面を持つ礫が大半を占めること，接合個体のほとんどが非焼けの割れ面同志の接合であることなどである。これは，一度割れた礫は二度と焼かなかったことを意味すると考えられる。さらに一度しか焼かなかったと考えることも可能である。また接合個体は完全に復原されることは稀であり，接合しない割れ礫も含

めこれに接合する大量の欠落礫の存在が推定される。現存する礫群の姿は，欠落礫の在り方が大きく影響されているものと考えるべきである。さらに接合関係は礫群間にあることは稀で，非常に孤立的である。大量の欠落礫は，本遺跡の外に存在していると考えねばならない。この他，接合関係や礫の分布状況から礫の拡散・集中・分離といった動きが推定できた。使用過程復原に当っては，この共通点の解釈を中心に置く必要がある。推定した使用過程は以下のごとくである。

礫採集→遺跡に持ち込み焼く。あるいは礫採集地，両者以外の場所で焼く→対象に対しかけた礫を覆う・詰める・混合する。その際，重量・完形度・接合率に関する偏りがそれぞれに為を受けた礫の群集間で生じる場合がある→対象とともに他遺跡・礫採集地・両者以外のいずれかに移動する。その際，礫は分割され欠落礫が生じる。前作業で生じた偏りがそのまで分割された場合選択的分割行為，偏りがない場合平等分割行為と呼ぶ。両者は結果的に出現するものである→対象と礫を分ける。この際，礫の分散・集中・分離が起きる。なお，この目の段階でも起こり得る→対象を食べ，礫群を放置する。この後，石器が礫群に重なるように分布するようになる場合もある。ブロック形成の初期に形成されたものもあったと思われる。使用回数については，非焼け要素から一度割れた礫は二度と焼かれないが，一度に焼く個数が少なく見積れば回数も増加する。礫群に何度もくりかえされた集積行為があれば回数を多くしなければならない。しかし，接合関係が混然一体であることや接合距離の在り方，礫の集中箇所が1ケ所であること，分類したような礫群の違いが出現してくることなど，何度もくりかえされる集積行為には否定的な材料が多い。多量の礫を一度だけ焼き使用したと考えた方が妥当と考える。

多くの礫を焼き使用する点，複数の人間が同時に食事をするための料理法であることは容易に考えられることである。さらに，毎日の食事を全てまかなったものではなく，ある特別の意味を荷った非日常的なものであることもありうる。祭祀的な意味合いもさることながら，集落構成員の紐帯の強化をねらったものと考える。この料理法が社会全体に認められ定着する背景には，対象がおいしく料理できるとか多少長持ちする程度の効果が着目されたのではなく，一度に多量の料理ができる点が着目されたのだと考えたい。

次に集落景観の復原であるが，これを考える場合，構成要素相互のつながりの有無・強弱を検討しなければならない。礫群の場合接合関係があまりないので距離関係を重視した。礫群は互いに近接し礫群群を形成しているものが大半を占める。その内部では似た特徴のものが，礫群群間では違いが目立つ。その違いは，礫群使用過程の微妙な違いによるものと思われ，人間集団の違い，社会的な役割の違い，時期の違い等を反映しているものと思われる。それゆえ，礫群群はユニットの名称を与え得る単位である。しかし，内部では全てが同時に存在し機能していたとは考えられず，長短の時間差を持つものと思われる。礫群は一つの人間集団の存在のあかしと思われるが，1戸の家に対応するとは限らない。礫群さらに礫群群のある場は集落構成員の共同の場と考えた方が妥当であろう。

礫群はＫ３・Ｋ２の各石器群に伴うが，それぞれの文化の礫群には若干の違いが認められる。Ｋ３文化では，他にはない大規模な礫群がある。また，構成礫も1,000g以上の重量の礫をいくつも含むものがかなりある。礫群間でかなり頻繁な接合関係を持つものもある。もっとも，これについては巨大礫群が遺跡内で分割されたと見るべきである。遺構内では，礫群群主体のもの，配石群主体のもの，多数の配石と礫群が合体したもの，配石と礫群が多数混在するもの等さまざまである。Ｋ２文化第Ⅰ・Ⅱ期では小規模礫群が増加する。1,000g以上の構成礫は稀である。接合関係も孤立的なものばかりである。遺構群も，配石と礫群が多数混在するものが主体であり，配石群もあるが小規模である。Ｋ２文化第Ⅲ期も同様な状況であるが，遺構群では，配石・土壙・礫群が１ないし２基ずつ近接して一つの単位を成しているもの，第Ⅰ・Ⅱ期ほどではないが配石と礫群がやや近接している部分がある。しかし，第Ⅰ・Ⅱ期のように大規模なまとまりではない。なお，両面加工尖頭器を主体としたより新しい文化や細石刃文化には礫群は見られない。すなわち，新しい文化になるほど礫群自身さらに群としても規模の縮小，さらには消失という現象が認められる。礫群の内容に大差はないので，使用過程に若干の違いがあったかもしれないが用途自体が変化したとは思われない。むしろその背景の変化，すなわち人間集団の小規模化，対象の少量化，回帰の少数化，人間集団の紐帯の弱化，紐帯強化の必要性の弱化などが考えられるものと思われる。

第２節　配　　石

ここでいう配石とは，1,000g以上の礫で礫群構成礫と混然一体とはなっていないものである。礫群やその集中部の縁部に位置するもの，ブロック内にあるもの，単独のもの，複数のものなどさまざまである。しかし，重量や形などの属性で分類することはできない。おそらく，礫採集地にある1,000g以上の礫を自由に採集してきたものと思われる。また非焼け礫が多く，接合関係を持つものが少ない。使用するにあたって火と直接関わることは少なく，また強い力が加わるような使われ方もあまりされなかったものと思われる。特に礫群に近接して位置するものが多く，礫群の使用過程で何等かの役割を果したものもあったと思われるが，他の遺構との関わり方もさまざまであり，実際は生活活動の中でさまざまな用途に用いられた万能石器であったと考えたい。したがって，ある場所に個定的に存在していたとは必ずしも考えられず，集落景観復原にあたっては，生活領域の範囲を示す程度の情報しか提供できないであろう。配石はＫ３文化から尖頭器文化まで存在し，細石刃文化にも伴っていた可能性がある。配石群として存在する傾向はＫ３文化が最も強い。しかしどの文化にも認められることから，より実生活に結び付いたものであったことが窺える。

第3節　土　　坑

先土器時代の遺跡から性格不明の土坑が発見されることは古くから知られている（芹沢1959）。しかし当時の学会の趨勢からしてそうした石器以外のものに積極的に取り組むという姿勢は少なかった。近年，遺跡構造論や集落論・生業論が活発化するに伴い，改めて遺跡における確実な遺構としての土坑に目が向けられるようになってきた（鈴木1983b，小野1984他）。またこうした動向に伴って土坑の検出に意を注ぐ機会がふえ，発見例も増加しつつある（鈴木他1984，金山他1984他）。しかし土坑の実態を探ってみると，形態的には木根による撹乱坑ものから安定した遺構としての条件を備えるものまであり，機能的にも貯蔵穴・墓坑など多様的材料の乏しい中での推論が多いことがわかる。土坑の機能が，推定し得るいずれにおいてもその存在の歴史的意義が重要であるだけに，分析技術の改良・開発が望まれていた。

本遺跡では，このような状況の中で全国でも初めて18基もに上る形態的に安定した土坑が発見され，それらの処理には十二分な注意を払う必要があった。そこで常用の手段ではあるが土坑内の遺物を炭化物も含めて余す事なく回収するために，全覆土を1mm目のフルイで処理することにした。残った遺物は全て回収し，木質の炭化物（年輪が識別できるもの）以外については鑑定を依頼した。

1．所　属　時　期

土坑の分布範囲は遺跡内の高台に限られており，約10m間隔でほぼ一線に並んで発見された（別添第3図）。それらの掘り込み面の確認と隣接して発見される遺物群から，第3b層のナイフ形石器群すなわち南関東第Ⅳ期（鈴木・矢島1978）並行期に伴う土坑群であろうと推定された。これに対し土坑覆土中からはナイフ形石器・尖頭器・細石刃が検出されており，それらの帰属時期が単純には片付かないものであることがわかってきた。特に第10号土坑底面上からはポイントフレイクの一括投棄資料が検出され，明らかに尖頭器を有する文化段階の土坑の存在が推定された。一方で今回の分析外であるが北区に分布する土坑周辺からは1点の尖頭器も発見されておらず，尖頭器を伴わないナイフ形石器文化段階にも土坑の存在が考えられた。さらに先の第10号土坑および南区の第11号土坑中からは細石刃の流入したものが検出されており，多数の土坑が細石刃文化段階に依然として凹部を残していた事実も知られている。以上から土坑は尖頭器を伴わないナイフ形石器文化段階の終末から細石刃文化段階の直前まで，数千年に亘る文化の流れの中で作り放置されたものであることが推定された。

2．用　　途

土坑の用途を直接的に物語るデータは今回の発掘・分析では得られなかった。いくつかの

見状況に照らして可能性を絞ってみたい。まず①土坑の分布する位置は遺跡を載せる台地稜線上の高台に当る。②周囲の遺物分布には多少があるものの，必ず石器・礫群・配石のいずれかは分布する。③土坑中には石器・礫・炭化物の流入が認められる。④土坑の埋土は周囲からの流れ込みによって形成されている。これらから，一つには土坑の機能した空間が集落を構成する人々の主たる活動空間に接して配されていたことが察せられる。また，埋没状況から故意に埋め戻す行為があったことは考えられない。

ここで土坑の一般的形態から先に可能性として考えられる用途を抜き出してみると，常識的には貯蔵穴・墓壙・落し穴位に限定されるのではあるまいか。このうち墓壙は，埋め戻しの行為が認められず集落内に分布するという点から可能性は少ないようである。墓が集落内に設けられる例は皆無とは言えないが土坑の形態・分布の詳細等において違いがあるようである。落し穴は分布上と第10号土坑のポイントフレイク一括投棄に問題がある。先土器時代の明確な落し穴の例は知らないが，少なくとも縄文時代の例に照らす限り分布上に問題があろう。落し穴の配置となると，動物の習性に対応するものであり先土器時代と縄文時代の動物あるいはその習性に大きな差を考えなければならなくなる。いずれにしても集落内に落し穴を設置する可能性は少ないと考えられよう。形態的にも大いに異なってはいるが，この違いは単に文化的な隔たりによる差とも考えられる。また，臭覚の発達する動物を促えようとする落し穴の中に，ポイントフレイクを投棄することも可能性の少ない行為と言えよう。

消去法では，したがって貯蔵穴の可能性が最も高いと考えられる。貯蔵穴であれば先の①～④のいずれの可能性も考えられるのである。しかしながら，発見状況からは首肯し得る可能性も，歴史的には大いに問題を含んでいる。一つには，かなり頻繁な移動生活が考えられている先土器時代人が，より定着的な要素である恒常的な食糧供給体制に資する貯蔵穴を持ったか否かという問題がある。現時点では検討に耐える実資料が少ないために具体的なアプローチは難しいが，地域社会構造を探る視点としては非常に重要であろう。以下はこの問題に全て帰着するが，第二は調理技術とも絡めて食料貯蔵が一般化するのが縄文時代前期以降とされている点である(渡辺1969，潮見1977)。最近鹿児島県東黒土田遺跡(瀬戸口1981・河口1982)で縄文時代早創期の堅果類の貯蔵穴が発見されてはいるが，資料的な連続性に乏しく現状では評価が難しい。そのような中で，本遺跡に堅果類の貯蔵穴の存在を認めようとすれば技術的萌芽を一気に１万年近く遡らせる必要が生じてくるのである。一方で当時(約1.4～1.7万年前)の遺跡周辺の植生からは貯蔵穴の存在は十分考えられる。既存の植生図(塚田1974，安田1980)に従い最寒冷期より若干暖かいようにゾーンを移動してやると，遺跡周辺は冷温帯落葉広葉樹林となり最も可食堅果類の豊富な林相に対応するようになるのである。第Ⅶ章第１節２の炭化物の樹種同定結果とも対応している。貯蔵穴についてはこのように問題を含んではいるものの，採集狩猟社会における植物質食料の重要性を考える時，この可能性をより積極的に評価して行きたい。　この他，覆土中出土のため土坑の機能との直接の結び付きを問うことはできないが，複数の土坑中からクルミの炭化した小片が回収されている(第38表)。土坑が機能していた時

代と全く同時とは考えないにしても，少なくとも細石刃文化段階位には土坑にクルミの殻が化して流入するような状態，すなわち日常的な生活の中で食糧として利用していたことがられよう。

第4節　水　洗　選　別

今回の発掘調査における水洗選別法応用の主たる目的は，火処の所在を指示する可能性のある微小赤化砂岩の検出にあった。その結果についてのみまとめておく。

赤化砂岩の検出量は，総数としてはそれほど多いものではない。集中度も弱く，1区画中2～4点も出土すればまとまっている方である。資料があまりに少数であるために，数点出土している区画を火処と考えていいものか否かも問題であった。しかし一方では，大勢として赤化砂岩の分布域は石器の集中域と重複しており，人為的に残されたものであるとの認定には大きな誤りはないようであった。そこでさらに詳細に石器・礫との分布関係を検討してみると，集中部と考えられた数点の赤化砂岩分布域は，石器ブロックや礫群分布域内にあってもそれらの分布の稀薄な所により一般的に分布することがわかった。すなわち，赤化砂岩は石器や礫と同様に遺跡内においてある領域を占有していたものと考えられるのである。領域を占有していた実態は，当初の予測からすると「火処」と考えられるのである。

さて，本分析のもう一つの重要な成果は大規模なものから小規模なものまでどのようなブロックにも「火処」が多かれ少なかれ伴っていることが判明した点である。従来，ともすれば住居に隣接した固定的で少数の「火処」を想定しがちであったが，今回の「火処」の多さを考えると，個定的なものと同時に臨機応変の一時的なものの存在も十分想定し得るかと考えた。先土器時代の炉址がほとんど構造体としては遺存していない点も，こうした推定を補強するのであろう。またほとんどの石器ブロックに伴うということは，屋外における日常的な任意の火の利用が考えられよう。さらに「火処」に対しては，全ての石器ブロックがほぼ等価の位置を占めていた点も重要である。日常的な活動のあらゆる面に対し，「火処」が共通した等価の役割を演じていたと考えることができよう。

第5節　集落構造と景観の変遷

上にまとめた他各種の分析を経て，最終的には六つの文化段階について集落構造と景観の復原を試みた。以下，それらの連続的な変遷を述べてみたい。なお，これらの論では集落の周辺的利用を前提としている。

まず第3層のナイフ形石器文化段階（K3），すなわちATを前後する頃には少なくとも

つの世帯が当地を利用していた。彼等は必ずしも移動生活を共にしていたと考える必要はなく，むしろ任意に出入が行われるようなルーズな関係にあったと考えられよう。しかし，たとえそのような世帯間の関係を保持していたとしても，当時の人々が季節性を契機とする移動を行っていたとすれば，四つの世帯が同時に生活を営んだ可能性も大きいと考えられる。

世帯内の構造は，石器ブロックから見る限り性格を異にする複数のブロックから成り立っている。ブロック間相互には直接的な繋りは見出せず，石器組成に若干の違いを認めるのみである。それらを総合すると，工作場的なブロックで製作された石器は遺跡外に持ち出され，消費的性格のブロックには搬入された石器が多かった。これを解釈すると，ブロック群を残した世帯の人々は当初搬入石器による生活を営みながら，石器に補充を必要とする段階にまで至ると間もなく移動するという比較的短いサイクルでの移動が考えられよう。また，性格を異にするブロックも世帯ユニットとしてまとめられた結果，ユニット単位での組成的な等質化がはかられており，相互の構造的類似性が認められると言えよう。世帯ユニット相互は等質的なものでありながらユニット規模の大小は居住時間の長短・回帰回数等の違いに由来するものと考えられる。

礫群・配石は石器の量に較べ質・量ともに充実している。礫群は主として儀式的性格を伴う調理施設で，形態の差は使用段階の諸相を示すと考えられる。配石については礫群に伴うもの・単独で分布するもの等様々な状況が認められており，主たる性格を特定することは難しい。第3層ではこのような礫群・配石がそれぞれ独自の分布域を保持しており，しかもそれらが石器とも分布を接しつつ重ならない点に特徴がある。また，一部には礫群と配石にセット関係が認められる例もあり，他と異なる性格を荷っている可能性がある。

世帯ユニットは，台地平坦部からわずかに傾斜の始まる東の地域にかけて分布する。傾斜を反映するように，ユニット西側のより高い部分に消費・居住空間が配され，東側には工作・調理空間が広がっている。このような世帯の集合としての集落も，全体としては東方に開く配置と考えられる。しかしながら本層においてのみは，集落背後に該当すると考えられる西方にも数多くの配石が分布しており，それらが特定の役割を持った空間であった可能性もある。

K2第I期では，単一の世帯ユニットが認められたのみである。集落全体はさらに北方に伸びる可能性がある。

世帯ユニットの構造は基本的に第3層と似ている。相互に接合等のほとんど認められない三つのブロックからなっている。ただしここでは工作場的なブロックの石器組成は豊かで，その点では第3層と異なっている。また礫群・配石の質・量は乏しく，分布も第3層ほど截然と分かれることはない。こうした違いが，第3層とのどれほど本質的な違いを示しているのか，該期の遺構群が限定されているだけに解釈が難しい。

K2第II期の世帯ユニットについては最も情報量が多く，細部に亘る構造復原が為されている。この時期に該当するものとしては，二つのユニット＋αと一つの特殊機能を持ったと考えられるユニットがある。世帯ユニットの移動様式・原理などは第3層と同じと考えられるが，

一世帯ユニットの規模の大きさ，世帯ユニット以外に特殊機能空間が分離設定される点などで第3層と異なる。世帯ユニットの規模の大きさは，世帯構成員の違いと回帰回数に主として関わると考えられるが，各種遺構群の重複分布の程度からは後者の可能性を採りたい。同じ世帯を構成する人々は機能空間の配置については共通の認識を持っているはずであり，多少構成員が多いからと言って異なる機能をもつ空間が重複分布する可能性は少ないと考えられよう。第3層とは本質的に機能空間の配置が異なる可能性もあろうが，機能を異にしたはずの遺構が重複し合う現象は回帰回数の多さによって惹起された可能性の方が高いと考える。特殊機能空間の配置は集落東縁の最も低い台地縁に認めることができる。このユニットは数多くの礫群・配石を持つのに対し，トゥール類を含むわずかな石器しか伴なっていない。その在り方から判断して，本ユニットは集落全体に関わる儀式・調理空間と考えることができよう。この他，集落最高所にのみ分布する土坑群も，それらの属するユニットと同時に集落全体に関与する遺構である可能性がある。

世帯ユニットの構成については，重要ないくつかの指摘が為されている。一つにはK2第I期までと異なり，本期では世帯ユニットを構成するブロック間に数多くの接合・個体の共有が認められ，さらに世帯ユニット間にもそうした関係がいくつか認められている。このような世帯および世帯間構成原理はかつて「並行型集落」と呼ばれたもの(鈴木忠他1982)と共通するものである。本期を前後する段階ではこうした関係がそれほど明瞭ではなかっただけに，時期的な特殊性とともに時間内における普遍性の一端を示すものかと考えられる。

第二には回帰的移動を示すとも考えられる**単位的世帯ユニット**が抽出されている。世帯ユニットには大規模ブロック一つと，小規模ブロック複数が含まれるが，個体別資料を分析した結果各小規模ブロックは大規模ブロックと石器の需給関係において相互補完的であり，その個々の関係を持ってユニットとし，回帰的に形成された世帯ユニットのより短期で単位的な世帯ユニットと解釈しようとするものである。しかしこれも単位的とは言え必ずしも一回帰に対応するとは考えられず，実態としては世帯ユニットの小規模なもの，すなわち概念上成立し得る真の単位的世帯ユニットが少数回帰することによって形成したのがここで言う単位的世帯ユニットであり，回帰回数が増えこれがさらに複合し合ったものが世帯ユニットに対応すると考えられる。単位的世帯ユニットの内容についてはさらに内容を吟味しなければならないが，世帯ユニットの持つ二重構造が捉えられた意義は大きい。

第三には，水洗によって得られた結果から各単位的世帯ユニットが安定して複数の「火処」を持ったらしいことがわかった。おそらくそれらのうち，住居内あるいは接する位置と工作場にはやや恒常的なものがあったと推定されるが，それ以外の小ブロック個々にも随時「火処」が設けられたようである。

第四には，土坑分布の偏りがあげられる。土坑は台地陵線部に当る第4世帯ユニットにのみ含まれているが，前述のごとくこれらが貯蔵穴であるとすれば，機能的重要性は計り知れないものがあり，むしろ一世帯というよりは集落全体に関わる役割を負っていたと考えられる。本

段階に至って初めて世帯ユニット間に個体別資料の共有と言うやや明瞭な結び付きが認められるようになるが，本例もその一端を示すものであり，集落というレベルでの統一体の意義を強調するものである可能性がある。

礫群・配石で特記すべきは，第3層の様にそれらが個々に独自の空間を占有するような分布を示さなくなる点である。多くが，石器と何等かの形で重複分布を示すようになる。この原因として，一つには回帰の安定化により遺構群の重複分布する機会が増えることが考えられようが，さらに他の要因も関係するように思われる。こうした傾向と相反するように，他方では集落全体に関わる礫群・配石が集中的に分布する空間(第2ユニット)が現れてくる。そこには少重型の礫群が多いという特徴は認められるが，石器と重複分布する礫群との機能差を明示するような独特の属性は現れていない。第2ユニットを構成する礫群が，どれ程他と異なる意識の下で形成されたものか，興味ある課題である。

世帯ユニットの配置と，ユニット内の機能空間の配置は，ともに地勢の影響を強く受けている。それらは台地東縁から，南方に入る浅谷に添って残されている。第3層と同様，消費・居住域は北～西～南に，工作空間は東～南に配されている。また，前述の如く特定機能空間が，集落東縁と西方に配されている。

K2第Ⅲ期には，三つ以上の世帯ユニットの存在が考えられる。南端の第5ユニットが今一つ性格不明であるためにこれを除けば，二つの世帯ユニットの存在と集落のさらに東北方への延長を考えることができる。この段階に至ると世帯ユニット間の具体的結び付きは再び弱いものになる。ここでも土坑を持つ世帯ユニットと持たないユニットが認められるが，石器からは世帯間の結び付きは弱いとせざるを得ない。

世帯ユニット内の構造では，K2第Ⅱ期とは大きな違いが生じている。それは一つにはブロック間の接合・個体の共有関係がほとんど認められなくなり，相互の独立性が強くなる点である。二つには，第3層以来ずっと認められて来たブロック相互の質的な差がここではほとんどなくなり，ブロックの大小に関わらず質的には同じであることがわかって来た。そこでここでは個々のブロックに対して単位的世帯ユニットを考え，わずかな手懸りからグルーピングされたブロック群に対し世帯ユニットを設けることにした。単位的世帯ユニットの中核となるブロックはいずれもポイントフレイクを多く含んでいることから，住居空間は全く独自に措定する必要がある。このようなブロック構成から推定される世帯ユニットの移動様式には，土坑を多く持つにもかかわらず第Ⅱ期に較べては短期の居住が考えられる。相互に矛盾するとも考えられる内容を含む世帯ユニットの存在を，回帰パターンの定式化の進行と備蓄観念の崩芽と考えることも可能であろうがさらに検討を要する。土坑はここに至って独自の空間を確保するようになる。

この段階になると礫群・配石とも規模が小型化する。また礫群と石器群の重複分布もより顕著になり，第3層の在り方とは大きな違いとなっている。さらに一部の礫群・配石には，土坑と特定の関係にあるものも出て来るようである。それらは土坑と一体となって個有の分布を示している。

世帯ユニットは，これまでと異なり台地西側緩傾斜面に残される。傾斜が緩やかな上に地区区分も不明瞭であるためか，ユニット配置は一見すると地勢とは無関係のようである。各ユニットでは北に消費・居住域を，南に工作空間を配しており，集落全体としても南に開いた印象を与える。また，土坑は第Ⅱ期と同様，集落東方の最も高い位置を占めている。

尖頭器文化期(Ｐ)は，二つ以上の世帯ユニットで構成される。二つのユニットの間に対応する三つのブロックをどのようなまとまりと評価するかによって，新たに一つ以上の世帯ユニットを加えることができる。これらの世帯ユニットも横の繋りは弱く，個体の共有は全く認められない。西向きのごく緩い斜面に広がるこれらの世帯ユニットは，他の両面加工中型尖頭器を指標とする石器群同様，概して遺構の構成には乏しい。第１ユニットに配石が伴う以外は，石器ブロックのみである。このため本報告も含め，ともすれば短期居住を示すものとの評価を下しがちであるが，ベースキャンプ，ハンティングキャンプ他の集落運営原理，石器に反映する文化的背景も併せて再検討の余地はあろう。

世帯ユニット内の構成は，先のＫ２第Ⅲ期の等質なブロックの集合から，再び大きく性格を違えるブロックの集合へと変化する。すなわち，ユニットを構成するブロックには極めて工作場的なものと消費あるいは居住域的なものが含まれるようになる。Ｋ２第Ⅲ期でも実資料としての消費域は特定できないものの，そうしたものの潜在的存在は指摘しておいたが，この段階ではＫ２第Ⅱ期以前と同様再び明瞭な形で顕現するようになる。ユニットを構成するブロック間相互には接合，個体の共有関係はほとんど認められておらず，Ｋ３やＫ２第Ⅰ期と似た状況を示している。工作場的なブロックがポイントフレイクを主体としており，製作された尖頭器は必ずしも集落内では消費されないという実態のためにブロック間相互の結び付きがそれほど明瞭に現れない可能性があろう。

二つの世帯ユニットは，消費空間と工作空間の配置が東西で逆転しており，これまでに認められてきた集落単位での斉一性に欠けている。尖頭器に偏った石器組成から，狩猟集団による集落の一時的利用が考えられる点からも，ユニットの同時存在そのものに問題が残る。

細石刃文化段階ではわずかに一世帯ユニットが抽出されたに留まる。消費空間を北方に，工作空間を南半に考えることができる。この段階の遺跡を概観してみると，西南日本では特に規模の小さい例が多いようであり，こうした傾向と符合している。ナイフ形石器文化段階に比較して，移動生活を共にする単位集団の構成，回帰パターンの変化等を考えることができよう。

世帯ユニットは二つのブロックから成っているが，相互に個体の共有といった繋りは全く認められない。両ブロックともに細石刃の生産を行っているが，資料抽出過程に不確定要素を含むため，ブロックの性格を推定することは難しい。

以上を編年順にまとめてみると，第87表のようになる。推定世帯数では，攪乱を想定すると細石刃文化以外は全て複数で構成される。それら世帯間の関係は，Ｋ２第Ⅱ期以外は独立的である。Ｋ２第Ⅱ期は他に比較するとより相互依存的であるが，世帯構成ブロック間の依存度に較べるとより独立的である。世帯内・間の依存度を相対的な個体の共有関係の多少で測る限り

第87表　集落構成要素の変遷

文化段階	主要石器	遺構	世帯数	世帯間の関係	世帯構成石器ブロックの性質	ブロック間の関係
K3	ナイフ形石器	礫群 配石	4＜	独立的	工＋消	独立的
K2 第Ⅰ期	ナイフ形石器	礫群 配石	1＜	独立的	工＋消	独立的
K2 第Ⅱ期	ナイフ形石器	礫群 配土石坑	2＜	より相互依存的	工＋消	需給関係
K2 第Ⅲ期	ナイフ形石器 尖頭器	礫群 配土石坑	3＜	独立的	工＋(消)	独立的
P	尖頭器	配石	2＜	独立的	工＋消	独立的
M	細石刃	配石？	1	単独	？	独立的？

工：工作作業場　　消：消費的あるいは住居空間的

において，本段階のみはかつて提唱された「並行型集落」の範疇で捉えられよう。世帯を構成するブロックを大きく工作的なものと消費的なものに分けると，K3～K2第Ⅱ期，尖頭器文化(P)では両者が統合される形で世帯を設定し得るが，K2第Ⅲ期の大部分，細石刃文化(M)では両方の性質を兼備した比較的等質なブロックから成っている。また，そうしたブロック間の関係はK2第Ⅱ期を除くと相互に独立的である。石器ブロックの性質とそれらの関係に必ずしも対応関係が認められない点は注目される。

全体的には，K2第Ⅱ期と細石刃文化期に集落規模における極相があろうかと考えられる。また，集落構造的には，K3～K2第Ⅰ期・K2第Ⅱ期・K2第Ⅲ期～尖頭器文化(P)・細石刃文化(M)の四段階に大別されそうである。　　(山下，保坂)

註

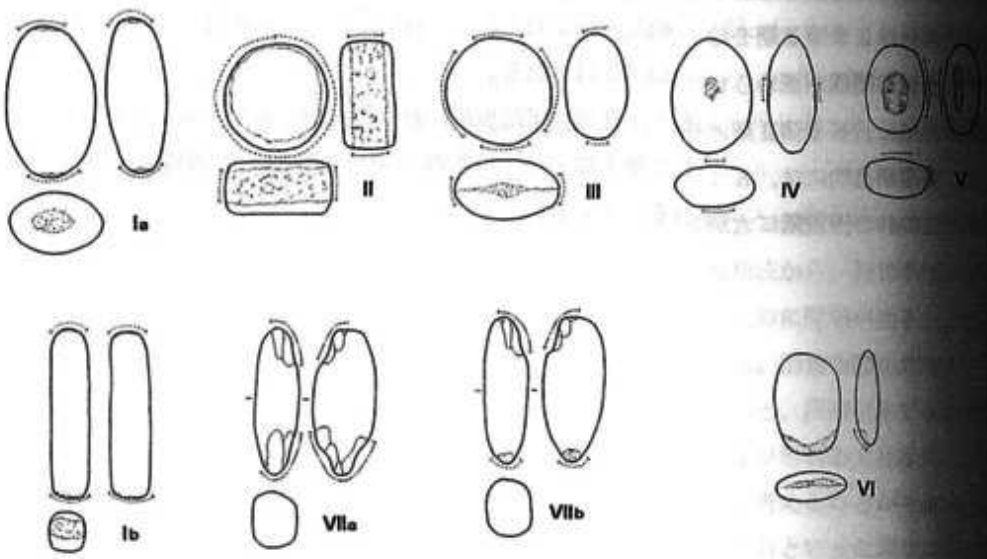
1) 分類は，日本全国から出土している先土器時代の敲石類を細別9つに分けたものである(下図)。連続した敲打によるあばた状の使用痕を持つもの(Ⅰa，Ⅱ～Ⅳ類)と磨れ面を持つもの(Ⅴ類)を敲石，扁平な円礫を用い先端部に滑らかな磨れ面を持つもの(Ⅵ類)を局部磨製礫，強度の打撃により礫面が剥落した状態になっているもの(Ⅰb，Ⅶa，Ⅶb類)を楔石としている。なおⅠb類は細長い棒状の礫を使用するもので打撃のないものもあるが，楔石としてよく用いられる形態であることから，拡大解釈して楔石に含めている。詳細は黒坪1983・1984に著わしたので，ここでは概念図で大略を示すに留める。

2) 接合資料作業順序中に現れる各種の記号について説明する。→は通常の剥離作業に従う工程(Ⅰ種接合)を，＋は破損した資料の接合(Ⅱ種接合)を示す。⁞は90°以上の打面の移動を示す。イ・ロ……は実資料を欠くが推定復原される工程内容を，①・②……は実資料を示す。1F24A110は遺物登録番号を，番号の後の(A　UF)は遺物の種別を示す。ここではA：二次加工のある石器，B：剥片，C：砕片，D：石核に大別され，AはさらにKn(ナイフ形石器)，Pt(尖頭器)，Sc(スクレイパー)，Gr(彫器)，RF，UFに，DはMc(細石核)とDに細分されている。

3) 実際にはRFは定型化した石器とは言い難いし，剥片を全て副次生産物とすることにも問題はあるが，大きな傾向を捉えるために形態レベルの分類を行った。

4) 尖頭器の幅とポイントフレイクの長さは，言わば距離と道程の関係にある。ポイントフレイクの長さが尖頭器の周縁から稜線上までを線的に計測しているのに対し，尖頭器の幅は周縁から中心に向って距離を測っていることになる。

5) 文化的に，施設たる遺構の検出例に乏しいナイフ形石器文化前半期(約2.2万年以前)，旧石刃文化段階などではこの限りでない。



敲石類の分類

破線は敲打(アバタ)痕，実線は面的な磨れ痕，
1点鎖線はヒンジフラクチャー。

引 用・参 考 文 献

相川幹子1983「礫群・配石の使用過程の復原」(『多聞寺前遺跡』II所収，東久留米)。

相川幹子・溝口優司1983「礫群諸形質の相互関係と礫群の遺跡間比較」(『多聞寺前遺跡』II所収，東久留米)。

秋本真澄・小野真一・平林将信他1976『陣場上・平畦遺跡』(静岡県長泉町)。

秋本真澄・小野真一・笹津海祥他1979『下長窪上野遺跡』(静岡県長泉町)。

麻生　優1975「「原位置論」の現代的意義」(「物質文化」第24号所収，東京)。

阿部祥人1982「先土器時代の微細遺物」(「史学」第52巻第2号所収，東京)。

阿部祥人・山下秀樹1980「微細遺物」(『はけうえ』所収，小金井)。

安蒜政雄1973・77「砂川遺跡についての一考察」(「史館」第2号，第9号所収，市川)。

安蒜政雄1977「遺跡の中の遺物」(「どるめん」第15号所収，東京)。

安蒜政雄1979「石器の形態と機能」(『日本考古学を学ぶ』(2)所収，東京，有斐閣)。

安蒜政雄・戸沢充則1975「砂川遺跡」(『日本の旧石器文化』第2巻所収，東京，雄山閣)。

池水寛治1975「上場遺跡の住居址から」(「もぐら」第10号所収，川内)。

石川治夫・北川恵一1982『子ノ神・大谷津・山崎II・丸尾II』(沼津)。

市野浩世・鈴木久雄・松崎正子他1980「磐田原台地の先土器時代遺跡」(『寺谷遺跡』所収，京都)。

伊藤美鈴・鈴木節司1984『野際遺跡』(磐田)。

稲田孝司1978「旧石器時代の小集団について」(「考古学研究」第24巻第2号所収，岡山)。

稲田孝司1984「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」(「考古学研究」第30巻第4号所収，岡山)。

磐田南高校地学部1984「磐田原台地の先土器遺物包含層の鉱物組成と成因」(「静岡地学」第50号所収，静岡)。

大上周三・鈴木次郎1984『栗原中丸遺跡』(横浜)。

大橋保夫・足立順司・向坂鋼二他1981「広野遺跡」(「森町考古」17所収，京都)。

岡村道雄1978「長野県飯田市石子原遺跡の再検討」(『中部高地の考古学』所収，長野県戸倉町)。

岡村道雄1979 a「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例－その1－」(「東北歴史資料館研究紀要」第5巻所収，多賀城)。

岡村道雄1979 b「旧石器時代遺跡の基礎的な理解について」(「考古学ジャーナル」第167号所収，東京)。

奥村吉信1984「白岩藪ノ上遺跡のユニット」(「大境」第8号所収，富山)。

小田静夫・宮崎　博1974『調布市仙川遺跡』(東京)。

小田静夫・金山喜昭1976「前原遺跡IV中2層文化の礫群」(「考古学研究」第23巻第1号所収，岡山)。

小田静夫・C．T．キーリー1979 Japanese Palaeolithic Cultural Chronology (Paper Presented to the XIVth Pacific Science Congress held in Khabarovsk, U.S.S.R. August 20 to September 5 .Khabarovsk)。

小野　昭1976「後期旧石器時代の集団関係」(「考古学研究」第22巻第4号所収，岡山)。

小野　昭1984「旧石器時代の集落」(「季刊考古学」第7号所収，東京)。

小野正敏1979「先土器時代の遺跡群と集団」(『日本考古学を学ぶ』(3)所収，東京，有斐閣)。

織笠　昭1983「細石刃の形態学的一考察」(『人間・遺跡・遺物』所収，東京，文献出版)。

梶原　洋・柳沢和明1984「旧石器時代」(「考古学ジャーナル」No.232所収，東京)。

加藤晋平・桑原　護・鶴丸俊明1969『中本遺跡』(東京)。

加藤晋平1970「先土器時代の歴史性と地域性」(『郷土史研究講座』第1巻所収，東京，朝倉書店)。

加藤芳朗1979「土地条件編」(『磐田の自然』所収，磐田)。

加藤芳朗1980 a「寺谷遺跡をめぐる地形・地質・測定年代」(『寺谷遺跡』所収，京都)。

加藤芳朗1980ｂ「テフラと斜交する黒土層」(「軽石学雑誌」6号所収，東京)。
加藤芳朗・斉藤全生・黒沢美房他1979『磐田の自然』(磐田)。
金山喜昭1977「礫群」(『新橋遺跡』所収，小金井)。
金山喜昭1984「武蔵野・相模野両台地における旧石器時代の礫群の研究」(「神奈川考古」第19号所収，横浜)。
金山喜昭・溝口優司・小田静夫他1978「鈴木遺跡の礫群の分析」(『鈴木遺跡』Ⅰ所収，小平)。
河口貞徳1982「縄文草創期の貯蔵穴」(「季刊考古学」創刊号所収，東京)。
栗島義明1983「ブロックの構成と機能一個体別資料からみたブロックのあり方一」(『多聞寺前遺跡』Ⅱ所収，東久留米)。
栗島義明・辻本崇夫・斎藤幸恵他1982「矢出川遺跡群の細刃器の分析(『報告・野辺山シンポジウム1981』所収，東京)。
黒坪一樹1982「先土器時代敲石類の集成」(『野沢遺跡』所収，京都)。
黒坪一樹1983・84「日本先土器時代における敲石類の研究(上)・(下)」(「古代文化」第35巻第12号・第36巻第3号所収，京都)。
小薬一夫1981「礫群の分析」(『地頭山』所収，東久留米)。
小林達夫・小田静夫・羽鳥謙三他1971「野川先土器時代遺跡の研究」(「第四紀研究」第10巻第4号所収，東京)。
近藤義郎1976「先土器時代の集団構成」(「考古学研究」第22巻第4号所収，岡山)。
佐藤宏之1983「水洗選別による先土器時代の資料分析」(『多聞寺前遺跡』Ⅱ所収，東久留米)。
潮見　浩1977「縄文時代の食用植物」(『考古論集』所収，広島)。
白石浩之1974「尖頭器出現過程における内容と評価」(「信濃」第26巻第1号所収，松本)。
白石浩之1979「尖頭器石器群研究の現状と展望」(「神奈川考古」第7号所収，横浜)。
白石浩之1981ａ「尖頭器の製作技術とその様相」(「野州史学」第5号所収，栃木)。
白石浩之1981ｂ「茂呂系ナイフ形石器の型式学的研究」(「考古学研究」第27巻第4号所収，岡山)。
白石浩之・荒井幹夫1977「茂呂系ナイフ形石器を主体とした石器群の変遷」(「考古学研究」第23巻第2号所収，岡山)。
杉原荘介1952「MILK　STONE」(「MICROLITH」第2号所収，東京)。
杉原荘介1977『群馬県武井における二つの石器文化』(東京)。
杉山荘平・中沢　保1954「東京都北多摩郡久留米村，落合，三角山の遺蹟」(「西郊文化」第9号所収，東京)。
鈴木遺跡調査会1978『鈴木遺跡Ⅰ』(小平)。
鈴木次郎・矢島國雄1978「先土器時代の石器群とその編年」(『日本考古学を学ぶ』(1)所収，東京，有斐閣)。
鈴木次郎・矢島國雄1979ａ「神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡の細石刃石器群」(「神奈川考古」第6号所収，横浜)。
鈴木次郎・矢島國雄1979ｂ「相模野台地におけるナイフ形石器文化終末期の様相」(「神奈川考古」第7号所収，横浜)。
鈴木次郎・白石浩之1980『寺尾遺跡』(横浜)。
鈴木忠司1979「東海地方の細石刃文化について」(『日本古代学論集』所収，京都)。
鈴木忠司1983ａ「野沢遺跡」(『探訪先土器の遺跡』所収，東京，有斐閣)。
鈴木忠司1983ｂ「旧石器人のイエとムラ」(「季刊考古学」第4号所収，東京)。
鈴木忠司・山下秀樹・保坂康夫他1980『寺谷遺跡』(京都)。
鈴木忠司・山下秀樹・保坂康夫他1982『野沢遺跡』(京都)。
鈴木久雄1978『磐田原先土器時代遺跡地名表』(磐田)。
鈴木久雄1979『磐田縄文時代遺跡地名表』(磐田)。
鈴木久雄1980『磐田弥生時代遺跡地名表』(磐田)。
鈴木正己・平野和男・斉藤勝郎他1977『ふるさと豊田』(静岡県豊田町)。
関野哲夫1981『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書』(沼津)。
瀬戸口望1981「東黒土田遺跡発掘調査報告」(「鹿児島考古」15所収，鹿児島)。
芹沢長介1955「長野県馬場平遺跡略報」(「石器時代」第1号所収，東京)。
芹沢長介1959「新潟県荒屋遺跡における細石刃文

化と荒屋形彫刻刀について(予報)」(「第四紀研究」第1巻第5号所収，東京)。
橘　昌信1975「宮崎県船野遺跡における細石器文化」(「考古学論叢」3所収，別府)。
橘　昌信1981『大分県上下田遺跡発掘調査報告書』(別府)。
塚田松雄1974『古生態学Ⅱ』(東京，共立出版)。
辻本崇夫1981「礫群」(『東京都目黒区中目黒遺跡』所収，東京)。
辻本崇夫1984「礫群研究の現状と問題」(「東京の遺跡」No.4所収，東京)。
堤　隆1984「上草柳地区出土の細石刃について」(『一般国道246号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告』Ⅱ所収，大和)。
鶴丸俊明・栗島義明・松谷純一他1983『多聞寺前遺跡Ⅱ』(東久留米)。
徳永　裕1982「個体別資料と剥片剥離作業の遺存状況」(『野沢遺跡』所収，京都)。
戸沢充則1958「長野県八島遺跡における石器群の研究—古い様相をもつポイントのインダストリー」(「駿台史学」第8号所収，東京)。
戸沢充則1965「先土器時代における石器群研究の方法」(「信濃」第17巻第4号所収，松本)。
戸沢充則1968「埼玉県砂川遺跡の石器文化」(「考古学集刊」第4巻第1号所収，東京)。
戸沢充則1979「先土器時代論」(『日本考古学を学ぶ』(3)所収，東京，有斐閣)。
戸沢充則・安蒜政雄・鈴木次郎他1974『砂川先土器時代遺跡—埼玉県戸沢市砂川遺跡の第2次調査—』(所沢)。
戸田正勝1983「尖頭器の型式学的一考察—東京都鈴木遺跡の場合—」(「太平臺史窓」第2号所収，小平)。
直良信夫1954「三角山遺跡」(「西郊文化」第9号所収，東京)。
直良信夫1957「石神井川流域における無土器文化」(『栗原』所収，東京)。
中嶋郁夫・鈴木忠司1980「周辺の遺跡」(『寺谷遺跡』所収，京都)。
中嶋郁夫・市野浩世1981『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』(磐田)。
中村喜代重・曽根博明・草柳卓二1979『上和田城山』(大和)。
橋本　正1977「直坂Ⅱ遺跡第5ユニットから」(「どるめん」第15号所収，東京)。
服部実喜1981「武蔵野台地における礫群研究の現状—最近の研究成果を中心として—」(「石器研究」2所収，春日部)。
春成秀爾1976「先土器，縄文時代の画期について(1)」(「考古学研究」第22巻第4号所収，岡山)。
平野和雄1974『磐田の古代史』(磐田)。
平林将信・中野国雄・藤野義男他1978『西願寺遺跡(A地点)・長久保城址(二ノ丸)』(静岡県長泉町)。
保坂康夫1980「礫群および配石」(『寺谷遺跡』所収，京都)。
保坂康夫1982「先土器時代の遺構—礫—」(『野沢遺跡』所収，京都)。
堀井晶子1980「礫の説明」，「礫の分布」(『多摩蘭坂遺跡』所収，国分寺)。
町田　洋・新井房夫1976「広域に分布する火山灰」(「科学」第46巻第6号所収，東京)。
松沢亜生1954「長野県訪譲，北踊場石器群—特に石器製作工程の分析を中心として」(「第四紀研究」第1巻第7号所収，東京)。
松藤和人1974「瀬戸内技法の再検討」(『ふたがみ』所収，東京，学生社)。
松藤和人1979「再び"瀬戸内技法"について—瀬戸内技法第1工程を中心に—」(『二上山・桜ケ丘遺跡』所収，奈良)。
松藤和人1983「国府型ナイフ形石器の製作」(「季刊考古学」第4号所収，東京)。
松村明子1978「鈴木遺跡Ⅳ層出土石器群についての一考察」(『鈴木遺跡』Ⅰ所収，小平)。
松谷純一1982「微細遺物」(『野沢遺跡』所収，京都)。
明治大学月見野遺跡群調査団編1969『神奈川県大和市月見野遺跡群調査概報』(東京)。
矢島國雄1977「先土器時代遺跡の構造と遺跡群についての予察」(「考古学研究」第23巻第4号所収 岡山)。
矢島國雄・鈴木次郎・宮塚義人1974『地蔵坂遺跡発掘調査報告書』(神奈川県綾瀬町)。
矢島國雄・鈴木次郎1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」(「神奈川考古」第1号所収，横浜)。
安田喜憲1980『環境考古学事始』(東京，日本放送出版協会)。
山口卓也1980「個体別資料の内容」(『寺谷遺跡』

所収，京都)。
山崎克巳・小宮猛幸1984「匂坂上2号遺跡・遠江国分寺跡周辺発掘調査概報」(磐田)。
山下秀樹1983「静岡県豊田町広野北遺跡発掘調査概報」(静岡県豊田町)。
山田　治1980「第1土壙検出木炭の ^{14}C 年代」(「寺谷遺跡」所収，京都)。
山田　治・小橋川明1984「液体シンチレーション ^{14}C 年代測定とその結果(1)」(「京都産業大学論集」第13巻第4号所収，京都)。
山村　宏・山崎克巳・小林ゆり1982「京見塚遺跡群発掘調査概要」(磐田)。
横山裕平1980「打撃痕の観察される礫についての一考察」(「鈴木遺跡」Ⅲ所収，小平)。
吉田　格1952「東京都国分寺町熊ノ郷殿ケ谷戸遺跡」(「考古学雑誌」第38巻第2号所収，東京)。
吉田英敏1980「先土器時代」(「富加町史」下巻所収，岐阜県富加町)。
渡辺　誠1969「縄文時代の植物質食料採集活動について(予察)」(「古代学」第15巻第4号所収，京都)。
Michael,H.N.,E.K.Ralph 1974 University of Pensylvania Radiocarbon Dates XVI (Radiocarbon,Vol. 16, No. 2, New Haven)
Rolph,E.K.,H.N.Michael,M.C.Han 1973 Radiocarbon Dates and Reality (MASCA Newsletter,Vol. 9, No. 1, Philadelphia)
Turner,F.J.,J.Verhoogen 1961 Igneous and Metamorphic Petrology (New York)

English Summary

HIRONO-KITA SITE

Introduction

The Hirono-kita site is located about 10 km inland from the Pacific coast midway between Tokyo and Osaka, in Toyoda-cho, Iwata-gun, Shizuoka prefecture (Ch. I, Figs. 1 and 3). It is situated on the west edge of a plateau, which is part of the larger alluvial Iwatabara Terrace. This site is the southernmost one in the Iwatabara Preceramic Sites Group. Dissection has progressed on the terrace; the site is located on a small plateau, east of which is a ravine 10 meters deep, and to the west is a shallow valley about 2 meters deep.

Excavation was conducted in almost the entire area of this small plateau, approximately 13,000 ㎡ (Figs. 3 and 4). Archaeological remains from the Kofun, Yayoi, Jomon and Preceramic periods were found, and of these, the Preceramic material was the richest in content. This summary is concerned only with the Preceramic, and because of the huge quantity of material, sufficient analyses could be carried out only for the central section of the site, that is to say, for a 6,000 ㎡ area. In this central section, six Preceramic cultural periods were identified, the contents of which are shown below.

Stratigraphy

The natural stratigraphy is shown in Fig. 6 and also in Fig. 1 of the Supplement. Layer 1 contained remains of the Jomon and later cultural periods, but the Preceramic material was found in Layers 2 b and 3, and is clearly separated by a culturally sterile stratum. At this site the presence of AT Tephra has not been precisely confirmed, but volcanic glass is most abundant in the lower half of Layer 3, and charcoal from a stone cluster in this layer yielded a ^{14}C date of about 22,000 BP (Ch. XI). Therefore, the earliest group of lithics probably corresponds to about this date. Layer 2 b contained three Knife (Backed Blade) Cultures, a Point Culture and a Microblade Culture. Subdivision of the Knife Cultures was made through typological analysis

	Microblade Culture	Point Culture	Layer 2b Knife Culture (K2)			Layer 3 Knife Culture (K3)
			III	II	I	
Microblades	153	—	—	—	—	—
Microcores	6	—	—	—	—	—
Points	—	15	61	6	—	—
Knives	12	—	16	42	7	13
Scrapers	1	2	4	12	—	—
Gravers	—	1	1	1	—	3
Retouched Flakes	2	4	19	18	5	13
Utilized Flakes	16	89	165	142	33	68
Stone Axes	1	—	—	—	—	1
Choppers	—	—	3	—	—	—
Edge-Ground Pebbles	—	—	—	2	—	—
Pounding stones	3	2	17	22	—	9
Hammerstones	1	—	4	4	1	3
Anuils	—	—	4	1	—	4
Flakes	105	968	1,037	1,008	130	178
Chips	40	636	690	347	30	245
Cores	9	3	41	79	12	9
Total	338	1,720	2,062	1,684	218	546
Stone Heaps	—	—	12	24	5	25
Stone Clusters	?	1	21	27	4	57
Pits	—	—	5	4	—	—

and an analysis of the distribution of artifacts, and corresponds to established typological views. Assuming that the latest Microblade Culture existed about 13,000 years ago, it is estimated that this site was occupied intermittently for almost 10,000 years, from the earliest Knife Culture.

Considerations in Analysis

Together with traditional visual and typological studies of artifacts, much care was used here to recover information useful for the reconstruction of the settlement. One procedure was water separation of the soil from the pits using a 1 mm mesh (Ch. VI, Sec. 1) and also by water separation, the collection of fire-reddened sandstones from the soil, to identify areas where fire had existed (Ch. V, Ch. VI). As a result, it was found that pits, believed to be food storage facilities, occurred with pieces of walnut in the fill soil, verifying the use of walnuts by the late Knife Culture period. Also, reddened sandstones were found coinciding roughly in distribution with lithic clusters, and often many areas of concentration existed within one lithic block (an area in which all lithic material appears to be related in time and space) showing the possible high mobility of fire-using features.

Analytical work also centered on the idetification of the units of settlement pattern (households) and the relationships and characteristics of these units.

Method of Analysis

The most basic and important procedure in the study of a settlement pattern is an analysis of the distribution of artifact and feature groups, and analysis through nodular reconstruction of lithic waste and stones. From the distribution of remains such as artifacts and features we can identify visual concentrations known as a block, and from its character, deduce the use or function of the space it occupies. From its nodular reconstruction, it is possible to see how the block was formed and the inter-relationships between blocks. Sometimes, blocks may be grouped together into units by the nature of their relationship. Units may have various characteristics and be of different levels; some units are types with special functions, household (family) units, and settlement units. Here, much effort was concentrated on the identification of many types of units as an aid to the understanding of settlement makeup and pattern.

Distribution of Artifacts and Features

Because of lack of space, the process by which analysis progressed to enable settlement reconstruction will be described in detail for one cultural period--the Knife Culture period II in Layer 2 b (K 2). There will be an overview of settlement makeup for the other culture periods.

K 2 period II has stone heaps, stone clusters, pits and concentrations of reddened sandstones as well as lithic waste. Worked stones tended to appear in clusters, and isolated finds were rare. Of the blocks, some were composed mostly of lithic by-products which indicates that production and consumption of lithics progressed simultaneously. There are other small-scale blocks with 10 to 50 pieces of worked stones, composed of tools and blanks which may define areas of consumption or living (Suppl. Fig. 16) . Two groups of blocks were seen at this site which included both types.

Through an analysis of their attributes, stone heaps, which are concentrations of fired stones, have been divided into six types, and these types are thought to represent various stages of usage (Ch. VI, Sec 1). It is also conceivable that they may have had a ritual use or were part of a cooking facility accompanying the ritual. These also tended to cluster in groups, and three groups of stone heaps were identified (Suppl. Fig. 14). Of these two overlap in distribution with the above mentioned block groups.

Stone clusters, composed of stones weighing 1,000 grams or more and rarely fired, are the least understood feature, but are thought to have been used in many different ways (Ch. VI, Sec. 1). These also tended to aggregate, although to a lesser extent than the others, and three groups of stone clusters were distinguished (Suppl. Fig. 14). Two overlap or are adjacent to block groups, and one overlaps with a stone heap group.

Pits are believed to be food storage facilities, and are distributed only along the higher ridge of the land. Four pits were found, and three of these overlapped with one of the block groups, while the other was not associated with any.

Concentrations of reddened sandstones were found only in areas where water separation of the soil was conducted, and they were more than 20 in number. Many were associated with blocks, were within them or were in adjacent areas. If we assume that they represent fire use, then, since all could not have been in existence at the same time,

we must conclude that such a fire-using facility was of a highly mobile nature. At the same time, however, some of them may have been more or less permanent hearths. The distribution of these features also overlaps with two of the block groups(Fig. 238).

Taking together the distribution of all these features, it is possible to identify three groups (Fig. 239). From the east, they are labeled Unit No. 2, No. 3, and No. 4. Unit No. 2 is composed of only stone clusters and stone heaps, with almost no lithic waste, and probably had a special function. Units No. 3 and No. 4 are bacically similar, but an important difference is that one has pits and the other does not.

Study of Nodular Material

Reconstruction of the original nodules from lithic waste and stone pieces is accomplished mainly by the refitting of the detached fragments. Looking at the distribution of the worked stones which could be reconstructed, it can be seen that there is a closer relationship between blocks within a block group than between different block groups. This is another indication of the validity of the unit as a unit of analysis (Suppl. Fig. 24).

Furthermore, looking at the distribution of lithic types in the nodular material, a supply-and-demand relationship of lithics was found between the small-medium blocks and the large blocks. That is, lithic manufacture took place mainly in the large blocks, and tools and blanks were brought into the small-medium blocks to be used. This relationship was most typical of Unit No. 4. Thus the large and small blocks which were connected by such a relationship were also grouped into units for analysis (ex. 14:17, 15:17, 16:17 blocks). As a result, it was found that Unit No. 4 in fact contained four of these "supply-and-demand" units.

Settlement Pattern

What are the characteristics of these various types of units? First of all, from the sharing of nodules seen among the blocks, it is believed that the remains seen in K 2 period II were abandoned at roughly the same time and that they composed a settlement. And if these remains can be grouped into consistent units, it is natural to assume that such units correspond to household units, the smallest unit of a settlement. Here it is believed that all of the material from period II is part of an intermittently occupied settlement (by the same group of people) and that the units corres-

pond to households. However, Unit No. 2 has a very different content from the other units and cannot be considered a household unit. It is surmised that Unit No. 2 had a special function in the settlement. Units No. 3 and No. 4 are similar in content (chart 55) and also have a constant relationship in terms of shared nodular material with each other, indicating at least partial dependence on each other.

How should we interpret the small-scale units observed within the household units? The key to this probably lies in a consideration of the lifestyle generally thought to have existed in those times. That is, we must keep in mind the temporary nature of facilities in a repeatedly occupied site. Even though the same location may be returned to, it is hard to believe that dwellings and work places would occupy exactly the same spot. It is also equally hard to imagine that their relative locations would be randomly changed. The most natural interpretation is that small changes and shifts were made in the location of facilities with every new occupation. Evidence to back up this interpretation is the relatively equal content of small-scale units defined by the existence of a supply-demand relationship, which probably represents a few occupations. The original household units, most easily identified visually and in analysis, are the result of the accumulation of these small-scale units.

Household units were formed as a result of intermittent and repeated use of the same locale by at least two or more households. Besides the household unit, which was their base of activity, they also possessed a communal space in the settlement (Unit No. 2) and were at least partially dependent upon each other. Taken together, they made up the settlement seen in the Knife Culture period II of Layer 2b.

Overview of the Settlement

What was the spatial layout of the settlement (Fig. 239)? Let us view this in terms of its relationship to the topography. The site extends from the east slope to the terrace. About 10 meters to the south is a shallow valley, coming from the east, with an elevation difference of 1 meter and length about 30 meters (Fig. 2; pl. 2).

First of all, Unit No. 2 is situated on the east scarp, running north to south. It is believed that ritual activities took place here in connection with food preparation. Directly to the west of this is an area thought to have been used to treat animal skins, although there is a possibility that it may have been a third household unit.

Southwest are Units No. 3 and No. 4. Both have similar spatial arrangements: large blocks which are mainly lithic manufacturing sites to the east, and "consumer" blocks (small-medium blocks) to the north and west. From the arrangement of the blocks it is possible to estimate the living area as being northwest of the household units. It must be noted that much evidence of fire was found in this area.

In this way, at the household level, a spatial arrangement open to the southeast with respect to the dwellings is hypothesized, and as an extension of this, the settlement seems also to be oriented towards the east or south. This layout follows the edge of the scarp, from the opening to the south valley, and is the result of the limitations of the topography.

Transitions in Settlement Patterns

Transitions in settlement structure and an overview of the settlement for each cultural period will be described as we have reconstructed it, following the procedure described above for K2 period II. First, in the Knife Culture period of Layer 3 (K3) at least four households occupied this location. Each household unit is composed of multiple blocks of various sizes, but there is little evidence of interaction between blocks, as observed through nodular analysis. Although there are differences in block content composing the different household units, the household units as a whole were similar in nature to each other.

Stone heaps and clusters here surpass those in other culture layers in both quality and quantity. Although they are located close together, the stone heaps can be individually distinguished, which is one characteristic of this culture period.

As a settlement, each household unit is oriented toward the south or east (Fig. 325). The presence of material from different household units which can be fitted together, and the sharing of nodules, was not the case for either lithic waste or stones (Suppl. Fig. 34) and indicates they were isolated from each other.

In Layer 2b, Knife Culture (K2) period I, only one household unit was present (Fig. 239-1). The composition of the household unit is similar to that of Layer 3, but the large-scale manufacturing blocks had a richer content.

In this layer, the number of stone heaps and clusters decline, and their distribution overlaps with lithic clusters.

The single household unit is open to the east. The center of the settlement was probably more north, in an area of the site which is disturbed, so that a general view of the settlement is impossible.

In period II, existence of at least two households was deduced (Fig. 239- 3, 4). As described in detail above, a characteristic is the sharing of a relatively large number of nodules both inside and outside the household unit. Analysis of the unit structure of this period revealed the dual structure of the household unit. Also, the overlap of facilities, such as stone heaps, stone clusters, concentrations of reddened sandstones and pits, with the household unit is probably an indication of the lifestyle of this period. Further, the uneven distribution of locations with special functions such as Unit No. 2, and of pits, indicates the possibility of the development of a functional division of space within the settlement. The settlement is open toward the south or east, and is thus strongly influenced by the topography.

In period III, three or more household units were identified (Fig. 239- 6, 7, 8). At this stage, a major change in household unit structure can be seen. Until now, units were composed of large, medium, and small blocks, with varying lithic assemblages. Here, although blocks were of various sizes, the assemblage content of the blocks began to resemble each other. Also, the sharing of nodules between blocks and between units declined again, and blocks were isolated (Suppl. Figs. 13, 24). Stone clusters decreased in size and frequency, and each cluster was associated with a block and overlapped in distribution. Pits had a close relationship with stone features and occupied a district place, both within the unit and within the settlement.

Although the settlement seems to spread to the north, two household units were arranged so that living and lithic consumption areas were north of the working area, and the settlement was probably also open on the south.

The Southern Point Cluster consisted of two or more households (Fig. 96). Here there is a return to the old pattern of household units being composed of blocks with varying assemblages. There is little direct relation between large and small blocks, but the large blocks are clearly mainly point manufacturing sites. Stone heaps and pits completely disappeared and stone clusters also became rare.

The two household units each have consumption and living areas to the east and

west of the working area, and lack the uniformity seen in previous periods (Fig. 96). Also, there was no sharing of nodules between households (Suppl. Fig. 13). The dominant presence of points in the assemblage could indicate that some may have been hunting groups.

The microblade group is composed of only one household unit. This is composed of three large and small blocks, but there is little interaction between them. It is more complete as a house hold unit if the three blocks are taken together. Stone clusters are still present, but their associations are unknown.

The settlement has only one household unit, and its content is not rich This tendency seems to be a phenomenon shared by southwest Japanese sites of this period. Compared with the Knife Culture, there seems to be a major change in settlement pattern and lifestyle.

The results of analysis may be summarized in the chart below. Allowing for disturvance in some areas, the estimated number of household units is more than one, except for the Microblade Culture. The households were isolated from each other except during the K2 period Ⅱ. K2 period Ⅱ households were mutually dependent to a greater degree than in the other periods, but were indepen-

Transitions of the Elements of Settlement Composition

Culture Period		Characteristic Stone Tool	Features	Household Number	Relationship of Households	Nature of Blocks in Households	Relationships Between Blocks
K3		Knife	Stone Heap; Stone Cluster	4<	Independent	Manufacture + Consumption	Independent
K2	Ⅰ	Knife	Stone Heap; Stone Cluster	1<	Independent	Manufacture + Consumption	Independent
	Ⅱ	*Knife*	Stone Heap; Stone Cluster; Pit	2<	Mutually Dependent	Manufacture + Consumption	Supply-Demand Relationship
	Ⅲ	Knife;Point	Stone Heap; Stone Cluster; Pit	3<	Independent	Manufacture + (Consumption)	Independent
P		Point	Stone Cluster	2<	Independent	Manufacture + Consumption	Independent
M		Microblade	Stone Cluster?	1	None	Manufacture?	Independent

dent in comparison to the inter-relationship between the blocks which compose the household. In looking at the relative degree of interdependency inside and outside the household through the sharing of nodules, this culture can be classified as a "Parallel-type settlement" defined in a previous report (Suzuki et. al. 1982). From the K3 to the K2 period II, and the Point Culture (P), manufacturing and consumption blocks were separate and together they composed the household, but in most of the K2 period III and the Microblade Culture (M) blocks were all of similar content, with production and consumption occurring in the same block. Also, there was little inter-relationship between blocks or units with the exception of the K2 period II. It must be pointed out that there is not necessarily a correspondence between the nature of the lithic blocks and such inter-relationships.

As a whole, the size of the settlement reached the extremes of maximum and minimum in the K2 period II and the Microblade Culture period, respectively. In terms of settlement pattern sequence, the archaeology indicates these four stages: K3 - K2 period I; K2 period II; K2 period III - Point; Microblade.

YAMASHITA, Hideki: Heian Museum of Ancient History; Sanjo-Takakura, Kyoto, Japan

HOSAKA, Yasuo: Yamanashi Prefectural Cultural Properties Office; Yamanashi, Japan

(Translated by Mariko TATSUNO, Institute of East Asian Prehistory; Tokyo and revised J.E. KIDDER, International Christian University; Tokyo)

あ と が き

発掘調査終了の後，直ちに報告書の作成にかかってすでに三ケ年になる。遺跡の内容の豊かさに反して，当初の予算的な見通しの不明さと人手不足，加えて編集の不手際もあり，整理作業の進行・展開は必ずしも円滑には行かなかった。これらのために，本格的な整理報告を中央区に限らざるを得なかったことは心残りである。中央区以外の整理報告は，今後の我々の研究の一環として進めて行きたいと考えている。

報告書の作成に当っては，遺物・遺構の出土状態の提示と分析を主，遺物の分析を従としたが，紙数の関係からそれらさえ十分には行えなかった。報告書から遺物台帳を削除したのも，こうした事情による。また，最も基礎的な情報をできる限り盛り込むように努め，分析結果については不可欠なものを除き図等は省略した。

報告書の主眼は，集落構造と景観の復原に置いた。すでに1980年以来同様のテーマの下にいくつかの報告書を成して来たが，それらに対する批評も様々に行なわれている。そのうちのいくつかは我々自身もさらに意を注ぐべきと考えているものである。今回の報告書が必ずしもそうした批判に十分に応え，また一方で従来の方向性をさらに深めるものとなり得たとは考えていない。しかしながら，従来の仮説を検討し，補うべき及ばざる所を再認識できるだけの材料は提供できたと考えている。

現状は，まだまだ集落構造が検討できるような新しい資料の増加を待つ段階にありながらも，十分にはそうした展開は見せていない。にも関わらず他方では，それと平行して集落・世帯構造についての各種の仮説の提示が行われている。それらが小野氏の指摘する通り，必ずしも同じ認識の下に一点に収斂しつつあるとは考えられない現状は，研究が初期段階にあるだけに回避のための手段を構じる必要があるように思う。

本書を成すに当っては，数多くの方々から有形・無形の御助力を賜わった。

まず発掘調査に当っては，遠方より労を惜しまず御参加いただいた調査補助員，炎天下の作業に営々として従事して下さった作業員各位の御努力に対し御礼申し上げたい。こうした方々の御尽力なくしては発掘の遂行そのものも覚つかなかったのではと考えると，そうした思いも一際である。作業員の方々についてはあまりに多人数になるため一々御芳名を挙げられなかったが，寄せられた御厚情を心に銘記しておきたい。調査補助員では以下の各位に御助力を賜わった。

相川幹子，Amani Juma Kasinya，五十嵐　彰，石田美代子，市野浩世，出居　博，伊藤雅文，猪俣甲二郎，岩元雅毅，宇佐美明子，大下　明，小川正人，工藤敏久，熊谷俊美，黒坪一樹，小林ゆり，酒井彰子，佐野康雄，沢元保夫，柴崎健太郎，島立　桂，角　宣剛，高井良夫，竹広文明，田中　聡，田村欧盟，千喜良淳，徳永　裕，西岡誠司，新田浩三，原　真一，保坂康夫，松井政信，松谷純一，宮坂直子，柳沢　順，山尾典子，山口卓也，山下淑子，山田隆一，山元　建，綿貫俊一　　（敬称略，五十音順）

また，調査の進行に当っても以下の各位の御協力，御助言を賜わった。

阿部祥人(東京都埋蔵文化財センター)，市川米太(奈良教育大学)，岡本東三(文化庁)，加藤芳朗(静岡大学)，潮見　浩(広島大学)，鈴木公雄(慶応義塾大学)，鈴木幸朗，鈴木久雄，瀬川裕市郎(沼津市歴史民俗資料館)，辻　誠一郎(大阪市立大学)，土屋光永(磐田北高等学校)，鶴丸俊明(日本女子大学)，戸沢充則(明治大学)，平野和男(磐田市郷土館)，向坂鋼二(浜松市立博物館)，森　伸一(磐田南高等学校)，山田治(京都産業大学)，山村　宏(遠江考古学研究会)　(所属は当時，敬称略，五十音順)

整理では資料が厖大であっただけに，個々の作業は単調で長期に及ぶことが多かった。そうした中でも，会社勤めの合間をぬって石器の接合作業を続けられた徳永　裕氏，礫の水洗・接合作業を主導していただいた西村(上住)直子・児玉浩見・山村恵美氏，図面作成と整理全体の進行を助けていただいた保坂(山尾)典子・藤田有利子・花田八千代・鷲田重美・横田千恵子・柳沢　順・神原(山下)淑子・井上千津・田中智子・宮内智加氏，さらには遠方にありながら石器の実測に手を割いていただいた石田美代子・松谷(相川)幹子・市野浩世氏など，特に無理をお願いすることが多かった。

整理作業の進行に際しても，以下の各位に御協力と御助言を賜わった。

阿子島　香(東北大学)，安蒜政雄(明治大学)，岡村道雄(東北歴史資料館)，金山喜昭(国学院大学)，小薬一夫(東京都埋蔵文化財センター)，鈴木敏則(浜松市立博物館)，副島和明(長崎県教育委員会)，竹岡俊樹，田島龍太(唐津市教育委員会)，橘昌信(別府大学)，平口哲夫(金沢医科大学)，藤野次史(広島大学)，矢島國雄(明治大学)　(所属は当時，敬称略，五十音順)

各種分析関係でも多くの方の手を煩わせた。静岡大学の加藤芳朗先生には現地にも足をお運びいただき，様々な御助言を賜わると共に，数多くの資料を分析していただいた。京都大学木材研究所の島地　謙・林　昭三先生には，突然のお願いにも関わらず多くの微小な炭化材の同定をお引き受けいただいた。京都産業大学の山田　治先生・小橋川　明氏には^{14}C年代測定を，奈良教育大学の市川米太先生にはサーモルミネッセンス年代測定をお願いした。礫の受熱分析では，㈱エリオニクス及び同社の大井英之・原田克正氏に測定をお願いし，結果は花園大学教授であると同時に本博物館の非常勤講師でもある上田健夫先生に解析していただいた。土壌中の炭化物片については，大阪市立大学の南木睦彦氏に鑑定の労をお取りいただいた。

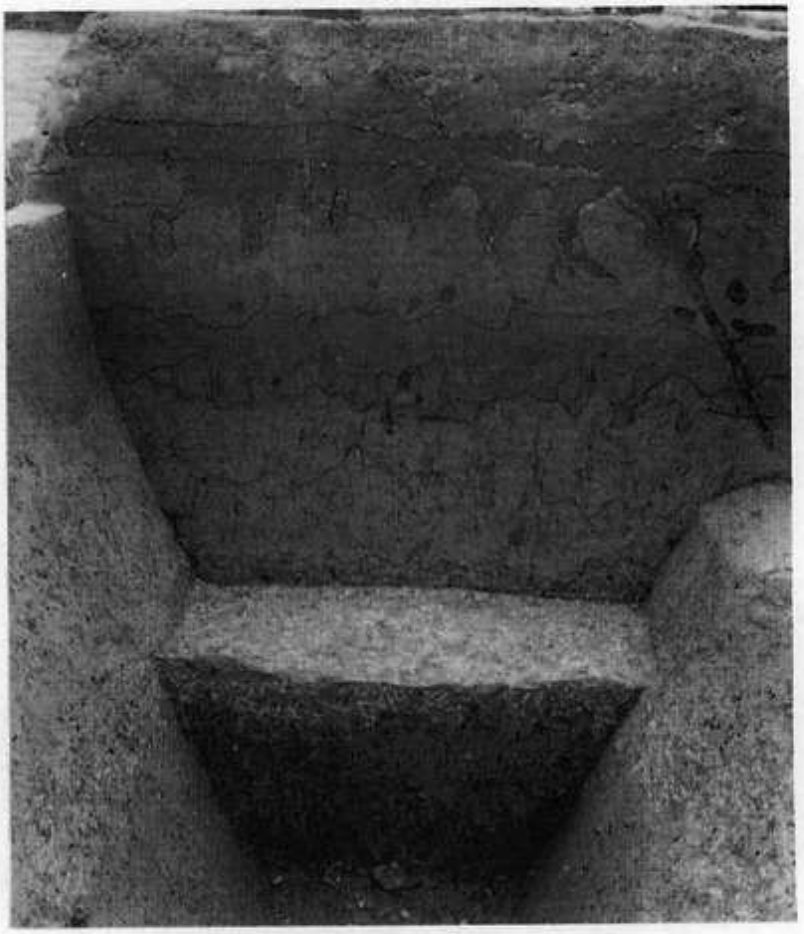
また，英文要旨の作成に当っては，東アジア先史研究所と辰野万理子氏の手を煩わし，さらには国際基督教大学のJ.E.キダー先生に御校閲いただいた。

『野沢遺跡』に続き，本書の題字も山梨県在住の保坂香渓氏に御揮毫いただいた。同氏は昨年甲府市長賞に，今年は山梨県議会議長賞の栄誉に耀いたそうである。常日頃から親交を結ばせていただいている我々としても，心から御祝い申し上げたい。

この他，御芳名を挙げられなかった人々も合せて，数多くの御援助と御協力に対し衷心より謝意を表する次第である。

図　版

遺跡遠望(東から)

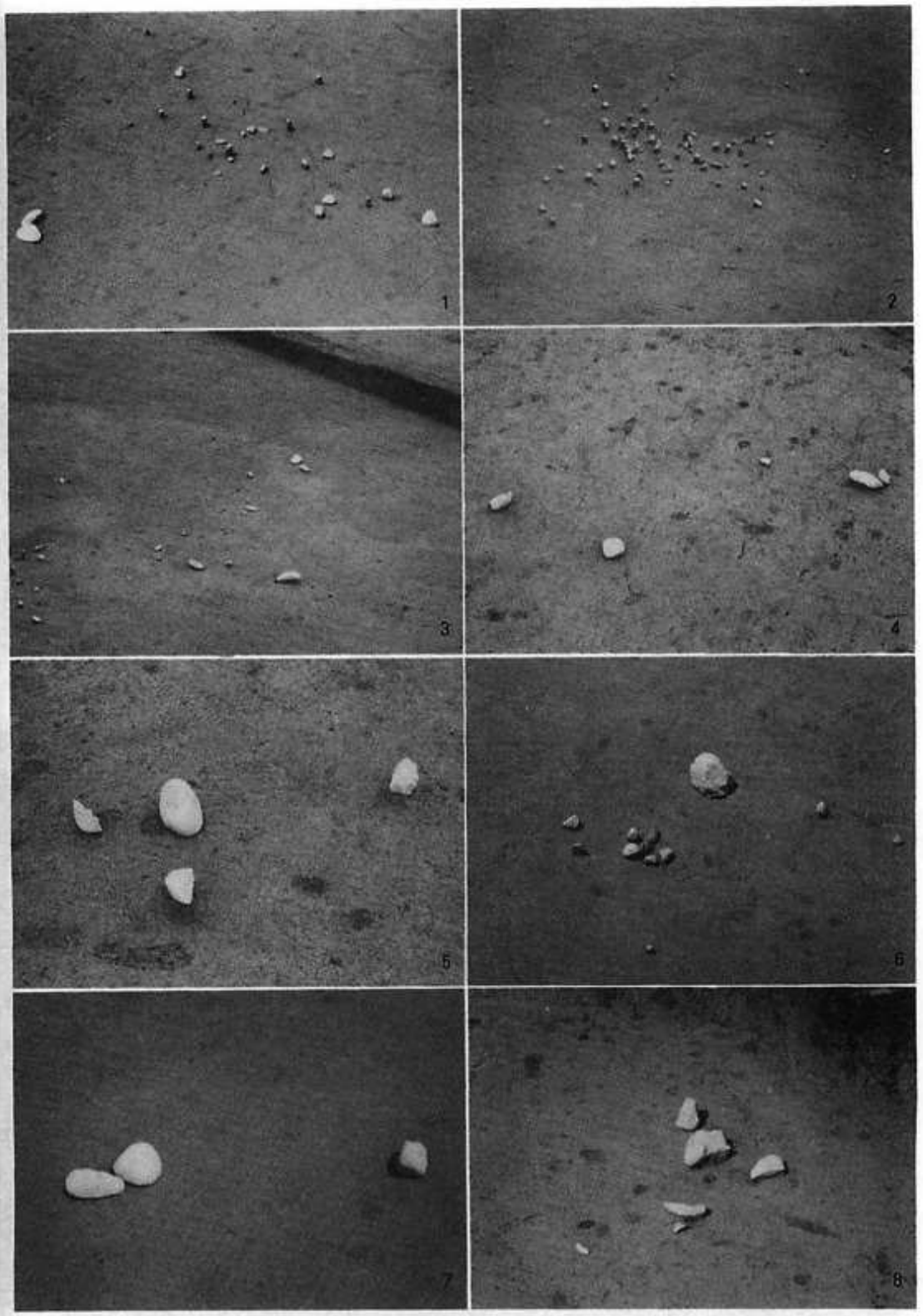


土層断面(1H24区)

図版　2

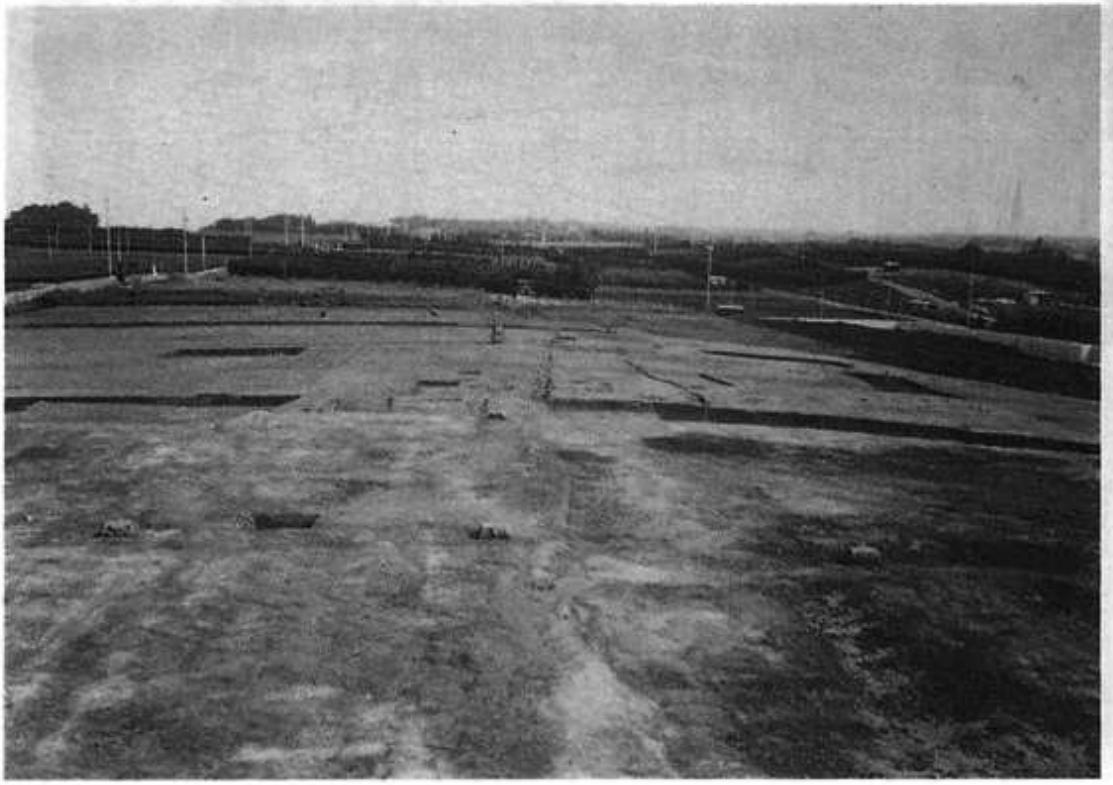
3 I・4 I区浅谷(西から)(第2 b層)

第41礫群，第5・6配石(第2 b層)

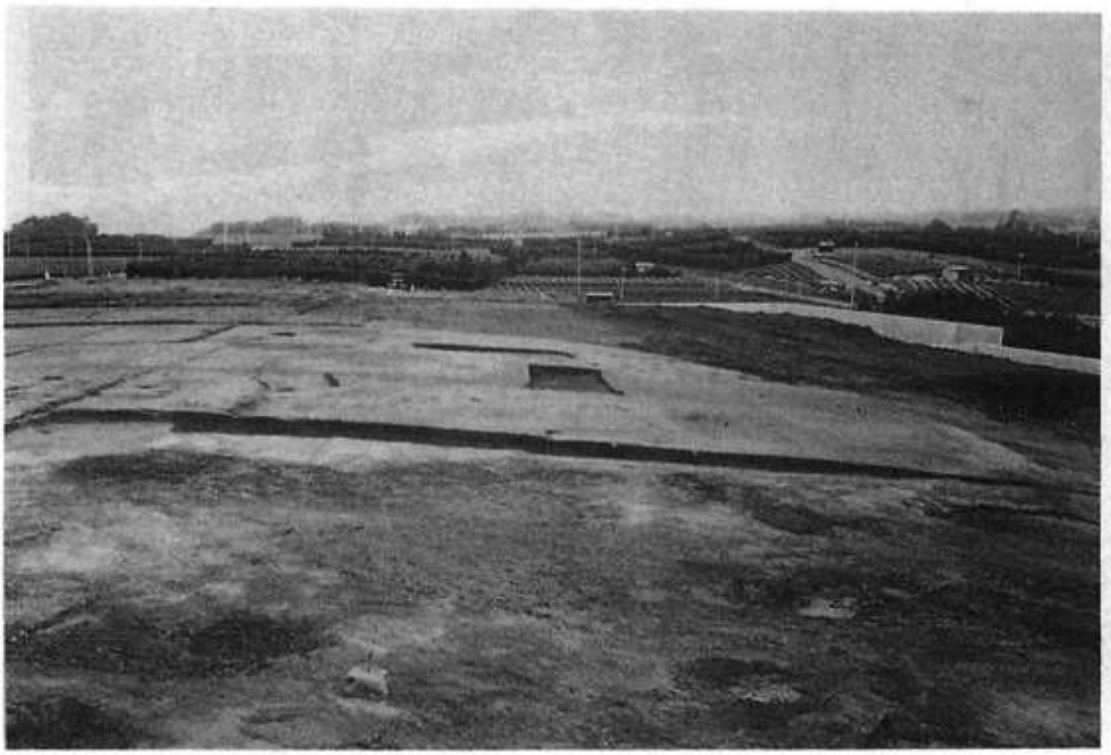


1．第5礫群，第11・16配石　2．第41礫群　3．第4・6配石　4．第7配石
5．第9配石　6．第10配石　7．第16配石　8．第44配石　（全て第2b層）

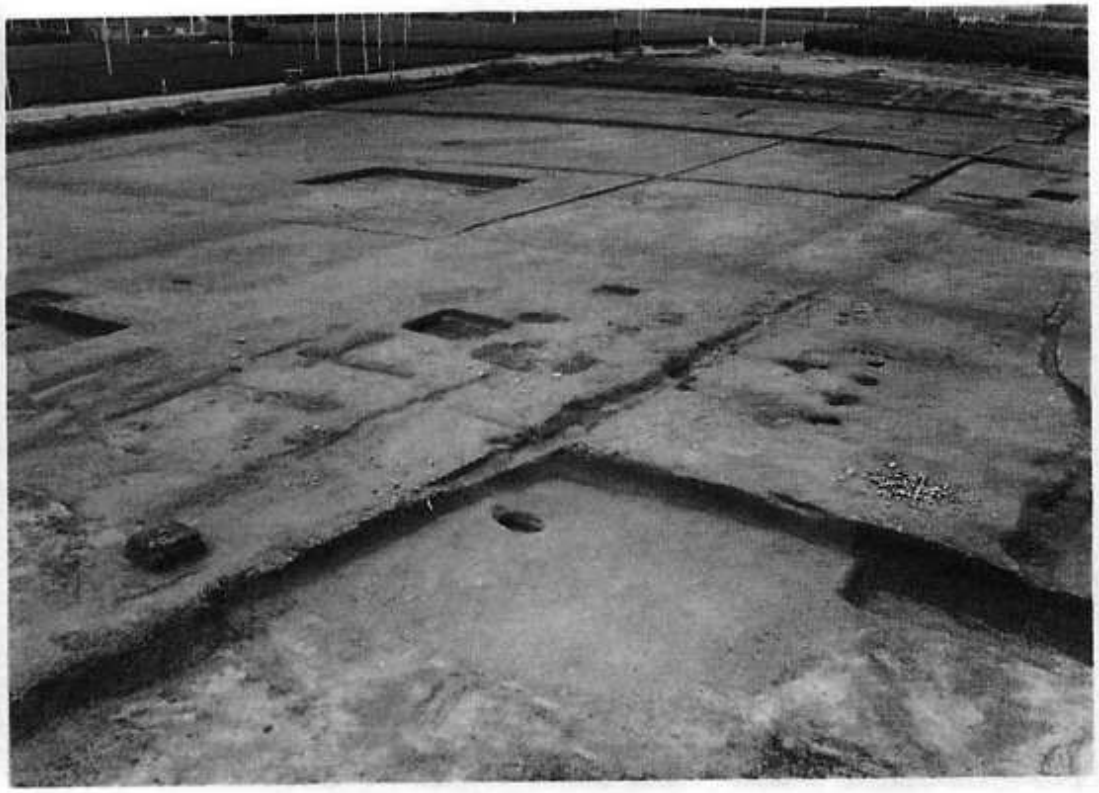
図版 4



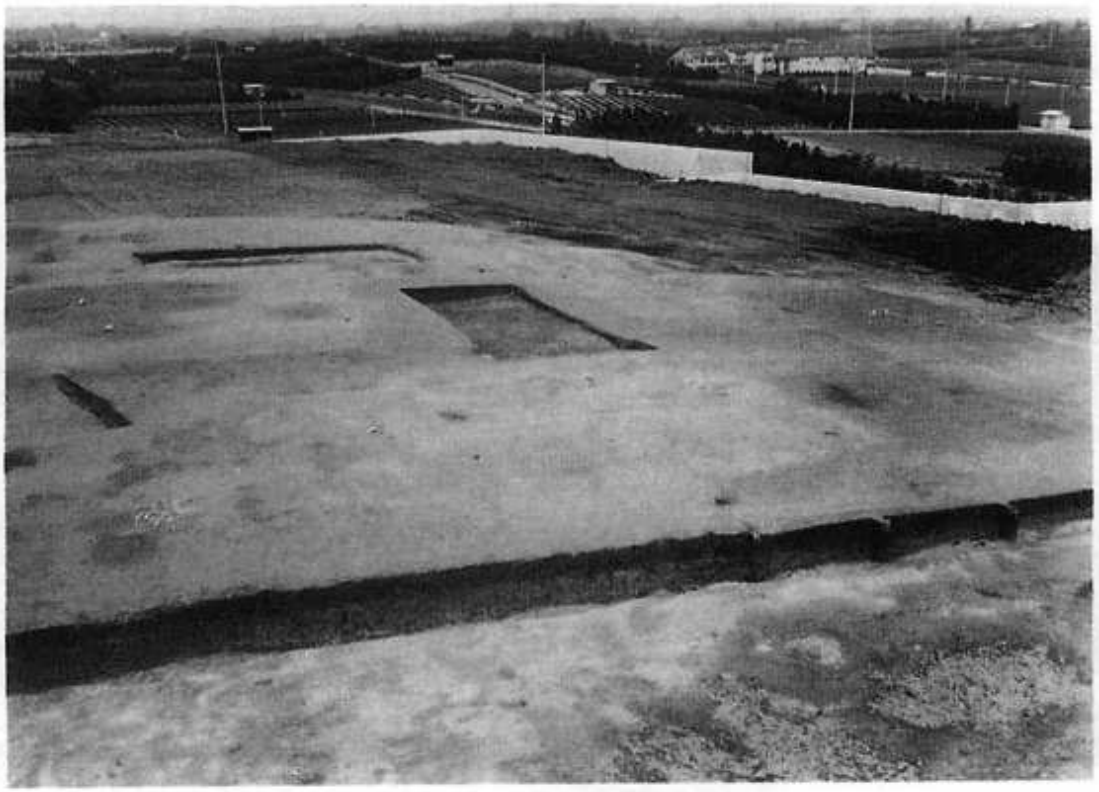
中央区近景(南から中央部)(第２b層)



中央区近景(南から東半部)(第２b層)

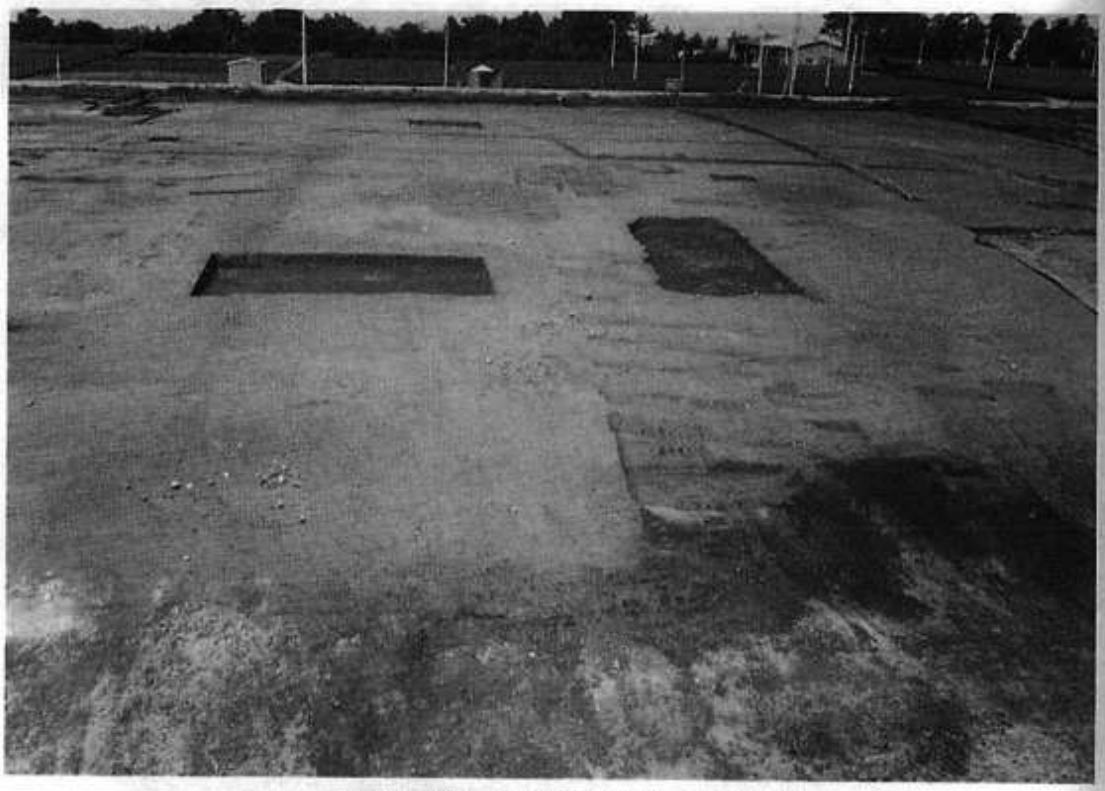


中央区　2G・2H・3H区礫群・配石分布状態(南東から)(第2b層)



中央区　3G・4G・3H・4H区礫群・配石分布状態(南から)(第2b層)

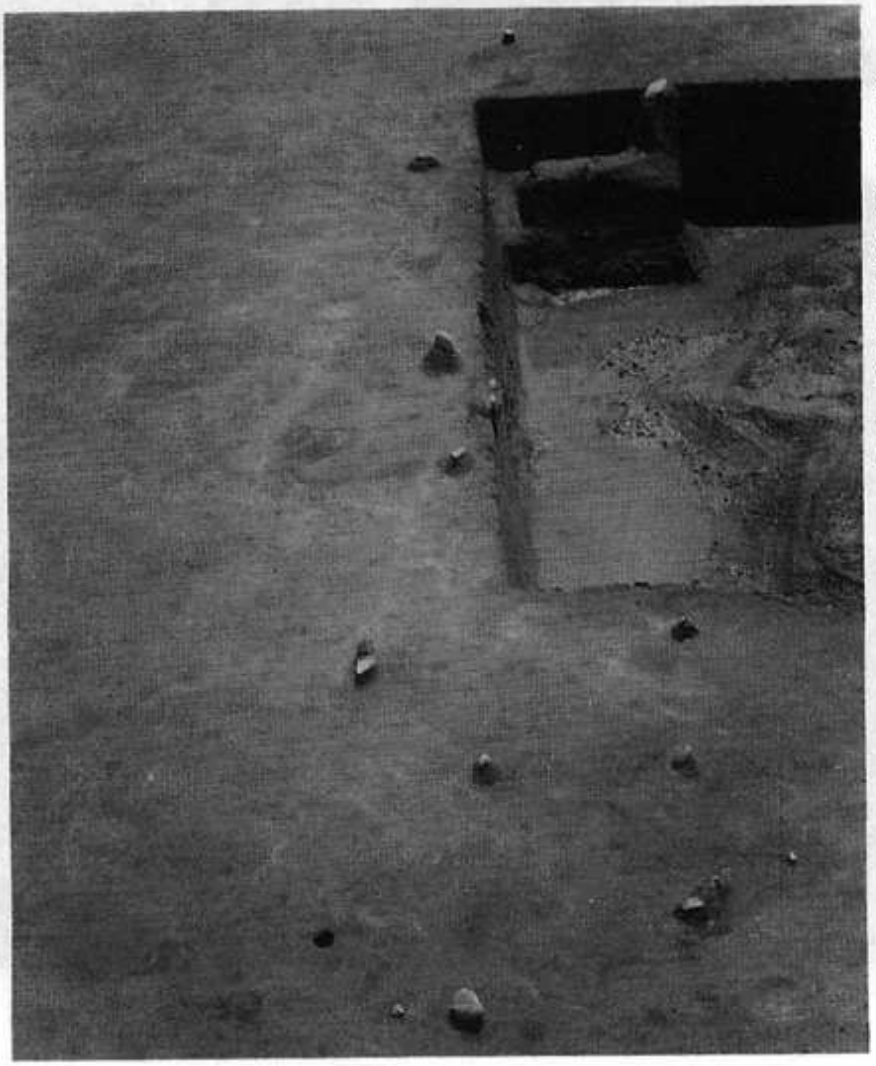
図版 6



中央区　礫群・配石分布状態(東から)(第２b層)

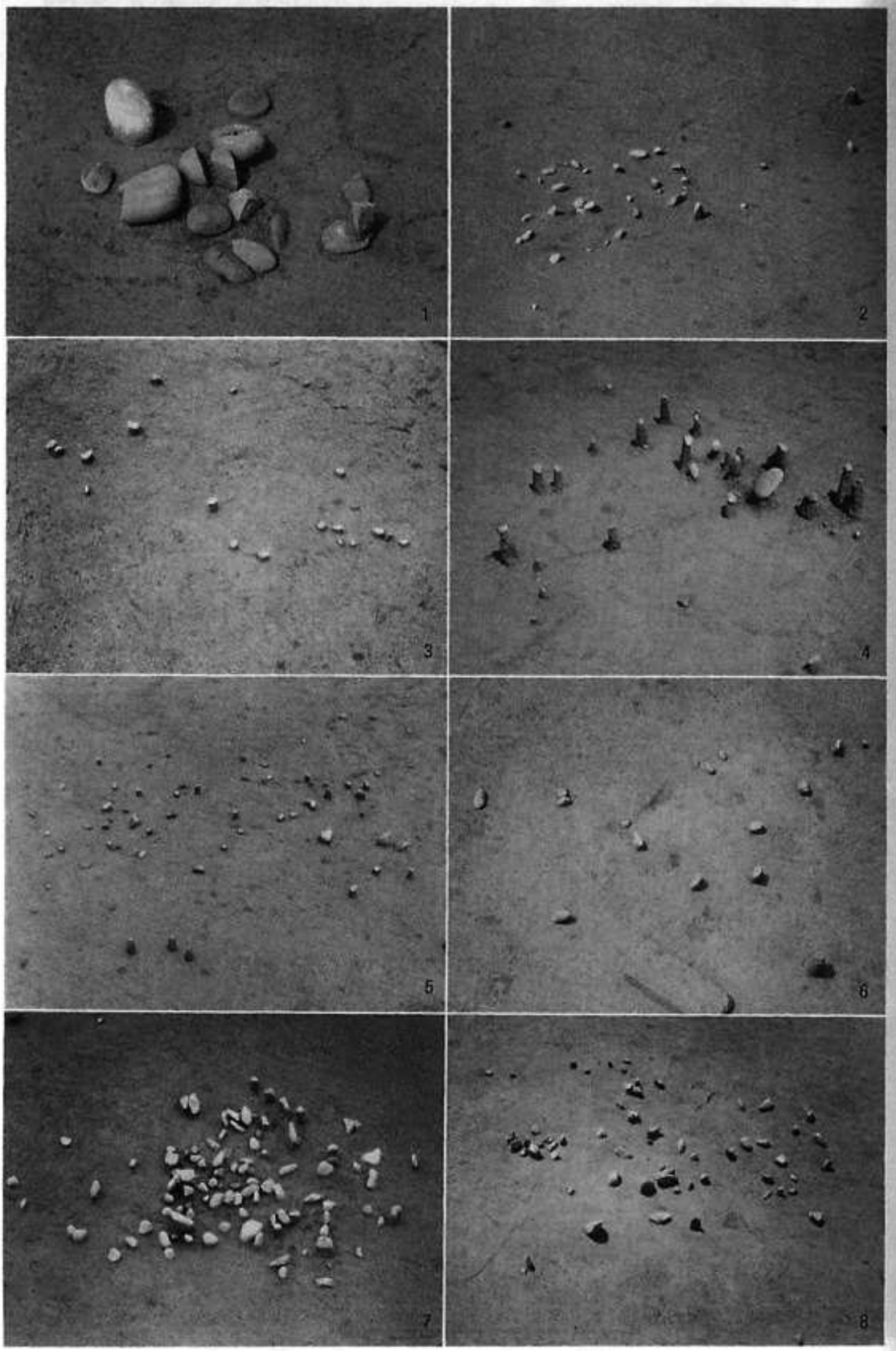
４G区　礫群・配石分布状態(北から)(第２b層)

第30礫群周辺(南から)(第２b層)

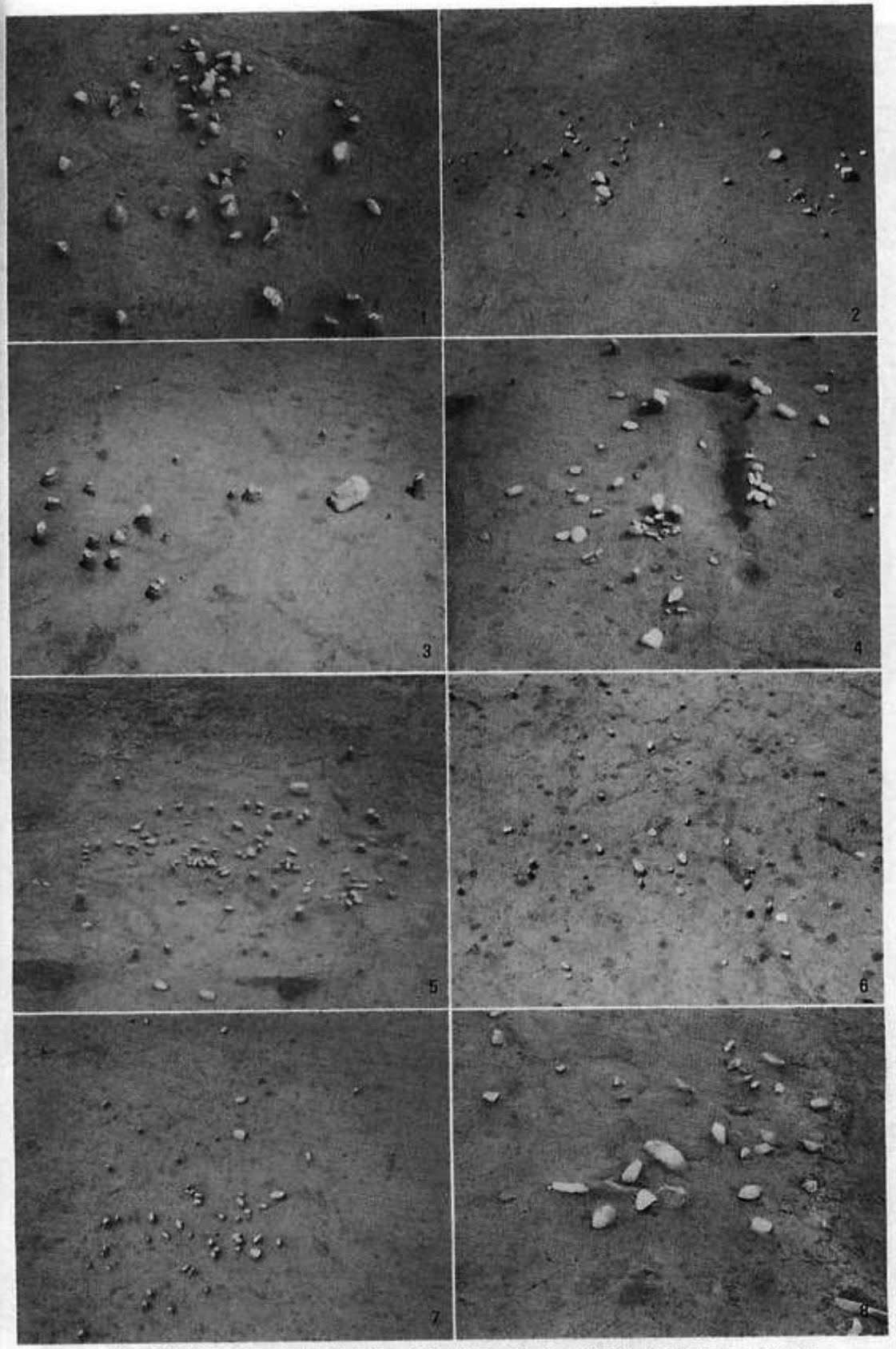


第20・21・22配石(北から)(第２b層)

図版 8

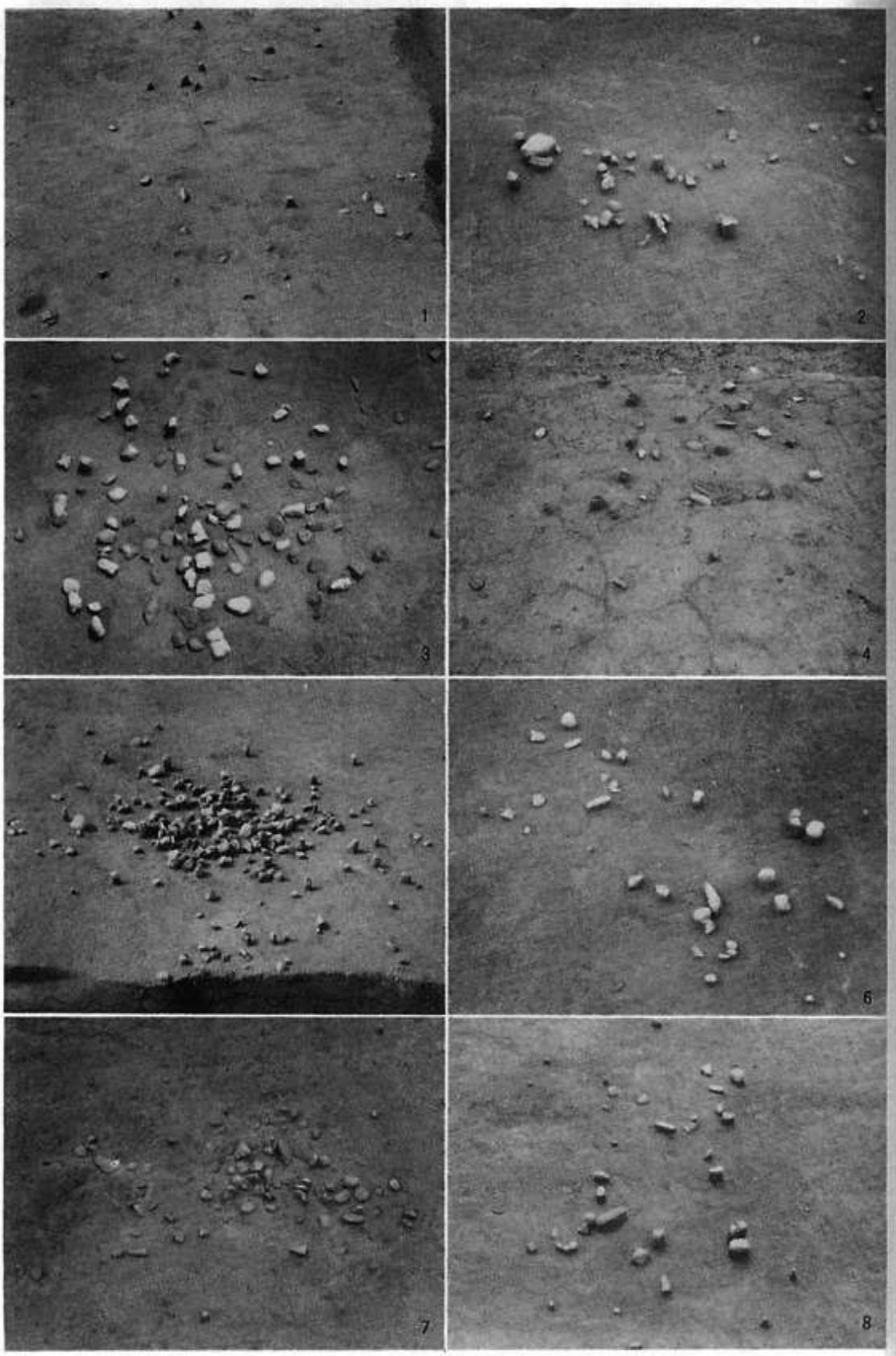


1．第1礫群，第2配石(東から)　2．第7礫群(西から)　3．第8礫群(南東から)
4．第9礫群，第14配石(南から)　5．第10礫群，第15配石(南から)　6．第11礫群(南東から)　7．第14礫群(東から)　8．第15礫群，第23配石(東から)（全て第2b層）

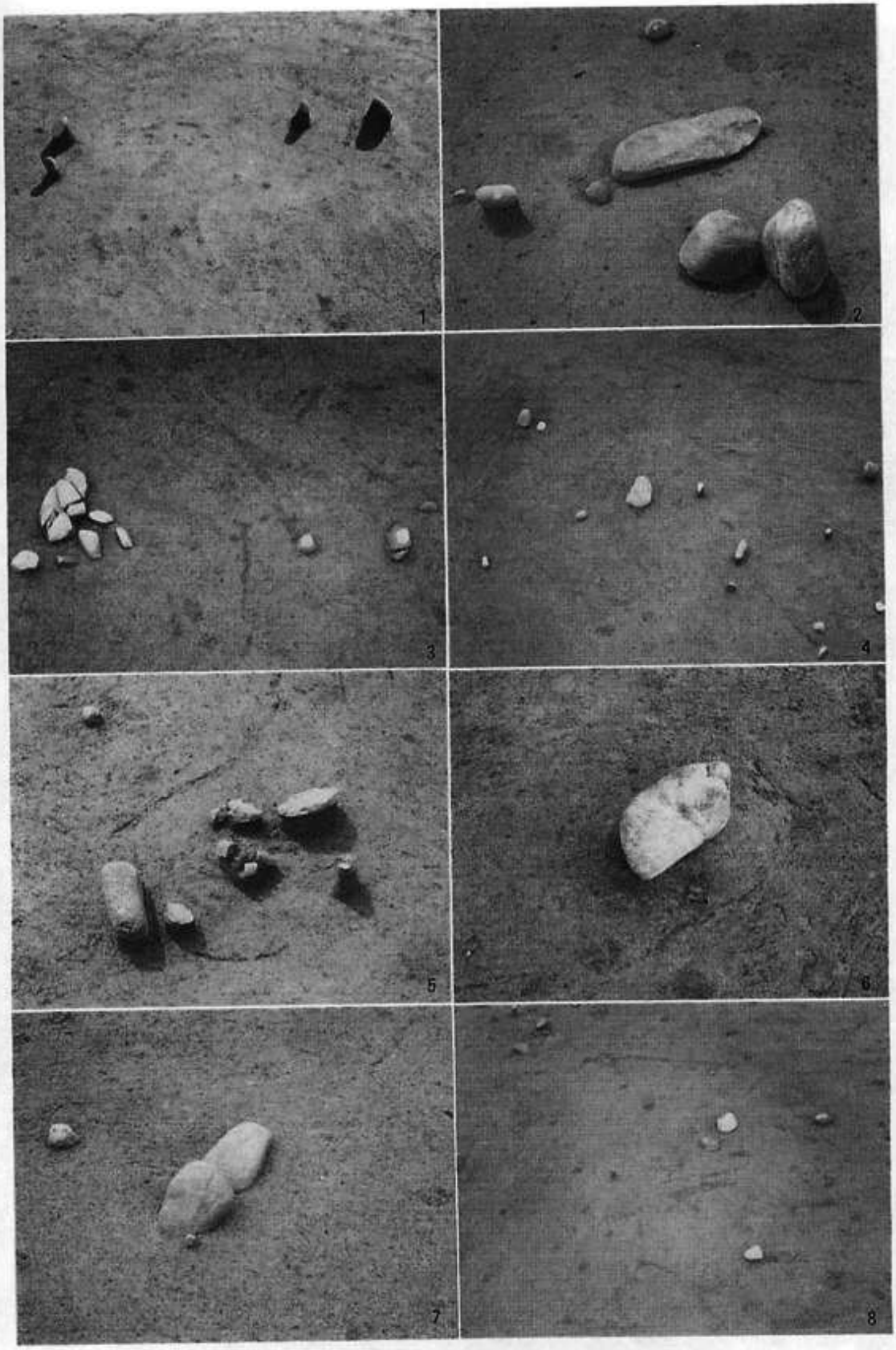


1．第16礫群(北から) 2．第17礫群,第26配石(南から) 3．第19礫群,第28配石(南から)
4．第22礫群(北から) 5．第25礫群,第41配石(北から) 6．第27礫群(南から) 7．第28礫群，第46配石(南から) 8．第31礫群,第49配石と周辺の遺物(南から) (全て第2b層)

図版 10

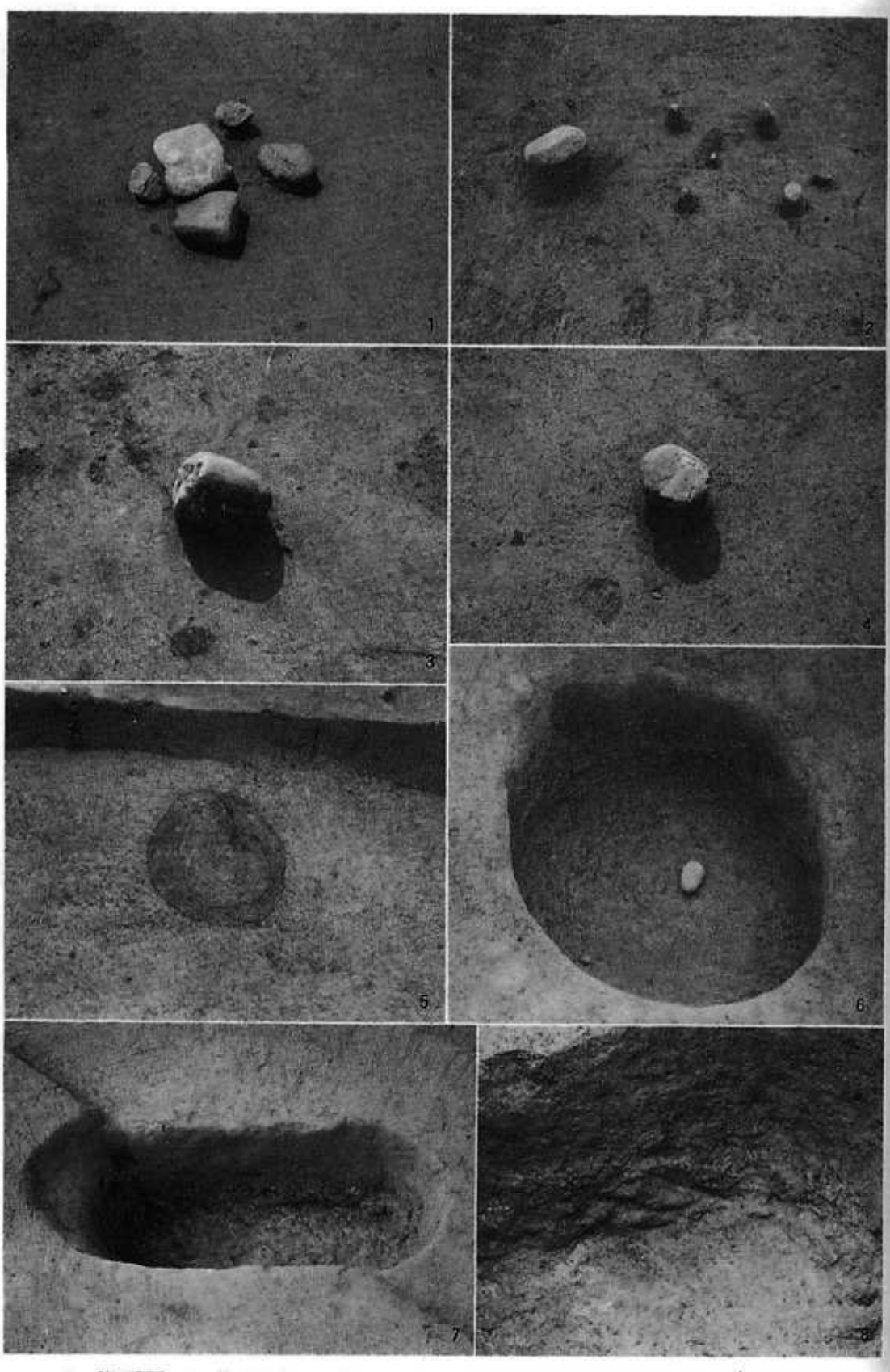


1．第32礫群(北から) 2．第34礫群,第52配石(東から) 3．第35礫群(東から)
4．第36礫群,第54配石と周辺の遺物(北から) 5．第37礫群,第55配石(南から)
6．第38礫群(東から) 7．第39礫群(東から) 8．第40礫群(南から) (全て第2b層)

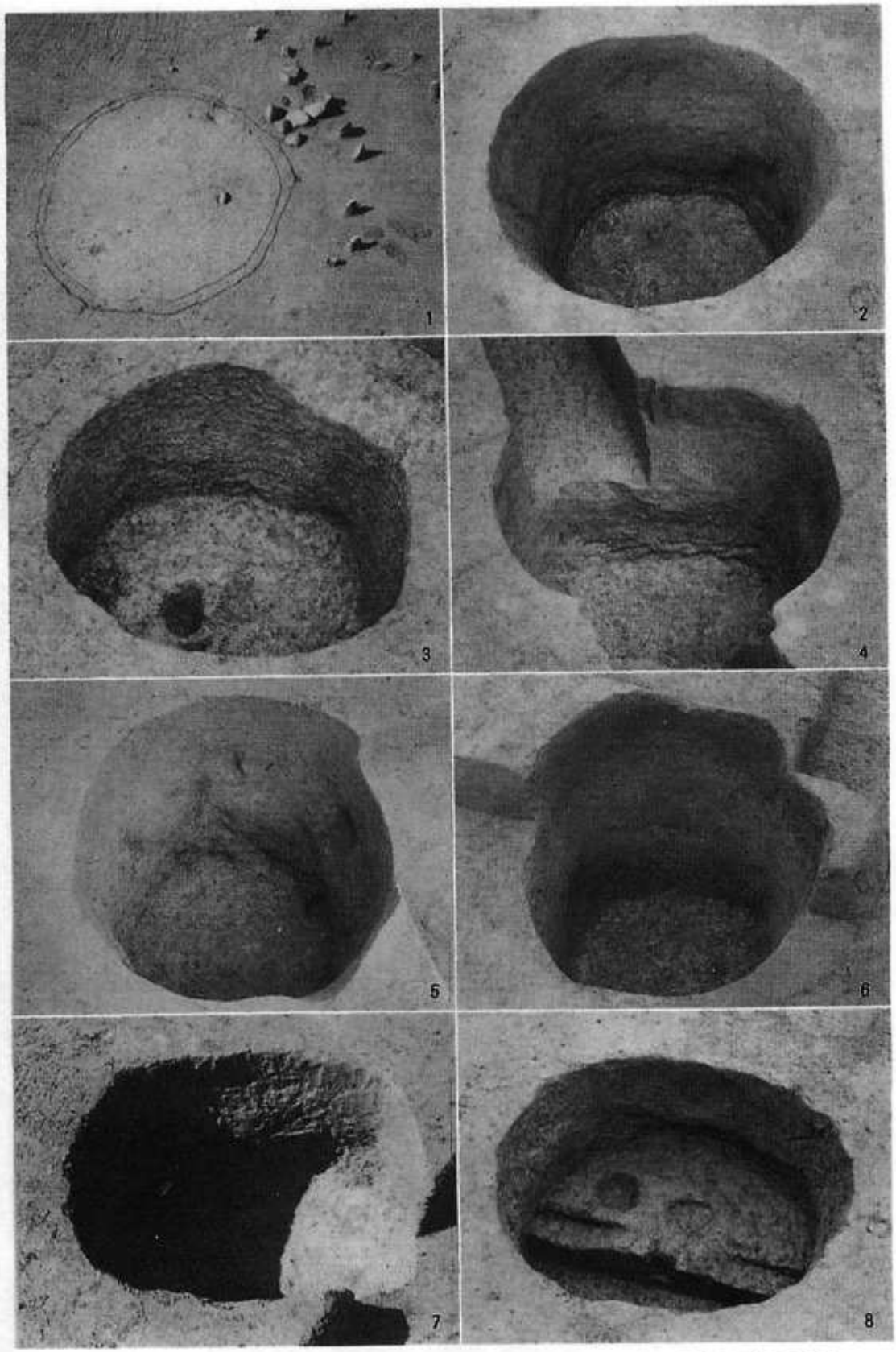


1．第1配石　2．第8配石　3．第13配石　4．第24配石　5．第27配石
6．第29配石　7．第31配石　8．第34・35・40配石　（全て第2b層）

図版 12



1．第38配石　2．第39配石　3．第42配石　4．第43配石　5．第1号土坑検出状態(東から)
6．第1号土坑(南東から)　7．第2号土坑(南東から)　8．第2号土坑底面・壁の掘り方
(全て第2b層)

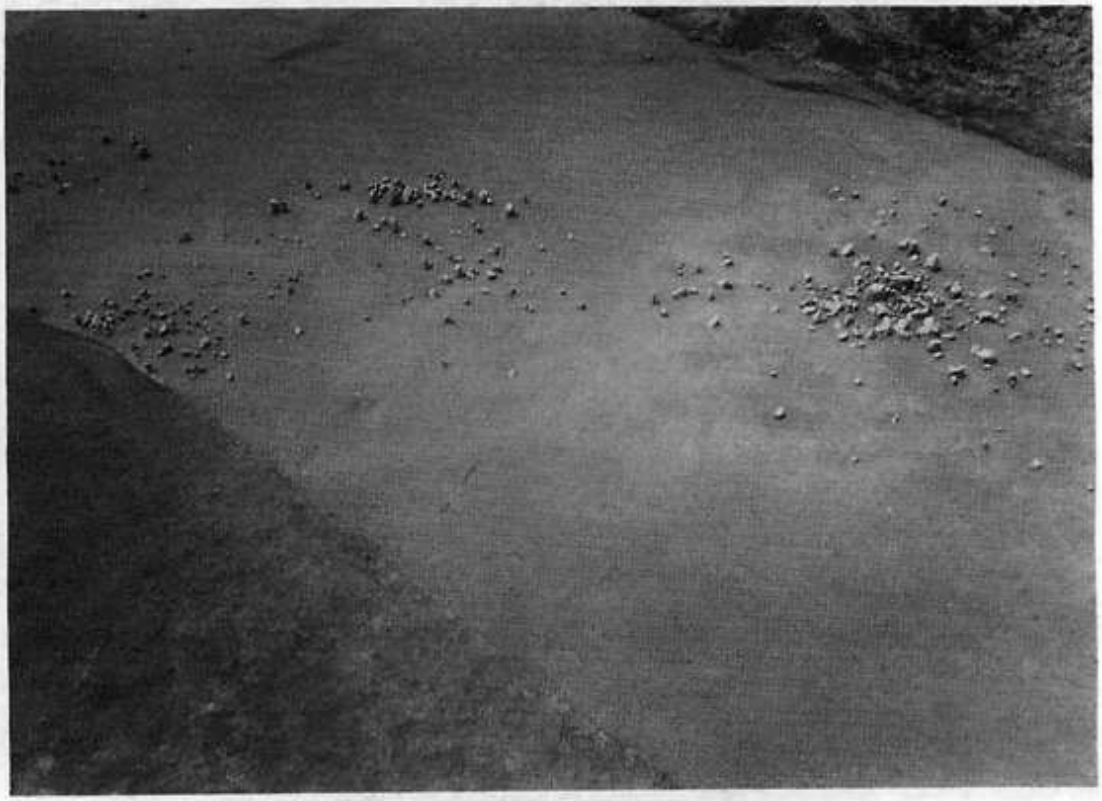


1．第4号土坑検出状態(南から)　2．第4号土坑(南から)　3．第5号土坑(南東から)
4．第6号土坑(南から)　5．第7号土坑(南から)　6．第8号土坑(南から)
7．第9号土坑(南東から)　8．第10号土坑(南から)　(全て第2b層)

図版 14

1．P4aブロック発掘風景(南西から) 2．中央区東半発掘風景(南西から) 3．3G16区敲石出土状態 4．3G16区敲石出土状態 5．3G16区敲石出土状態 6．土坑発掘風景 7．採取土砂の水洗 8．第2層から第3層への掘り下げ,中央区東半(北から)(全て第2b層)

第1・3・4礫群と周辺の配石(南から)(第3層)

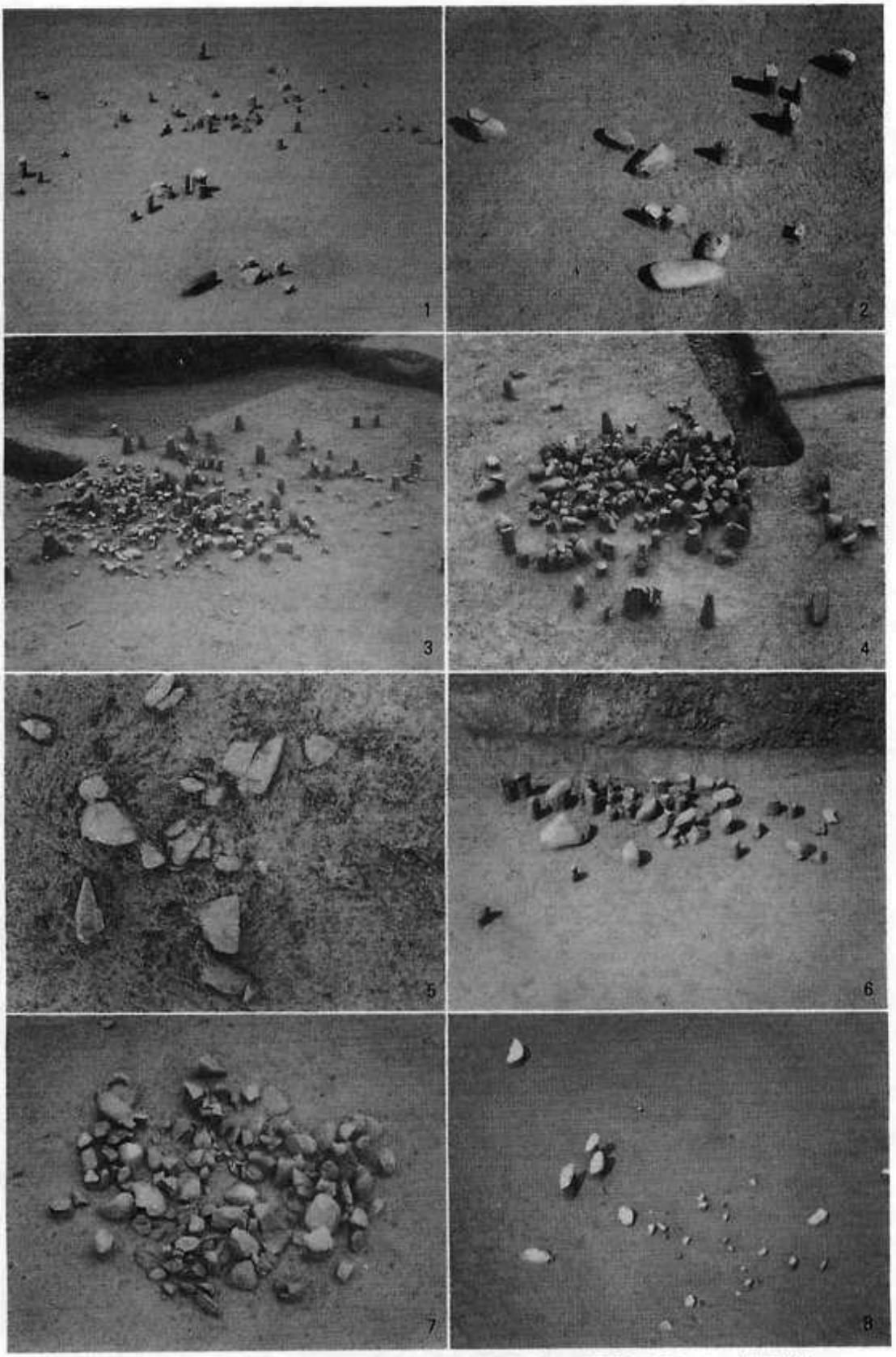


第10・11・12・26礫群と周辺の配石(南東から)(第3層)

図版 16

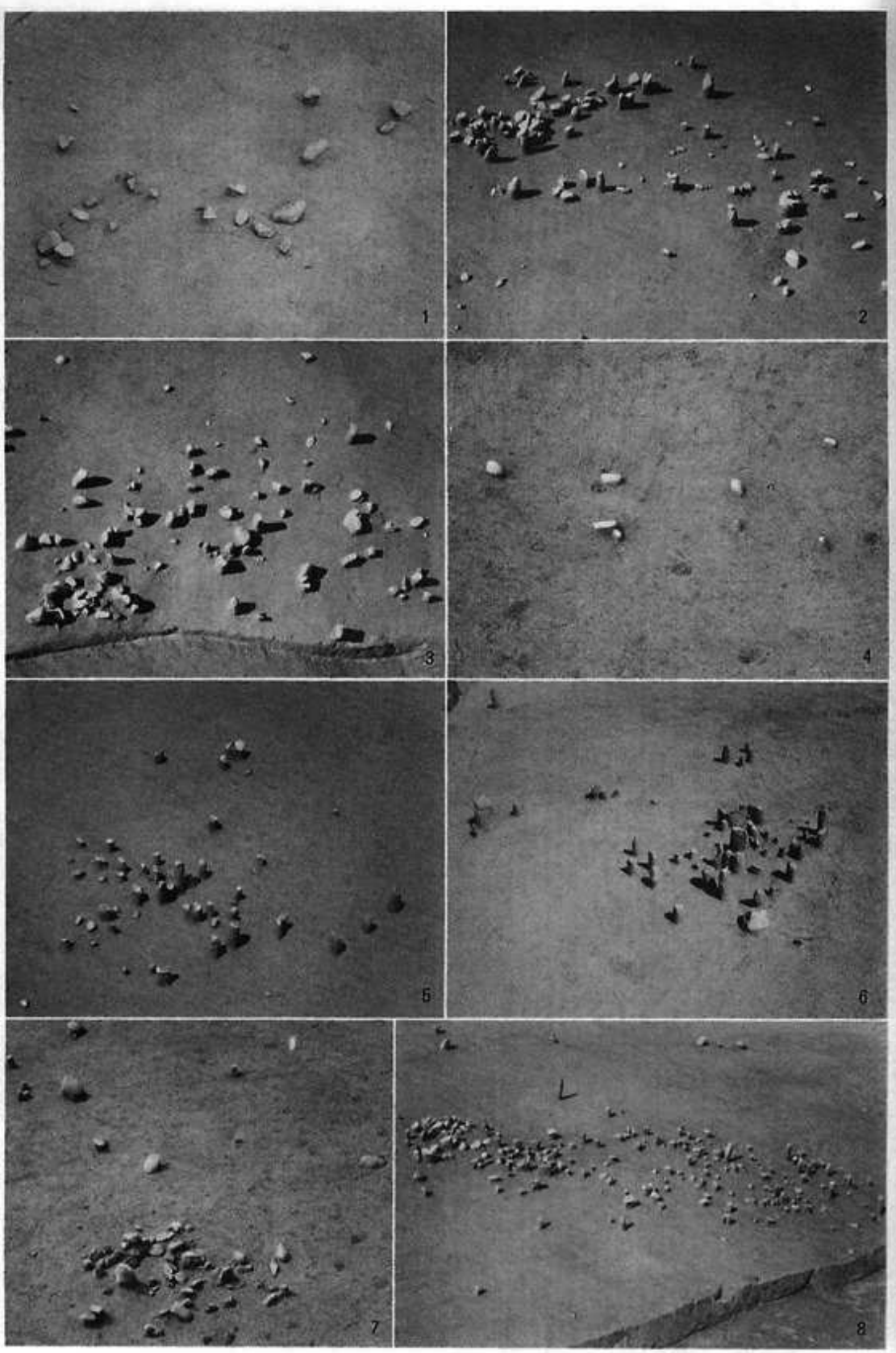
第18礫群と第46・48配石(南西から)(第3層)

第17・18礫群，第48配石(北東から)(第3層)

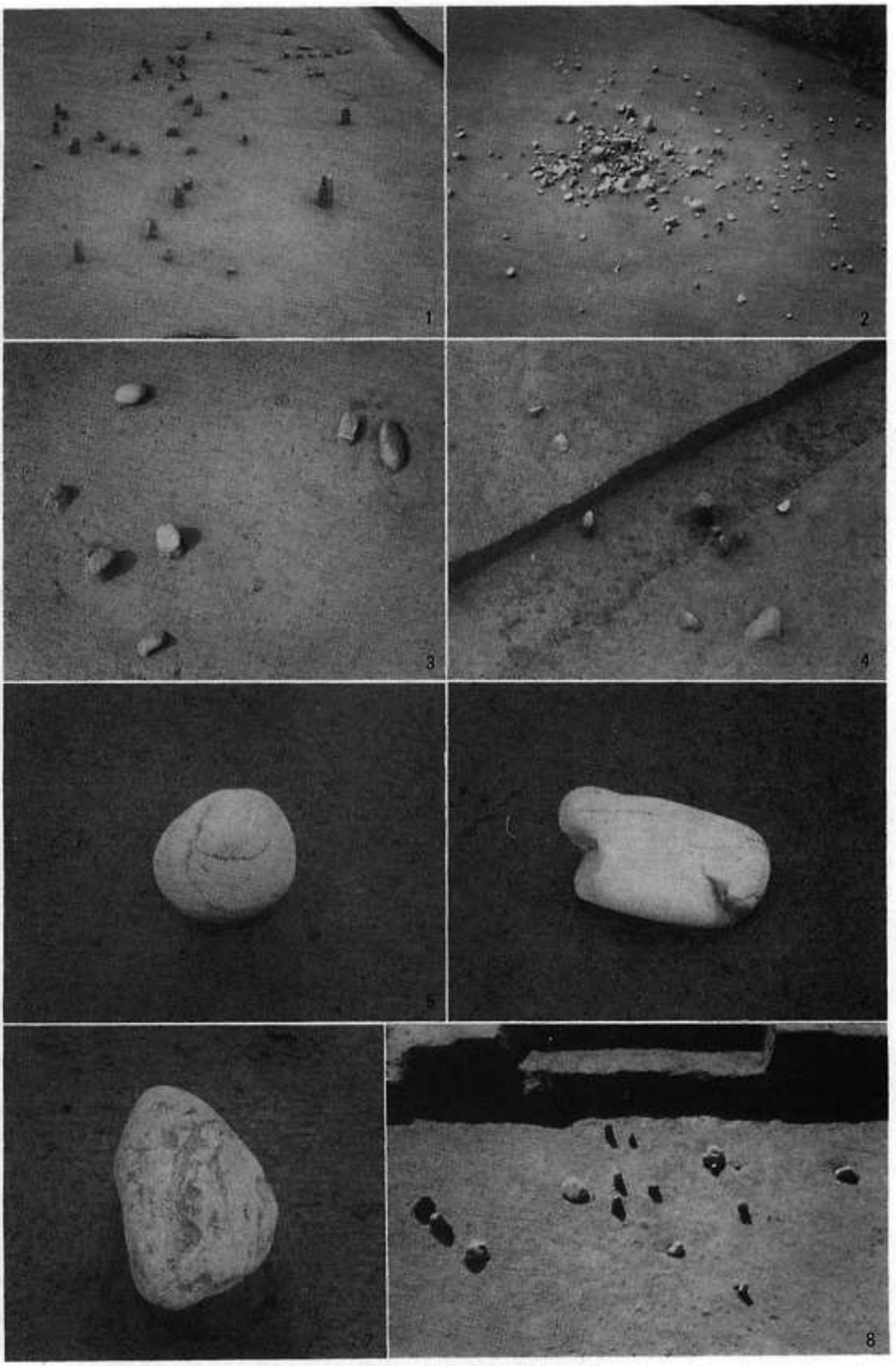


1．第1礫群，第1・2・3配石(南から) 2．第2礫群，第4配石(南から) 3．第3礫群(南西から) 4．第4礫群(東から) 5．第5礫群，炭化物の絡みが著しい 6．第7礫群(南から) 7．第8礫群(南から) 8．第9礫群，第8・9配石(南から) (全て第3層)

図版 18

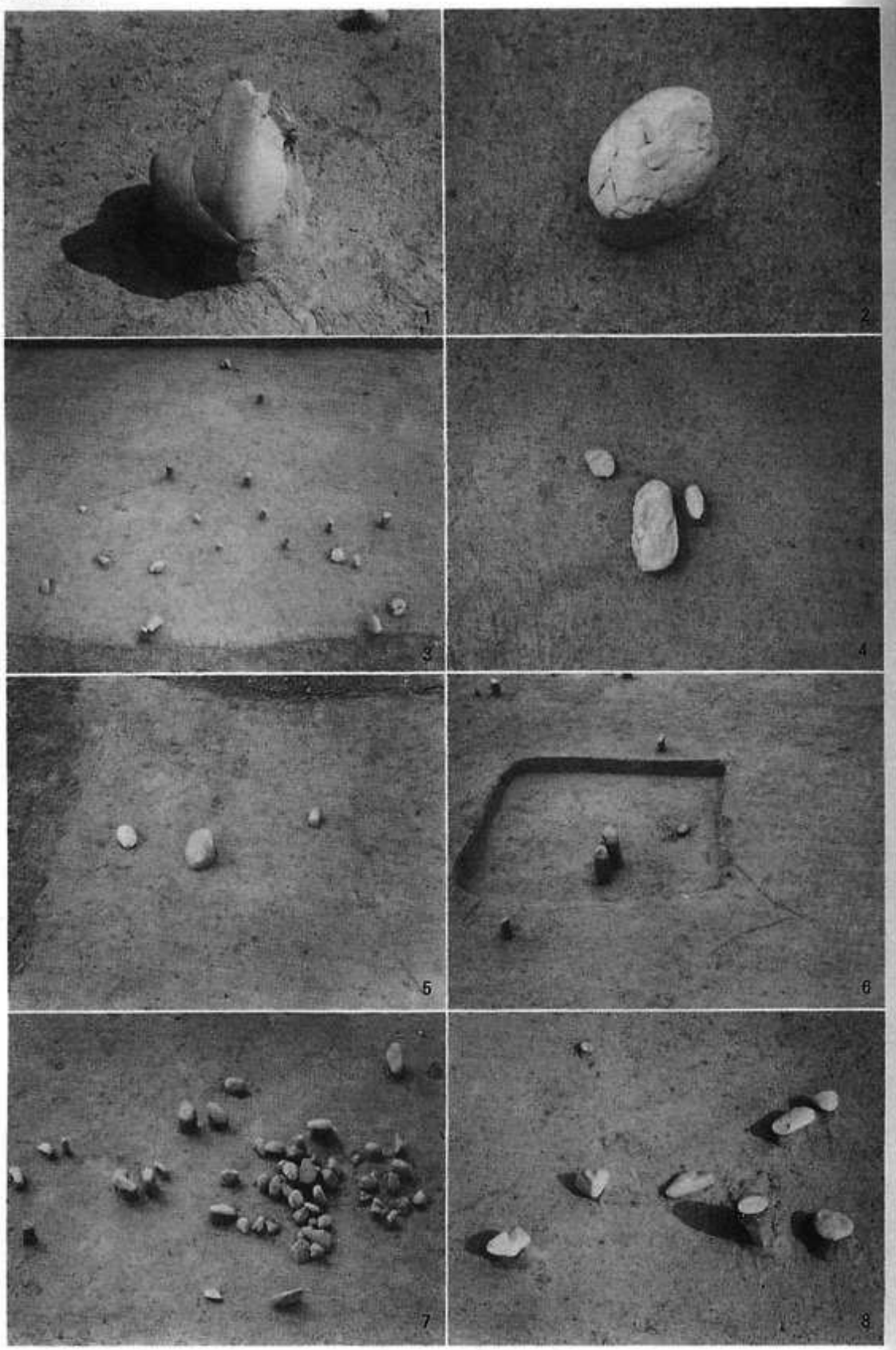


1．第10礫群，第57配石（東から） 2．第11礫群，第14配石（南から） 3．第12礫群（南から）
4．第13礫群，第25配石（北から） 5．第14礫群（南から） 6．第16礫群，第31配石（南から）
7．第19礫群（北東から） 8．第22・23・24礫群，第50・51・52配石（南西から）（全て第3層）



1．第25礫群，第20・55・56配石(南から) 2．第26礫群(南東から) 3．第6配石(東から)
4．第10配石　5．第26配石　6．第27配石　7．第28配石　8．第29配石(東から)
(全て第3層)

図版 20



1．第30配石　2．第33配石　3．第34配石(西から)　4．第35配石　5．第41配石
6．第42配石　7．3 H21区非焼け礫群(北から)　8．2 F19区礫ブロック(全て第3層)

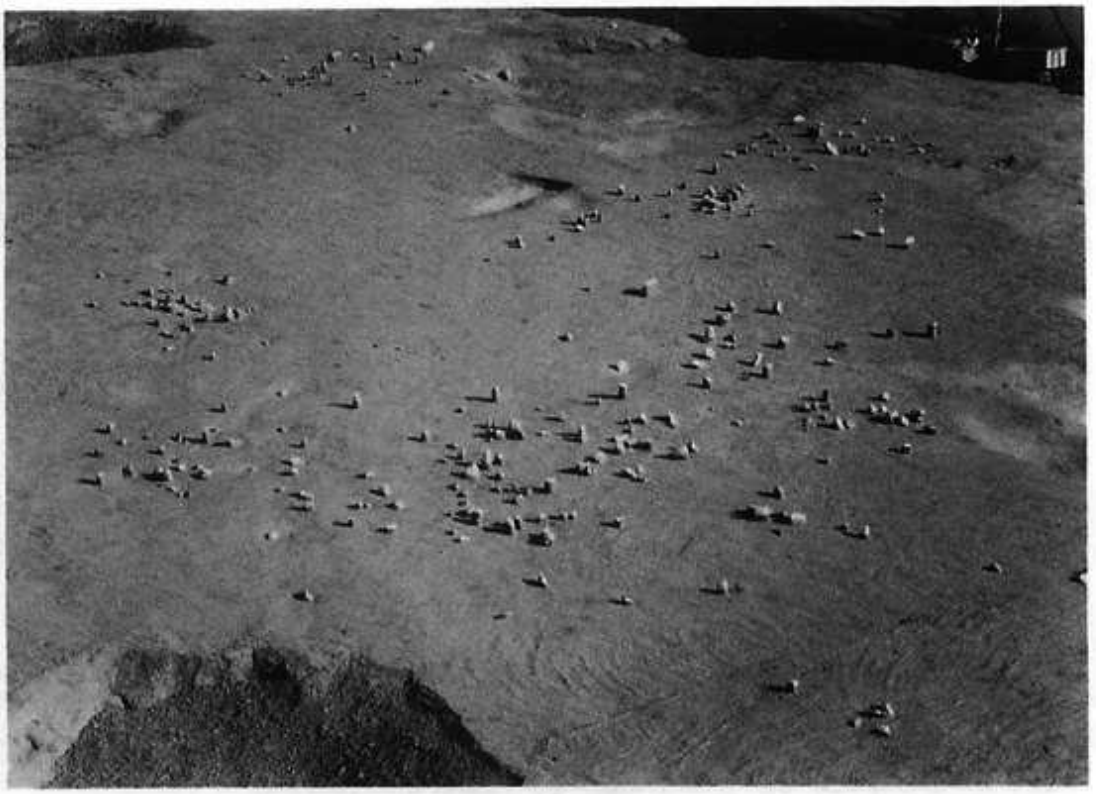
中央区調査終了状態：北半(東から)　(第3層)

中央区調査終了状態：南半(東から)　(第3層)

図版 22

北区北半第２b層調査前，１号方形周溝墓完掘(南から)(北区第２b層)

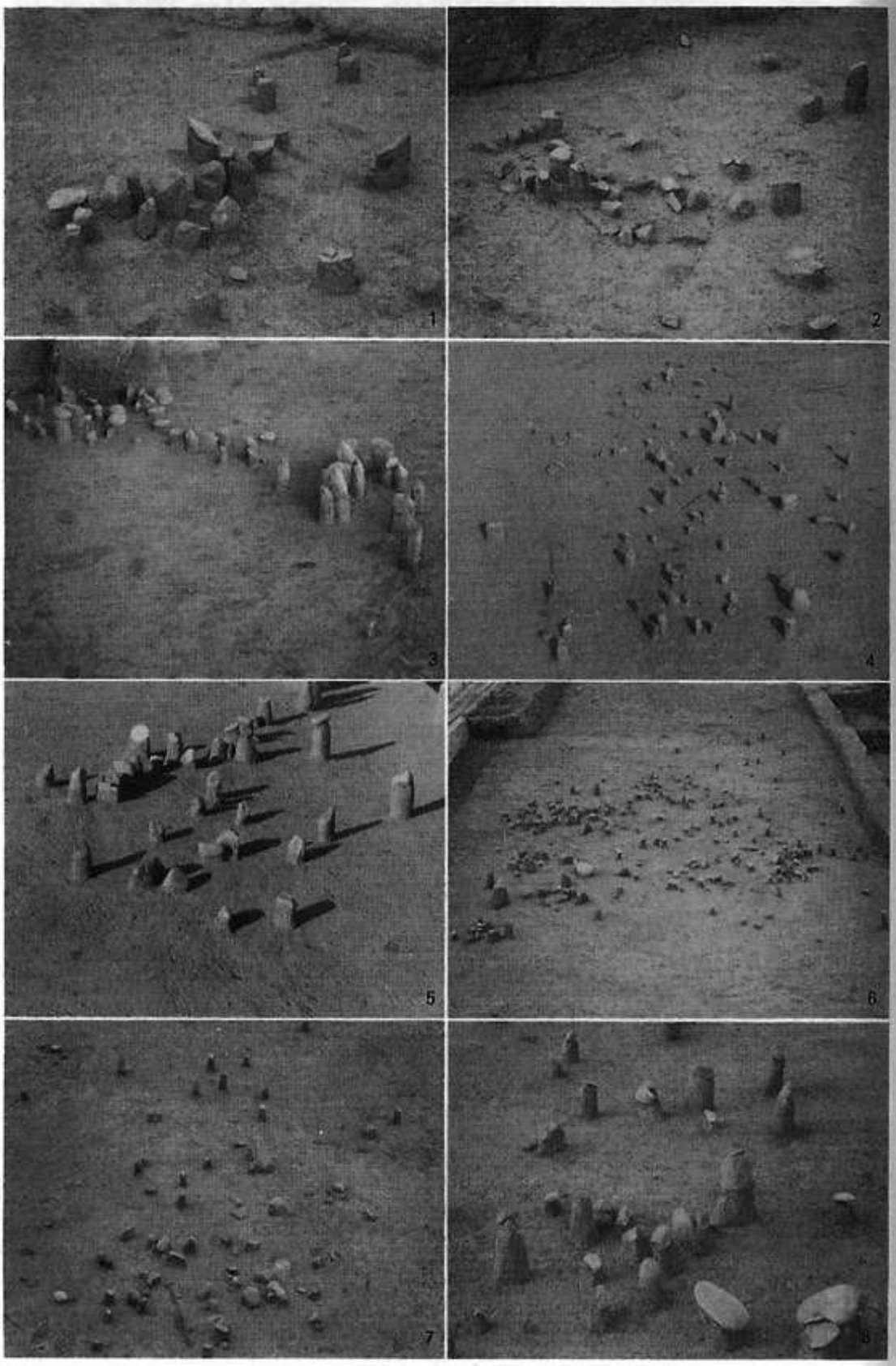
北区北半第２b層礫群・配石出土状態(南から)(北区第２b層)



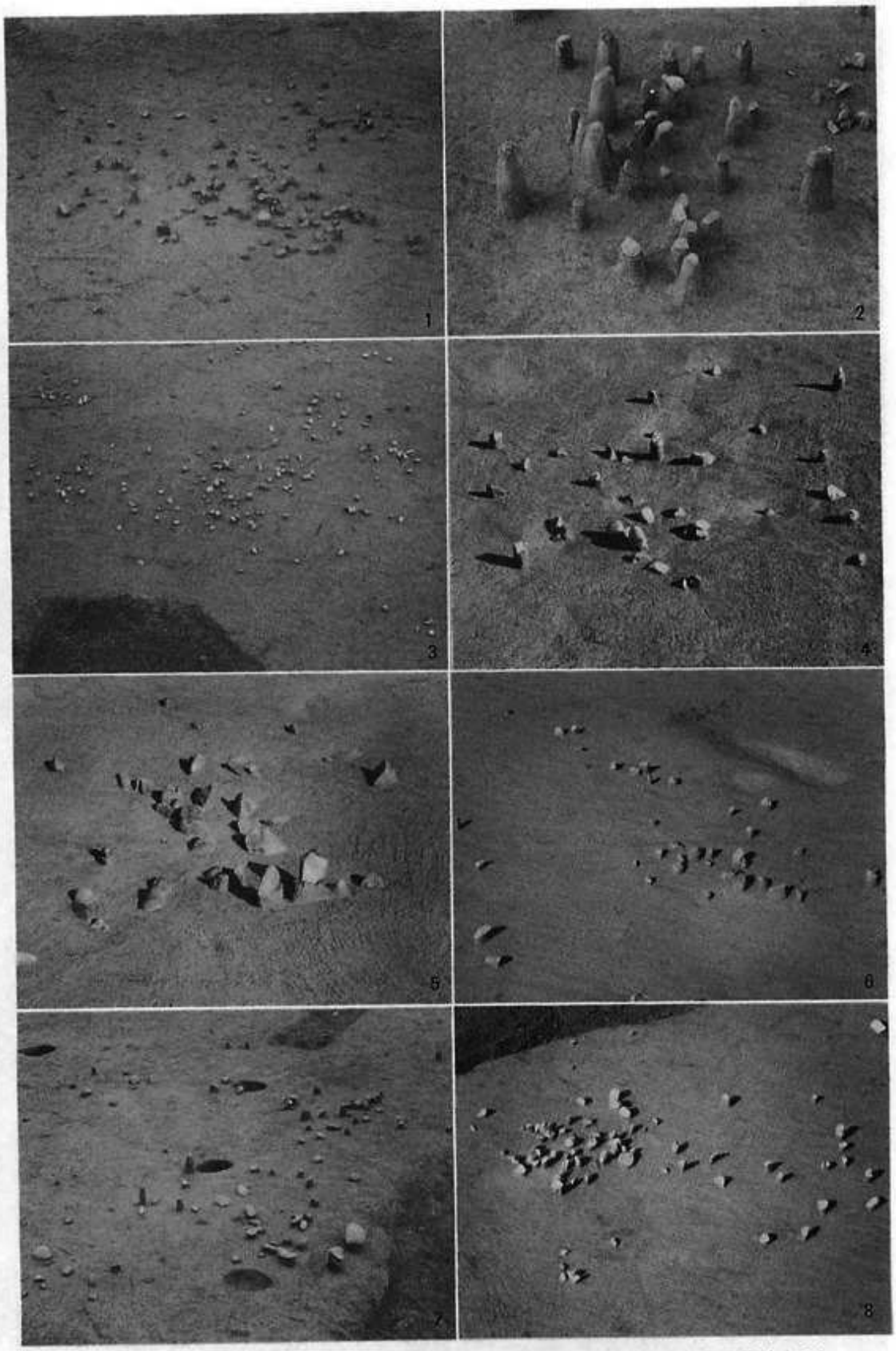
1 B区東半礫群出土状態(南西から)(北区第2b層)

1 C区北東部礫群出土状態(東から)(北区第2b層)

図版 24

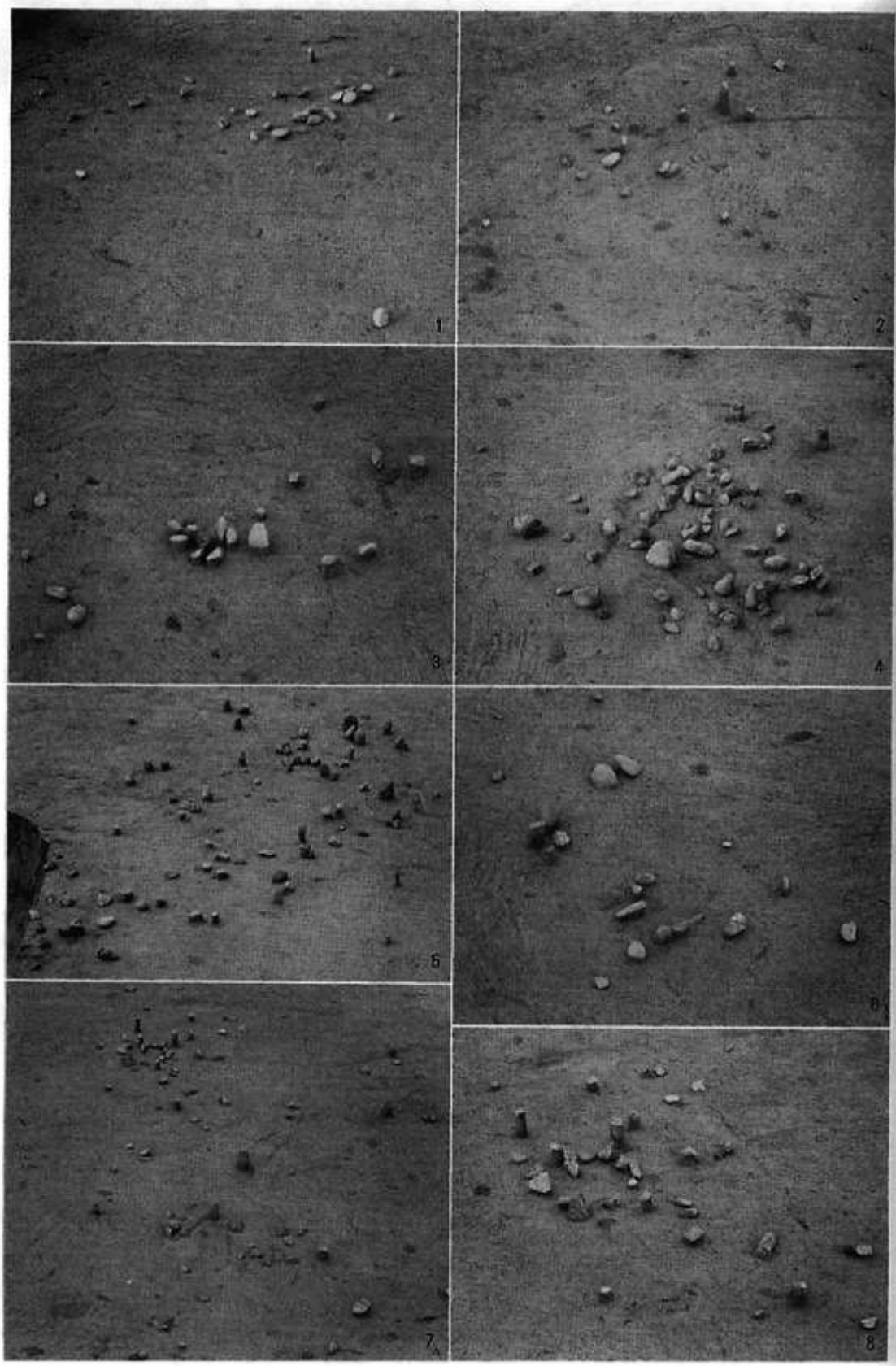


1．0 A19区礫群(南から)　2．0 A24区礫群(南東から)　3．1 A16区礫群(西から)
4．1 A22区礫群(南から)　5．0 B5 区礫群(南から)　6．0 B14・15区礫群(南から)
7．0 B19区礫群(西から)　8．1 B1 区礫群(南から)　(全て北区第2 b層)

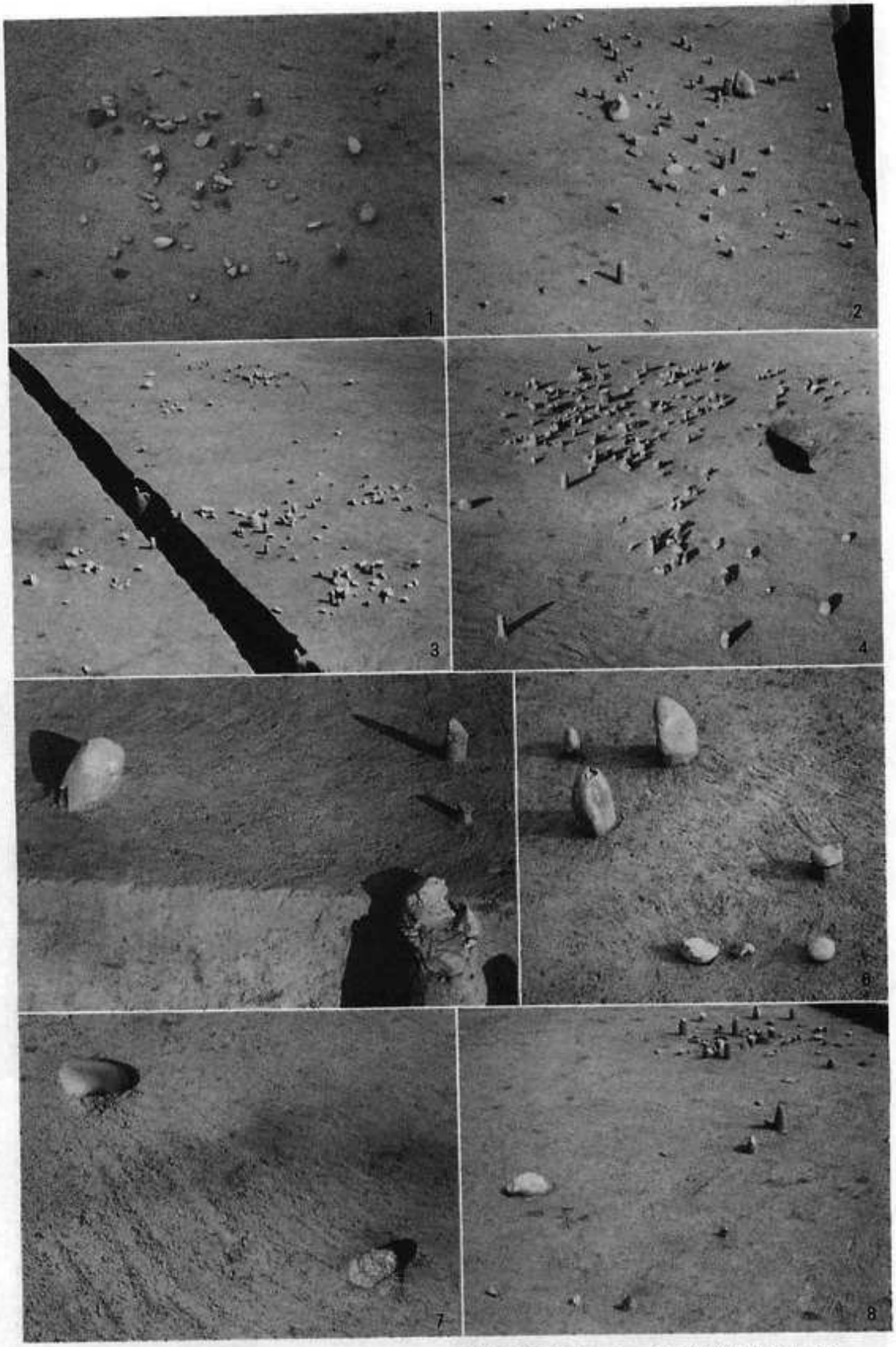


1．1B4・9区礫群(南から) 2．1B6区礫群(南から) 3．1B区中央礫群群(南から)
4．1B12・13区礫群(南から) 5．1B13区礫群(南から) 6．1B14区礫群(南東から)
7．1B16区礫群(西から) 8．1B21区礫群(南から) (全て北区第2b層)

図版 26

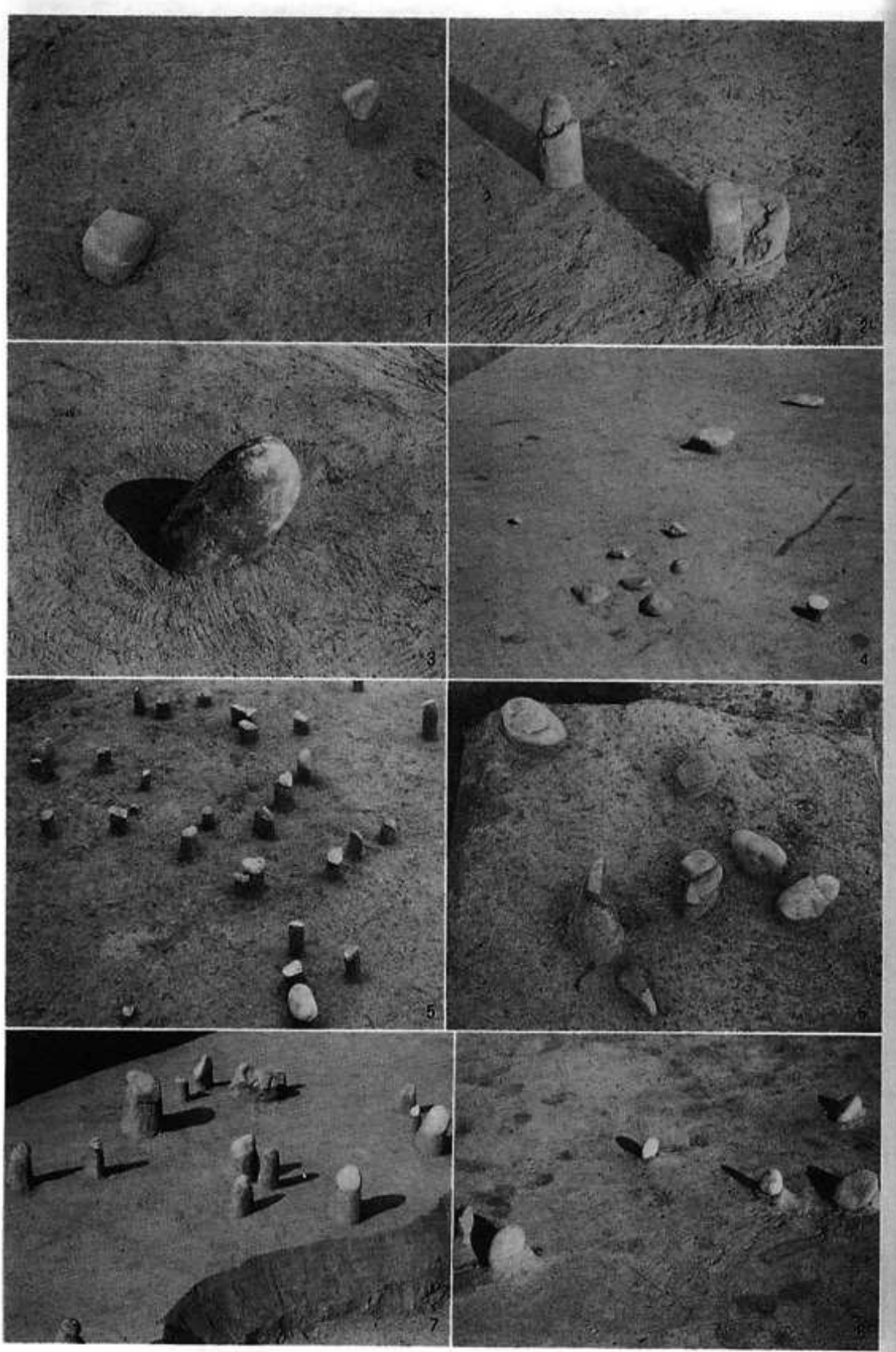


1．0C15区礫群(南から)　2．1C2区礫群(南から)　3．1C3区礫群(南から)
4．1C4区礫群(南東から)　5．1C5区礫群(東から)　6．1C8区北礫群(南から)
7．1C8・13区礫群(南から)　8．1C8区礫群(西から)（全て北区第2b層）

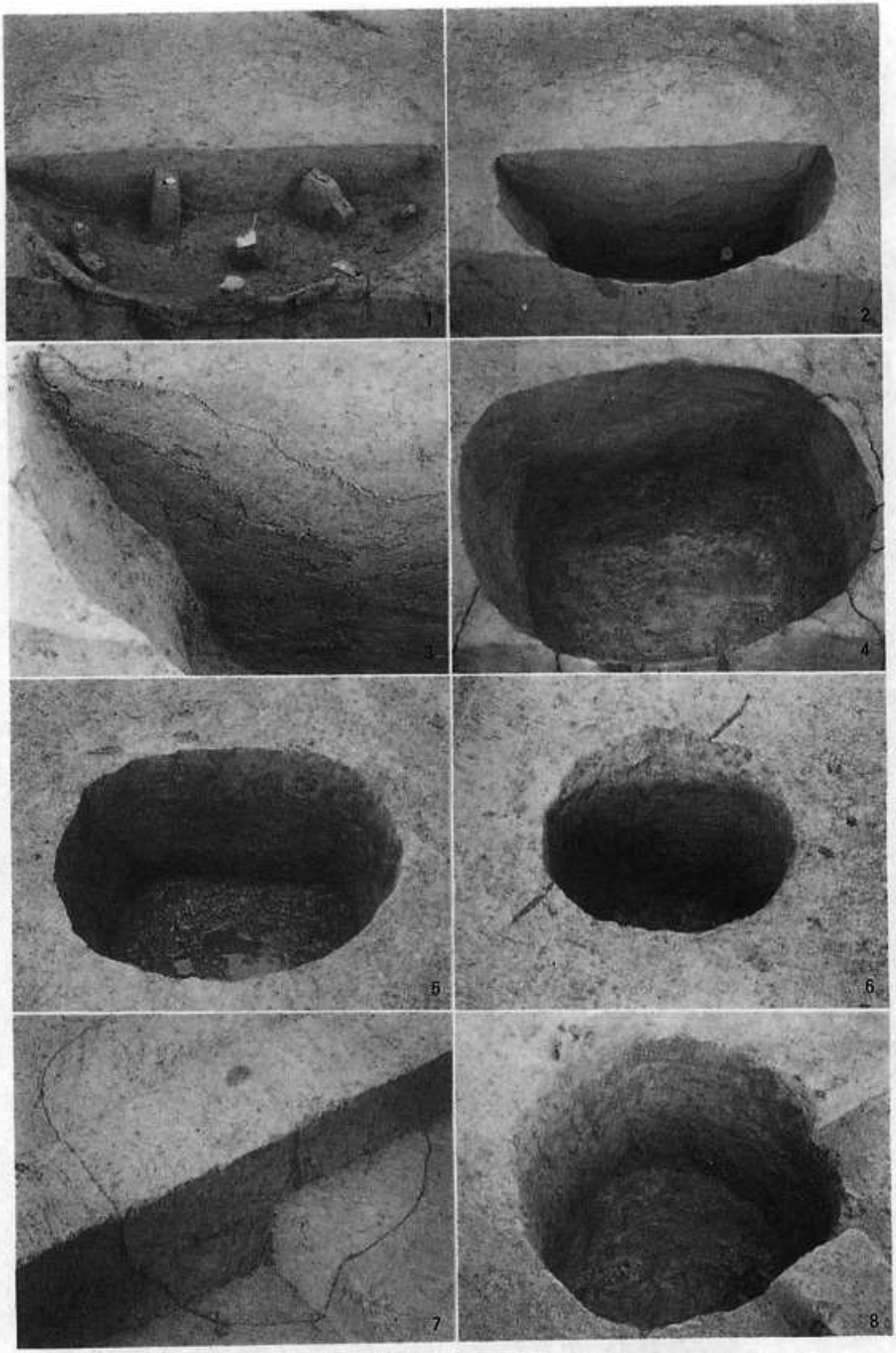


1．1C17区礫群(西から)　2．1C23区礫群(南西から)　3．2C区礫群群(西から)
4．2E4・5区礫群(南から)　5．0A25区礫(西から)　6．2B21区礫(西から)
7．0C15区礫(東から)　8．1C6区礫(西から)　(全て北区第2b層)

図版 28

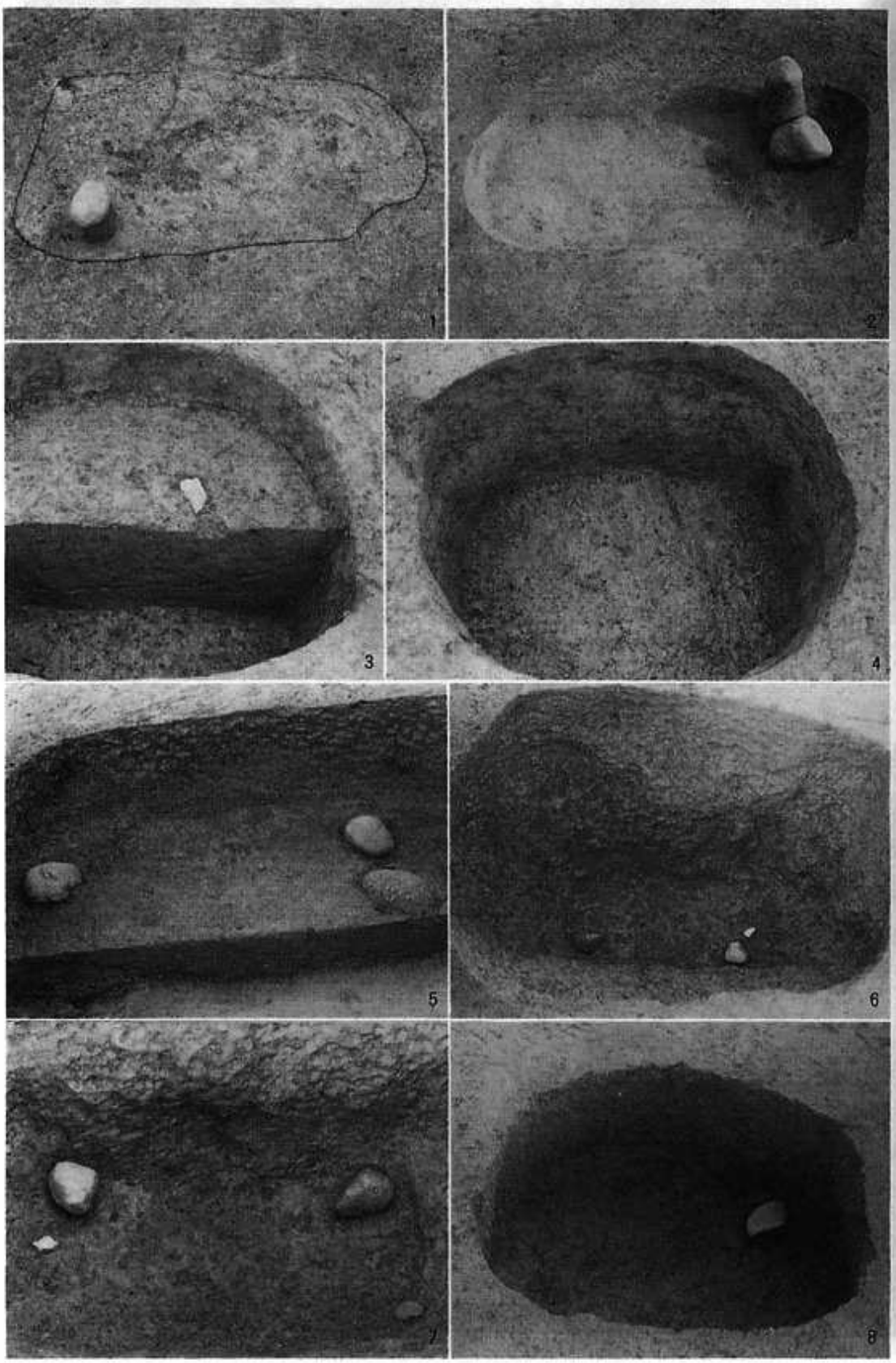


1．1C19区礫　2．2C1区礫　3．2C6区礫　4．2C17区礫(南西から)
5．2D5・10区礫(南から)　6．2D8区礫(西から)　7．2D16区礫(南東から)
8．2E10区礫(南から)　(全て北区第2b層)

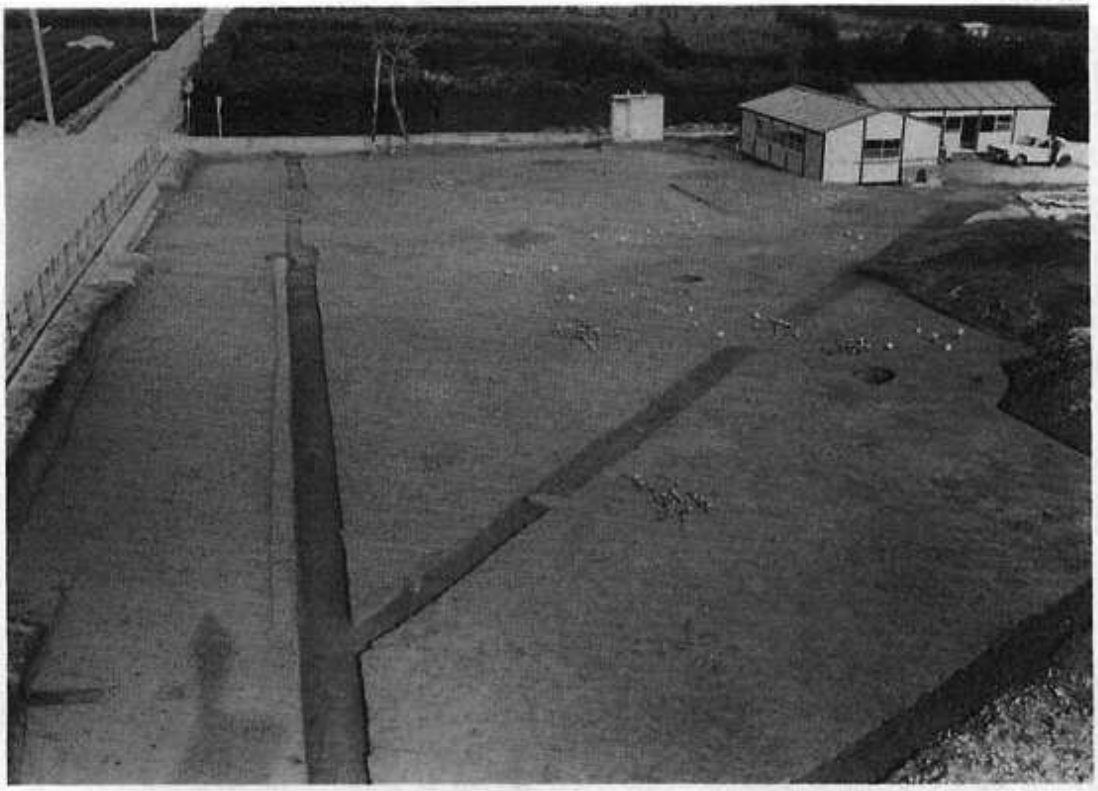


1．第12号土坑遺物出土状態　2．第12号土坑半割　3．第12号土坑土層断面:黒色土の流れ込みがよくわかる　4．第12号土坑完掘　5．第14号土坑　6．第15号土坑
7．第16号土坑検出状態　8．第16号土坑完掘　（全て北区第2b層）

図版 30



1．第17号土坑検出状態　2．第17号土坑完掘　3．第18号土坑遺物出土状態
4．第18号土坑完掘　5．第20号土坑遺物出土状態　6．第20号土坑完掘
7．第20号土坑底面遺物出土状態　8．第21号土坑　（全て北区第２b層）

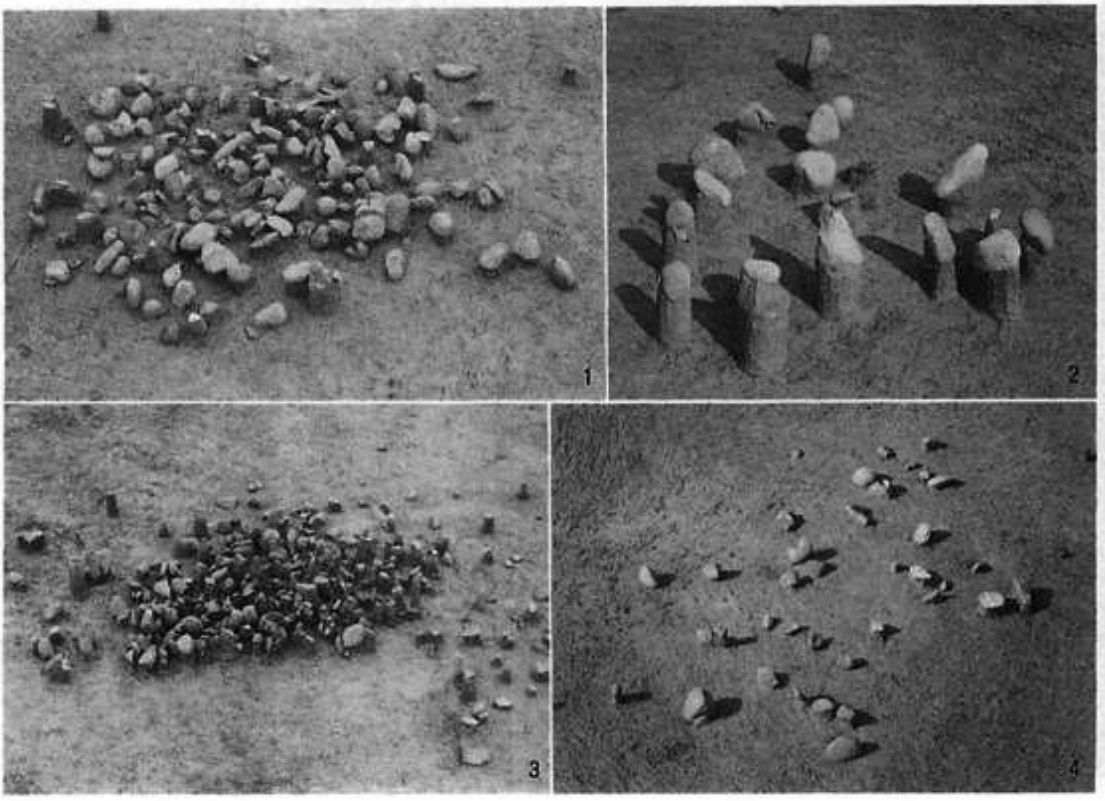


北区北半第３層礫群・配石出土状態(南から)　　(北区第３層)

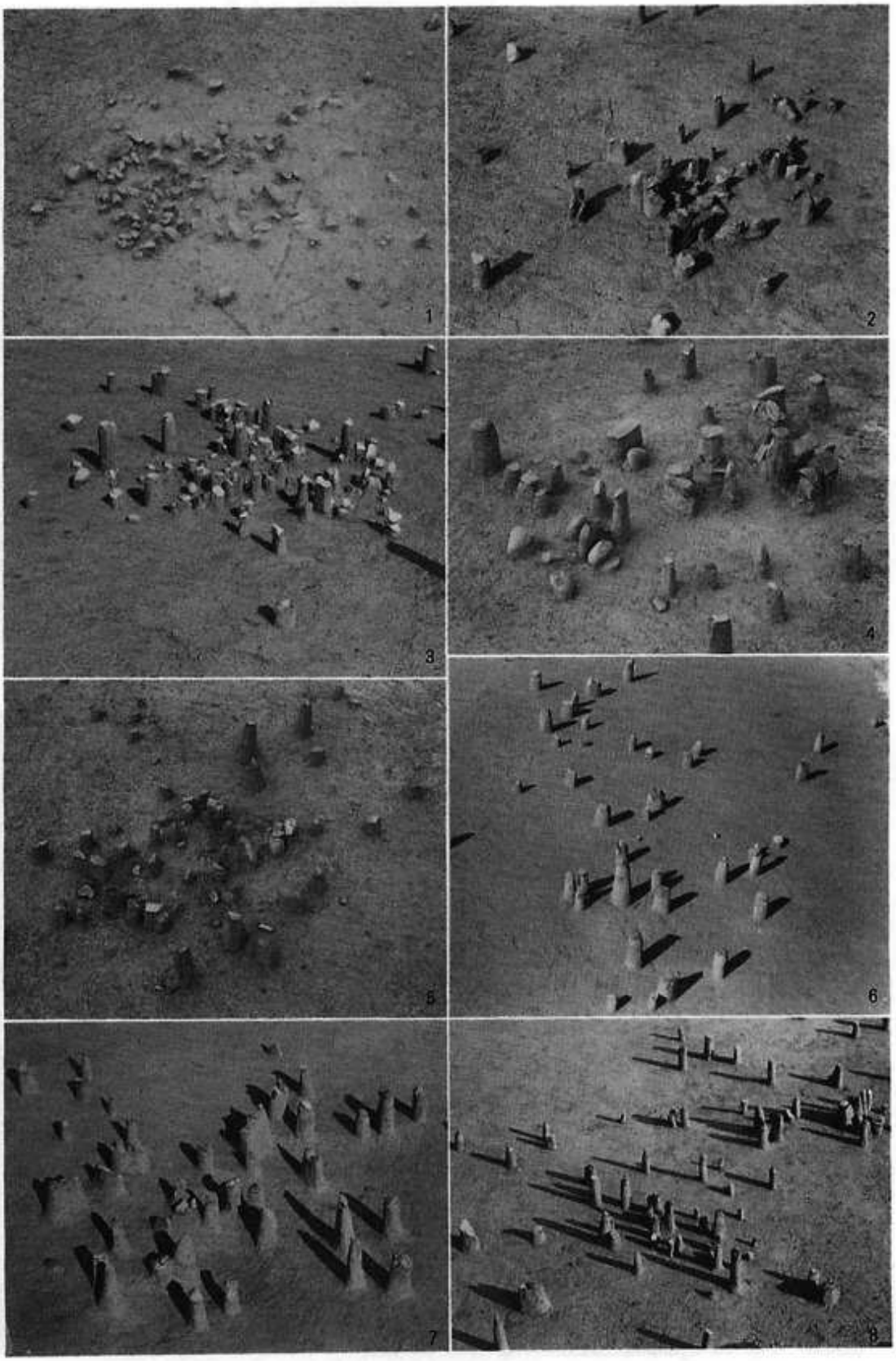
０Ｂ・１Ｂ区礫群・配石出土状態(東から)　　(北区第３層)

図版 32

1 C区礫群・配石出土状態(南東から)　(北区第3層)



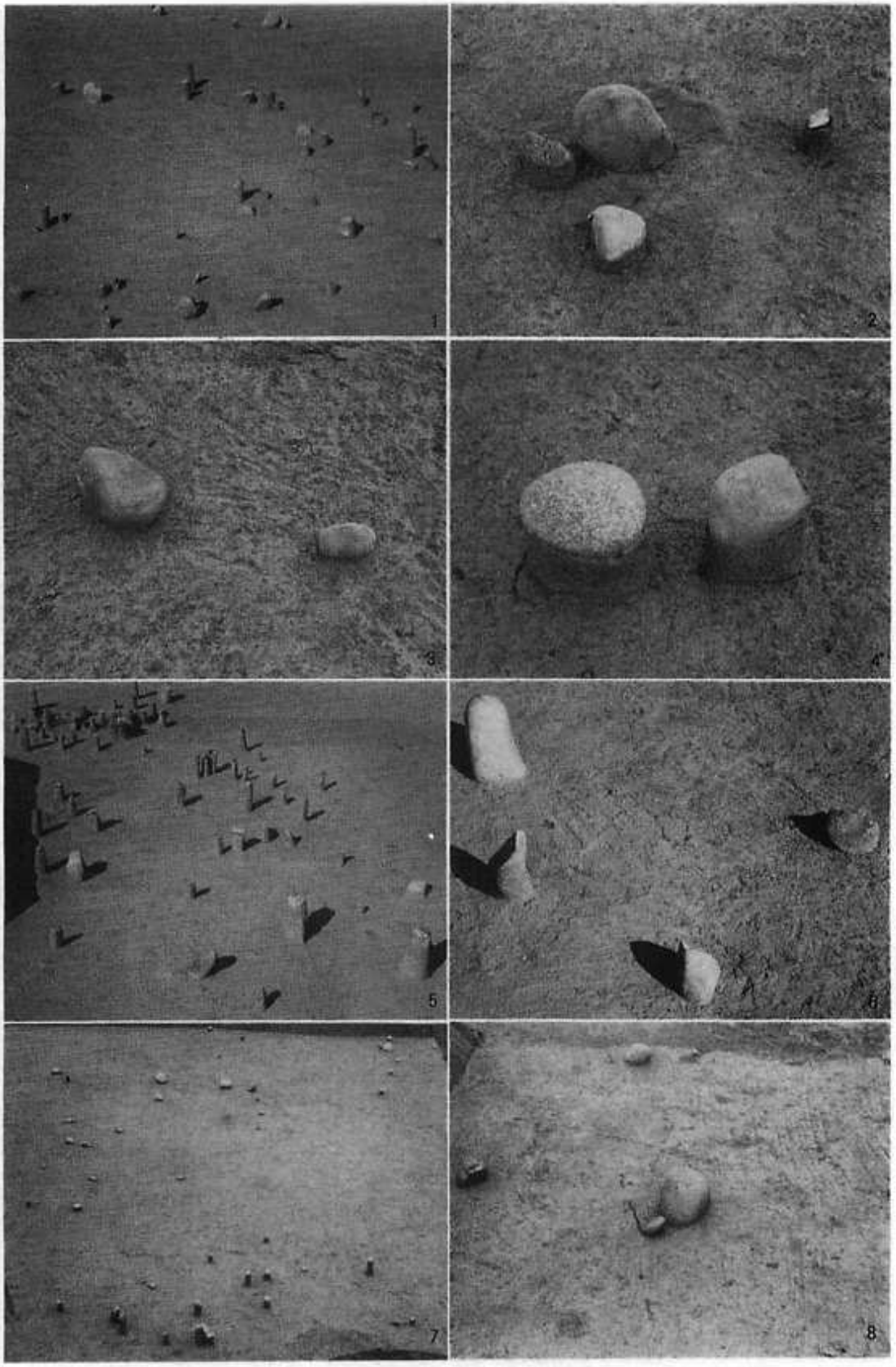
1．0 B10区礫群(南から)　2．0 B14区礫群(西から)
3．1 B2区礫群(東から)　4．1 B3区礫群(東から)　(全て北区第3層)



1．1B15区礫群(南から)　2．0C20・25区礫群(東から)　3．1C7区礫群(西から)
4．1C8区礫群(東から)　5．1C22区礫群(南から)　6．2D20区礫群(南から)
7．2D24区礫群(西から)　8．2E1区礫群(南から)　(全て北区第3層)

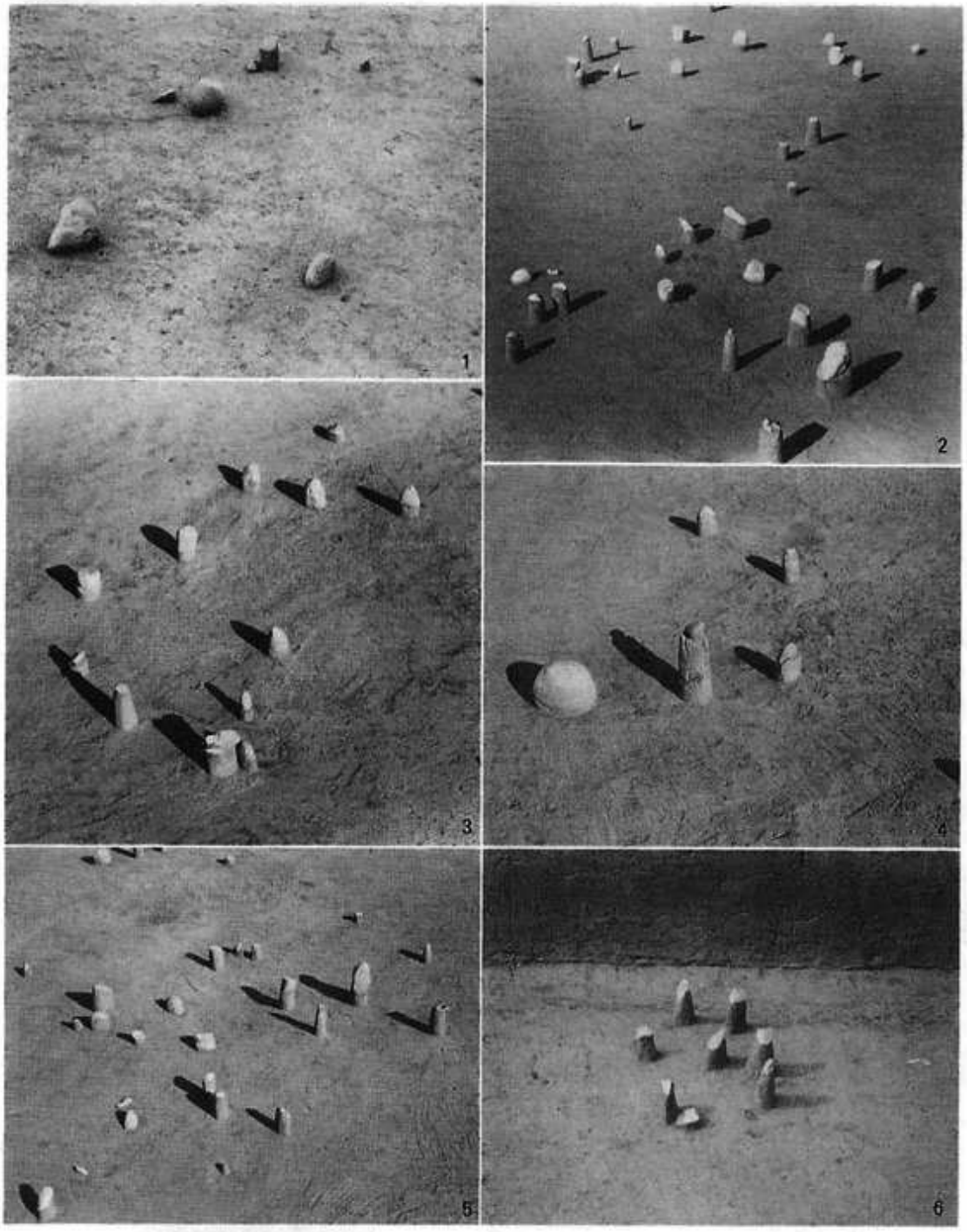
図版 34

1．2E8・9区礫群(南から)　2．2E5区礫群(南から)　3．0B15区礫(南から)
4．1B3区礫　5．1B区東縁部礫(南から)　6．1B区南縁部礫(西から)
7．2B21区礫(南から)　8．2B21区南西部礫(東から)　(全て北区第3層)

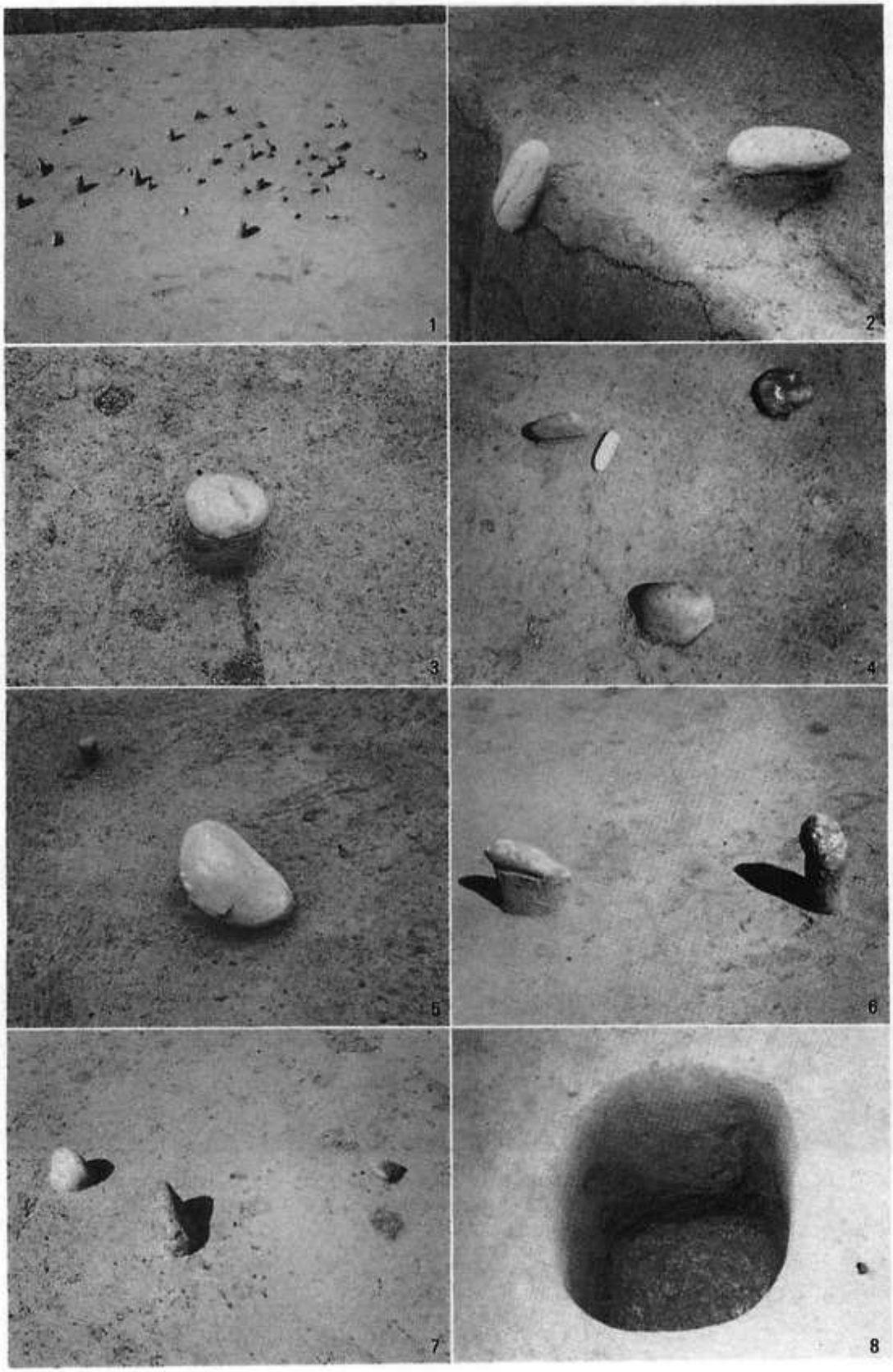


1．1C区礫(南から)　2．1C2区礫　3．1C2区礫　4．1C5区礫
5．1D14区礫(東から)　6．2C11区礫(南から)　7．2C区礫(東から)
8．2C7区礫　(全て北区第3層)

図版 36

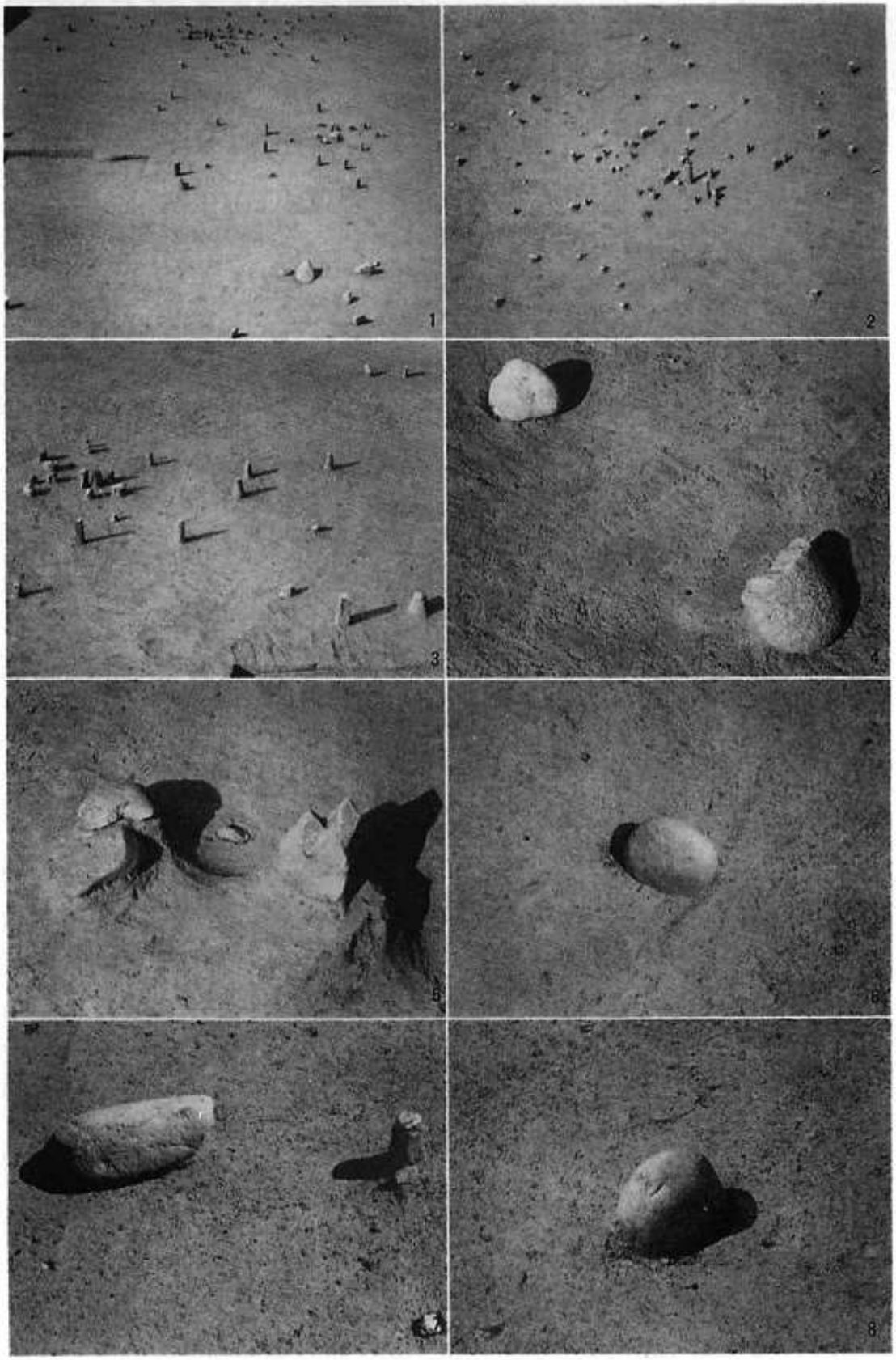


1．2 C13区礫(南から)　2．2 D21・22・23区礫(東から)　3．2 D21・22区礫(南から)
4．2 D23区礫(南から)　5．2 D22・23区礫(南から)　6．2 E14区礫(南から)
(全て北区第3層)

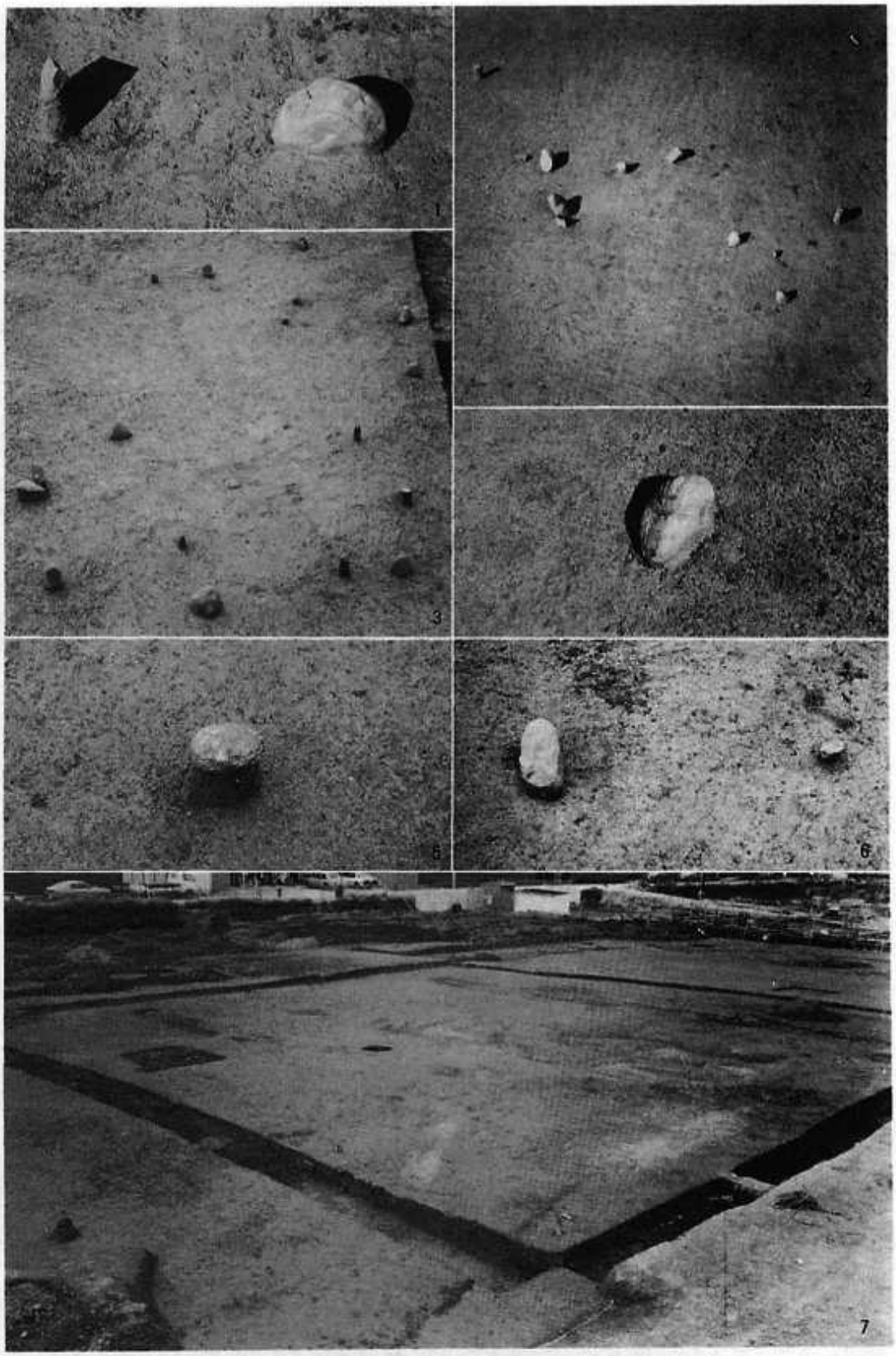


1．1K2区礫群(南から)　2．2124区礫　3．1J3区礫　4．2J7区礫(南から)
5．2J10区礫　6．1K9区礫　7．1K10区礫　8．第11号土坑　(全て南区第2b層)

図版 38

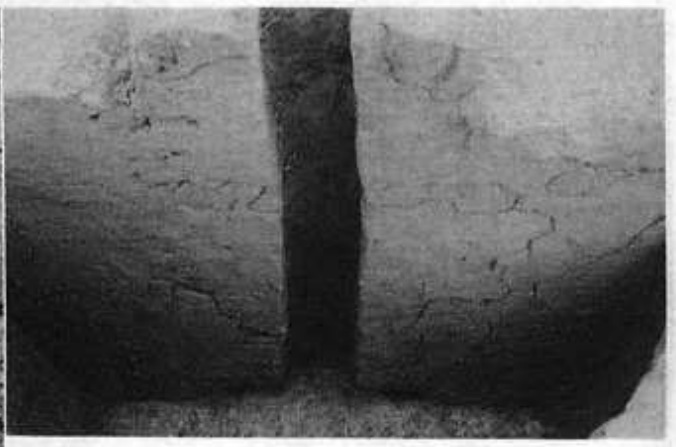


1．21区南縁部礫群・配石出土状態(東から)　2．2117・22区礫群(南から)
3．2119区礫群(南から)　4．1123区礫　5．1115区礫　6．214区礫
7．217区礫　8．218区礫　(全て南区第3層)



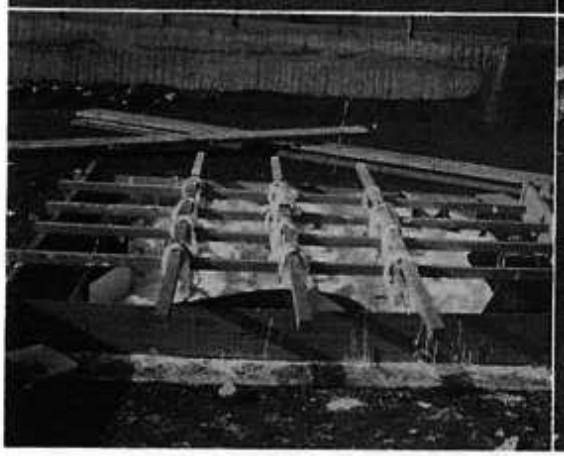
1．2I18区礫　2．2I20・25区礫(東から)　3．2J4・5区礫(東から)
4．2K1区礫　5．2K2区礫　6．2K7区礫　7．南区完掘状態(南東から)
(全て南区第3層)

図版 40



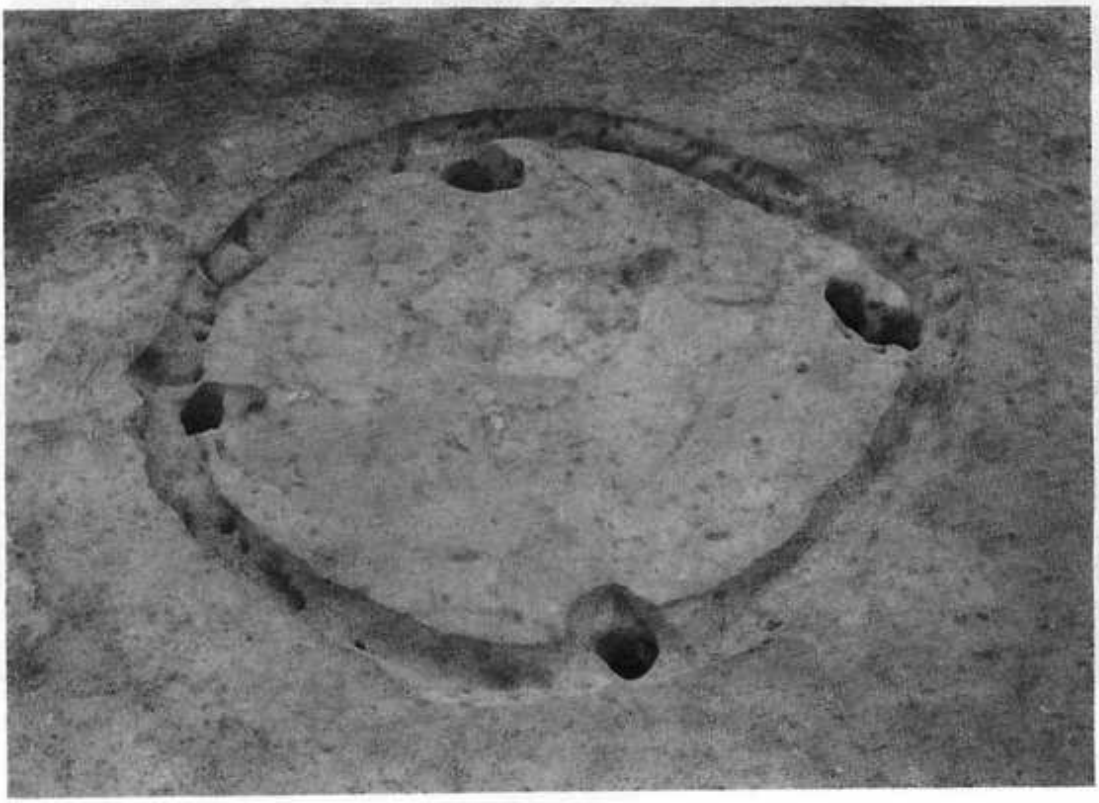
第16号土坑土壌サンプル採取状態

1E3区土壌サンプル採取状態



礫群型取り作業：1．礫のオーヴァーハングを修正しながらラテックスをぬる　2．木枠を付ける　3．木枠内に石膏を流し込む　4．取り上げ後(北区第3層)

1号住居址柱穴(南東から)



2号住居址(南東から)

図版 42

1. 2号方形周溝墓（南西から）

2. 3号方形周溝墓（東から）

3. 4号方形周溝墓（西から）

4. 4号方形周溝墓東溝壺出土状態

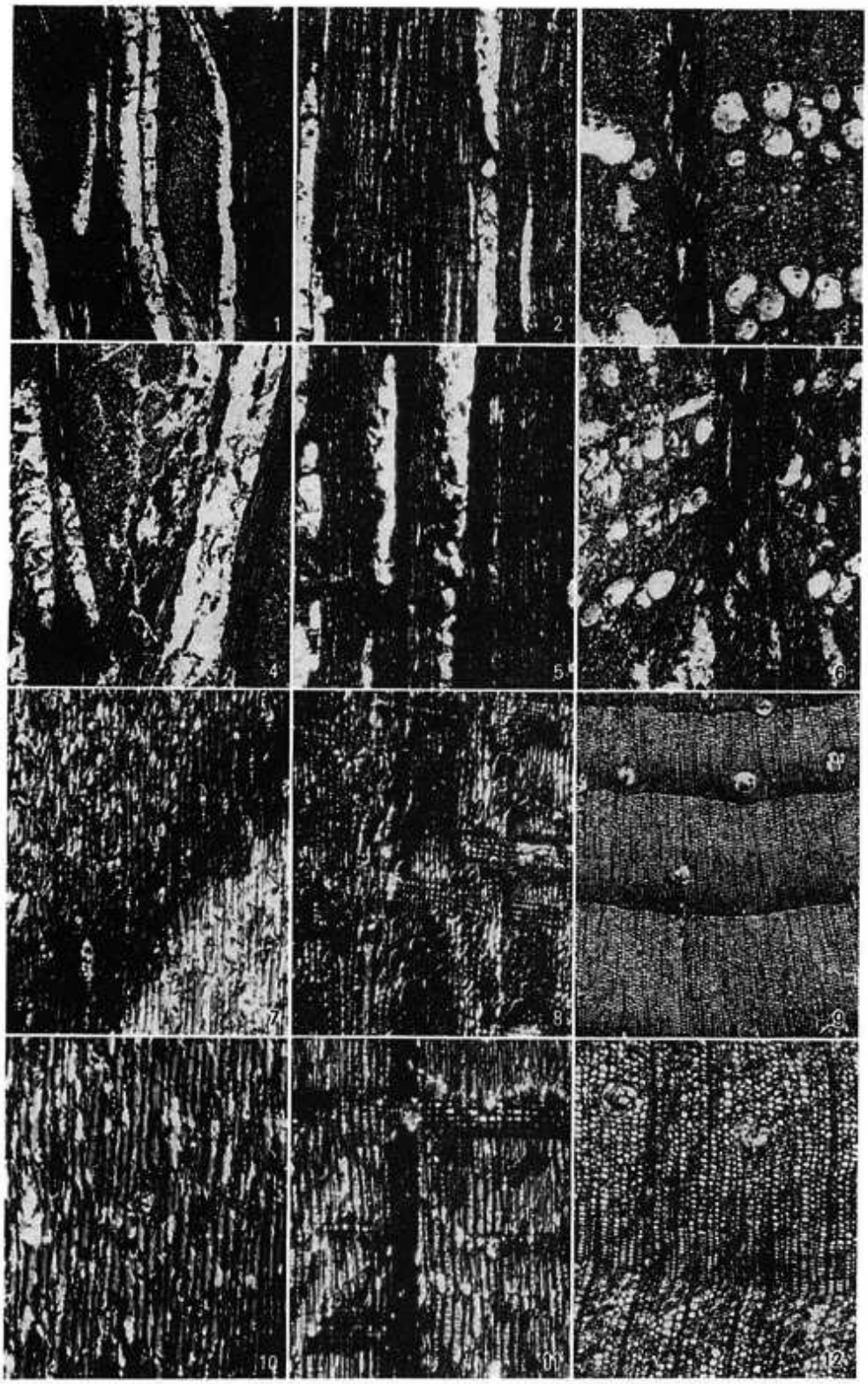
1. 5号方形周溝墓(南から)

2. 6号方形周溝墓(東から)

3. 土壙墓(南から)

4. 土壙墓内遺物出土状態(北西から)

図版 44



1．木口×100(試料No.3)　2．柾目×50(試料No.10)　3．板目×50(試料No.7)
4．木口× 20(試料No.8)　5．柾目×50(試料No.3)　6．板目×50(試料No.14)
7．木口× 20(試料No.4)　8．柾目×20(試料No.13)　9．板目×20(試料No.13)
10．木口× 20(試料No.9)　11．柾目×20(試料No.2)　12．板目×20(試料No.16)

静岡県豊田町広野北遺跡発掘調査報告書

本　編

発行日　1985年10月31日

編集者　平安博物館考古学第一研究室
山下秀樹
604 京都市中京区三条高倉

発行者　平安博物館
604 京都市中京区三条高倉

制作者　ピクトリー社
604 京都市中京区油小路通錦上ル